

クリエイター等育成・文化施設高付加価値化機能強化支援事業
令和6年度活動報告書
（5か年計画の1年目）

令和8年1月16日
文化審議会文化経済部会

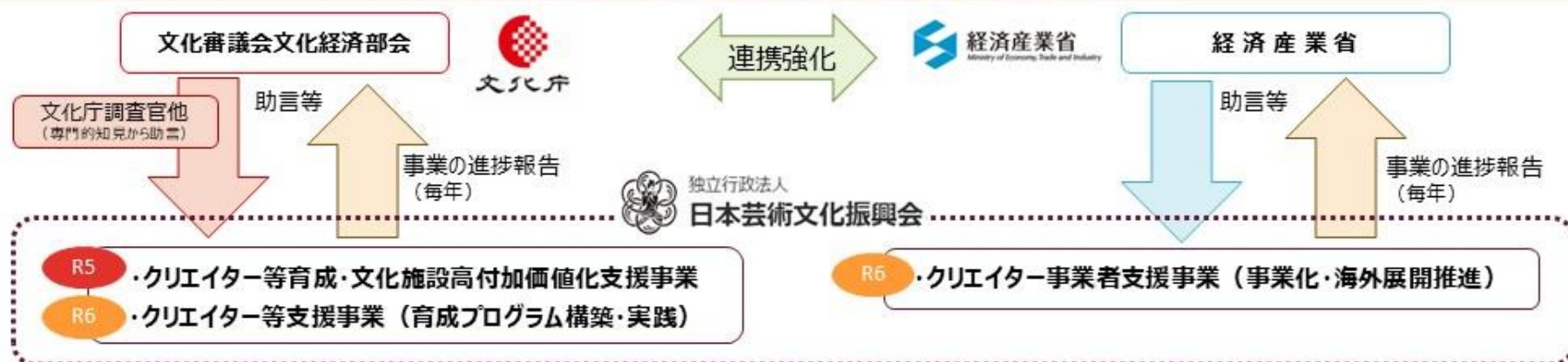
目次

はじめに	
本事業の概要	p. 3
業務実施概要	p.17
<hr/>	
全体サマリー	
1 年目途中経過（令和6年度の事業実施報告）	p.21
事業別の主な成果	p.26
海外展開に係る課題およびプロジェクトの意見・要望	p.40
今後の示唆・提言	p.43
<hr/>	
クリエイター等育成支援事業詳細資料	
採択プロジェクトインタビュー個票	p.47
採択プロジェクト概要	p.93
<hr/>	
文化施設による高付加価値化機能強化支援事業詳細資料	
採択プロジェクトインタビュー個票	p.151
採択プロジェクト概要	p.174
<hr/>	

1 .はじめに

- (1) 本事業の概要
- (2) 業務実施概要

「クリエイター支援基金」に係る体制について



(独) 日本芸術文化振興会における体制整備

【制度設計・進捗把握・助言・成果検証】

事業検証委員会

- ・アドバイザー (アニメ、ゲーム、マンガ、映画、音楽、舞台、現代アート等)
- ・分析者 (効果分析事務受託事業者またはその協力者) 等

- R5** ○ クリエイター等育成・文化施設高付加価値化支援事業検証委員会 (令和7年8月開催)
- R6** ○ クリエイター等支援事業・クリエイター事業者支援事業検証委員会 (令和8年8月開催予定)

報告

【基金管理事務／広報／効果分析】

企画部 基金・助成事務局 (基金管理、運営事務)

受託事業者 (広報事務／効果分析事務)

【採択審査】

<補助事業>

部会

- R5** ※令和6年4月設置
 - クリエイター等育成部会
 - 文化施設高付加価値化支援部会 (博物館・美術館等、劇場・音楽堂等)
- R6**
 - クリエイター等育成プログラム構築・実践部会 ※令和7年4月設置
 - クリエイター事業者支援部会 ※令和7年8月設置

<委託事業>

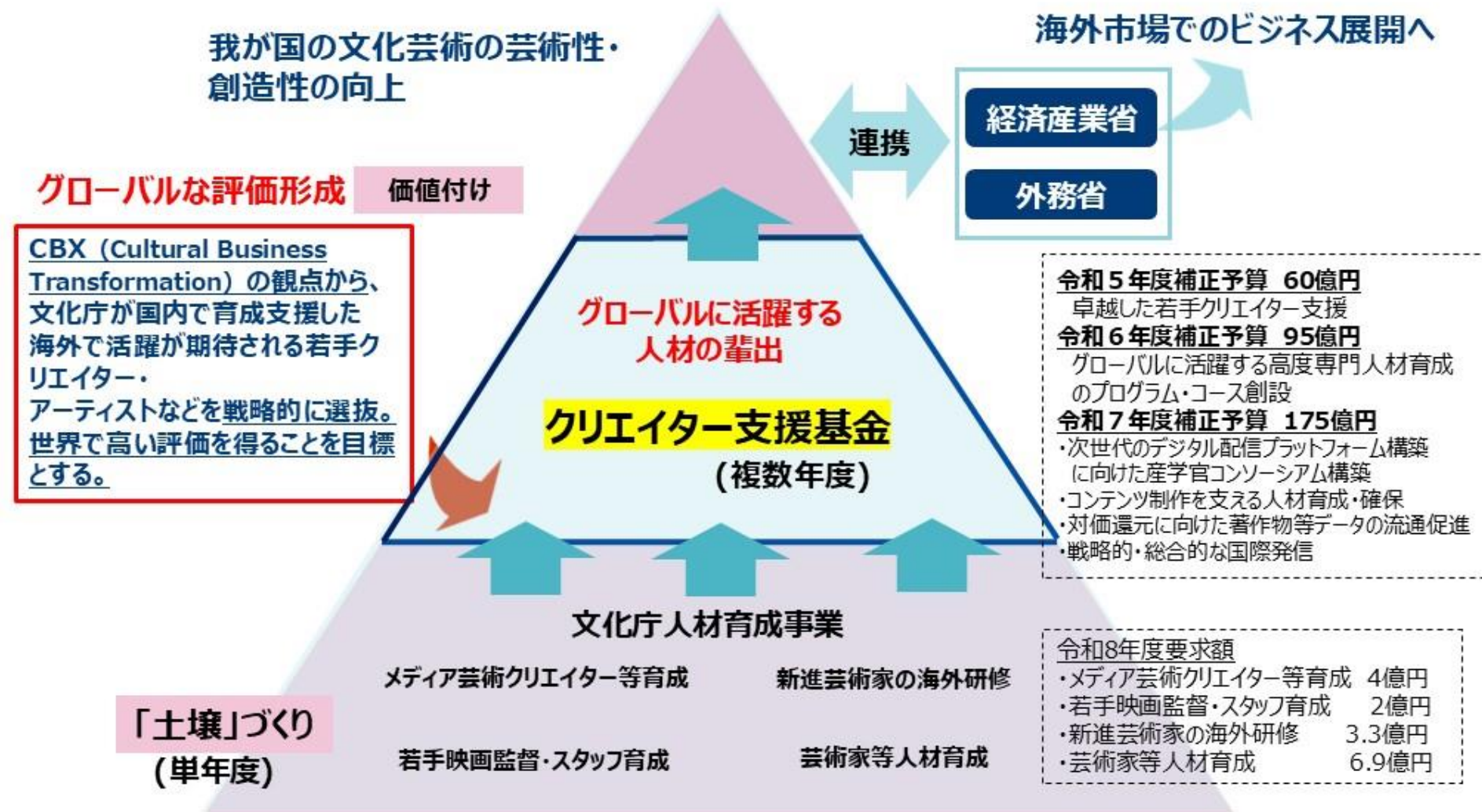
審査委員会

- クリエイター・アーティスト等育成事業審査委員会 (令和6年4月設置)
- クリエイター等支援事業 (育成プログラム構築・実践) 審査委員会 (令和7年4月設置)

クリエイター・アーティスト支援と海外展開の戦略全体構想



コンテンツ産業を基幹産業と位置付け、**2033年**に海外売上を現在の約4倍となる**20兆円**とする目標を設定。

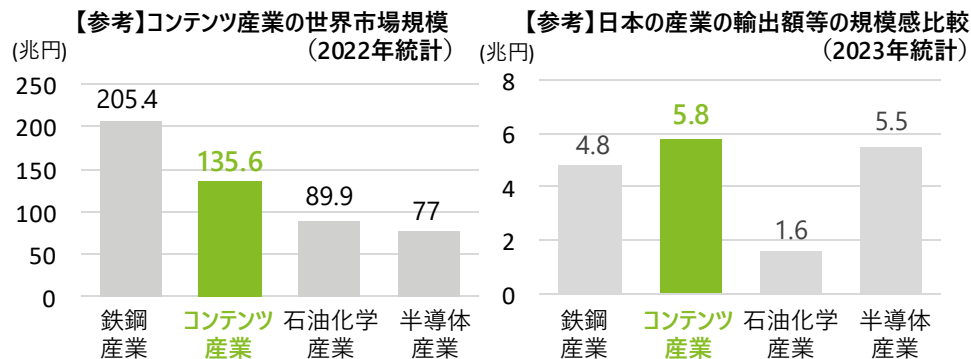


クリエイター等育成・文化施設高付加価値化支援事業は、文化芸術活動基盤強化基金を活用し、次代を担うクリエイター・アーティスト等の育成およびその活躍・発信の場である文化施設の機能強化を、弾力的かつ複数年度にわたり支援する事業である

本事業の背景および趣旨・目的

本事業の背景

- ・日本発コンテンツの海外売上は4.7兆円と自動車の輸出額に次ぐ規模であり「基幹産業」である
- ・政府の戦略としては、「海外売り上げを2033年までに20兆円」と示されている（知財本部決定：本部長内閣総理大臣）
- ・日本には1.2億人の市場があり、すでに国内市場規模も13兆円であるため、リスクを取って海外に打って出るインセンティブが生じにくい。一方で、人口減少の中、このままでは高い成長潜在力を持つコンテンツ市場の衰退の危機である
- ・我が国の文化芸術の海外展開を視野に入れた若手クリエイターやアーティスト等の挑戦支援、育成体制を強化するとともに、国内活動拠点として博物館・美術館、劇場等の文化施設が新たな価値を付加できるよう機能強化し、若手クリエイター等を支える場として確立することが急務である



本事業の趣旨・目的

- ・文化庁令和5年度補正予算において措置された補助金により、クリエイター・アーティスト等の育成および文化施設の高付加価値化のために行う事業を実施するため、振興会に文化芸術活動基盤強化基金（通称：クリエイター支援基金、英語表記：Japan Creator Support Fund）が設立された
- ・本基金を活用し、本事業として「クリエイター・アーティスト等育成事業」および「文化施設による高付加価値化機能強化支援事業」の2事業を実施し、次代を担うクリエイター・アーティスト等の育成およびその活躍・発信の場である文化施設の機能強化を、弾力的かつ複数年度にわたって支援する



独立行政法人

日本芸術文化振興会

文化芸術活動基盤強化基金

Japan
Creator
Support
Fund

クリエイター・
アーティスト等
育成事業

Japan
Creator
Support
Fund
FOR CREATORS

文化施設による
高付加価値化機
能強化支援事業

Japan
Creator
Support
Fund
FOR CULTURAL FACILITIES

本事業では、次代を担うクリエイター・アーティスト等の育成およびその活躍・発信の場でもある文化施設の次世代型の機能強化を、弾力的かつ複数年度にわたり支援することで、戦略的かつ持続的な日本のコンテンツの海外展開が可能になることを目標とする

我が国の海外展開の戦略全体構想と本事業の概要

我が国の海外展開の戦略全体構想

我が国の文化芸術の
芸術性・創造性の向上

海外市場での
ビジネス展開へ

グローバルに
活躍する人材の輩出
『価値づけ』

育成・創造活動支援
所管：文化庁

人材育成『土壌づくり』

本事業の概要

次代を担う卓越したクリエイター・アーティスト等の育成、およびその活躍・発信の場でもある文化施設の次世代型の機能強化を、弾力的かつ複数年度にわたって支援する

クリエイター等育成・文化施設高付加価値化支援事業（文化芸術活動基盤強化基金）

所管：独立行政法人日本芸術文化振興会

文化庁が国内で育成支援した海外で活躍が期待される若手クリエイター・アーティスト等を戦略的に選抜。世界で高い評価を得ることを目標とする

本事業

クリエイター・アーティスト等育成事業



次世代を担うクリエイター等による、企画・交渉・制作・発表・海外展開までの一体的な活動を弾力的かつ複数年度にわたって支援

対象

クリエイター・アーティスト・キュレーター等

予算

3年・45億

支援概要

金銭的支援・アドバイザーによる支援

文化施設による 高付加価値化機能強化支援事業



文化施設における新たな文化芸術活動に付加する活動について、弾力的かつ複数年度にわたって支援

対象

文化施設

予算

3年・15億

支援概要

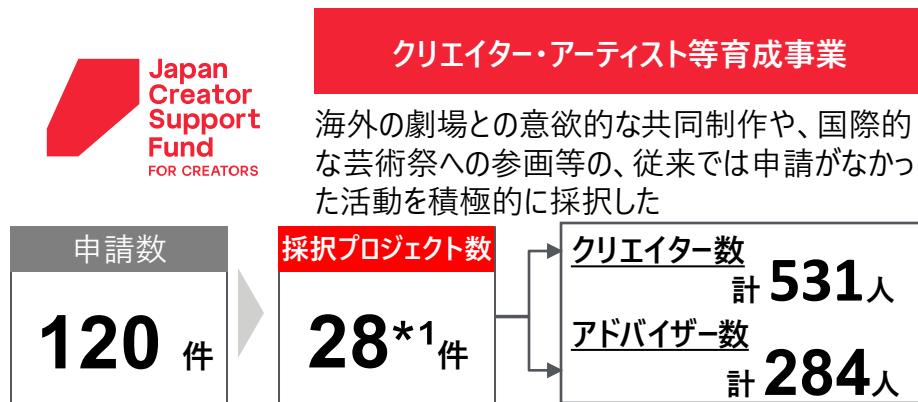
金銭的支援・アドバイザーによる支援

支援メニュー

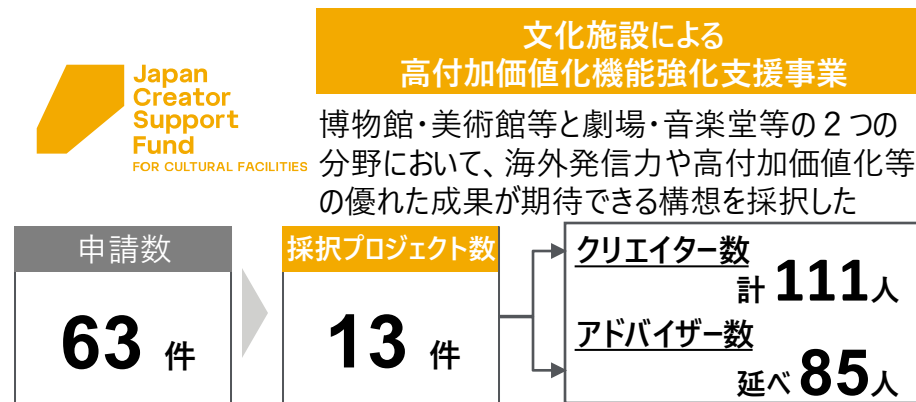
クリエイター・アーティスト等育成事業では、2つの支援メニュー（「補助型」、「委託型」）にて実施。「補助型」は若手クリエイターの国内外での活動を一体的に支援し、振興会が伴走型支援を実施。「委託型」は人材育成を目的に、海外展開に向けた育成プログラムを委託事業として実施

クリエイター・アーティスト等育成事業および文化施設による高付加価値化機能強化支援事業におけるそれぞれの採択プロジェクト数は28*1件、13件、支援するクリエイター数は総勢640名超となる

各事業の採択状況



区分	分野	採択件数	
舞台芸術	音楽	4件	オペラ、オーケストラ、ポピュラー音楽
	舞踊	3件	バレエ、現代舞踊等
	演劇	5件	現代演劇、ミュージカル等
	伝統芸能・大衆芸能	3件	歌舞伎、文楽、邦楽等
	舞台芸術等	1件	舞台芸術総合
メディア芸術	メディア芸術	7*1件	マンガ、アニメ、ゲーム、映画等
現代アート	現代アート	2件	現代アート、写真等
分野横断的新領域		4件	特定の芸術分野に縛られない公演・展示活動

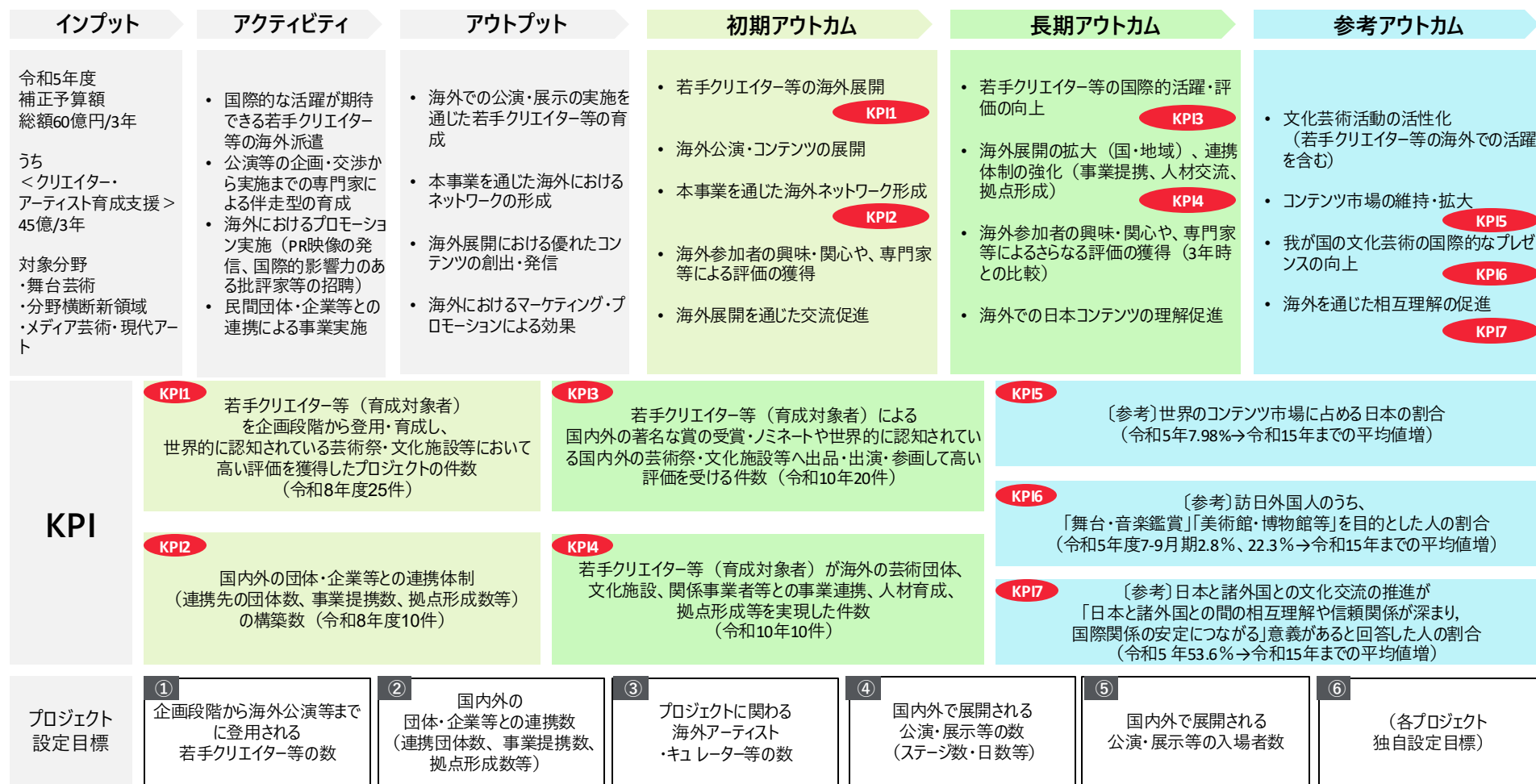


分野	区分*2	採択件数	
博物館・美術館等	大規模	3件	日本美術、建築等
	中規模	1件	伝統工芸
	小規模	-	-
劇場・音楽堂等	大規模	-	-
	中規模	4件	パフォーミングアーツ、現代音楽等
	小規模	5件	演劇、ダンス等

各事業は、それぞれのロジックモデルに基づき、アウトカムおよびKPIが設定されている。各採択プロジェクトに対しては、これらを踏まえたプロジェクト目標の設定を求め、各年度において定量的なプロジェクト評価を実施している

ロジックモデルとKPI（クリエイター・アーティスト等育成事業）

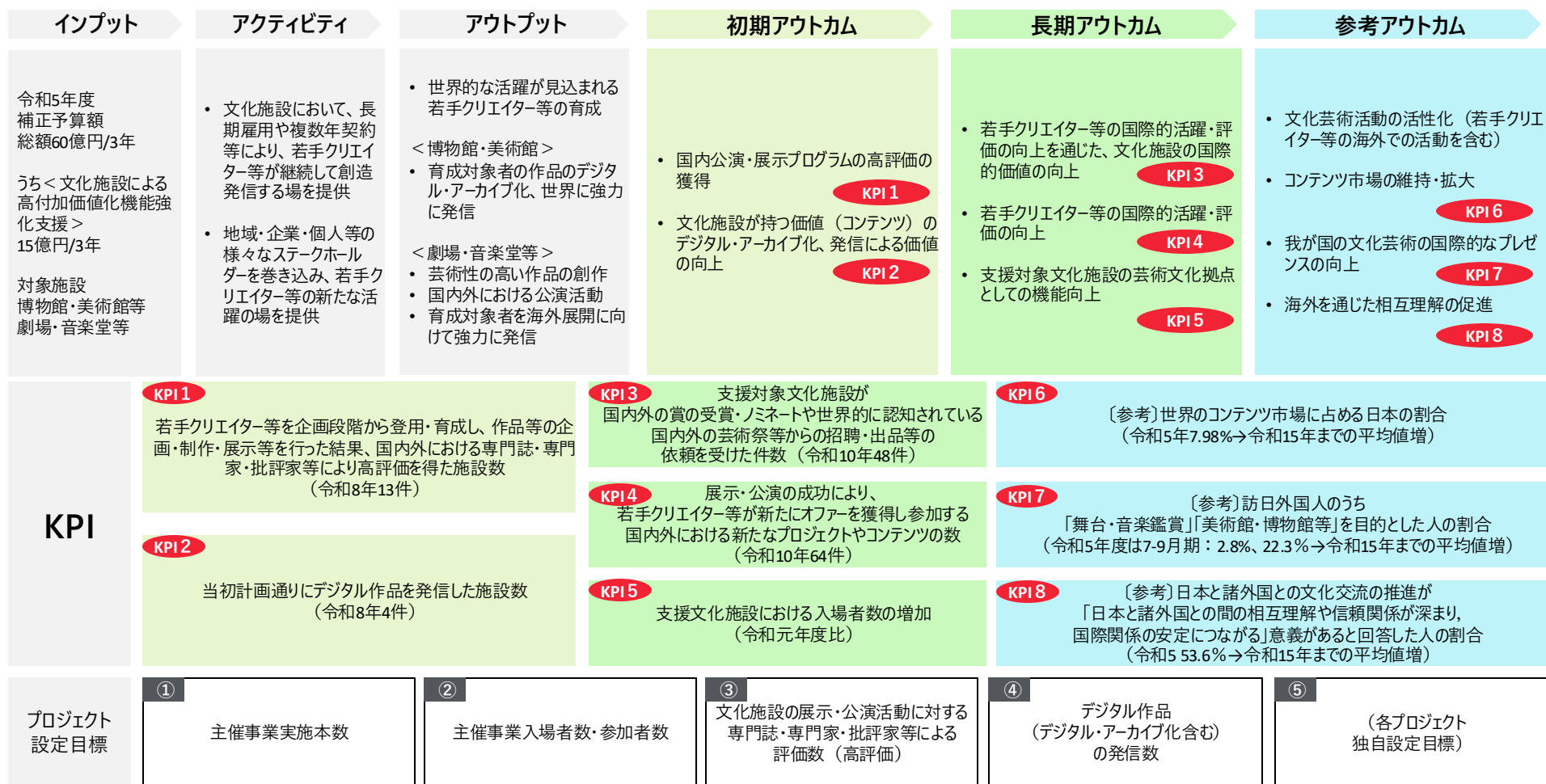
「クリエイター・アーティスト等育成事業」ロジックモデル



各事業は、それぞれのロジックモデルに基づき、アウトカムおよびKPIが設定されている。各採択プロジェクトに対しては、これらを踏まえたプロジェクト目標の設定を求め、各年度において定量的なプロジェクト評価を実施している

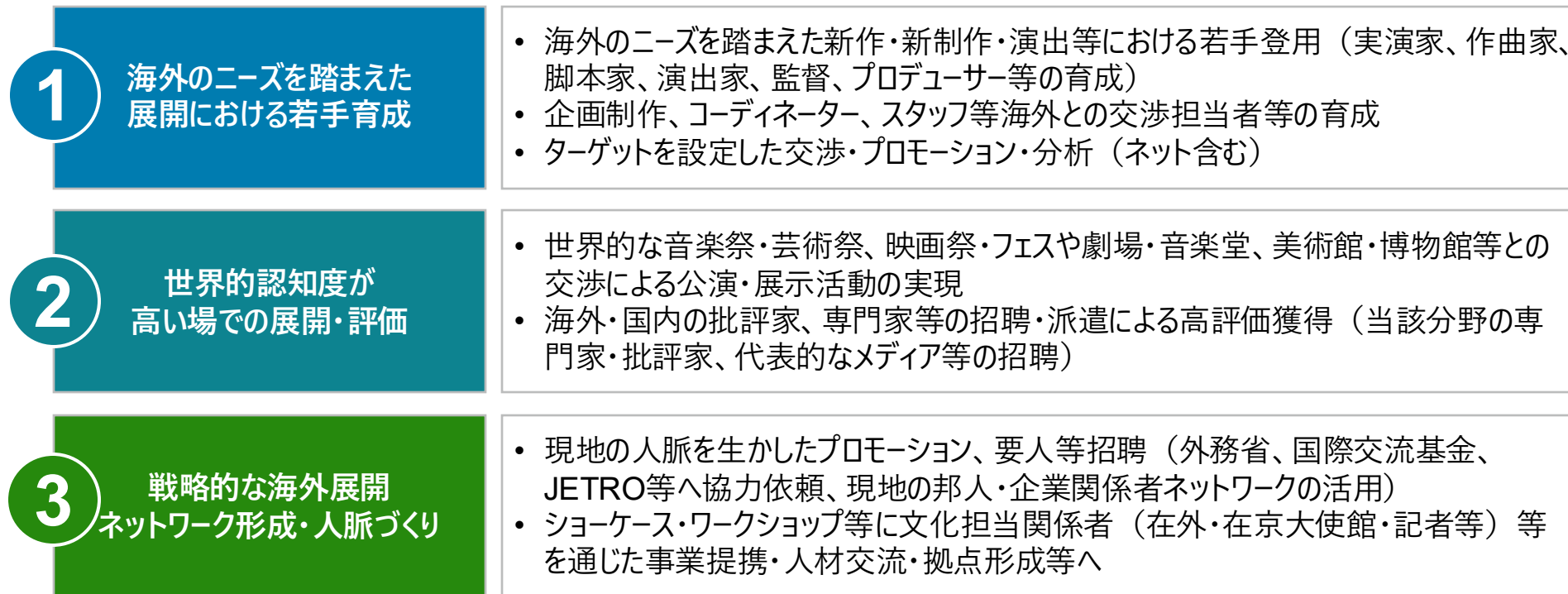
ロジックモデルとKPI（文化施設による高付加価値化機能強化支援事業）

「文化施設による高付加価値化機能強化支援事業」ロジックモデル



本事業では、海外展開に対する3つの方向性・ポイントを以下のとおり定め、各分野の海外ニーズの特性・状況を踏まえた海外展開を重視している

本事業の海外展開に対する方向性・ポイント



各分野の海外ニーズの特性・状況を踏まえた展開が必須

本事業の趣旨・要件等を踏まえ、クリエイター・アーティスト等育成事業では、専門家の審査を経て28*¹のプロジェクトが採択された

クリエイター・アーティスト等育成事業採択プロジェクト一覧 (1/3)

#	プロジェクト名	採択団体名	採択額 (千円)	概要ページ
1	国際音楽祭での新作初演と新作オペラ “The Great Wave”の国際共同制作を通じた若手育成	株式会社 KAJIMOTO	300,000	p.94,95
2	アーティストの好循環を創り出す～大規模国際共同制作オペラ通した輸出型プロモーションの試み～	公益財団法人 東京二期会	100,000	p.96,97
3	ニコニコ動画主催企画を介した若手クリエイター発掘 および海外進出プロジェクト	株式会社 ドワンゴ	220,000	p.98,99
4	欧州公演ツアーを通じたオーケストラの次世代担い手 育成プロジェクト	公益財団法人 読売日本交響楽団	100,000	p.100,101
5	海外公演を通じた国際的なダンサー育成プロジェクト	公益財団法人 新国立劇場運営財団	110,000	p.102,103
6	世界に羽ばたく次世代クリエイターのためのDance Base Yokohama国際ダンスプロジェクト“Wings”	一般財団法人 セガサミー文化芸術財団	90,000	p.104,105
7	次世代の国際スター創出および世界五大バレエ団達 成プロジェクト	公益財団法人 日本舞台芸術振興会	150,000	p.106,107
8	KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭をブ ラットフォームとした次代のクリエイター育成事業	一般社団法人 KYOTO EXPERIMENT	90,000	p.108,109
9	SOIL Fellowship Program	一般社団法人 緊急事態舞台芸術ネットワーク	170,000	p.110,111
10	世界を現場にする次代クリエイターの育成プロジェクト	株式会社 サイ	80,000	p.112,113

本事業の趣旨・要件等を踏まえ、クリエイター・アーティスト等育成事業では、専門家の審査を経て28*¹のプロジェクトが採択された

クリエイター・アーティスト等育成事業採択プロジェクト一覧 (2/3)

#	プロジェクト名	採択団体名	採択額 (千円)	概要ページ
11	IN TRANSIT －異なる文化を横断する舞台芸術プロジェクト－	株式会社 precog	170,000	p.114,115
12	世界のショービジネス界で飛躍するクリエイター 育成 プロジェクト	株式会社 ホリプロ	170,000	p.116,117
13	歌舞伎の海外展開を目指したクリエイター 育成	松竹 株式会社	300,000	p.118,119
14	日本音楽の魅力発信プロジェクト －和の文化活動を通じた若手育成－	特定非営利活動法人 日本音楽国際交流会	110,000	p.120,121
15	世界で高い評価を得られる文楽・技芸員 (アーティスト) 育成プロジェクト	公益財団法人 文楽協会	130,000	p.122,123
16	舞台芸術海外コーディネーター 育成事業	公益社団法人 全国公立文化施設協会	94,000	p.124,125
17	グローバル・アニメ・チャレンジ	株式会社 キネマシトラス	230,000	p.126,127
18	Manga International Network Team (MINT)	一般財団法人 出版文化産業振興財団	178,000	p.128,129
19	Top Game Creators Academy(TGCA)	一般社団法人 コンピュータエンターテインメント協会	178,000	p.130,131
20	WAN: Art & Tech Creators Global Network	公益財団法人 画像情報教育振興協会	178,000	p.132,133

本事業の趣旨・要件等を踏まえ、クリエイター・アーティスト等育成事業では、専門家の審査を経て28*1のプロジェクトが採択された

クリエイター・アーティスト等育成事業採択プロジェクト一覧 (3/3)

#	プロジェクト名	採択団体名	採択額 (千円)	概要ページ
21	New Way, New World: Program for Connecting Japanese Animators to the World	公益財団法人 画像情報教育振興協会	168,000	p.134,135
22	Film Frontier	公益財団法人 ユニジャパン	280,000	p.136,137
23	T3: PHOTO FESTIVAL TOKYO / PHOTO ASIA / NEW TALENT	一般社団法人 TOKYO INSTITUTE of PHOTOGRAPHY	100,000	p.138,139
24	JUMP アーティスト＋キュレーター国際協働プログラム	独立行政法人 国立美術館	178,000	p.140,141
25	オペラ『Super Angels』新シリーズ制作及び海外展開 に向けた領域横断型人材育成	アタック・トーキョー 株式会社	200,000	p.142,143
26	渋谷・京都を拠点に「GAME/遊び」を起点としたクリエ イションとグローバルネットワークを形成する404 Not Found・art bit連携プロジェクト「ars●bit」	一般社団法人 渋谷あそびば制作委員会	110,000	p.144,145
27	「Kogei」アーティスト育成グローバル展開プロジェクト	認定NPO法人 趣都金澤	200,000	p.146,147
28	日本文化輸出プラットフォーム『KAISEKI』	株式会社 スクリイム・ラウドア	100,000	p.148,149

本事業の趣旨・要件等を踏まえ、文化施設による高付加価値化機能強化支援事業では、専門家の審査を経て13のプロジェクトが採択された

文化施設による高付加価値化機能強化支援事業採択プロジェクト一覧 (1/2)

#	プロジェクト名	採択施設名	採択額 (千円)	概要ページ
1	大分発アートプラクティス発信事業 -竹/キュレーション・プロデュース	大分市美術館	57,000	p.173,174
2	次世代型学習コンテンツプロデューサー育成プロジェクト	国立科学博物館	280,000	p.175,176
3	Global Exhibition Team (GET) による 日本文化発信プロジェクト	東京国立博物館	250,000	p.177,178
4	グローバル・アート・プロフェッショナル育成プロジェクト	森美術館	260,000	p.179,180
5	Constellation ~世界をつなげる愛知県芸術劇場ダンスプロジェクト~	愛知県芸術劇場	40,000	p.181,182
6	無隣館インターナショナル	江原河畔劇場	39,444	p.183,184
7	ストリートシアター グローバル人材育成プロジェクト "STRANGE Lab."	SPAC-静岡県舞台芸術センター	53,000	p.185,186
8	劇場による総合的な人材育成・国際発信プロジェクト	世田谷文化生活情報センター (世田谷パブリックシアター)	100,500	p.187,188
9	TMTギア-東京芸術劇場クリエイター支援プロジェクト	東京芸術劇場	130,000	p.189,190
10	音楽クリエイター育成プロジェクト Tokyo & Paris to the NEXT	東京文化会館	50,000	p.191,192

出所：採択プロジェクト概要資料および令和6年度報告書

本事業の趣旨・要件等を踏まえ、文化施設による高付加価値化機能強化支援事業では、専門家の審査を経て13のプロジェクトが採択された

文化施設による高付加価値化機能強化支援事業採択プロジェクト一覧 (2/2)

#	プロジェクト名	採択施設名	採択額 (千円)	概要ページ
11	Step into the world from Matsumoto	まつもと市民芸術館	18,121	p.193,194
12	子ども×テクノロジー作品の制作を通じた人材育成プロジェクト	山口情報芸術センター[YCAM]	40,000	p.195,196
13	ロームシアター京都 レポートリーの創造 ホープス	ロームシアター京都	40,000	p.197,198

1 .はじめに

- (1) 本事業の概要
- (2) 業務実施概要

本報告書で参照する情報は、インターネット上の公開情報をはじめ、令和6年度の実績報告書やインタビュー等を通じて段階的に収集し、分析・検証を進めた

本報告書の作成概要

参照した情報

公表資料・情報

文化庁、独立行政法人 日本芸術文化振興会や文化芸術活動基盤強化基金などの各種ウェブサイトや公表されている参考資料等

令和6年度実績報告書

※取りまとめは別途一次報告書で作成

令和6年度（1年目）における各プロジェクトのプロジェクト概要、活動状況、活動における成果や課題に関する報告書（団体が本プロジェクトのFMTに基づいて作成）

採択プロジェクトインタビュー

約60分間のオンラインインタビューでプロジェクトに関わる指導者・団体・育成対象者から聴取した、これまでの活動/成果/課題/今後の展望等に関するヒアリング情報

振興会・文化庁ご担当者様との協議・対話（定例会等）

定例会議を含む各種会議における振興会および文化庁ご担当者様からの各プロジェクトに関するヒアリング情報

2 次報告書（本報告書）

はじめに

- ・ 本業務の概要
- ・ 本事業の概要
- ・ 業務実施概要

全体サマリー

- ・ 令和6年度の事業実施効果
- ・ 事業別の主な成果
- ・ 海外展開に係る課題およびプロジェクトの意見・要望
- ・ 今後の示唆・提言

クリエイター等育成支援事業詳細資料

- ・ 採択プロジェクトインタビュー個票
- ・ 採択プロジェクト概要

文化施設による高付加価値化機能強化支援事業詳細資料

- ・ 採択プロジェクトインタビュー個票
- ・ 採択プロジェクト概要

令和6年度の活動・成果・課題等をより詳細に把握し、本事業の効果を分析すべく、42団体中、約半数の22団体に対してインタビューを実施し、結果を取りまとめた

インタビュー実施概要

調査目的	<ul style="list-style-type: none"> クリエイター等育成・文化施設高付加価値化支援事業における1年目の成果と課題と明らかにする
インタビュー項目	<div> <div> 1.業界動向・海外展開に係る課題等 <ul style="list-style-type: none"> 日本における当該分野の動向（日本コンテンツのニーズ、諸外国と比較した特徴等） 海外展開に係る課題 海外展開における成功ルート 海外展開・人材育成における考え方 </div> <div> 2.プロジェクト詳細情報 <ul style="list-style-type: none"> プロジェクトにおける目的・目標・概要 これまでの活動実績 プロモーションにおける活動 本基金によって活性化した活動/新たに取り組んだ活動 </div> <div> 3.成果・課題 <ul style="list-style-type: none"> プロジェクトにおける成果/今後見込まれる成果 育成対象者のスキル/マインドの変化 団体/業界/地域にもたらした好影響や波及効果 本基金のメリット 現状プロジェクトが抱える課題 </div> <div> 4.今後の展望 <ul style="list-style-type: none"> 本基金の活動を経て業界へ還元できるポイント等 基金への要望/改善点等 持続的な海外展開に向けて今後求められること 今後の活動の計画/展望 今後のプロモーションにおける計画/展望 </div> </div>
調査先の選定基準	<p>以下の選定基準に基づき、採択団体全42団体の約半数以上をインタビュー対象とする</p> <ul style="list-style-type: none"> 各分野/区分（クリエイター等育成事業は分野、文化施設による高付加価値化機能強化支援事業は区分）の網羅性を担保する 令和6年度実績報告書時点で、他団体の参考になる活動やユニークな活動を行っている
調査手法	<ul style="list-style-type: none"> 約60分間のオンラインインタビュー
調査期間	<ul style="list-style-type: none"> 令和7年8月18日～令和7年9月16日

令和6年度の活動・成果・課題等をより詳細に把握し、本事業の効果を分析すべく、42団体中、約半数の22団体に対してインタビューを実施し、結果を取りまとめた

インタビュー実施団体一覧

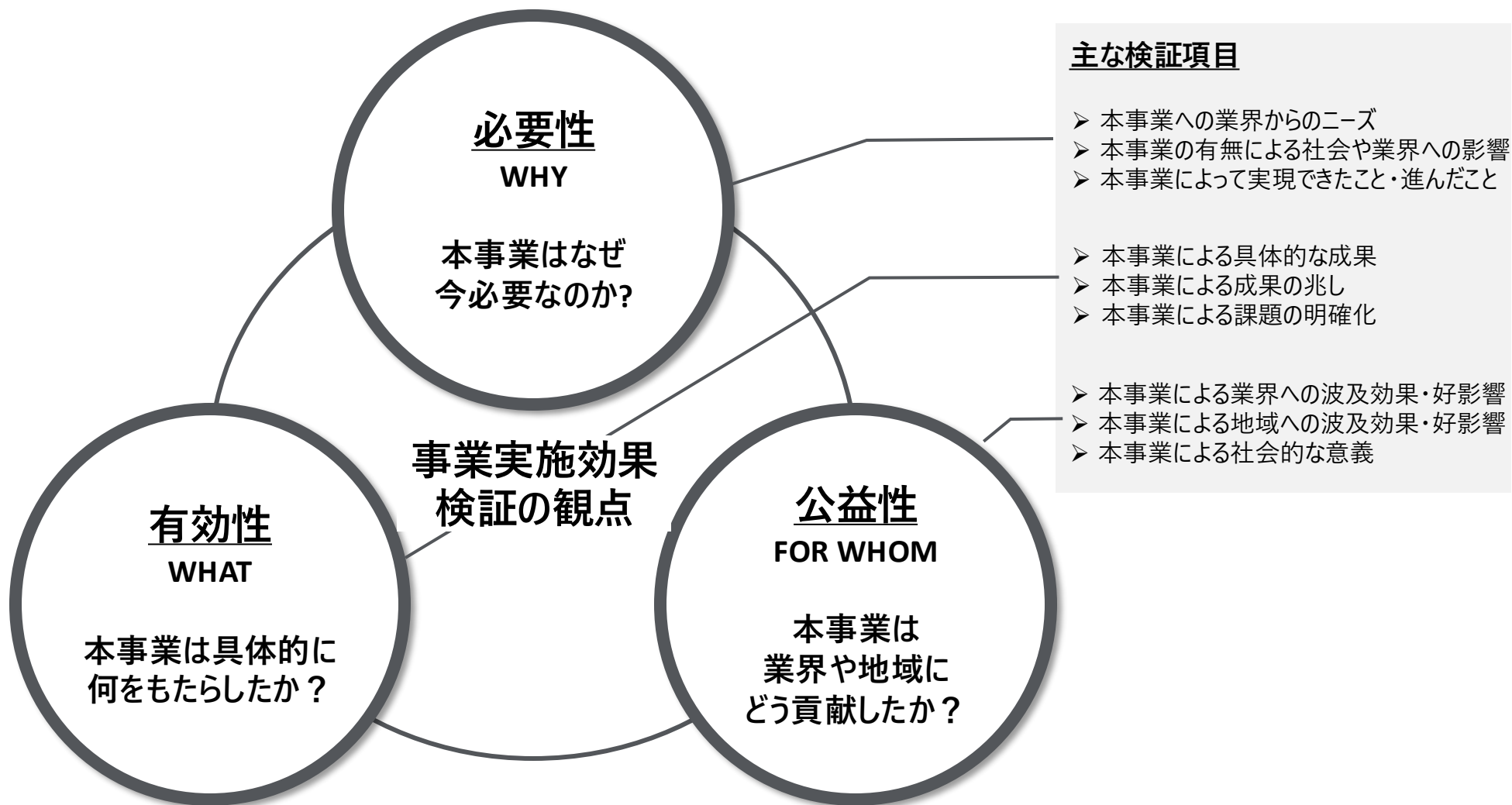
事業名	分野／区分（大項目）	分野／区分（小項目）	団体名／施設名	インタビュー詳細ページ
クリエイター等育成事業	音楽	オペラ	公益財団法人東京二期会	p.48 – 50
		オーケストラ	公益財団法人読売日本交響楽団	p.51 – 53
	舞踊	バレエ	公益財団法人新国立劇場運営財団	p.54 – 56
		現代舞踊	一般財団法人セガサミー文化芸術財団	p.57 – 59
	演劇	現代演劇	一般社団法人KYOTO EXPERIMENT	p.60 – 62
		現代演劇	株式会社precog	p.63 – 65
		現代演劇／ミュージカル	一般社団法人緊急事態舞台芸術ネットワーク	p.66 – 68
	伝統芸能	伝統芸能・大衆芸能（邦楽）	特定非営利活動法人日本音楽国際交流会	p.69 – 71
	舞台芸術	舞台芸術等	公益社団法人全国公立文化施設協会	p.72 – 74
	メディア芸術	ゲーム	一般社団法人コンピュータエンターテインメント協会	p.75 – 77
		マンガ	一般財団法人出版文化産業振興財団	p.78 – 80
		アニメ	公益財団法人画像情報教育振興協会	p.81 – 83
		映画／アニメ	公益財団法人ユニジャパン	p.84 – 86
	現代アート	現代アート	独立行政法人国立美術館	p.87 – 89
	分野横断的新領域	分野横断的新領域	認定NPO法人趣都金澤	p.90 – 92
文化施設による高付加価値化機能強化支援事業	博物館・美術館等	大規模	東京国立博物館	p.151 – 153
		大規模	森美術館	p.154 – 156
	劇場・音楽堂等	小規模	愛知県芸術劇場	p.157 – 159
		小規模	江原河畔劇場	p.160 – 162
		中規模	東京芸術劇場	p.163 – 165
		小規模	まつもと市民芸術館	p.166 – 168
		小規模	山口情報芸術センター[YCAM]	p.169 – 171
		小規模		

2.全体サマリー

- (1) 1年目途中経過（令和6年度の事業実施報告）
- (2) 事業別の主な成果
- (3) 海外展開に係る課題およびプロジェクトの意見・要望
- (4) 今後の示唆・提言

基金の事業実施初年度となる令和6年度については、事業の「必要性」「有効性」「公益性」の3つの観点から、本事業が創出した社会や業界に与えた影響や波及効果等を整理した

本事業の実施効果検証の観点



本事業の実施効果検証の観点①「必要性」 | 本事業はなぜ今必要なのか?

必要性 WHY

採択プロジェクトより聴取した意見からは、現在日本の文化芸術コンテンツは国際的に注目を集め、海外展開の好機を迎えている一方、活動リソース不足の解消を進め、人材育成や海外関係者等との関係構築等の成果の創出に一定の時間を要する取組を着実に行う必要があることが確認できた。そのためには長期的かつ柔軟に様々な準備やチャレンジができる支援体制が求められており、現在の日本の文化芸術にとり、本事業の必要性が極めて高いことが確認された

海外展開にかかる文化芸術分野の動向

海外動向

日本のコンテンツへの 注目・期待の高まり

海外では、近年のデジタルでのコンテンツ配信の普及・浸透に伴い、日本のマンガやアニメ、およびそれらを原作とした舞台作品等が注目・期待を集めており、日本のコンテンツは海外展開の好機を迎えている。文化・歴史等の伝統的な要素と日本ならではの感性・クリエイティビティ・価値観を適切に活かすことが評価ポイントのひとつとなっている

国内動向

海外展開を支える リソース・ネットワーク・知見の不足

多くの分野にて、活動資金や人材等の海外展開におけるリソースが不足している。また、国内市場における活動が多かったことによる、海外関係者とのネットワークや現地の最新情報の不足、そして既に世界で活躍している一部の人材へ活躍の場が偏ってしまう傾向も見られる。さらに、海外志向があっても、上記のリソース不足等により海外現地への視察訪問等は個人的に行わざるを得ないケースも多く、組織や業界への体系的な知見・ノウハウの蓄積という点においても課題が見られる

長期的かつ柔軟な 支援スキームの不足

海外展開を進めるためには、そのための人材育成や、展開先の関係者およびキーパーソン等とのネットワーク・信頼関係の構築等、長期的かつ地道な活動が強く求められる。一方で、国の実施する多くの支援事業は、単年度で終了してしまう（成果を求められる）ため、本格的な海外展開を進める上では、長期的かつ柔軟なスキームによる支援が、より成果創出につながりやすいと考えられる

本事業の実施効果検証の観点②「有効性」 | 本事業は具体的に何をもたらしたのか？

有効性 WHAT

事業初年度は多くのプロジェクトで、本事業の支援スキームを上手く活用し、多様な育成対象者の選抜や国内外の指導者の招聘等による海外展開を推進する体制構築を行いながら、海外の芸術祭等の視察やネットワーキングを目的とした具体的な活動に着手しているほか、既に海外公演を実施したり、作品に対する現地の高評価を獲得した事例も生まれており、2年目以降の展開に期待が持てる着実な前進を見せた

事業初年度の主要な活動・成果

事業アウトカム・KPIへの貢献

事業初年度より、音楽やメディア芸術分野の複数のプロジェクトで、欧州での公演実施や国内外のコンクール・映画祭関連事業での入賞等、本事業の初期・長期アウトカムおよびKPIの達成に貢献する成果が生まれた。現地メディアや観客等からも高い評価を獲得したほか、育成対象者を含むプロジェクト関係者は、多くの学び・気づきを持ち帰り、今後のプロジェクト推進に弾みをつけた

多様な育成対象者の選抜と指導者の招聘による体制構築

各プロジェクトでは成果の創出および現状課題の解決に向けて、クリエイター・アーティストのみならず、プロデューサーや批評家等、様々な役割を担う人材を育成対象者として選抜し、プロジェクトの推進体制を構築した。また、海外の著名なアーティストや専門家、海外実績を豊富に持つ有識者等が多数本事業の趣旨・目的に賛同し、指導者としてプロジェクトに参画し、2年目以降の本格的な海外展開に向けた内部基盤の整備が進んだ

育成対象者の創作能力・マインドの深化

実績・経験豊富な指導者による直接指導や講義、さらには海外での芸術祭等の視察、ネットワーキング、ピッチ等、事業初年度から多くの育成対象者が様々な経験を積んでおり、スキル・マインド両面から変化や成長が見られた。本事業には、これまで海外展開経験の少ない育成対象者も多く、これらの経験が、自身の創作活動を客観的に見つめ直したり、海外で高い評価を受けることで自身の作品に自信を持つ機会となっており、良い影響が生まれている

海外関係者とのネットワーク構築の進展

多くのプロジェクトにおいて、海外展開を図るうえで必要不可欠となる現地の関係者やキーパーソンとのネットワークや関係構築が課題となるなか、多くの関係者が集まる海外芸術祭等への訪問や、海外関係者の国内への招聘が可能となり、ネットワーキングが進んだ。また、複数年度支援という本事業のスキームや、文化庁の事業の採択プロジェクトである点が、今後の海外展開の交渉を進める上で有利にはたらいっている側面もあり、プロジェクトの前進に繋がった

本事業の実施効果検証の観点③「公益性」 | 本事業は業界や地域にどう貢献したのか？

公益性 FOR WHOM

採択プロジェクトが業界全体や地域社会に対してどのように貢献したかという点では、初年度より海外から高評価を獲得し、業界における日本の国際的なプレゼンスを高める動き、多様な人材の選抜とノウハウ・知見の共有を通じて業界全体のレベルアップにつなげる動き、そして活動を行う地域の人々との交流を通じて地域活性化やブランディングを推進する動き等、多くのプロジェクトで公益的な価値をもたらす活動が見られた

業界や地域への貢献に資する活動

国際的な舞台での 日本のプレゼンス向上

舞台芸術の複数のプロジェクトにおいて、国内外の著名な指導者による指導や、育成対象者の意識の醸成等を経て、本場欧州での公演が実現した。世界的にも著名な文化施設で披露された日本の高度な技術は、観客や現地メディア等からも高く評価され、国際的な舞台における日本の存在感を高めた。
また、映画のプロジェクトでは、育成対象者の企画が企画ピッチで入賞を果たす等、業界へのインパクトももたらした

業界への情報や ノウハウの発信・還元

舞台芸術や現代アートを中心とする複数のプロジェクトにて、プロジェクトの特設サイトで海外展開ノウハウや創作活動プロセスの発信を行う等、業界全体への情報やノウハウの発信・還元を進める動きが見られた。
海外展開経験や情報不足という課題を抱える団体も多いほか、海外からの日本のクリエイター等に関する情報へのニーズも一部では確認され、広範かつ効果的な情報発信が、国内外に広く好影響を与える可能性が示唆された

多様な人材の選抜による 業界の人材基盤強化

多くのプロジェクトで、クリエイター・アーティスト、プロデューサー、監督、キュレーター、演出家、批評家、広報、企画制作等の多様な人材を育成対象者として選抜し、企画開発から展開（施設機能強化）までの一連の海外展開プロセスに総合的に取り組む体制を構築した。
様々な立場・役割の人が育成対象となることで、業界全体での海外展開に向けた人材基盤の強化が期待される

地域の活性化や ブランディングへの寄与

演劇やダンスのプロジェクトでは、地域の演劇祭や文化・教育施設等との連携を通じた「演劇による地域活性化」や、育成対象者の移住を伴う地域密着型のプロジェクト活動を通じた「ダンスによる地域ブランディング」等を進めている。
また、舞台芸術のプロジェクトでは、子どもを対象とするAI技術を活用した新たな作品制作や、育成対象者による一般向けのワークショップの実施等、地域社会・住民と直接的に交流しながら創作を進める動きも見られた

2.全体サマリー

- (1) 令和6年度の事業実施効果
- (2) 事業別の主な成果
- (3) 海外展開に係る課題およびプロジェクトの意見・要望
- (4) 今後の示唆・提言

本事業初年度は、クリエイター・アーティスト等育成事業で4件、文化施設による高付加価値化機能強化支援事業で2件の短期・長期アウトカムのKPI達成に寄与する成果が創出された

事業別アウトカム達成への貢献状況

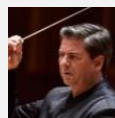
クリエイター・アーティスト等
育成事業

文化施設による高付加価値化
機能強化支援事業

短期アウトカム
KPI①へ貢献

ベルリン・フィルハーモニーでの公演実施＋現地高評価獲得
(読売日本交響楽団)

- 世界的に認知されているベルリン・フィルハーモニーにて公演を実施
- Schwalzwalder Bote紙（フィリンゲン＝シュヴェニンゲン）をはじめとする独英8都市の各公演地の現地批評で多くの高評価を獲得



長期アウトカム
KPI③へ貢献

「沖縄環太平洋映画インダストリー」最優秀企画賞受賞
(ユニジャパン)

- プロジェクトの育成対象者が、将来的に国際的な評価を得る可能性が見込まれる「沖縄環太平洋国際映画祭Cinema at Sea」の関連事業「沖縄環太平洋映画インダストリー」にて企画ピッチを実施
- 育成対象者の太田信吾氏が最優秀企画賞を受賞



短期アウトカム
KPI①へ貢献

藤本壮介展の開催＋高評価獲得
(森美術館)

- 7月2日から開催した藤本壮介展は、9月6日時点で入場者10万人を突破し、藤本展に関するメディア掲載件数は46件に到達。「藤本壮介という建築家の過去・現在・未来を、身体感覚を通じてたどることのできる貴重な機会である」（美術手帖）と高評価を獲得
- 2026年には、台湾・韓国での巡回展を予定



長期アウトカム
KPI③へ貢献

第21回リヨン国際室内楽コンクール入賞
(東京二期会)

- 第21回リヨン国際室内楽コンクール（声楽・ピアノデュオ部門）にて、育成対象者である七澤結氏が第3位入賞および委嘱作品最優秀演奏賞受賞



長期アウトカム
KPI③へ貢献

神ゲー創造主エボリューション 2024「審査員賞」を受賞
(渋谷あそびば制作委員会)

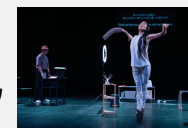
- NHKが主催する革新性をテーマにしたゲームクリエイターコンテスト「神ゲー創造主エボリューション 2024」において、プロジェクトの育成対象者が作品を出品
- 育成対象者の西島大介（島島）氏の作品が「谷口 暁彦 審査員賞」を受賞



長期アウトカム
KPI③へ貢献

YPAM2024での高評価獲得＋海外公演機会の獲得
(愛知県芸術劇場)

- 横浜国際舞台芸術ミーティング（YPAM）において育成対象者が出演する作品発表を実施
- 上記において育成対象者の酒井はな氏が出演する作品に声がかかり、業界的にも国際的にも高い注目を集めるドイツとオランダの舞台芸術祭において公演機会を獲得した（2026年2月上旬及び5月下旬予定）



『ジゼルのアらすじ』

クリエイター・アーティスト等育成事業では、主に以下のような成果創出に向けた活動やアプローチが見られ、事業初年度より多くの採択プロジェクトで具体的な海外展開へのアクションが取られた

クリエイター・アーティスト等育成事業 | 成果創出に向けた活動・アプローチ例

活動の領域	成果創出に向けた活動・アプローチ例
【創作】 創作能力の向上や新たな作品 価値の創造に関する活動	<ul style="list-style-type: none"> ● 海外のアーティストや専門家の招聘による指導 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 世界で活躍する著名なアーティストや、海外現地と日本の事情に精通した、広い業界ネットワークを持つ専門家を招聘し、育成対象者に対する創作活動の指導や助言を実施した ● 海外展開に係る講習会の実施 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 既存のネットワーク等を活用し、海外にて多様な領域で活動している実演家や研究者等を講師とした講習会を実施した ● 多様な育成対象者や指導者の関与体制の構築 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 業界の人材課題解決に貢献すべく、大学生を含む多様なクリエイターや業界内の複数企業から指導者を集め、活動を始めた
【発信】 国内外への広報発信および その基盤構築に関する活動	<ul style="list-style-type: none"> ● 国内外の芸術祭等でのピッチ・作品プレゼンテーションの実施 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 育成対象者は、国内外の芸術祭や映画祭等に参加し、自身の作品のピッチや企画プレゼンテーションを行い、作品や自分の考え等を海外関係者に発信した ➢ 同時通訳の導入等の運営面での工夫を行ったり、企画のトレーラー映像を制作することで作品の意図が伝わりやすいような構成で、ピッチを実施した ● プロジェクトの進捗や創作過程の可視化 <ul style="list-style-type: none"> ➢ プロジェクトの特設サイトの立ち上げや、対面イベントの開催を通じ、プロジェクト概要や最新の活動状況を発信した ● 海外関係者・文化施設との連携による情報発信 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 本格的な海外展開を前に、海外の著名な博物館と共催でシンポジウムを開催し、現地関係者への情報発信を行った ● 現地ファンとの交流の実施 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 海外のイベント出展や、現地大学と連携したトークイベント・サイン会を開催し、現地のファンとの交流を行った
【ネットワーキング・交渉】 海外関係者等とのネットワーク 構築や展開に向けた 交渉に関する活動	<ul style="list-style-type: none"> ● 育成対象者の海外芸術祭等への視察・出展参加 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 海外関係者とのネットワークを有するプロジェクト関係者とともに、育成対象者が海外の芸術祭等を視察訪問し、今後の活動を見据えた現地の最新動向入手や関係者とのネットワーキングを実施した ● 国内の芸術祭への海外関係者の招聘 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 国内の芸術祭における育成対象者のショーケース公演に合わせて海外の著名な劇場や芸術祭の関係者を招聘した
【展開】 公演等の海外展開および 現地評価の獲得に関する活動	<ul style="list-style-type: none"> ● 欧州での公演の実施 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 英独8都市でのオーケストラの公演ツアーや、イギリスの著名な劇場でのバレエ公演が実現した ● 著名な音楽コンクール等への出品・出場 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 育成対象者が、国際映画祭併設の企画ピッチングフォーラムで自身の企画のピッチを行った ➢ 海外の指導者による指導を受けた育成対象者が、フランスの著名な音楽コンクールに出場した

クリエイター・アーティスト等育成事業では、主に以下のような成果創出に向けた活動やアプローチが見られ、事業初年度より多くの採択プロジェクトで具体的な海外展開へのアクションが取られた

クリエイター・アーティスト等育成事業 | 創出された活動成果・好影響・波及効果例

活動の領域	創出された活動成果・好影響・波及効果例
【創作】 創作能力の向上や新たな作品価値の創造に関する活動	<ul style="list-style-type: none"> ● 実践的な指導を通じた育成対象者の創作スキルの向上とマインドの醸成 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 育成対象者が、招聘した海外指導者と寝食をともにする等多くの時間を共有し、相互理解や信頼関係を築きながら指導を受けたことで、技術面のみならず、意識や考え方の面でも多くの刺激を受けた ● 企業等の組織の枠を超えた多数の熱意ある指導者および若手育成対象クリエイターの巻き込み <ul style="list-style-type: none"> ➢ 業界内への訴求等を通じ、30名超の指導者の参画と、大学生を含む熱意ある若手クリエイターを選抜することができた。指導者から活動の改善や新たな施策に対する提案がある等、関係者の間で積極的なプロジェクト推進が見られた ● 国際共同制作への発展と契約の締結 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 指導者として参画する海外プロデューサーと対話を重ねて相互理解・信頼関係が構築ができたことにより、共同制作契約の締結を進めることができた
【発信】 国内外への広報発信およびその基盤構築に関する活動	<ul style="list-style-type: none"> ● 国際的な場でのピッチ・プレゼンテーションスキルの向上と高評価の獲得 <ul style="list-style-type: none"> ➢ プレゼンテーションを作り上げる過程で語学力の向上や自身の作品の振り返りにもつながった ➢ ピッチでの高評価を受けて、業界関係者限定のVIPイベントへの招待等を受け、業界における日本のプレゼンス向上に貢献できた ● 新たな引き合いの獲得 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 海外現地でのイベント開催を通じ、作品に付随するコンテンツの依頼や翻訳依頼を受けたほか、海外芸術祭でのピッチを通じて、フェスティバル出演の打診や共同制作の提案を受けた ● 戦略的な情報発信の進展 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 海外博物館との共催イベントを通じて新たなネットワークを獲得し、次年度以降のプロジェクトの海外展開活動をより多くの関係者等に事前発信・訴求していけるようになった ● 育成対象者の情報共有意識の向上 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 海外での創作活動や海外指導者等と接する中で得た実践的な気づきを、より多くの人に共有していきたいという意識が芽生えた
【ネットワーキング・交渉】 海外関係者等とのネットワーク構築や展開に向けた交渉に関する活動	<ul style="list-style-type: none"> ● 海外関係者ネットワークの拡充・深化 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 海外芸術祭等への出展等を通じてつながった海外関係者と、その後のフォローアップ等が進み、継続的にやりとりをする関係を構築することができた
【展開】 公演等の海外展開および現地評価の獲得に関する活動	<ul style="list-style-type: none"> ● 現地事業者との連携による海外展開実現と国内外での高評価獲得 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 海外公演にあたり、現地事業者と広報・プロモーション等の面で連携や調整を図る等、公演の成功につなげるための一連の活動を経験し、現地との調整のノウハウやポイントを認識することができた ➢ 国内テレビ局との連携を図ったほか、YouTubeでの動画配信等を実施し、当日の現地メディアや観客からの高評価・反響に加えて映像として記録・発信することで、国内やオンラインでも大きな反響を得た

活動の領域ごとのプロジェクトの主な活動成果は以下のとおり

クリエイター・アーティスト等育成事業 | 主な活動成果詳細

活動の領域

【創作】創作能力の向上や新たな作品価値の創造に関する活動

フランス人プロデューサーとの共同制作の決定
(ユニジャパン)



内容詳細

- ・ 指導者として参画したフランス制作会社のジャン＝マリー・ジゴン氏に対し、制作実務（プレゼン映像、脚本）から資金・人間関係の悩みまで相談を重ねた。こうした密なコミュニケーションを通じて信頼関係を構築した結果、同氏を本プロジェクトのプロデューサーとして正式にお迎えすることになった
- ・ プロデューサー就任に際して、共同製作契約を結び、制作費の一部も提供されることとなり、撮影の目途が立つに至った

世界的バリトン歌手ロラン・ナウリ氏ら
による指導の実施
(東京二期会)



内容詳細

- ・ 世界的バリトン歌手ロラン・ナウリ氏や、ミラノ・スカラ座をはじめとする世界的に活躍する指揮者を招聘し、「マスタークラス」と呼ばれる公開形式のレッスンを実施した
- ・ 招聘した海外指導者とは、寝食をともにする等、多くの時間を共有し、相互理解や信頼関係を築きながら指導を受けたことで、技術面のみならず、歌手として世界で活躍していくうえでの意識や考え方の面でも多くの刺激を受けた

30名を超える指導者の参画と
若手クリエイターのモチベーション向上
(コンピュータエンターテインメント協会)



内容詳細

- ・ 約35名の指導者が参加しており、若手の人材育成への熱意を持つものが多い。指導者が勉強会や座談会の実施を提案、実際に実施する等、育成対象者への助言の機会を多く創出している
- ・ 専任メンターとなっている指導者とは毎月オンラインでミーティングを実施し、制作の助言をしている
- ・ 本プロジェクトには大学生も多く選抜されているが、国の支援プログラムであることから、保護者の後押しも得やすく、それが育成対象者のモチベーションの向上につながっている

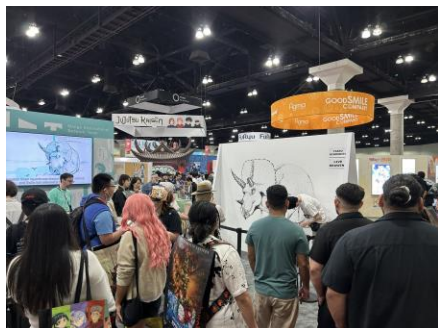
活動の領域ごとのプロジェクトの主な活動成果は以下のとおり

クリエイター・アーティスト等育成事業 | 主な活動成果詳細

活動の領域

【発信】国内外への発信活動およびその基盤構築に関する活動

指導者の助言を活かした北米への展開と、
現地での高い評価による事業拡大の可能性
(出版文化産業振興財団)



内容詳細

- 令和7年にAnime Expo（ロサンゼルス）でのブース出展や、カリフォルニア美術大学（サンフランシスコ）でのトーク・サイン会を実施した
- 渡航前に指導者と面談し、現地での積極的なコミュニケーションや断るべきことの判断など、バランスを取る対応について助言を受けた
- 育成対象者は、現地でファンと交流する中で自身の作品が高く評価されていることを実感し、今後の制作意欲をより高めることができた

オンライン・オフライン双方からの情報発信
(独立行政法人国立美術館)



内容詳細

- 本プロジェクトのウェブサイトを作成し、海外美術館での展示までのプロセスの可視化や情報発信に積極的に取り組んでいる
- リスボンチームは、国内への知見還流のために、駐日ポルトガル大使館において、リサーチ報告会を実施した
- オンライン、オフライン両面での情報発信を行うことで、本プロジェクトの認知度向上と海外展開のプロセスの可視化による業界への知見還流に努めている

V&A博物館（ロンドン）でのシンポジウム開催
(趣都金澤)



内容詳細

- 「Kogei」の単なる普及や市場拡大にとどまらず、学術的な新しい言説を生み出すことを目的にV&A博物館（ロンドン）においてシンポジウムを実施した
- 本シンポジウムに参加した育成対象者からは、日本と海外という異文化間においても共通の課題が存在することを認識できたとの意見があった。その結果、「日本的なもの」に固執せず、より柔軟な発想で制作に取り組む姿勢が醸成されたことが確認された

活動の領域ごとのプロジェクトの主な活動成果は以下のとおり

クリエイター・アーティスト等育成事業 | 主な活動成果詳細

活動の領域

【ネットワーキング・交渉】海外関係者等とのネットワーク構築や展開に向けた交渉に関する活動

英国主要フェス参加を通じた国際展開基盤
構築・ネットワーク強化
(緊急事態舞台芸術ネットワーク)



内容詳細

- 国際フェスティバルのプロデューサーを指導者として招き、実践的なワークショップやレクチャーを経て、世界最大の演劇祭であるエディンバラ・フェスティバル・フリンジ（イギリス）にてピッチを行った
- ピッチは現地で高評価を受け、作品概要をまとめたコンパクトな資料の作成や同時通訳の実施など運営面での工夫も行い、ネットワーキングが活発に行われた。その後、各国関係者から具体的な提案がされており、着実に次の展開につなげることができた

招聘および海外視察におけるネットワーク拡大
(KYOTO EXPERIMENT)



内容詳細

- 今年度は海外キュレーターを約20名招聘し、プログラム鑑賞の他、京都市内の文化施設を案内するなど見識を深める仕掛けをつくることで、育成対象のキュレーターや演出家等が様々な関係を構築することができた
- 次代のディレクター候補（育成対象者）によるショーケース公演を通して日本のアーティストと独自のキュレーションをアピールしつつ、アジアを中心にフェスティバルを視察することで舞台芸術界の潮流を知り、今後キュレーションする作品に生かしている

国際的ネットワークの構築による美術館間交流
(独立行政法人 国立美術館)



内容詳細

- 海外美術館のキュレーターが来日した際、育成対象者が勤務する美術館を訪問してもらい、コレクションや地元にはゆかりのあるアーティストを紹介した
- 実際に訪問してもらうことで、日本の地方美術館の規模や作品の収蔵庫など、海外美術館とのさまざまな違いを実感してもらうことができ、交流も深まった。これまで予算や規模の面で海外との関係性構築が困難であった地方公立美術館にとって、今回のような交流がきっかけとなり、今後海外展開を進めていく契機になると考える

活動の領域ごとのプロジェクトの主な活動成果は以下のとおり

クリエイター・アーティスト等育成事業 | 主な活動成果詳細

活動の領域

【展開】公演等の海外展開および現地評価の獲得に関する活動

欧州公演ツアーの実施と高評価の獲得 (読売日本交響楽団)



内容詳細

- ・ イギリス、ドイツを周遊する欧州公演ツアーを約10年ぶりに実施した
- ・ 楽団の知名度向上を目的として演奏の様子の録画、英語字幕追加を日本テレビに発注し、YouTube上に公開したところ、40万件近くのアクセスを獲得した
- ・ 演奏成果に対する現地の観客、メディア上での評価は非常に高く、イギリスのメディアは、“読響というオーケストラは、表現力・音の響きにおいて別格の存在だった”との評価をした

英国ロイヤルオペラハウス公演の実施 (新国立劇場運営財団)



内容詳細

- ・ 団体初となる海外自主公演にあたっては、現地の広報・宣伝会社と連携し、効果的な展開戦略で現地メディア関係者とのネットワークを構築。広告出稿の他、プレスランチやトークイベント等の開催によりチケット完売に繋げることができた
- ・ 現地の複数メディアにおいて公演評が掲載され、いずれも4～5つ星の非常に高い評価を得た。また、SNSや終演後のロビー、出待ちの観客からの熱のこもった反応は育成対象者の自信にも繋がり、その後の活動の後押しになっている

「沖縄環太平洋映画インダストリー」 最優秀企画賞受賞 (ユニジャパン)



内容詳細

- ・ 「第2回沖縄環太平洋国際映画祭Cinema at Sea」の関連事業「沖縄環太平洋映画インダストリー」のピッチングフォーラムで、育成対象者の太田信吾氏が最優秀企画賞を受賞した
- ・ 企画プレゼンでは、プロジェクト予算を活用してプレゼン映像を制作したことで企画への本気度や覚悟を示すことができ、次回作へと繋がる企画プレゼンを成功させることができた。海外で作品を売り込む際に、映像を用意する重要性を再認識した

文化施設による高付加価値化機能強化支援事業でも、主に以下のような成果創出に向けた活動やアプローチが見られ、事業初年度より海外展開や施設機能強化へのアクションが多く見られた

文化施設による高付加価値化機能強化支援事業 | 成果創出に向けた活動・アプローチ例

活動の領域	成果創出に向けた活動・アプローチ例
【創作】 創作能力の向上や新たな作品価値の創造に関する活動	<ul style="list-style-type: none"> ● 新たなキュレーター育成を見据えた巡回展示の始動 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 国内の建築展キュレーター不足という現状課題を踏まえ、建築展の国際巡回を始動。第一歩として国内の展示を開始した ➢ 国内の建築キュレーターの育成を目的とする国際ワークショップを公募で実施し、人材の裾野を広げることも目指す ● 指導者による育成対象者の自主的な活動の尊重・サポート <ul style="list-style-type: none"> ➢ 育成対象者の自主的な活動を尊重し、指導者による指導の枠に囚われない様々な活動ができる環境を整えた ● 世界最高峰の創作環境を持つIRCAMとの連携 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 現代音楽において世界最高峰の環境を持ち、国際的に活躍する作曲家の輩出しているIRCAM（フランス国立音響音楽研究所）と連携したプロジェクトを立ち上げた
【発信】 国内外への広報発信およびその基盤構築に関する活動	<ul style="list-style-type: none"> ● 世界的認知度のある指導者を迎え指導の様子を発信 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 本プロジェクトの指導者に世界的デザイナー・コシノジュンコ氏を迎え、竹芸作家の育成対象者に対するレクチャーを実施した。レクチャーの様子は地元テレビ局にて取材された ● プロジェクトサイト・プロジェクトページの開設 <ul style="list-style-type: none"> ➢ クリエイションをした作品や育成対象者を日英両方で発信するプロジェクトサイト・ページを開設し、映像や活動レポート等の掲載を通じて国内外に情報発信を開始した
【ネットワーキング・交渉】 海外関係者等とのネットワーク構築や展開に向けた交渉に関する活動	<ul style="list-style-type: none"> ● 育成対象者の海外フェスティバル等への視察・リサーチ訪問 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 欧州で開催されている複数のダンスフェスティバルを視察・リサーチ訪問し、各所で海外関係者とのネットワーキングを実施した ● 育成対象者の国際会議への参加、海外関係者とのミーティング実施 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 業界関係者が集まる国際会議や、海外関係者とのミーティングに参加し、指導者等からのネットワークの共有を受けた
【機能強化】 海外展開のための体制構築や推進基盤構築に関する活動	<ul style="list-style-type: none"> ● 初の海外展覧会の主催 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 施設として初めて海外での展覧会を主催した。展示前の出展作品の共同調査等、長期的な関係構築を進めた ● 地域ブランディング・地域活性化の推進 <ul style="list-style-type: none"> ➢ プロジェクトの活動を地域のブランディングや活性化に寄与すべく、地域住民や地域内の施設等との交流・連携を図った

文化施設による高付加価値化機能強化支援事業でも、主に以下のような成果創出に向けた活動やアプローチが見られ、事業初年度より海外展開や施設機能強化へのアクションが多く見られた

文化施設による高付加価値化機能強化支援事業 | 創出された活動成果・好影響・波及効果例

活動の領域	創出された活動成果・好影響・波及効果例
<p>【創作】</p> <p>創作能力の向上や新たな作品価値の創造に関する活動</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 育成対象者の海外展開マインドの醸成 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 初めて建築展の国際巡回を交渉する上で、日常的に海外美術館の建築展へのアプローチ動向をチェックするようになった ➢ 育成対象者がこのプロジェクトをきっかけに海外展開マインドが醸成され、欧州を自発的に視察、現地の日本人アーティストへのインタビューやフェスティバル公演の鑑賞・海外関係者とネットワーキングを実施し、海外で創作する機会を獲得するにいたった ● 世界最高峰の創作環境での育成対象者の新たな学び・気づきの創出 <ul style="list-style-type: none"> ➢ IRCAMの経験豊富なクリエイターやエンジニアと密にコミュニケーションをとることにより、育成対象者が新たな境地を開拓できる創作環境づくりを着実に行うことができた
<p>【発信】</p> <p>国内外への広報発信およびその基盤構築に関する活動</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● プロジェクトサイト・プロジェクトページの開設による劇場としての発信強化 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 育成対象者の作品が世界市場で認知されるための第一歩として、今後の海外展開に貢献可能なWEBサイトを構築した
<p>【ネットワーキング・交渉】</p> <p>海外関係者等とのネットワーク構築や展開に向けた交渉に関する活動</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 育成対象者への海外ネットワーキング共有 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 令和7年度の始めにニューヨークで行われた国際会議ISPA(International Society for the Performing Arts)に育成対象者を参加させ、指導者のもつネットワークを育成対象者に共有することができた ➢ その後に、ギリシャのフェスティバルに参加した際に、そのネットワークを活かした活動をすることができ、育成対象者自身によるネットワーク構築も順調に進んでいる
<p>【機能強化】</p> <p>海外展開のための体制構築や推進基盤構築に関する活動</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 海外展開を通じた課題の再発見とノウハウの蓄積 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 海外展覧会を初めて主催したことで、法務対応等の自施設の課題を改めて認識できたほか、長期プロジェクトで関与メンバーも増えたことにより、輸出入の手続きや契約対応等様々なノウハウが蓄積された ● 創作活動と地域貢献 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 館の掲げるビジョンに強く共鳴した育成対象者が自発的に移住し、積極的に地域住民と交流している

活動の領域ごとのプロジェクトの主な活動成果は以下のとおり

文化施設による高付加価値化機能強化支援事業 | 主な活動成果詳細

活動の領域

【創作】創作能力の向上や新たな作品価値の創造に関する活動

建築展示の国際巡回と海外著名キュレーター招聘による人材育成
(森美術館)



内容詳細

- 日本では、学芸領域として建築部門を有する美術館が少なく、建築を専門とするキュレーターが十分に育成できていない。そこで活動の場を世界に広がりつつある建築家の藤本壮介に焦点を当て、その国際巡回を本基金の活用によって実施し、我が国において建築を専門とするキュレーターの育成を目指す
- また並行して、現代建築の魅力を世界に発信するための人材育成と体制構築を目指し、情報の収集と蓄積、ワークショップの企画、海外機関との連携構築等の取り組みを開始した

IRCAM（イルカム）との国際共同委嘱と、
日仏での作品発表による若手クリエイター育成
(東京文化会館)



内容詳細

- 現代音楽において世界最高峰の環境を持ち、国際的に活躍する作曲家を輩出しているIRCAM（フランス国立音響音楽研究所）と連携したプロジェクトを立ち上げた。若手クリエイターへ国際共同委嘱し、ここで創作された新作をパリと東京で発表する
- これまでに、国内外で活躍する3名の作曲家と1名のサウンドデザイナーを選出し、令和10年度までに実施する、フランスでの創作・発表スケジュールを調整している。現地コーディネーターを交え、IRCAMの経験豊富なクリエイターやエンジニアと密にコミュニケーションをとりながら、育成対象者が新たな境地を開拓できる創作環境づくりを着実にやっている

活動の領域ごとのプロジェクトの主な活動成果は以下のとおり

文化施設による高付加価値化機能強化支援事業 | 主な活動成果詳細

活動の領域

【発信】国内外への発信活動およびその基盤構築に関する活動

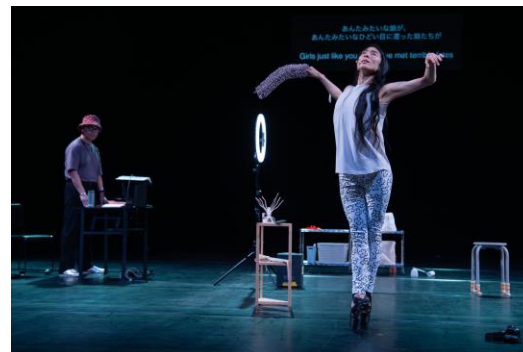
世界的デザイナー・コシノジュンコ氏による指導と地元テレビ局による取材
(大分市美術館)



内容詳細

- 本プロジェクトの指導者に世界的デザイナー・コシノジュンコ氏を迎え、竹芸作家の育成対象者に対するレクチャーを実施した。レクチャーの様子は地元テレビ局にて取材された
- 地元テレビ局で報道された結果、本プロジェクトの認知度向上に繋がった。また大分が誇る竹工芸への注目を集め、来秋の作品発表への期待感を効果的に高めるといふ大きな成果を上げた

海外展開を意識したウェブサイトの構築や
育成対象者の批評家による発信活動
(愛知県芸術劇場)



『ジゼルのあらすじ』

内容詳細

- 本プロジェクトの専用WEBサイトを、WEB製作者と劇場にて議論を重ねて作成・リリースし、国内外への主要な発信プラットフォームとして位置付けた。単なる情報公開にとどまらず、批評家（育成対象者）による作品のレビューやイベントのレポートなどを掲載・集約し、育成対象者自身と本プロジェクトにて製作したダンス作品の紹介を実施
- 海外展開においては、対面でのコミュニケーションが最重要であるが、その機会は限られている。育成対象者の作品が世界市場で認知されるための第一歩として、今後の海外展開に貢献可能なWEBサイトを構築した

活動の領域ごとのプロジェクトの主な活動成果は以下のとおり

文化施設による高付加価値化機能強化支援事業 | 主な活動成果詳細

活動の領域

【ネットワーキング・交渉】海外関係者等とのネットワーク構築や展開に向けた交渉に関する活動

テクノロジーを活用した作品創作を通じた国際交流の活性化 (YCAM)



撮影：守屋友樹 写真提供：山口情報芸術センター [YCAM]

内容詳細

- ・ 国内外のフェスティバルや見本市を通じてネットワーキングを実施し、海外プレゼンターとの関係構築を進めることで、今後の海外展開の可能性を高めた。また、現代社会を映す鏡としてのフェスティバルにおいて、多くのディレクターが同時代に発生しているテクノロジーに興味関心を持っており、テクノロジーを取り入れたパフォーマンスは海外展開のニーズに即していることを再発見した
- ・ 主にアジアの機関や舞踊団と、テクノロジーを通じたパフォーマンスについてのコミュニケーションが深まり、各国間を行き来した相互交流が生まれている。令和7年10月には、育成対象者が韓国でのテクノロジーに関するダンスイベントに、ワークショップ講師やトーク登壇者として参加し、創作するパフォーマンス表現や、実際に海外で上演するための知見を深める機会となっている

劇場の恒常的なネットワーク形成への寄与 (世田谷パブリックシアター)



撮影：細野晋司

内容詳細

- ・ 海外公演を見据え、英国・韓国でのリサーチ・関係者との間で集中的なネットワーキングを実施。単に公演を実施するだけでなく、劇場間あるいは関係機関の恒常的な関係構築を目指し、緊密な連携を確立。先方から話があればすぐに現地に赴き、直接対話をすることで、文化的な機微を踏まえた迅速かつ柔軟な交渉を行った
- ・ これにより、単発の国際共同制作ではなく、長期的な共同制作プロジェクトの第1弾として、国内での公演を実現（韓国との共同制作作品2025年8月「紅い落葉」）。海外関係機関との恒常的なネットワーク構築・劇場としての強固な基盤づくりの第一歩を踏み出した

活動の領域ごとのプロジェクトの主な活動成果は以下のとおり

文化施設による高付加価値化機能強化支援事業 | 主な活動成果詳細

活動の領域

【機能強化】海外展開のための体制構築や推進基盤構築に関する活動

海外展開活動に向けた新組織「GET」の立ち上げ (東京国立博物館)



内容詳細

- ・ 本基金への採択を機に、特命担当「Global Exhibition Team (GET)」を立ち上げた。GETでは、世界で活躍できる専門家の育成、さらには日本の伝統文化の国際的なプレゼンスの向上ならびに当該地域における日本文化のファン獲得・拡張を目標としている
- ・ 組織化により、館内で「GET」及びプロジェクトの認知度が向上するとともに、海外展開に関する問い合わせ先として「GET」が機能するようになり、海外展開時のコミュニケーションスキームが組織内に確立されつつある
- ・ 広報担当者を海外に派遣することは予算の関係もあり実現できなかったが、本基金により広報室員の現地派遣による取材が可能となり、SNSやホームページを通じた国内外への発信を強化できている

滞在制作を通じた地域交流と都市ブランディングの推進 (まつもと市民芸術館)



内容詳細

- ・ ダンスによる松本市のブランディングを標榜しており、館の掲げるビジョンに強く共鳴した育成対象者が自発的に移住し、滞在制作に着手した
- ・ 移住したことにより、地域のお祭りやイベントに参加するなど、地域住民との交流が活発化し、本プロジェクトやコンテンポラリーダンスの認知度を高めることができている
- ・ 併せて、本プロジェクトのWEBサイトを立ち上げ、育成対象者によるコラムやレポートを掲載し、国内外への発信を強化している

2.全体サマリー

- (1) 令和6年度の事業実施効果
- (2) 事業別の主な成果
- (3) 海外展開に係る課題およびプロジェクトの意見・要望
- (4) 今後の示唆・提言

各分野の共通課題としては、資金・人材のリソース不足や、海外展開に必要なネットワークやノウハウの属人化が見受けられた。分野ごとに課題や背景は様々だが、日本の商習慣の構造等に起因しているものもあり、長期的には抜本的な改革も求められる

各分野における海外展開に係る課題

分野	海外展開に係る課題
共通	<p>1.リソース（資金・人材）の慢性的な不足 日本の芸術関連の施設及び団体は慢性的な資金やそれに伴う人材（稼働ベース）が慢性的に不足している。また、海外（特に欧米）と比して、運営体制等の構造の違いにより海外展開で必要とされる専門性を持つ人材が不足している</p> <p>■分野別特徴 メディア芸術（ゲーム）：技術の高度化に伴い一作品当たりの制作工数の増加および制作に必要な人材が求められる一方、人材不足が顕著である 現代アート：特に公立美術館においては、企画展での所蔵作品の貸借による海外美術館との協働も、近年は輸送費の高騰により難しい状況 また、日本の美術館は学芸員と事務員という組織体制を維持している館が多く、専門的なキュレーター人材の育成を行う組織体制を構築出来ていない 舞台芸術：海外の劇場がカンパニーを有し、劇場内で制作からプロモーション、公演、再演を推進する体制が根付いているのに対し、日本の劇場は上演する場としての機能が主であり、キュレーター/プロデューサー/アートマネジメント人材等の育成機会に乏しく、それらの人材が不足傾向</p> <p>2.海外ネットワークの不足、ネットワークの個人依存・若手への未継承、ノウハウの不透明性 海外展開に必要なネットワークは単純に不足しているだけでなく、個人に依存する傾向となっており、それらのネットワークの若手への継承が進んでいない また、ネットワーク構築・海外プロモーションに関するノウハウが個人・特定団体に留まっており、広く共有されていない</p> <p>■分野別特徴 メディア芸術（映画）：そもそも海外展開の経験値が業界全体で不足しており、ノウハウの蓄積がまだ少ない 現代アート：海外の美術館や展覧会視察のための出張費が所属組織から支給されにくく、組織としての海外ネットワーク構築が非常に難しい状況</p>
舞台芸術	<p>3.物価高騰等の経済情勢・エコ志向等による渡航ハードルの上昇 世界的な物価高の経済情勢は多くの関係者や物品の輸送を必要とする舞台芸術分野にとって大きなコスト増となっている。また、とりわけ欧米においては、近年のエコ志向（海外渡航に対する環境への配慮）の広まりにより、招聘する側のハードルが高まっている</p> <p>4.海外志向のある若手アーティストの減少 近年の3.の要因も多分に影響し、若手アーティストが海外展開に対する視野を持てないまま活動を続けている</p>
メディア芸術	<p>5.国内と海外の市場の違いによる海外展開志向醸成の難しさ（マンガ） 国内市場が成熟していることも起因し、もとより海外市場向けに作品を展開することのインセンティブが作家・出版社ともに高まりにくい</p> <p>6.産業的な構造による資金不足（短編アニメーション） 産業として成り立ちにくい構造となっているため、制作資金を得る場が少なく、自己資金と余暇で作らざるを得ない状況である</p>

採択プロジェクトへのインタビューからは、①本基金の支援内容の拡張②持続的な海外展開支援の検討に関する要望が寄せられた

プロジェクトから寄せられた意見や要望




カテゴリ	詳細
本基金の支援内容の拡張	<ul style="list-style-type: none"> プロジェクト間、育成対象者間での繋がり強化 本基金のプロジェクトに参加したことによる同プロジェクト内でのネットワークの広がり価値を見出す育成対象者が多く、プロジェクト内に限らず、他プロジェクトの育成対象者との交流する機会（情報交換や成果報告等）が求められている 振興会・文化庁のネットワークを活用した海外情報発信の強化 プロジェクトごとに特設サイト等を用いて、クリエイター等、作品、ナレッジ/レポート等を発信するもののリーチ範囲は限定的。振興会・文化庁がネットワークを持つ、外務省や国際交流基金、そして在外大使館等の海外に対する発信力を持つ公的組織と連携した情報発信の取り組みを支援・強化することで、個々の各団体/プロジェクトの広報・プロモーション活動の活性化と事業全体としての発信力の底上げが求められている
持続的な海外展開支援の検討	<ul style="list-style-type: none"> 海外展開に関する情報のオープン化 海外展開を検討し始めた際に必要な情報（当該分野における基本的な海外展開に関する座学講義等）は広くクリエイター等が認識することで若手クリエイター等の海外展開の機運醸成に繋がる。また、実際に海外展開のために必要な情報（自身の作品にあった展開候補となる国やそのトレンド情報、海外ディレクターの特徴、具体的なネットワーク構築ノウハウ等）があることでよりアクションに繋げやすいため、これらの情報が段階的にでもオープンになることで、業界全体で海外展開の機運醸成を図れると考えられる エージェントやディストリビューターの機能の本格立ち上げ 特に舞台芸術分野等において、海外には存在する同機能（海外展開時に劇場やフェスティバルなど、広く関係者に作品を売り込み出来る機能）の担い手が不足しており、効率的な海外展開を実現するためにも同機能が各分野で充足される必要がある

2.全体サマリー

- (1) 令和6年度の事業実施効果
- (2) 事業別の主な成果
- (3) 海外展開に係る課題およびプロジェクトの意見・要望
- (4) 今後の示唆・提言

今後の本事業に関して、採択プロジェクトの成果の最大化を支援しつつ、これまでの成果・課題・要望等の整理の結果から、本事業での検討・検証を通じた持続的な海外展開モデルの追究と、文化芸術分野全体への普及が求められていると思料した。その実現にあたっては、本事業で以下の3フェーズの目的を果たし、あるべき状態を作り出していくことが重要であると考えた

「採択プロジェクトの成果の最大化」と「持続的な海外展開モデルの展開」に向けた本事業のロードマップ（案）

	フェーズ1	フェーズ2	フェーズ3
目的	採択プロジェクトの成果の最大化による 本事業の目標達成 	持続的な海外展開モデル・仕組みの 検討と検証 	持続的な海外展開モデルの 文化芸術全体への段階的な普及・実装 
目的達成の ポイント	採択プロジェクト間の交流活性化と 海外展開活動の認知度向上による成果を 創出しやすい環境の構築	各プロジェクトに蓄積された成果や ベストプラクティスの体系化および 有用性の検討・検証	各分野に有効にはたらく持続的な海外展 開モデルの継続的な精度向上と 業界における認知拡大・浸透
あるべき状態	<ul style="list-style-type: none">✓ 育成対象者を含む各採択プロジェクトの関係者同士が、有機的に繋がりながらコミュニケーションを取り、情報交換等を通じて自身の創作、発信、ネットワーク構築等の海外展開に向けた各活動を深化させる環境が整備されている✓ 各採択プロジェクトにおける成果創出を促進または創出された成果による影響を最大化するための海外向けに情報発信が可能な環境が整備されている	<ul style="list-style-type: none">✓ 各採択プロジェクトにおいて海外展開に向けた活動が進み、成功事例が蓄積され、自分たちのベストプラクティスが見えてきている✓ 上記のベストプラクティスが基金内で共有され、採択プロジェクト間での参照・応用も進み、一定の再現性や有効性が確認されている✓ 海外展開モデルの応用にあたっての課題やボトルネックが明らかになっている✓ 基金内での応用状況を踏まえ、業界全体でも有効に機能するような持続的な海外展開モデルに関する検討・検証が進んでいる	<ul style="list-style-type: none">✓ 本事業で検討・検証された持続的な海外展開モデルが文化芸術分野全体に段階的に広まり、団体や個人で応用して海外展開に取り組むことができています✓ 各分野でボトルネックとなるポイントや海外展開モデルのさらなる発展や深化に向けて、不足している／必要とされる機能やリソース（仕組み、組織、人材等）の要件等が明らかになってきている✓ 海外展開モデルが常に検証・改善・アップデートされ、様々な分野での成果創出に貢献している

各フェーズにおいて、本事業の主な関係者となる文化庁・振興会および採択団体に求められるキーアクション案を整理した。
各フェーズの目的達成には、文化庁・振興会、採択団体が丸となり、本事業目標の達成に加え、持続的に海外展開を行うためのモデルを構築し、常にアップデートを繰り返しながらも、文化芸術分野全体へ段階的に普及させることが重要であると思料する

本事業の関係者に求められるキーアクション（案）

		フェーズ1	フェーズ2	フェーズ3
目的		採択プロジェクトの成果の最大化による 本事業の目標達成	持続的な海外展開モデル・仕組みの 検討と検証	持続的な海外展開モデルの 文化芸術全体への段階的な普及・実装
キ ー ア ク シ ョ ン （ 案 ）	文化庁・ 振興会	<ul style="list-style-type: none">採択プロジェクトの関係者を対象とする定期的な情報交換会・交流会の企画・開催成果発表会、シンポジウム等の企画、開催（既に実施している中間報告会を含む）海外機関との連携を通じた、本事業および採択プロジェクトの活動や成果のプロモーション・発信強化	<ul style="list-style-type: none">持続的な海外展開モデルの検討に向けた海外事例等の先進事例のリサーチ各採択プロジェクトの創出成果分析およびベストプラクティス等の情報の集約成果およびベストプラクティスの類型化、成功ステップの体系化海外展開モデルの発展に必要な機能やリソースの明確化リサーチ成果や検討状況等の定期的な発信・共有	<ul style="list-style-type: none">海外展開モデルの広域的な発信・展開準備<ul style="list-style-type: none">必要リソースや機能の明確化と実装想定されるアクション専門人材の育成カリキュラムの実装情報プラットフォーム整備<ul style="list-style-type: none">統括団体やエージェント組織の設立・運営支援検証・改善・アップデート体制の整備海外展開モデルの確立と文化芸術分野への広域的な発信・展開
	採択団体	<ul style="list-style-type: none">採択プロジェクト交流機会への積極的な参加採択プロジェクト間の交流推進に関する要望や意見出し主体的な情報交換会等の開催成功事例やノウハウの蓄積プロジェクト特設サイト等を活用した創出成果の発信・見える化	<ul style="list-style-type: none">成功事例等からのベストプラクティス導出ノウハウやネットワークの集約・体系的な整理交流機会における積極的な情報発信・共有採択プロジェクト間での相互学習や相互のベストプラクティスの応用の推進	<ul style="list-style-type: none">統括団体やエージェントの組織への参画・運営情報発信・ネットワーキングの継続実施次世代人材の継続育成・採用

フェーズ1における「各採択プロジェクトの成果の最大化」そして、次フェーズ以降の持続的な海外展開モデルを検討、普及させていく上で、目先のプランとして、「各採択プロジェクト間の交流推進」と、「本基金としての海外への情報発信体制の強化」の2つのアクションプランが、採択プロジェクトの課題や要望にも応えるという観点においても、検討し得ると考えた

成果創出に向けたアクションプラン（案）

アクションプラン①プロジェクト間の情報交換機会の創出

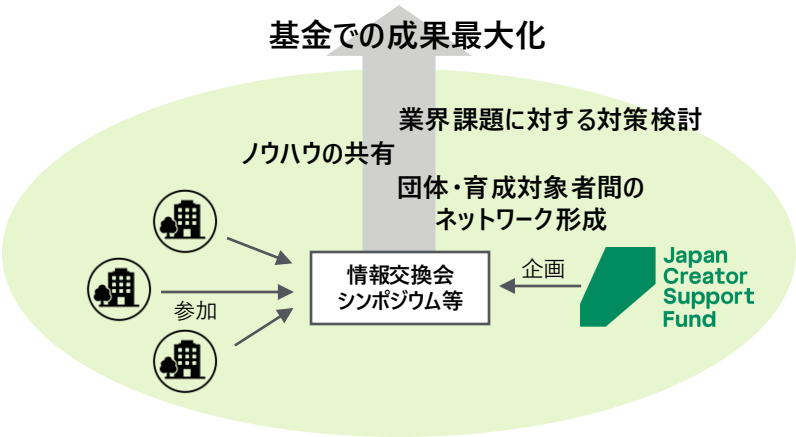
背景・目的

- 海外展開の経験が少ない育成対象者も多く参加する本事業では、同じ志を持つ育成対象者の繋がりには自分自身にとって意義深いことがわかり、現在希薄になっているプロジェクト間の交流を求める声が挙がっていた
- 各プロジェクトに蓄積されているノウハウや成功事例を共有し、採択団体の関係者の国内ネットワーク強化・成果創出の促進することを目指す

施策概要

定期的に関係者を対象とした交流の機会を作る。ノウハウの共有をする、特定のテーマ（各分野における成果創出に向けたアクションプラン等）について議論するなど、様々な観点から交流目的を設定し、採択団体関係者の興味喚起、交流促進を図る。

また、今後のありたき姿に向けてコミュニティ化の検証をするなど、本基金の成果以外にも、各業界に還元できる取り組みになることを目指す



アクションプラン②海外情報発信体制の構築・周知による発信強化

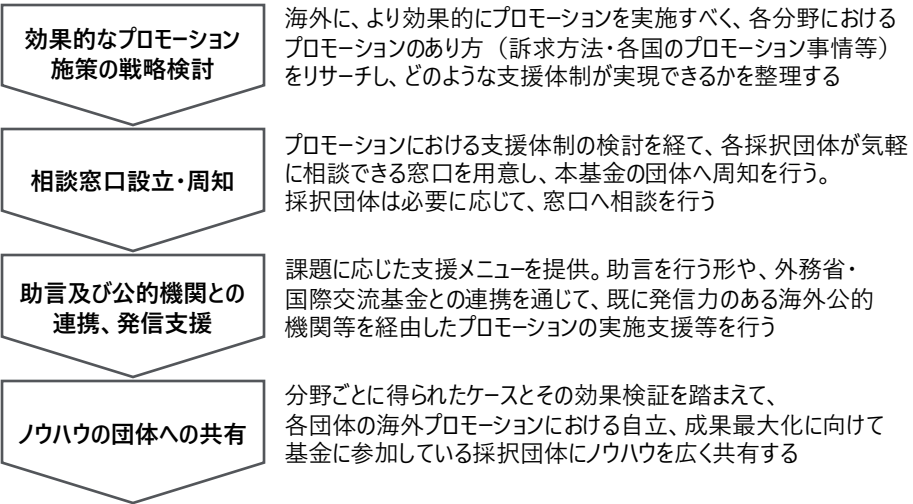
背景・目的

- 各団体のウェブサイトによる海外への発信力は限定的であり、直近の成果創出に向けて効果的な情報発信が求められている
- 各プロジェクト及びクリエイター等の海外における認知拡大・成果創出の足がかりとなる情報発信を目指す

施策概要

採択団体が海外に向けたプロモーションに苦戦した際に、気軽に相談を受けられる窓口を設立し、課題に応じて助言・公的機関（例：国際交流基金、外務省等）との連携・発信支援を実施する。さらに、相談窓口で得られたケースとノウハウを広く基金の採択団体へ共有することで各団体の発信強化に寄与する

▽施策実施のイメージ



3.クリエイター等育成支援事業詳細資料

- (1) 採択プロジェクトインタビュー個票
- (2) 採択プロジェクト概要

インタビュー対象	公益財団法人 東京二期会	分野	音楽
プロジェクト名	アーティストの好循環を創り出す ～大規模国際共同制作を通した輸出型プロモーションの試み～	区分	補助型

インタビューサマリー









- ✓









新型コロナウイルスの影響による劇場公演の遅延に加え、各国劇場の改修工事などが重なり、海外公演の調整は容易ではない状況。海外展開に係る課題としては、国際的な競争に挑む国としての支援体制の整備や、アーティストの海外展開のモチベーション醸成が挙げられた
- ✓

教育的な趣旨や国のバックアップ体制の伴う本基金により、海外の一流アーティストによるマスタークラスの開催等の普段では実現できない活動に取り組むことができ、育成対象者のモチベーション向上・国内外での活動の広がり、著名な海外コンクールでの入賞等の成果創出にも繋がった
- ✓








今後は、本基金から得た繋がりを活かした国際的な活動に加え、SNS等での情報発信も行いながら、オペラへの認知・関心を高めることで国内外の活動を有機的に拡大していく見込み

インタビューメモ

調査項目		回答内容	
業界動向・海外展開への考え方・業界課題	●業界動向（国内外のオペラ分野における状況・課題等）	 世界的に施設の運営資金等の経済面で深刻な課題を抱える劇場も多い状況である。また、現在日本を含む世界各地で劇場の改修工事や建て替えが進行しており、東京文化会館も2026年5月から3年間使用不可となる予定である	 団体・施設
	●海外展開における課題	 地方ではオペラの認知度や集客が課題であり、海外の著名アーティストが来日しても、地方ではその価値が十分に伝わらない。そのため、プロモーションや地域住民・教育機関との連携強化が重要。当財団でも、愛知での公演に向けて音楽大学でのワークショップの実施、事前公演イベントなどのアプローチもしたが、オペラの知名度の低さにより、まだまだ集客の課題がある	 指導者
活動実績・成果およびその影響	●プロジェクトの目的/活動概要/5年後に目指す成果・ありたき姿	 本基金による育成対象者は国内で活躍できる能力を持っている一方で、欧州に進出すると競争相手も他国のアーティストに広がり、欧州での活躍には、専属契約が第一歩になり、それには非常に激しい競争が伴う。他国（韓国など）では国を挙げて若手人材を海外に輸出していく若手の支援が進む中、日本の市場も成熟しているため、日本国内である程度活動できてしまうことも起因し、海外進出への個々のハングリー精神や教育や支援体制が不足している	 育成対象者
		 現在、若手人材は、言語能力や柔軟性に優れ、特に海外展開を視野に入れた活動において高い期待が持てる。国内に限定されず、グローバルに活躍できる人材を育成することは、共同制作や本プロジェクトの重要な目的の一つである。国際性やグローバルスタンダードを身につける機会を提供し、業界で長く活躍できる人材の育成を目指す	
		 2024年10月にロラン・ナウリ氏のレッスンを受講。そこで更に新たな繋がりが生まれ、フランス語のディクシオン指導を受けるなどし、2025年4月にリヨン（フランス）での国際室内楽コンクールに参加し受賞。貴重な経験が出来た	

インタビュー対象		分野	音楽
プロジェクト名		区分	補助型
調査項目		回答内容	
活動実績・成果およびその影響	●基金によって活性化した取り組み/基金があることで始動した取り組み	<div><div></div><div>東京二期会・本基金のプロジェクトへの参画によって、海外アーティストとの共演がかなり増えた。リヨン（フランス）の国際室内楽コンクールに挑戦することで、現地の審査員との繋がりができ、今後の仕事の可能性が広がったと実感。繋がりが繋がりを生むことにつき、強く実感</div></div>	<div><div></div><div>団体・施設</div></div> <div><div></div><div>指導者</div></div> <div><div></div><div>育成対象者</div></div>
	●プロジェクトにおける成果/今後見込まれる成果	<div><div></div><div>通常では招聘が出来ない世界トップクラスのバリトンのロラン・ナウリ氏を招聘し、マスタークラスの実施と山形での公演に伴う育成を可能にしたのは間違いなく本基金があったためである。その甲斐あって、各育成対象者の活動や成果創出に繋がっている。また、ミラノ・スカラ座でコレパティートルを務め現在名門劇場での客演が続く有能な指揮者を招聘出来た。彼らの参加により、若手歌手やスタッフに「一流とは何か」を示し、プロジェクト全体に大きな成果をもたらした</div></div>	
	●参加した国際コンクールでの評価	<div><div></div><div>演出: 2024年10月のワークショップ時の通訳及び演出助手としての評価を受け、2025年11月にドイツ公演の演出助手に抜擢されている。もともと活動拠点がウィーンと限定的だったが、本基金での活動を通じて、ドイツや日本での活動機会を得られている。例えば、2025年7月に兵庫県立芸術文化センターのオペラ公演で助手の仕事にも携わった</div></div> <div>歌手1: イタリア・ペーザロでの若手中心のオペラ公演に出演するほか、ロラン・ナウリ氏のマスタークラス受講や、ナウリ氏と寝食を共にすることで歌手としてプライベート面で学ぶことも多く、それらも経て2025年8月のイタリアでの公演に繋がった</div> <div>歌手2: ナウリ氏とオペラで共演することで、芸術面のテクニックや、海外の競争環境で生き抜いていくかなど、様々な観点で有益なアドバイスを貰っていた。これらの基金での活動を通じて、主要な海外歌劇場からも評価を受け、スペインでのオペラデビューに繋がった</div>	
	●育成対象者におけるスキル/マインドの変化・成長実感	<div><div></div><div>表現力と演技力を評価頂けた。この成果は、東京二期会でのオペラの活動を通して培ってきた部分であると感じており、自分の強みを出せた感覚がある</div></div> <div><div></div><div>海外のコンクールで大きな刺激を受けた。以前より憧れと敬意を抱いていたフランス人オペラ演出家のロラン・ペリー氏との共演を果たし、夢を実現した瞬間を経験すると共に、新たな夢が広がる契機となった。この共演を通じて、同様の体験をさらに増やしたいという意欲が高まり、海外アーティストとのさらなる共演に向けたモチベーションが一層強まった。</div></div> <div>海外指導者との時間を過ごす中で、作品を作り出すプロセスも日本と異なり、本場ならではの独特な取り組みに触れることができた。本場で最高のオペラを追求している感覚を実感。 また、日本人にはない引き出しの豊富さについて学んだ。現地の方は、演出の一つにとっても、常に自分の中で進化し、新たなアイデアを引き出すことに意欲的であり、非常に刺激を得た。同じことを繰り返すのではなく、常に新しい視点を追求する姿勢には非常に学ぶべき点が多いと感じた</div>	



インタビュー対象		分野	音楽
プロジェクト名		区分	補助型
調査項目		回答内容	
活動実績・成果およびその影響	●これまでの活動を踏まえてスキル/マインドにおける変化／成長実感の度合い	 海外における作品へのアプローチは日本と全く異なる。現地では、失敗を恐れず新たな挑戦を続けることで、脳をリフレッシュさせながら果敢に取り組む姿勢を大切にされている。また、新しいアイデアを尊重し、チーム全体で作品を作り上げていくプロセスに重点を置いている。参加した2025年2月「カルメン」においても、出演者の状況やキャスティング、さらにはチームの雰囲気に応じて柔軟に対応しながら進行していく姿勢が際立っていた。即興的な対応やその場の雰囲気を活かす手法は、日本人にとってやや難しい部分があると感じたが、非常に学びの多い経験となった	
	●本基金のメリット	 国の支援であるという点や、本基金が人材育成（教育）を趣旨としている点はナウリ氏を含めた海外の著名アーティストを招聘できたことに繋がっている	
	●広報・プロモーションの活動	 現在、日本語だけでなく、海外展開に向けてSNSを活用して公演情報やファンへの呼びかけを英語でも発信。さらに、韓国語や中国語でYouTube含む様々な媒体で発信の研究・取り組みを進めている	
今後の展望・本基金への示唆	●今後の展望	 1年目と変わらず、最低年に1本の、育成対象者が関わるプロダクションの上演を行っていく。加えて、指導者による個別のプログラムを充実させていきたい	
		 リヨン（フランス）の国際室内楽コンクールで知り合った審査員の方とも継続的にやり取りをしており、海外でのリサイタル開催やレッスンの受講を計画中である。このようなコンクールで知り合った審査員との国際的な繋がりを活かしながら活動を広げていきたい	
	●他アーティストに還元したい学び	 コンクールでは審査員や器楽のアーティストや指揮者の方など多様な方がおり、それらの方とも繋がりを作ったり、視野を広げるために意見交換などをする重要性を感じている。またコンクールの経営サイドとの人脈も、重要だと思う	
	●海外から学べる今後の広報・プロモーション活動について	 自身の歌唱や本番だけでなく稽古の様子を積極的に配信出来たら良いと感じた。海外のプロダクションでは、制作スタッフではなく、キャスト自身が劇場のSNSを1日担当し、劇場の風景や稽古の雰囲気、キャスト同士のやり取りを自然に撮影・投稿する取り組みがある。そのような取り組みは非常に興味深いと思った。衣裳を着用した状態での撮影なども、作品への関心を高める上で有効だと思った	

 団体・施設  指導者  育成対象者

インタビュー対象	公益財団法人 読売日本交響楽団	分野	音楽
プロジェクト名	欧州公演ツアーを通じたオーケストラの次世代担い手育成プロジェクト	区分	補助型

インタビューサマリー








- ✓

日本のオーケストラは海外での知名度が十分とは言えず、国際的な評価・認知度の拡大が課題となっている。そのため海外での公演を通じて現地での認知度向上を図るとともに、デジタル配信やメディア露出を通じて広く波及効果を生み出すことが重要である
- ✓

ドイツ・イギリス8都市を周遊する欧州公演ツアーを実施し、若手育成対象者に貴重な経験の場を提供した。また、公演の映像をYouTubeに投稿したところ、多くのアクセスを獲得し、オーケストラとして存在感を高めることができたとともに、公演に留まらない波及効果を創出できた
- ✓







SNSやYouTube等を活用した海外向けの発信には、広報体制の強化が必要である。今後、広報のあり方を再検討し、専門人材も確保し、持続的なデジタル発信を展開することで、オーケストラとしての国内外における存在感をさらに高めていくことが求められる

インタビューメモ










調査項目		回答内容	
		<div><div> 団体・施設</div><div> 指導者</div><div> 育成対象者</div></div>	
業界動向・海外展開への考え方・業界課題	●海外展開における課題	<div><div></div><div>日本のオーケストラ団体は海外のオーケストラ団体と比して、情報発信が弱いと感じている。アジアにおいては、競合となる韓国や香港のオーケストラ団体は情報発信の方法が上手く、世界的に著名なソリストと協演している様子や談笑している様子を動画に撮影し、SNS上で発信することで知名度を高めている。日本のオーケストラも情報発信を強化しなくては、競争力を失ってしまうのではないかと危惧している</div></div>	
		<div><div></div><div>日本のオーケストラは、海外においても一定の評価は得ているものの、知名度は依然として低いことは課題だと思う。これは、西洋音楽が欧米発祥であることから、聴衆がクラシック音楽を鑑賞する際には、西洋のクラシック音楽を輸入した形になるアジアのオーケストラよりも、欧米のオーケストラを優先して注目する傾向があるためとも考えられる</div></div>	
成果およびその影響	●これまでのプロジェクトの進捗状況/活動実績	<div><div></div><div>ドイツ、イギリスを周遊する欧州公演ツアーを約10年ぶりに実施した。当楽団の知名度向上を目的として演奏の様子の録画、英語字幕追加を日本テレビに発注し、YouTube上に公開した。令和7年度12月に実施予定のアンサンブル公演の様子も録画し、同様にYouTube上に公開する予定で、プロジェクト期間中は継続的に実施する</div></div> <div>再び海外ツアーを行うための活動は、継続して実施している。具体的には、グレードの高い指揮者の招聘に向けた営業活動、楽団の情報発信を行っている</div>	
	●本基金によって活性化した取り組み	<div><div></div><div>本基金が無ければ、海外向けデジタル配信には取り組めていなかったため、本基金に対して大変感謝している</div></div>	

インタビュー対象	公益財団法人 読売日本交響楽団	分野	音楽
プロジェクト名	欧州公演ツアーを通じたオーケストラの次世代担い手育成プロジェクト	区分	補助型



調査項目	回答内容
●プロジェクトにおける成果/今後見込まれる成果	<p> 演奏成果に対する現地の観客、メディア上での評価は非常に高かった。演奏を行ったドイツの町の町長からは、もう一度公演を行って欲しいという言葉が頂戴した。また、イギリスのメディアからは、“「読売日本交響楽団」というオーケストラは、表現力・音の響きにおいて別格の存在だった”との評価を得た。今までの当楽団の活動成果を、現地の観客の声を通じて実感することができた</p> <p>欧州公演の録画をYouTube上に公開したところ、40万件近いアクセスを獲得することができた。これは、平時に獲得しているアクセス数の100倍に相当する成果となっている。この取り組みを通じて、演奏のデジタル配信を行うことは、知名度向上やアクセス数の増加といった効果につながるという気づきを得た。実際にデジタル配信開始以降、主催公演に来場する外国人客が増加している</p> <p>また今後の国内公演としては、令和7年度12月にトッパンホールにて欧州公演に参加した育成対象者の成果発表の場としてアンサンブル公演を予定しており、ここでも公演でも演奏の様子を撮影し、YouTube上での発信を検討している</p>
活動実績・成果およびその影響	<p> 10年ぶりの海外公演であり、演奏者の中には海外公演経験のない者もあり、YouTube等のオンラインで見たことのあるホールでも、実際に現地に赴いて演奏することでは全く異なることから、団員たちはいつも以上に楽しんでいて良いパフォーマンスをしていた。ホールでどのように音を鳴らしているのか、現地の音楽家が音楽に対してどのように向き合っているのか等、現地で公演をしなれば得られない経験や知識を得ることができた</p> <p> 初めて海外演奏を行う育成対象者(演奏者)の中には、欧州公演ツアー中に体調を崩してしまうトラブル等も発生したが、実際に海外での公演を実施することで身に付けることができない経験をできたと思う。また、ツアー中には年代の垣根を超えて演奏者同士で音楽談義なども行われ、演奏者間の交流も深まった</p>
●本プロジェクトに関する外部からの評価	<p> 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ放送の首脳陣、オーケストラの評議員らに成果報告会を実施した。国の支援を受けた上で、欧州ツアーを成功させたことについて、非常に高い評価をいただいた</p>
●プロジェクトにおける課題	<p> 現状 SNSでの広報・プロモーションは公演スケジュールや販売状況の告知のみを行っており、発信内容の幅を広げる必要があるが、事務局の人員が不足しており、SNS広告にリソースを割くことが難しく、人員基盤の整備が必要であると認識している</p>
●欧州公演ツアーにおける課題	<p> 現地にて券売を行う人脈が形成されておらず、土地により集客に苦戦した。券売は現地の人脈に加え、オーケストラの認知度や国際的に評価されている指揮者をオーケストラが抱えているかといったオーケストラの実力ではなく、所謂“人気”が重要な要素となる</p>

インタビュー対象	公益財団法人 読売日本交響楽団	分野	音楽
プロジェクト名	欧州公演ツアーを通じたオーケストラの次世代担い手育成プロジェクト	区分	補助型

調査項目		回答内容	 団体・施設	 指導者	 育成対象者
お活動実績・成果 およびその影響	●広報活動における課題	 業界全体でも、若年の観客層の獲得には、デジタル空間での広報や販売を行う必要があると認識しており、SNS等を活用したプロモーションに加え、時代に即したオンライン上でのチケットの販売システムの構築が重要になる			
	●本基金のメリット	 新聞社を母体とするオーケストラであるため、SNS等での情報発信がやや後手。そのため、デジタルコンテンツの配信を進める際には、周囲の関係者との調整等時間を要するため、本事業で長期にわたる支援制度があるのはありがたい			
今後の展望・本基金への示唆	●今後の展望	 アンサンブル公演は当楽団の主催公演として、今後も続けていく予定である。また本公演は人数が少ないことから、ひとりひとりの仕事量も多くなり、育成対象者も研鑽を積むことができる機会であるため、参加を促している 本来基金の建付けに海外展開は終盤で活動の積み上げの集大成としてスケジュールされるものだと思うが、当楽団は1年目に海外展開となったため、自分たちの現在地としてオーケストラの実力や課題を把握する建付けと認識している。 そのため、令和6年度の海外公演の経験を通じて得た経験を今後の活動に活かす意識を育成対象者も持っているとする 本基金がなくとも海外展開が出来るようにするために、1.財務基盤の構築 2.海外における人脈の構築 3.認知度の向上の三本柱が必要になってくると考えている。当楽団の本旨としては、日本国内の顧客にオーケストラを通じて幸せな時間を提供することであるが、普段の活動から海外の顧客獲得を行うことで海外展開に繋げていけると考えている 財務基盤を安定させるためには、公益財団法人という枠組みでは難しいものがあつた。しかし、令和7年度4月に法改正され、多少ゆとりを持った財務運営が可能となり、公益活動充実資金の活用等によって財務基盤を整えていきたいと思っている。 また、防衛や少子化等の様々な国家的な課題を抱えている中で、文化芸術分野への支援への優先度が低くなってしまっているところがあると思う。政界の協力も仰ぐためにも、文化芸術の価値を訴えていきたい			
	●基金に対する要望	 韓国や香港等のアジア各国のオーケストラの実力が高まり、ライバルが増えているため、オーケストラとしての読響の活動を世界に発信する必要を強く感じている  オーケストラとしての地位を向上させるには指揮者の存在が重要であり、著名な指揮者からの認知を獲得し、また招聘するには、当団の知名度を高める必要がある。 当団の魅力を高めるため、“読響”としてどのような情報発信するのか方針を検討する必要があると感じている  新聞・テレビ局の運営する団体であるがゆえに、SNSを活用した情報発信において遅れをとっており、ノウハウが蓄積されていないため、戦略を打ち立てられていない。専門家にSNSの広報を伴走支援して頂きたい			

インタビュー対象	公益財団法人 新国立劇場運営財団	分野	舞踊
プロジェクト名	海外公演を通じた国際的なダンサー育成プロジェクト	区分	補助型

インタビューサマリー







- ✓

近年日本人バレエダンサーが多数海外で活躍しているが、国内バレエダンサーの待遇が十分でない点は課題のひとつである。当劇場では文化庁の支援も受けながら、ダンサーがバレエに専念できる環境を整えており、最近では海外からの入団希望も増え、国際的なバレエ団に成長しつつある
- ✓













直近ではロンドンのロイヤル・オペラ・ハウスでの公演が大きな成功を収めた。不慣れな環境下でのダンサーの努力に加え、広報活動を含む現地との各種調整を実施した制作・広報スタッフが活躍した。公演を通じて、チームの信頼関係が醸成され、海外展開を前向きに捉えるようになった
- ✓

既存の関係性がない中での海外公演にはハードルを感じているが、今回の成功を糧とし、次の海外公演の実施を検討している。そのために制作チームの体制の見直しや、現地との関係構築、現地で受け入れられる演目の選定等、ハードルを乗り越えていく

インタビューメモ

調査項目		回答内容	 団体・施設	 指導者	 育成対象者
業界動向・海外展開に対する考え方・業界課題	●業界動向	 近年、海外で活躍する日本のバレエダンサーは増加傾向にあり、これは日本が世界レベルの人材を輩出できているという点では成功と言えるかもしれないが、同時に、優秀な人材の海外流出とも捉えられる。これまで国内のバレエ団ではダンサーの待遇が海外の主要バレエ団と比べて十分ではなく、いわゆる「食べていけない」職業として成立してこなかったことも影響していると感じている			
	●海外展開における課題	 7月のロンドン公演が集客面でも成功した大きな要因として、当劇場の舞踊芸術監督である吉田都氏とロイヤル・オペラ・ハウスの芸術監督であるケヴィン・オヘア氏との信頼関係を前提とした広報・プロモーション活動への協力、ロイヤル・オペラ・ハウスとのプロダクションレンタルやゲストダンサーの招聘を通じて構築された両劇場の制作サイド間の関係性が挙げられるが、他の海外劇場での展開にあたっては、上記のアドバンテージがない中での興行となることから、人脈作りや現地で受け入れられる演目をどう選定するかなど、大きなハードルがあることが考えられる			
	●業界課題に対する取り組み	 当劇場では文化庁の支援も受けながら、ダンサーの報酬改定や体調管理におけるサポート体制の強化、トレーニング機器の導入などに力を入れ、この5年間で大きく待遇改善が図られた。ダンサーが安心してバレエに専念できる環境が整ったことでバレエ団全体のクオリティが向上した。その結果、海外からの当劇場への入団希望も増え、国際的にも魅力的なバレエ団になりつつあると認識している			

インタビュー対象	公益財団法人 新国立劇場運営財団	分野	舞踊
プロジェクト名	海外公演を通じた国際的なダンサー育成プロジェクト	区分	補助型

調査項目	回答内容	 団体・施設	 指導者	 育成対象者
活動実績・成果およびその影響	 ロイヤル・オペラ・ハウスでは、夏季にはロシアのバレエ団を招聘し公演を行うことが慣習となっていたが、国際情勢の影響もあり、近年はロシア以外の海外バレエ団の招聘が行われるようになった。ロイヤル・オペラ・ハウスと当劇場の芸術監督の吉田都氏との従来からの関係性があり、今回の公演が実現した			
	 観客からの評価を直接的に収集はしていないが、SNSでの反応や公演後にダンサーやスタッフが直接聞いた観客の声から、好意的に受けて止めてくれていたのだと感じている。現地メディアからも公演直後に15紙程度もの批評が出て、いずれも好評であった			
	 毎公演でスタンディングオベーションがあり、現地の観客にも満足して頂いたと感じている			
	 ロイヤル・オペラ・ハウスはオペラの本場であり観客の目も肥えていることから、ダンサーに対してどのように指導をすればよいのか、プレッシャーを感じていた。また、当劇場のダンサーは、普段はホームである新国立劇場での公演がほとんどで、移動公演の機会は国内でも少ない。そのため、慣れない環境・舞台での公演時の体調管理には細心の注意を払った			
	 ロンドン公演に参加したダンサーの大半は海外での公演経験がなく、長時間の移動や現地での生活の仕方や食生活の違い等に対応することが大変だった。海外公演をしてみなければ分からない、初めての経験だった			
	 当劇場とロイヤル・オペラ・ハウスは構造が異なるので、客席からの舞台の見え方が異なり、演出等の調整を直前まで行う必要があった。公演の直前に演出を変更することに不安を感じていたが、本番ではダンサーが臨機応変に対応してくれて、ダンサーの能力を信用することの大切さを学んだ			
	 ロンドン公演中は日々様々な問題が発生し、その度に臨機応変に対応する必要があった。今回の公演を通じて自分に自信がつき、たくましくなったと感じている			
	 チケット販売はロイヤル・オペラ・ハウスに委託し、会員組織への販売等もすることができた。ただ、広報・プロモーション活動については現地の広報会社や宣伝会社をロイヤル・オペラ・ハウスに紹介してもらい、当方の広報と共に各種施策を実施した			
	 現地の委託業者を通じた広報・プロモーションを進める上では、職員がロンドンに赴き直接話をしたり、委託業者を新国立劇場に招待し公演を鑑賞してもらうなど、当劇場の現状を知り興味を持ってもらうための取り組みを行ったことが非常に効果的だったと感じている また、吉田都氏の現地での知名度の影響も大きく、ロイヤル・オペラ・ハウス側も広報・プロモーション活動に非常に協力的であり、会員誌への特集の掲載やメルマガでの周知等で協力していただいた			

インタビュー対象	公益財団法人 新国立劇場運営財団	分野	舞踊
プロジェクト名	海外公演を通じた国際的なダンサー育成プロジェクト	区分	補助型









団体・施設



指導者



育成対象者

調査項目	回答内容
活動実績・成果およびその影響	<p> 広報において自分たちが伝えたいことや、求めるデザインの意図を繰り返し主張する必要があるという学びを得た。効果的な広報活動を行うためには、デザインや発信方法を現地で受け入れられるように調整する必要があるが、当劇場として現地に合わせずに発信したいこともあり、その点を繰り返し主張し続けなければならない</p> <p> 当初はロンドン公演に対して完全に自信があったわけではなく、酷評される可能性や観客が入らないのではという不安もあったが、実際は現地の観客から大きな評価をいただいた。当劇場のメンバーに対する信頼が増し、今後海外公演を行うとしても自信を持って前向きな気持ちで臨むことができていると感じている</p> <p> ロンドン公演後の国内凱旋公演について、当初はどこか1箇所で購入公演の形での実施を考えていたが、本基金の支援をいただけたことによって選択肢が大きく広がり、全国2箇所での自主公演（予定）を計画することができている</p> <p> 単年度助成よりも柔軟性が高く、各年度の結果を踏まえて以降の年度計画を見直し、より良い成果へと軌道修正していくことができるのが何よりのメリットである。単年度助成では当初計画に則った結果を示す必要があるが、実際の興行は計画通りに行くものではない。試行錯誤がある程度許容されるのが複数年度の大きな利点だと感じている</p>
今後の展望・本基金への示唆	<p> 海外公演は非常に良い結果に終わったため継続して実施したいと考えているが、ロイヤル・オペラ・ハウスの協力的な体制下でも大変な取り組みであったため、交流の少ない劇場や非英語圏での公演はハードルが高く、制作チームの体制を整える必要があると感じている</p> <p> 本プロジェクトでは再度海外公演を実施することを目指している。上演地や演目の選定、制作体制の強化を進めるとともに、ダンサーの育成に資する海外でのプログラム（ショーケース等を含む）に参加するなど、海外公演に向けてさらに実力を向上させる取り組みを実施する。ただし、海外公演は旅費等を含めると非常に多額の費用がかかることから独自採算での実現は難しいため、スポンサーや助成金等の獲得にも力を入れていきたい</p> <p>当劇場バレエ団のプリンシパルが海外劇場からゲストダンサーとして招聘を受けた際には、ぜひ積極的に応えていきたいと考えている</p>

インタビュー対象	一般財団法人 セガサミー文化芸術財団	分野	舞踊
プロジェクト名	世界に羽ばたく次世代クリエイターのための Dance Base Yokohama 国際ダンスプロジェクト“Wings”	区分	補助型

インタビューサマリー

- ✓

日本の舞台芸術分野のさらなる海外展開には、海外に存在するエージェントのように、複数のアーティストを抱えながら、作品制作、人材育成、プロモーション、セールスまでを広く行う、「マス対マスの関係性を築くことができる組織」が求められている
- ✓

韓国の芸術祭への出展も1件決定するなど、国内外の見本市やオープンコール等を通じた積極的な海外ネットワークの拡充と作品の営業活動を進めている。また、様々な職種の育成対象者が、制作に留まらず上演、海外発信、再演というプロセスの中で経験を重ね、マインドを高めている
- ✓

海外プロモーションに関する今後の要望として、採択プロジェクト間での連携強化・統括コーディネーター配置等を通じた複数のコンテンツの取りまとめと効率的なプロモーションの実施、国際交流基金等の外部機関の協力による発信の強化等を求める声が上がった

インタビューメモ

調査項目

回答内容



団体・施設



指導者



育成対象者

業界動向・海外展開への考え方・業界課題

- 海外展開における課題
- 人材育成の考え方



日本のコンテンポラリーダンスの海外展開に係る課題として、「エージェント」の役割が重要でありながら、それがほぼないことが考えられる。エージェントも色々な種類があるが、例えば劇場・フェスティバルとは別の組織で、芸術家の所属する団体を取りまとめプロモーションしていく組織等を意味している。
劇場同士の関係性だと、1対1の関係性に留まってしまうが、エージェントは複数のアーティストが所属したり、複数のフェスティバルに売り込みができたりと、マス対マスの関係性を築くことができる組織である。それらの育成と作品制作を行い、売り込みまで行うことができる組織が日本にほとんどなく、海外展開が難しい原因でもあると考えられる。



これまでの海外での活動は、ダンサーとしてソロの作品を披露するものばかりだったが、本プロジェクトでは振付家として参加しており、他の育成対象の制作・広報スタッフとも連携しながら創作に取り組んでいるため、とても新鮮で初めての経験になるだろうと思っている。一方で、海外展開にあたっては、日本人が振り付けて日本人のダンサーが躍る作品が、現地で海外の人たちの目にどう映るのかを考えながら制作することに難しさや課題を感じている



Dance Base Yokohamaでは、作品の上演だけでなく、クリエイション、発信、再演という一連の流れに関わることができる、制作者、アートマネジメント人材、ドラマトウルク、批評家を育成しようと考えている。劇場等の場合は、劇場の事業やそこで上演する活動のための人材育成という意味合いが強くなるため、人材育成の視点として本プロジェクトと大きく違う点である

インタビュー対象	一般財団法人 セガサミー文化芸術財団	分野	舞踊
プロジェクト名	世界に羽ばたく次世代クリエイターのための Dance Base Yokohama 国際ダンスプロジェクト“Wings”	区分	補助型



団体・施設








指導者











育成対象者

調査項目

回答内容

活動実績・成果およびその影響	●これまでのプロジェクトの進捗状況/活動実績	 <p>今回6組のアーティストの作品制作に取り組んでおり、それぞれの特性を踏まえて受け入れ先の検討、ネットワーク構築・営業活動を行っている。2025年10月末に愛知県芸術劇場にて、2025年12月にYPAM（横浜国際舞台芸術ミーティング）にてそれぞれ作品の上演を予定しており、以前から興味を示してくれている海外ディレクターの招聘や、メンターからアドバイスを得る機会を設ける予定である</p> <p>スウェーデンの劇場とのネットワークを通じて得た情報をもとに、現在北欧のフェスティバルのオープンコールに応募している。オープンコールは、作品のビデオ審査を通じて、劇場の興味関心を得ることができれば、場所代や現地スタッフの費用は劇場負担で公演ができるというものである（渡航費は自己負担となる）</p>
	●基金によって活性化した取り組み/基金があることで始動した取り組み	 <p>海外メンターの方々も本プロジェクトへ参画しているが、本基金の趣旨に賛同してくれたからこそ参画してくれたのだと感じており、本基金がなければ承諾を得るのは難しかったと思っている。招聘予定の海外ディレクターも同じように、国を越えた国際的な交流の機会に、舞台芸術領域の発展の可能性を感じてくれているようである</p>
	●プロジェクトにおける成果/今後見込まれる成果	 <p>これまでは公演ベースで作品に関わっていたが、今回はプロジェクトのマネジメント担当として関わっているため、作品の企画制作から公演、さらにはその先の海外展開まで全体を見通しながら活動することができている</p>  <p>鈴木竜氏（育成対象者）の作品に対して国立アジア文化殿堂（韓国）からオファーを頂き、2025年9月に韓国の音楽演劇祭での公演が決定した</p> <p>阿目虎南氏、岩淵貞太氏（育成対象者）のワークインプロGRESSをDance Base Yokohamaで発表した際にアメリカのフェスティバルディレクターが興味を示してくれた。2025年10月末の愛知県芸術劇場公演への来場の可能性があり、今後のアメリカでの展開につなげることができると考えている</p>
	●育成対象者におけるスキル/マインドの変化・成長実感	 <p>過去にYPAMやTPAM（横浜）で海外に向けて作品をプレゼンする機会はあったものの、よほど内容が評価されない限り海外上演や次の展開に繋がりにくく感じていた。今回は作品のことだけでなく、それ以外の部分を含めてどのように海外の人々とコミュニケーションを取れば今後の海外上演等に繋がるネットワークになるかを考えながらトライできる機会だと感じている。また、本プロジェクトでは、2024年12月のYPAMで海外のディレクターと会う機会を作ったが、その人たちの立場に立ったとき、また他の土地や文脈のなかで作品を上演するとなったときに、「誰がどこで見て、作品がどういうコミュニケーションを生み出すのか」を想像しながら制作に取り掛かるべきだという新たな視点を得られた</p> <p>広報・プロモーションだけではなく、リレーション構築に関する目標や道筋が以前より明確になった。今回実際にネットワーキングの場を作ってもらえたことにより、時間をかけたネットワーキングやコミュニケーションの重要性を改めて実感している。相手のニーズを把握し、情報を整理した上で、継続的なコミュニケーションを積み重ねることで、次に繋がるご縁をひとつでも多く生み出していけるのではないかと考えるようになった</p>

インタビュー対象		分野	舞踊
プロジェクト名		区分	補助型
調査項目		回答内容	
		 団体・施設  指導者  育成対象者	
成果およびその影響 活動実績・	●本基金のメリット	 公的な本基金によるサポートがあるという点を海外ディレクターに伝えたと、反応が全く違う。海外ディレクターも、政策的な側面でもきちんとしたバックアップ体制と予算があり、作品を海外展開しようとしているのであればサポートしたいと言ってくれる。海外ネットワーク構築や支援を受けるための根拠として本基金が十分に機能している	
	●本プロジェクトの地域や社会への還元	 2025年9月からDance Base Yokohamaの1階に制作スペースを増設し、より一般の人々が見学しやすい拠点作りと、地域との繋がりを感じやすい場作りを進める。アーティストのクリエイションだけでなく、一般向けのワークショップやクラスを通じて地域住民がダンスに触れる機会を提供していく予定である。ダンスを通じたコミュニケーションの場を創出し、地域住民のダンスへの関心を高めることで、シビックプライドの醸成に繋がる活動を展開することを意識している	
今後の展望・本基金への示唆	●本プロジェクトのプロモーションの取り組みと課題	 本プロジェクトの特設ページを立ち上げ、SNS発信での情報発信に加えて、プロジェクトの概要、インタビュー記事、映像、写真などを更新し、ウェブサイト上でレポート形式のアーカイブを作成している。これにより、プロジェクトの進行状況を可視化・共有するようにしているが、一方で日々の創作業務との両立が難しい面もあり、課題を感じている すぐに劇場やフェスティバルに招聘されるのは難しいため、令和8年度はエディンバラ・フェスティバル・フリンジ（スコットランド）やCINARS（モントリオール）といった舞台芸術見本市に参加する予定で、現在準備を進めている。会場等の経費を自分たちが負担し、この取り組みを足掛かりにステップアップしていくことを目指している	
	●今後、活動で成果を出すために本基金に求めること	 ウェブサイトを作成しても海外にリーチするのは簡単ではないため、特に海外の人々が興味を引くビジュアルや内容が必要だと感じる。各プロジェクト主体の発信に加えて、国際交流基金等の協力のもと、各国にある類似機関と連携して、海外の未開拓層へアプローチする仕組みを構築する等、国としての支援もお願いしたい  作品の海外展開は、国同士の交流を発展させる機会でもあるが、次のステップとしては、海外からオファーがあった際に積極的に受けられるような渡航費分の予算確保、また海外作品の受け入れ時の渡航費の負担支援等、相互的な仕組みを整備する必要がある。日本への展開を希望する海外アーティストも多い中、日本が一方的に作品を輸出しようとしているように見られないよう、信頼関係を築きやすい新たな仕組みが求められる 本基金の制度上、別の助成事業と重複して採択を受けることができないため効率的な海外展開がしにくい。国による旗振りの下で採択団体間にまたがるコーディネーターを立て、オーストラリア、北欧、韓国、台湾等のようにアーティストやディレクターをまとめて見本市に派遣する体制が実現できれば、より効率的な海外展開の可能性が広がると感じる	

インタビュー対象	一般社団法人 KYOTO EXPERIMENT	分野	演劇
プロジェクト名	KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭をプラットフォームとした次代のクリエイター育成事業	区分	補助型

インタビューサマリー

- ✓

舞台芸術分野の若手クリエイター等の海外志向は、新型コロナウイルス、自身の語学力等を理由に近年低下傾向にあるものの、欧州の業界関係者は興味を抱いており、クリエイター側の心理的障壁の打破、展開先の歴史・文化的な文脈を把握した作品内容の言語化が求められている
- ✓

育成対象者は、海外の著名な劇場・芸術祭のキュレーターへの招聘による交流や、「キュレーター」としての海外フェスティバルへの視察参加等、多様な経験と実践的な学びを通じ、次代を担うキュレーターとしての意識醸成を図った
- ✓






周囲のプロジェクト関係者および海外舞台芸術関係者からも次代の人材育成を目的とした本基金は非常に高く評価されている。本基金の更なる効果創出という観点で、育成対象者からは採択プロジェクト間の情報・知見の共有に関する取り組みの実施を求める声も挙がった

インタビューメモ

調査項目		回答内容
業界動向・海外展開に対する考え方・業界課題	●業界動向	<div><div></div><div>コロナの影響で海外への渡航機会が減少したほか、円安による渡航コストの高騰で、海外展開が資金的にも難しくなった結果、若手クリエイターの海外志向が低下していると感じている。他方、欧州の舞台関係者・キュレーターもコロナの影響等で日本の舞台芸術情報に以前よりもアクセスできておらず、特に若手の舞台クリエイター等に対して興味を抱いている</div></div>
	●海外展開における課題	<div><div></div><div>海外展開における重要な課題である「資金の確保」に関しては、本基金のおかげで大きく解消されている。同じく重要なのが、海外舞台芸術関係者とのネットワーク構築に関する課題であるが、その際に必要となる自身の思考や、作品のコンセプト・内容の翻訳、他言語化については課題を感じているクリエイターが多い印象である また、キュレーターに関しては、海外と比較して国内の舞台芸術キュレーターの専門性や認知度が低いことに課題を感じている</div></div>
	●海外展開のステップ	<div><div></div><div>海外展開を行う上では、外国語での情報収集・資料の読み込み・メールや会話を通じたコミュニケーション等、多くの場面で高い語学力が求められるが、この点はクリエイターの心理的な障壁になっていると感じる。展開先ごとの歴史的・文化的な文脈を把握しながら、それを作品のプレゼンテーションに取り組みすることも今後取り組むべきポイントのひとつであると認識している</div></div>
		<div><div></div><div>現代的な舞台芸術の領域では、各アーティストが扱う作品の内容や制作背景・社会的状況、表現形式が多様であり、一般化された成功ノウハウが業界に無く、それを作り出すことも難しい。国内ではYPAM（横浜国際舞台芸術ミーティング）等の機会を活用し、横の繋がり・海外の関係者とのネットワークを構築することで、情報やノウハウを共有しながら、課題の解決を目指している</div></div>

インタビュー対象		分野	演劇
一般社団法人 KYOTO EXPERIMENT		区分	補助型
プロジェクト名		KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭をプラットフォームとした次代のクリエイター育成事業	
調査項目		回答内容	
活動実績・成果およびその影響	●プロジェクトの目的/活動概要/5年後に目指す成果・ありたき姿	<div><div></div><div>日本国内における舞台芸術のキュレーターの専門性や認知度の低さに課題を感じていることもあり、本プロジェクトでは、KYOTO EXPERIMENTの次代を担うキュレーター人材を育成することを目標としている。KYOTO EXPERIMENTでは従来よりプログラムのディレクションに責任を持つ「キュレーター制度」を取り入れているため、その知見をもとにプロジェクトを推進しているが、現在の活動状況を踏まえると、本基金がなければ次代のキュレーター育成に本格的に取り組むことは難しかったと思っている</div></div> <p>今回のプロジェクトでは、これまでなかなか本格的に着手できていなかったKYOTO EXPERIMENTプロデュースのアーティスト作品の海外展開支援や、アーティストの活動を言語化して国際的に発信していくという面での「批評家の育成」にも取り組んでいる</p>	
	●プロジェクトにおける成果/今後見込まれる成果	<div><div></div><div>KYOTO EXPERIMENT 2024の会期中に、育成対象者によるショーケース公演の企画・実施と合わせて、海外の著名な劇場・芸術祭のキュレーターの招聘を行い、育成対象者へ国際的なネットワーク構築の機会を作ることができた。海外キュレーターの招聘は、従来型の舞台芸術の公演に対する助成金では賄うことが難しく、本基金がなければできないことであった</div></div> <div><div></div><div>昨年11月に、台湾の国際ダンスプラットフォームのシンポジウムに参加し、本プロジェクトの取り組みについて話す機会があったが、これをきっかけとして現在台湾の舞台芸術プラットフォームとのキュレーターエクステンジ（育成対象者派遣）の話が進んでいる。まずは取り組みを知ってもらうことで、次の展開につながってくる動きが必ずある</div></div>	
	●育成対象者におけるスキル/マインドの変化・成長実感	<div><div></div><div>今回初めて「キュレーター」を名乗りながら海外フェスティバルを視察する機会を得た。具体的には、タイとインドネシアの舞台芸術のフェスティバルへの視察訪問だが、インドネシアのフェスティバルでは、一般公開とは別に海外キュレーター向けのスケジュールが組まれており、プロフェッショナル向けのアーティスト公演の視察や、現地アーティスト・関係者との交流、情報交換を行うことができ大変有意義だった</div></div> <p>海外フェスティバルの視察では、自身が将来キュレーションを行う上でどのように情報を接すればよいのか、どのように現地でのコミュニケーションを取ればよいのかをかなり意識するようになり、非常に大きな経験となった。また、視察したフェスティバルにてトークセッション・プレゼンテーションを行う機会があり、自分の語学力に対しても一定の自信を持つことができた</p>	
	●広報における活動	<div><div></div><div>いかに効果的に海外に向けて自身の活動を海外の文脈のなかで発信していくべきか手探りであったが、感覚として海外のかなり多くのアーティストがInstagramを利用して情報収集やコミュニケーションを取っているということが分かってきたため、最近はInstagramで英語で発信するよう取り組んでいる</div></div>	



インタビュー対象		分野	演劇
プロジェクト名		区分	補助型
一般社団法人 KYOTO EXPERIMENT			
KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭をプラットフォームとした次代のクリエイター育成事業			
調査項目		回答内容	
今後の展望・本基金への示唆	●今後の活動のポイント	 ここ数年間内向きの時間が続き、感覚がドメスティックになっている部分もあると感じていたため、 本基金により海外に出て行けるクリエイターの数が増え、視野が広がってきている という点はポジティブに捉えている。あとはこの先、このプロジェクトの主軸がやはり「次代のキュレーター育成」にあることから、文化や言語が異なる相手にきちんと言語化して伝えること、説明することをもっと意識して取り組んでいきたい	
	●本基金のメリット	 資金面のサポートによるメリットだけでなく、一定の時間を要する海外のパートナーとの信頼関係の構築やネットワークの拡充にも取り組めるようになった。 オンラインよりも交流を深めやすい対面での活動を前提とし、強固で長期的な関係づくりに向けた段階的なアプローチを計画することが可能となり、本基金の意義をととても感じている 単年度の助成事業の場合、相手がたとえ我々との協業に興味を持ってもらえていたとしても、相手側の予算やスケジュールとかみ合わず、そこで話が終わってしまい協業に至らないケースがあるが、本基金の場合、「例えば2年後ならこういう枠組み一緒に出来ないか」という長期的な視点で前向きな話し合いが可能となった	
	●本基金(プロジェクト)に対する海外からの評価	 次代のフェスティバルディレクター育成に主眼をおいた本事業でのKYOTO EXPERIMENTの取り組みは、公募型で実績や経験豊富なキュレーターが選ばれることの多い欧州の劇場・フェスティバル等の仕組みと比べても、あまり他に見ない取り組みであり、故に海外劇場関係者やフェスティバル関係者からも「素晴らしいプログラムだ」と言われ、注目度が高いと感じている。 現在我々が取り組んでいるこのプロジェクトは、KYOTO EXPERIMENTのみならず、国際的な舞台芸術のシーンにおいても非常に重要なのではないかというコメントも海外キュレーターからいただいた	
	●今後、活動で成果を出すために本基金に求めること	 国内においては、共同制作のしやすさやコミュニケーションの取りやすさを理由に、活動地域が近いクリエイター同士で交流することが多く、活動地域が離れているクリエイターの交流機会が少ない。 本基金には全国から様々な団体が参加しているため、 別領域のプロジェクトも含め、各プロジェクトで得たそれぞれのネットワークや知見をプロジェクト間で共有することができれば、多様なジャンルの多様な才能を持つ若手クリエイター・アーティストが一同に海外展開を目指していることの効果がより一層生まれると感じている	
		 本事業のウェブサイトは英語対応しているが、 各プロジェクトの事業概要（PDF）が日本語のみであるため、それらも言語対応がされているとよい	

 団体・施設  指導者  育成対象者

インタビュー対象	株式会社 precog	分野	演劇
プロジェクト名	IN TRANSIT-異なる文化を横断する舞台芸術プロジェクト-	区分	補助型

インタビューサマリー





- ✓

舞台芸術分野における海外展開の課題は、海外関係者とのネットワークを広げるための機会や場が存在していても、その具体的なノウハウが業界内で蓄積・共有されていない点にある。本プロジェクトでは、プロジェクトウェブサイトを通じてその点の発信・共有を強化している
- ✓






本基金を通じて、アーティストだけでなく批評家やアートマネジメント人材等の海外展開に必要な専門人材の育成に取り組むことができている。育成対象者による海外公演を行う他、見本市でのプレゼンテーション、海外プレゼンター向けの国内公演（6件）等を通して海外展開の交渉が既に5件進んでおり、育成の成果の芽が出始めている
- ✓

来年度の海外公演に向け、活動場所の選定や現地での自主広報をサポートしてくれる現地事業者のリサーチを進めている、持続的な海外展開を可能にするためには、それらの活動を交渉・展開の面から支えるコーディネーター人材・組織の育成も求められている







インタビューメモ

調査項目		回答内容
		 団体・施設
業界動向・海外展開に対する考え方・業界課題	●業界動向（海外展開やそれに係る人材育成について）	 新型コロナウイルスの影響で、舞台芸術分野の国際交流が断絶されていたが、その間、海外では戦争・物価高騰・環境意識の高まり、保守化等の国際情勢の変化を受け、国際事業に対する意識も変化しており、舞台芸術の海外上演の機会は減少傾向にある。特に欧州では環境配慮の観点から、海外から舞台芸術関係者を20～30人呼んでまで公演を行う必要があるのかという問いも起きており、招聘する側のハードルも高まっている。また、ドイツなどは文化政策関連の予算が大幅削減されている。 活動場所や作品の上演機会の創出に時間が掛かるのと同様に、人材育成も短期間では難しく、本基金のように最低3～5年程度の期間が必要だと考えている
	●海外展開のステップ	 国内では、YPAM（横浜国際舞台芸術ミーティング）のような既に国際的なコネクションが形成されているプラットフォームで関係者向けに上演機会を作ることが、海外公演実現のルートの一つとなっている。舞台芸術の場合、その場で作品を見てもらうことで評価が可能になるため、実際に上演を見てもらえる機会が重要である 従来は欧州における舞台芸術市場が活発だったため、一度欧州市場に参入できれば海外公演の機会を獲得しやすかったが、今は環境意識の高まり等を背景に欧州市場の動きが停滞している。そこで、まだ開拓出来ていない舞台芸術のマーケットや新しいコミュニティ・ネットワークが築かれつつある中東の国々や中国語圏への進出を目指している
	●海外展開における課題	 見本市等のネットワークを広げる機会は存在するが、そこでのネットワークの広げ方やキーマンとのコミュニケーション方法等の具体的なノウハウが不足している点を課題に感じている。これまでノウハウを共有する場がなく、業界に蓄積されていないことが要因だと考えている

インタビュー対象	株式会社 precog	分野	演劇
プロジェクト名	IN TRANSIT-異なる文化を横断する舞台芸術プロジェクト-	区分	補助型

調査項目		回答内容
業界課題	●海外展開における課題 (人材育成)	<p> 20-30代の舞台芸術関係者の海外展開志向を持っている人が減少傾向にあると感じている。海外への展開よりも国内での活動を成立させることに精一杯になっている印象である</p> <p>作品やアーティストの成長のためには批評家の存在が不可欠だが、批評家の育成に対する国の支援はほとんどない。批評を行う上では、海外視察等を通じて舞台芸術の最新動向を把握しておくことも重要であるが、批評家は大学教育の中で海外に行くことはあれど、そうでない場合は基本的に自費で行かなければならない状況である</p>
	●プロジェクトの目的/活動概要 /5年後に目指す成果・ありたき姿	<p> アーティストが作品を作るだけでは海外展開は難しく、作品の言語化や社会との接続ポイントを作ること、作品を違う文脈に乗せる時の翻訳力などの総合的な専門性が発揮されて初めて海外展開が可能になってくると考えているため、アーティストだけではなく、プロデューサー、舞台監督、批評家という様々な職能の育成対象者の育成支援を実施している</p>
活動実績・成果およびその影響	●これまでのプロジェクトの進捗 状況/活動実績	<p> 令和6年度の活動は、各活動における目標の言語化、活動体制の構築が大半であった。 令和7年度は、各育成対象者の目標設定、活動のプロセス設計を実施しており、活動毎に具体的な海外展開先や関係構築を行うプレゼンターの選定等を進めているが、他にも字幕を付ける際のノウハウや、予算の組み方等のレクチャーを実施した。 同時に、本プロジェクトを通じて獲得した知見をプロジェクトウェブサイトに掲載し、業界関係者へ広く共有している</p>
	●プロジェクトにおける成果/今後 見込まれる成果	<p> 令和6年度に育成対象者の牧原依里氏が、韓国にあるModu Art Theaterから招聘を受け、作品が上演された。令和7年度に再度招聘を得られるよう、作品をブラッシュアップしながら現在交渉を行っている。また、同じく育成対象者の筒井潤氏は、FFT Düsseldorf (ドイツ) で国際共同制作を行った。現在これを契機とした新規ネットワークへのコネクション拡大を図っている</p> <p>さらに、育成対象グループの“オル太”は、令和6年度のYPAM (横浜国際舞台芸術ミーティング)、KYOTO EXPERIMENTでのプレゼンテーションを通じて、ソウル (韓国)、ブリュッセル (ベルギー) のフェスティバル関係者との対話を継続している。10月の愛知県での初演に関係者を招聘し、海外公演を確定させたいと考えている</p>
活動実績・成果およびその影響	●本基金によって活性化 した取り組み	<p> これまでは舞台演劇の企画制作に注力し、人材育成事業に本格的に取り組めていなかったが、今回専門家を招いて字幕や翻訳・資料作成等の具体的なスキルについてレクチャーする機会を作ることができた。また、批評家の海外視察の育成支援を実施できたことは非常に有意義であったほか、当社の運営事務局の若手スタッフの育成も進めることができています</p> <p>普段は、当社が協働している団体の海外渡航時に合わせてネットワークや現地情報のアップデートを行っているが、本基金によりそれらの海外関係者との関係構築・維持等の活動を自主的かつ長期的に実施できると考えている</p>

インタビュー対象	株式会社 precog	分野	演劇
プロジェクト名	IN TRANSIT-異なる文化を横断する舞台芸術プロジェクト-	区分	補助型








調査項目		回答内容	 団体・施設
活動実績・成果およびその影響	●本基金のメリット	 複数年度で予算が確保できていることから、海外の連携先と長期的な関係構築を前提に交渉できる点にメリットを感じている。単年度助成の場合、招聘の話が進んでいたとしても、助成金を得ることができなければ公演もできないというケースが非常に多く、中止のリスクを負いながら交渉せざるを得ないためである	
	●本基金による団体/業界等への好影響や波及効果	 本プロジェクトを通じて蓄積された海外展開のノウハウをプロジェクトウェブサイトで公開しており、将来的に海外展開を目指す舞台芸術の担い手に対しても役に立つ場となることを目指している。また、サイトではノウハウだけではなく、海外志向のあるアーティストも紹介しており、それらの人材を可視化できたことは国内外の舞台芸術関係者にとって有用であると感じている アーティスト・クリエイター目線では、知見やネットワークが広く公開されており、アクセスが容易である状態が望ましいと考えているため、当社では今後もプロジェクトウェブサイトで知見を記事形式で広く共有していく予定である	
	●海外に向けたプロモーションに係る取組/課題/今後の展望	 現在プロジェクトサイトに関して、海外関係者にアプローチしきれていない、サイトを見てもらえているかが分からないという課題を抱えている。今後は英語でのクリエイター情報の発信にも力を入れながら、海外関係者にとって有用なサイト構築に努めたいと考えている 本プロジェクトの3年目に実施予定の海外公演にて、現地での良い発信や高評価を実現するために、市場を絞りながら海外のメディアやジャーナリストをリサーチしている。通常フェスティバルや劇場から招聘される場合、招聘する側が現地でのプロモーションを行うため、今回初めて現地での自主的なプロモーションを行うための現地事業者のリサーチに取り組んでいる	
今後の展望・本基金への示唆	●本基金への要望等	 プロジェクト内の取組が多岐に渡るため、全ての活動を海外公演につなげることは難しい。そのため、観客数や公演回数等の可視化しやすい定量的な成果以外にも、プロジェクトの成果・価値を示していきたいと考えており、例えば定量的な指標だけでは測れない、プロセスや知見の蓄積に対する評価や、当社が取り組んだきた異なる文化圏への接続や、異なる文脈の人々との交流という本質的な国際交流に関する取り組みへの評価も検討して頂けると有難い	
	●持続的な海外展開や人材育成に向けた業界としての考え方	 日本が持続的な海外展開を可能にするためには、欧州で行われているようなエージェントの活用による海外ツアーの交渉ができるような人材を日本でも育てていくことが必要なのではないかという議論もある 舞台芸術は分野や職能が多岐に渡ることから、人材育成のスキルマップを作成するなど、人材育成における業界としての各職能に対する価値付けがあれば、今後の人材育成に関連する企画を行う際に考えやすくなるのではないかと考えている	

インタビュー対象	一般社団法人 緊急事態舞台芸術ネットワーク	分野	演劇
プロジェクト名	SOIL Fellowship Program	区分	補助型

インタビューサマリー

- ✓ 日本のコンテンツに対する海外の需要が高まる一方で、クリエイター等の所属形態（特に個人）によっては海外展開のノウハウが共有されきっておらず、日本の海外展開ハードルは未だ高い。また、作品の制作者が海外展開において担う役割が多い構造にあり、役割分担の必要性がある
- ✓ 海外見本市のピッチイベントでは、事前準備やオペレーション面の工夫によりネットワーク構築が進み、海外から複数の招聘打診を受ける等、高い評価を獲得した。また、海外の業界関係者の限定イベントに招待される等、日本の舞台芸術分野のプレゼンス向上にも寄与することができた
- ✓ 舞台芸術分野で横断的なネットワークを有する当団体の強みを活かし、本プロジェクトサイトでの発信や既存のノウハウ・ネットワークを共有することを通じて、当該分野の海外展開において必要性の高いエージェント的な機能を担っていくことに対する展望が窺えた

インタビューメモ

調査項目		回答内容	 団体・施設	 指導者	 育成対象者
業界動向・海外展開に対する考え方・業界課題	●業界動向（当該分野のコンテンツの立ち位置）	 イギリスでも日本のコンテンツは今がチャンスだと言われているが、新型コロナウイルスをきっかけにデジタル配信が主流になり、日本のマンガやアニメに無料でアクセスしやすい環境となったことや、寿司等の日本の食文化の流行などの要因により、今まで以上に日本文化の世界的な需要や価値の高まりを感じている			
	●海外展開における課題	 舞台芸術分野は、海外展開の形・形式が多様であるため、その種類や方向性を業界及び行政側で体系的に可視化し、整理できていないことが課題のひとつとして考えられる			
		 今回のプロジェクトで展開した作品は観客が満席になる等評価の良かった作品があった。しかし、BtoCの消費者マーケティングと、作品の買い付けに興味関心がある業界関係者向けBtoBマーケティングは異なるので、その興行の成果が商談に繋がる構造が必要である。また、作品を制作する人が、多くの実務を抱える中、短期戦としてのBtoCも長期戦のBtoBも両輪で行う必要があり、中長期的な展開を創出することが構造的に難しい仕組みになっている点に課題を感じている			
		 自身が所属するカンパニーでは2014年から海外展開を進め、9カ国13都市で上演、コラボレーション、戯曲の出版、トークショー等を実施してきた。今回のプロジェクトを通じて改めて、今までやってきた実績が積み重なっていないと感じた。自分自身も10年ほど海外公演をしてきたが、認知度や言語面の課題、海外活動に対する国内での評価や注目度（SNS等）の低さを実感している。例えば、海外での活動をSNSを通じて発信しても、国内公演等の発信に比べてリアクションが少なく、海外で活動することが注目されていないのでは、というもどかしさがある。今回の挑戦を通じて自身の学び、作品の視座を高め、今後に繋がる成果は得られたものの、海外活動の評価やその後の道筋が見えづらいという課題があると思っている			

インタビュー対象	一般社団法人 緊急事態舞台芸術ネットワーク	分野	演劇
プロジェクト名	SOIL Fellowship Program	区分	補助型



団体・施設







指導者



育成対象者

調査項目

回答内容

活動実績・成果およびその影響	●プロジェクトの目的/活動概要 /5年後に目指す成果・ありた き姿	 本プロジェクトの目的は、日本の舞台芸術コンテンツを海外へ積極的に展開させるためにその障壁を下げることにあり、プロデューサーを育成対象者とし、海外で作品のプレゼンやピッチを行い、作品の展開を促進するための人材育成活動を進めており、令和6年度は海外派遣の準備や、マンチェスター国際フェスティバル（イギリス）のプログラムを招聘し、国際展開の基礎を学ぶことが主な活動だった。令和7年度は、実際にエディンバラ・フェスティバル・フリンジ（イギリス）でプレゼンを行った
	●プロジェクトにおける成果/今後 見込まれる成果	 今回のピッチイベントには、ブリティッシュ・カウンシル、エディンバラ・フェスティバル・フリンジやマンチェスターのフェスティバル関係者等海外の団体が参加していたが、「今までのピッチイベントの中で最もクオリティが高い」という評価を受けた。同時通訳の実施、運営面の工夫（タイムキープの徹底、ネットワーキングしやすいように名札を付ける等）により、コネクション作りも活発に行われ、参加者の満足度も高かった ピッチイベント実施後には、各育成対象者に対して、海外のフェスティバルから出演の打診、アジア圏のディレクターからの出演の打診、イギリスの音楽家から共同制作の提案、海外フェスティバルへの紹介・推薦、イギリスの図書館への作品の収蔵依頼等、具体的な話が複数進行しており、将来につながるネットワーキングができた
	●育成対象者におけるスキル/マ インドの変化・成長実感	 これまで作品をプレゼン・公演することに意識が集中していたが、それだけではなく、事前準備やフォローアップをしっかりと行い機会を掴むというマインドシフトに至ったことが大きな変化である。また、異なる企業規模・働き方のプロデューサーとの意見交換を通して視野が広がり、別の場で活躍している新たな仲間が増えたという感覚である。今後共に海外展開等のコラボレーションに向けた関係構築も出来たと思う
	●本基金による団体/業界等への 好影響や波及効果	 これまで作品についてプレゼン等を行うのはクリエイターに委ねられており、プロデューサーや製作者が前に立つことはあまりなかった。しかし、昨年のK-Musical Market（韓国）で、現地のプロデューサーたちが自分の言葉で作品を海外に向けて発信する姿に感銘を受け、日本でも同様の活動が必要だと感じた。今後日本のプロデューサーの意識変容にも期待が持てる 本基金では、芸術的価値、社会的価値に加え、経済的価値も求めていることを明確に掲げることで、大手企業がプロジェクトに参加したり、著名人が協力したりすることに繋がっている。また、海外展開において営利か非営利かに関わらず、どちらも日本にとってプラスになる活動だと捉えられており、蓄積されたノウハウは事業参加者だけでなく広く共有されるという理念のもと、人材育成支援が進められている点は有益と感じる これまで個々の劇団やクリエイター等が欧州で評価されることはあったが、今回は国の基金を活用して複数の団体が海外に展開する環境を作っているため、舞台芸術分野における若手クリエイターや業界全体が海外展開に向けて団結するという意識の変化をもたらし、その機運を生み出していると感じる

インタビュー対象	一般社団法人 緊急事態舞台芸術ネットワーク	分野	演劇
プロジェクト名	SOIL Fellowship Program	区分	補助型







団体・施設



指導者



育成対象者

調査項目	回答内容
活動実績・成果およびその影響	<p> プリティッシュカウンスルとクリエイティブ・スコットランドから業界関係者限定のVIPイベントに招待され、日本のプレゼンス向上に寄与したと思う</p> <p>これまで海外展開を目指す作り手たちは、先行事例やノウハウに乏しく、個人レベルで信頼できる人に相談することしかできなかった。本基金による大規模なクリエイターの育成支援・推進により、海外志向を持つクリエイター等や中間支援団体・劇場が可視化され、心強さが増した。これにより、「何か困った時に相談し合おう」、「面白い作品作りが一緒にできるかもしれない」等、クリエイター等同士での相談や協力やコラボレーションの機会が広がる兆しが見えたのは業界として良いことだと思う</p> <p> 海外の見本市でピッチをして具体的なリードや反響を得る成果を上げたとしても、実際に次の海外展開に繋がる話が動き始めるまでには2〜3年かかるため、複数年度のスパンで戦略立ててコミュニケーションを進めていけるのは画期的である</p> <p>単年の事業の場合、どのような計画でどれくらい集客を目指すか等の表層的な議論になってしまうのに対して、複数年で取り組む前提に立つことで、どのようにすれば海外展開に必要な人材を育成していけるかという視座でプロジェクトを推進できるため、非常に本質的であると考える</p> <p>複数年で取り組むプロジェクトだからこそ、計画通りに進捗が進まなかった場合にも都度振興会の伴走担当者とも話し合い、方向性を定めたうえで柔軟に予算の執行を行うことが可能であり、複数年かつ伴走型という支援体制は非常に有難い</p>
本基金への展望・今後の展望	<p> K-Musical Market（韓国）では現地での盛り上がりに触れ刺激を受けた。K-Musical Marketも「アジア圏全体として業界を盛り上げたい」と話しており、本プロジェクトとの連携の話も挙がっているため、今後検討していきたい</p> <p>アジア圏の方がコスト面で展開しやすいという意味で、積極的な展開を検討していきたい一方、直近のエディンバラでの活動も踏まえると、欧州でのニーズも十分にあると感じているため、展開先に関する方針は引き続き検討したい</p> <p> SOILのウェブサイト、最終的に日本の舞台芸術の情報を海外に発信するゲートウェイとしたいと考えている。海外の関係者が日本の作品を知りたいと思った時に情報が手に入る場としたい。将来的には、PDF形式で作品情報・スペックを提供可能にし、SOILがエージェントとして情報を取り次ぐ役割を担うことを目指している</p> <p>情報発信の対応言語を増やすごとにコストがかかってしまう点が、今後のプロモーションの課題である。今後のアジアへの展開可能性も踏まえると、韓国語や中国語でのプロモーション実施等を戦略的に検討する必要がある</p> <p>今後の継続的なウェブサイト運営を行う上で人手不足が課題である。現状、作品に関する情報発信は海外フェスティバル等に採択された時にしか行えないが、通年で情報発信を行うことができれば、海外への日本の作品情報の発信を常時行っている状態を作れるため、唯一無二のメディアにもなれると期待している</p>

インタビュー対象	日本音楽国際交流会	分野	伝統・大衆芸能
プロジェクト名	日本音楽の魅力発信プロジェクト-和の文化活動を通じた若手育成-	区分	補助型

インタビューサマリー







- ✓

日本音楽の演奏者は減少傾向にあり、国内における和楽器の人気は下火にあるが、海外においてはアニメや映画などを通じて和楽器の認知がある程度獲得しており、その繊細な音色に関心が深まる傾向もある
- ✓







本基金を通じて当会は活動を再開した。長年の活動で蓄積された国内外のネットワークを活用して多様な領域で活動している実演家や研究者を講師とする講習会を開講し、海外展開を行う上で有用な情報を提供することで育成対象者の海外志向を高めた
- ✓

日本音楽領域には、公演会の広報や関係者との調整を担うマネジメント人材が不足しており、アーティストだけでなくマネジメント人材の育成を要望する声が上がった







インタビューメモ

調査項目		回答内容	 団体・施設	 育成対象者
業界動向・海外展開に対する考え方・業界課題	●業界動向	<div> 江戸時代に隆盛を極めた日本の伝統音楽は、明治時代以来の国策で西洋音楽が主流になってきたことにより、今日では演奏者人口、享受者人口がともに減少してきており、日本の伝統文化の中では、かなり危機的な状況にある</div>		
		<div> 尺八については、尺八と琵琶とオーケストラのための現代音楽作品『ノヴェンバー・ステップス』の国際的な成功、吹禅・メディテーションの流行、日本のアニメ・映画内での和楽器音楽の使用などがきっかけで海外での認知を獲得している。特に近年はアニメ由来での認知が中心となっており、アニメ人気を契機とし、公演機会を得ることもある。しかし、人気の高まりに対して、和楽器演奏者の数が不足しており、別の楽器の演奏者が和楽器の演奏を兼任しているケースもみられる</div>		
	●海外展開における課題	<div> 海外公演を実現するためには、現地の公演ホールとコネクションを持つ人が必要になり、ホール関係者等と繋がりをもつことが重要となるが、それらのコネクションづくりが現在の課題だと感じている</div>		
		<div> 同時に現地で公演を実現させるマネジメント能力（広報、出演者の要望対応、スケジュール調整、会場の設営等）を身に着ける必要がある。演奏家が演奏と企画のマネージメントを同時に行うことは難しいので、ホールに対して演奏の企画を提案し、実現することができる人材が必要になるが、日本の邦楽界はマネジメント人材が不足しており、マネージメント体制が脆弱であると感じている</div>		

インタビュー対象	日本音楽国際交流会	分野	伝統・大衆芸能
プロジェクト名	日本音楽の魅力発信プロジェクト-和の文化活動を通じた若手育成-	区分	補助型

調査項目	回答内容	 団体・施設	 育成対象者
活動実績・成果およびその影響	 国内外で多様な領域で活動している実演家や研究者等を講師として招聘し、講演会を6回実施した。令和7年度は、令和8年度の海外派遣を見据えて、仏語・独語・英語による楽器体験を含む外国人向けの日本音楽紹介ワークショップと、海外公演曲目を中心に据えた国内演奏会を計画している		
	 講習会には、対面とオンラインで参加した。講師陣からは、海外展開を行う上で注意すべき事項やコミュニケーションの仕方、日本で活動する上では考えられない問題やその対処法、資金繰り等を親身に話してもらった。海外で生活し、文化活動を行っている人の話を聞く機会は、日本では滅多になく、大変参考になった 講義内で紹介のあった韓国におけるK-POPと伝統音楽・民族楽器のコラボレーション楽曲の事例は非常に興味深かった。助成金や寄付に依存せずとも音楽制作企業と協業し、マネタイズを図る可能性があると感じた 講義の様子は録音されており、講師作成の資料も共有されているので、講義の内容を都合の良いタイミングで振り返ることができるため有難かった 本プロジェクト内で、海外展開における課題感を他の育成対象者と共有できたことで、以前と比べて海外展開へのモチベーションが高まった これまで単独での尺八の海外演奏機会はたくさんあったが、団体としての公演経験は少なく、本プロジェクトを通じて、演奏者の代表として団体をどのように統括し、公演を成功に導くかを意識するようになった。		
	 当会は日本の音楽を正しくしてもらうためにレクチャー公演を国内外で実施していたが、当初の目的は達成したので、側面からの研究者支援などに切り替えて活動していた。しかし、この度、専門家を目指す若手の活躍の機会を増やす必要性を痛感し、これまでの経験が役に立つと確信し、当プロジェクトに参加している		
	 「雅楽チーム」を令和7年度末に、「邦楽アンサンブルチーム」「三曲チーム」をそれぞれ北米とヨーロッパに派遣するが、現地の日本文化課機関など、政府機関の積極的協力を得られることを希望している。また、昨今の急激な円安の影響で申請時の予算通りの運営が難しく、経費の算出に苦労している		

インタビュー対象	日本音楽国際交流会	分野	伝統・大衆芸能
プロジェクト名	日本音楽の魅力発信プロジェクト-和の文化活動を通じた若手育成-	区分	補助型

調査項目	回答内容		
		団体・施設	育成対象者
今後の展望・本基金への示唆	 日本のアニメ音楽の演奏に日本楽器が使われていることがあり、 海外の和楽器に対する認知はアニメ・映画を通して獲得できている部分もある と思われる。今後は海外の方に更に深く和楽器について知っていただけるとありがたい。今回の事業を通して、日本の古典音楽や和楽器の魅力を知っていただける機会を提供できるとよいと考えている		
	 令和7年度の10月には「広報記録チーム」が主体となり、「 雅楽チーム 」「 邦楽アンサンブルチーム 」「 三曲チーム 」の3チーム合同で 国内公演を実施 する。この公演は文化庁芸術祭80周年記念行事に選択されている 「雅楽チーム」は、令和7年度末にベトナムのジャパン・ベトナム・フェスティバルで、また令和8年9月にはインドネシア中部ジャワの王宮での公演も予定している。令和8年には、さらに「三曲チーム」がフランス公演やOCORAというレーベルでの録音を行い、「邦楽アンサンブルチーム」はニューヨークのカーネギーホールでの公演を予定している。		
	 本プロジェクトに協力して頂いている外部講師などからの評価と期待は高いと感じている。海外在住の講師陣の中には、海外展開時の現地協力をお願いしている方もいて、 本プロジェクトに期待をしていただき、少しでも日本音楽が世界に広まってほしいという熱意を感じている		
	 日本音楽を志す音楽家が将来を見据えて活動できるよう、また日本音楽業界において必要な公演企画をマネジメントする人材の育成にむけて、積極的な支援をお願いしたい		

インタビュー対象	公益社団法人全国公立文化施設協会	分野	舞台芸術等
プロジェクト名	舞台芸術海外コーディネーター育成事業	区分	委託型

インタビューサマリー

- ✓

舞台芸術分野は、これまで国内に一定規模の市場があったことから、海外展開には多くのリソースを必要としている。また、昨今は韓国や台湾等台頭しているほか、作品制作においても複数年での共同製作が主流になってきているため、海外展開から制作まで長期的な支援が求められる
- ✓

育成対象者は、指導者からのレクチャー、対象者同士の対話、そして海外視察を通じた有機的な海外ネットワーク構築等を通して着実な成長を実感している。さらに、各人が所属する劇場等にその学びや気づきを還元することで、各劇場機能の強化・活性化にも寄与している
- ✓







海外とのネットワーク構築を複数年で計画できる本基金は大変有益である。「日本対海外という関係性ではない」ことへの意識を持つことを最重視しており、非商業的な文化芸術としての舞台芸術には、観客数などの数量的指標だけでなく、柔軟な観点での評価を求める声があがった

インタビューメモ












調査項目		回答内容
業界動向・海外展開に対する考え方・業界課題	●業界動向（当該分野のコンテンツの立ち位置、海外と比較した際の特徴）	<div><div></div><div>舞踏などの実験的なものを含めて積極的な海外展開がなされていた90年代やその後のアニメなどを含めて日本のコンテンツへの関心が高まっていた2000年代に比較すると、現在は日本のコンテンツ・日本人への文化的興味は薄れていると思う。そのためこのタイミングで基金が立ち上がったことは非常に意義深いと感じる 東アジアに限っても、韓国・台湾等は舞台芸術の国際交流に関する国の支援が非常に手厚いが、日本は比して遅れているという印象を受ける</div></div>
	●海外展開における課題	<div><div></div><div>舞台芸術は他の分野に比べて、展開に人が関わる必要があり、渡航費・運搬費・宿泊費などの経費がかかることに加え、一定規模の国内市場がある中で、あえて海外に出る必要がなかったことも海外展開に係るボトルネックのひとつだと感じている</div></div>
		<div><div></div><div>実際に、海外への発信を意識しているアーティストの少なさ、アーティストを支える劇場のサポートの弱さを実感している</div></div>
	●海外展開のステップ	<div><div></div><div>従来は、海外劇場が作品を視察し、気に入ったものを一括購入していく形が一般的であったが、近年では、日本の作家への委嘱や海外の劇場・団体との複数年にわたる共同製作による作品創出が主流になっている。この変化に伴い、日本の公共団体が単年度でしか予算を作れない点は課題だが、複数年で予算を活用できる本基金はそれを解決する良い事業である</div></div>
		<div><div></div><div>海外の見本市やショーケース、フェスティバルでのフリンジ参加等を通して関係者（ディレクター・プロモーター）に直接作品を観て頂き、評価されることが、海外劇場での公演に繋がる。また、一度海外で一定の評価を得ることができれば、継続して作品等の依頼が来ることもある</div></div>

インタビュー対象	公益社団法人全国公立文化施設協会	分野	舞台芸術等
プロジェクト名	舞台芸術海外コーディネーター育成事業	区分	委託型



調査項目	回答内容
活動実績・成果およびその影響	<div><div><p>●プロジェクトの目的/活動概要/5年後に目指す成果・ありたき姿</p><p>●これまでのプロジェクトの進捗状況/活動実績</p><p>●本基金によって活性化した取り組み</p><p>●プロジェクトにおける成果/今後見込まれる成果</p><p>●育成対象者におけるスキル/マインドの変化・成長実感</p></div><div><p> 事業の目的は、日本の舞台芸術作品全体の海外発信・展開を広げることである。また公立劇場で企画・制作される作品やアーティストが海外に展開され、公立劇場の活性化に繋がりたいと考えている</p><p> 育成対象者は、厳正な審査を経て選抜され、本人たちの作品制作の課題や方向性を踏まえながら、自身で海外の研修先を選定を行い、また併せてYPAM（横浜国際舞台芸術ミーティング）への参加も研修として行っている</p><p>なお、育成対象者は、海外渡航先でのプレゼン実施や関係者とのネットワーキング等を実施しているほか、将来的に渡航先のブースに出展することも見据え、国によってどういった作品が展開可能なのかという点も含めて会場の下見を行っている。また、リモートと対面を併用し、海外展開に関しての講義を受講中である</p><p> 令和7年度はモンパリエダンスフェスティバル（フランス）およびユリダンス・フェスティバル（オランダ）へ研修で訪問し、これまであまり経験のない海外視察に参加できた。劇場職員の海外視察は、予算の都合等もあり、キャリアや実績が豊富なプロデューサーが行くことが多く、他の現場職員にはチャンスがなかなか回ってこない。ゆえに、若手職員は自費でプライベートで行くしかないような状況だったが、今回のプロジェクトを通じて業務として海外視察を行うことができ、非常に貴重な経験となった</p><p> 海外に目を向けるための支援や複数年継続する支援はこれまでなかったため、本基金により、継続的に視察等を通して海外の状況を把握したり、海外関係者とのネットワーク構築ができるようになり、今後の展開につなげることが可能になった</p><p> 本基金のプロジェクトにより、若手を含む育成対象者の劇場職員が海外視察やネットワーク構築の機会を得ており、国内外での活動に新たな視野と刺激をもたらしている</p><p> 海外視察中に、海外からどのようなテーマの作品が日本に求められているのかを感じることで、日本を客観的に見つめることができ、そのうえで自分たちだからできることを考えられるようになる等、視野が広がった。指導者からのレクチャーも受け、これまで見えていなかった海外との共同製作のあり方なども学べた。指導者の方からお話し頂いた「現地に赴き、会話して、課題を一緒に乗り越えることが本当のネットワークである」という点も実感。メールでやり取りするだけでなく、作品について語り合うことで有機的なネットワークを持ち帰れたと感じる</p></div></div>

インタビュー対象	公益社団法人全国公立文化施設協会	分野	舞台芸術等
プロジェクト名	舞台芸術海外コーディネーター育成事業	区分	委託型



調査項目		回答内容	
活動実績・成果 およびその影響	●本基金による団体/業界等への好影響や波及効果	 本プロジェクトで選ばれた10人の育成対象者と交流することで多くの影響を受けていて、それが広がればさらに良い影響を与えるのではないかと感じた。またそこで得た知見は、所属する劇場内で共有し、所属劇場に貢献できたと感じている	 団体・施設
	●海外におけるプロモーション	 育成対象者の多くの応募数（65名）からもわかるように、若い方々に本基金の取り組みについて知っていただけたということは業界の機運醸成という意味で良かったと考えている  エディンバラ・フェスティバル・フリンジのような参加が自由の見本市では、プロモーションをして競争していく必要があるが、公募により選出される公式プログラムでは、主催側がプロモーションを実施してくれる。その違いはあるものの、今回本基金の英文サイトにて本プロジェクトの発信をしていただいたため、海外の関係者に向けてどういうプロジェクトをしていて、団体としてなぜ研修生を送りたいのか等を説明しやすく非常に有難かった	
今後の展望・本基金への示唆	●海外展開における人材育成方針	 最も意識しているのは、日本対海外という関係ではないという認識を育成対象者に持っていただくことである。本プロジェクトにより異なる文化の地域で上演する意義、日本国内で活動する際にどのような作品を創るべきかを考えることにも繋がる。また公立劇場は自治体エリア・地域文化政策を最優先としつつも、多くの観客を誘客するためにいかに視野を広げられるかが重要	 指導者
	●本基金のメリット	 日本の公共団体は予算を年度単位でしか計上できず、長期的な共同製作にあたっての障壁となっているが、複数年にわたり予算を活用できる本基金は大変有益である	
		 複数年基金により将来を見通せることは非常に有難く、8年、10年とより長期的に継続していただけることを望む。また、作品が評価されてから海外展開まで通常2年程度を要するため、このように複数年で支援をいただけると有難い	
	●これまでの活動を踏まえて、本基金に求める支援等	 海外展開においては、ネットワーキングの機会を安定的に作る事が最も重要であるが、ネットワーク構築は時間のかかることでもあるため、それを複数年で支える支援や事業を継続的に本基金や業界内でも構築していくことが肝要である 円安の影響などもあり、渡航費を含めた経費が値上がりしている中で、出演者やスタッフ含め数十名の移動となると費用が莫大となっており、さらなる支援をいただけると非常に有難い	
		 演劇やダンスは商業的な部分もあるとは認識しているが、文化芸術としての舞台芸術をどのように支援するかという視点は持っておいていただきたい。例えば実験的な演劇については商業的な演劇に比べて観客数も少なくなることがあるが、そのあたりに関しては柔軟に、複数の評価軸を持って今後とも対応いただきたい	
			 育成対象者

インタビュー対象	コンピュータエンターテインメント協会	分野	メディア芸術
プロジェクト名	Top Game Creators Academy (TGCA)	区分	委託型

インタビューサマリー

- ✓ 日本のゲームは従来より世界中のユーザーから高い評価を受けており、近年デジタル化に伴い作品数が増加しているインディーゲームへの期待値も高い。一方で業界の人材不足と技術革新による制作工数増加に伴う若手クリエイターの発掘・育成が急務となっている
- ✓ TGCAは、世界で評価されるオリジナルのゲームIP・コンテンツを創出する若手クリエイター支援を目的とし、今回は30歳以下を公募条件に熱意ある育成クリエイター（育成対象者）を選抜することができた。伴走支援アドバイザー（指導者）も多数登用し、月次でのミーティング実施等、継続的な助言体制を整備している
- ✓ 今後は東京ゲームショウ、台北ゲームショウ、gamescom等の国内外の展示会への参加や出展を通じ、成果発表や交流を積み重ねながら本育成プロジェクトの成果創出に努める。また、同時に今後も継続的に実施していけるよう、仕組み化にあたっての諸課題等も整理していく





インタビューメモ

調査項目		回答内容
業界動向・海外展開に対する考え方・業界現状課題	●業界動向（当該分野のコンテンツの立ち位置）	<div> ハードゲームは、Xbox、PlayStation、Nintendo Switch等のゲーム用ハードに加えPCでもゲームプレイが可能であり、各社はこれらの機器の特性も踏まえながらゲームの開発を進めている。ゲームの好みは地域ごとに異なるが、その点 日本のゲームは世界全体で高く評価され、グローバルな人気を獲得している</div> <p>2010年以降デジタル化の進行の中でデジタルゲームのプラットフォームが発達し、現在ではダウンロード型のゲームが主流となっている。その結果、個人でのゲーム販売が容易になり、インディーゲームが非常に盛り上がりを見せているが、本プロジェクトの視察で訪問したゲームショー・gamescom（ドイツ）では、インディーゲームの日本人ブースに多くの人が集まり注目されていた。インディーゲームの分野においても日本のゲームに期待が集まっていることを目の当たりにした</p>
	●業界に対する国の支援	<div> 国によるゲーム業界への支援は、映画やアニメ等、伝統的なコンテンツに比べると少なかったが、近年は政府の文化戦略にゲームの言葉が盛り込まれる等、支援も増加傾向にあり、重視されてきていると感じる。従来経済産業省からの支援が豊富であったが、今回文化庁も人材育成への支援をはじめいただき、経済産業省・文化庁双方から支援を受けながら発展できる体制となりつつある。業界としても、支援制度改革や将来に向けた強化策等を国に提言している</div>








団体・施設

インタビュー対象	コンピュータエンターテインメント協会	分野	メディア芸術
プロジェクト名	Top Game Creators Academy (TGCA)	区分	委託型

調査項目		回答内容
対する考え方・海外展開に 業界動向・海外展開に 活動実績・成果およびその影響	●ゲーム業界における課題	<p> 国内はどの業界でも課題だと思うが、少子高齢化の影響を受け、ゲーム業界も人材不足が課題である。ゲーム業界は、技術の高度化に伴い、一作品の制作に多くの工数を要する状況となっており、技術革新に適応し得る人材の質・量の確保が早急に必要だと認識している。大手ゲーム企業では、大学や小中学校への講師派遣、企業の見学会、ゲームエンジンを用いたコンテスト等を通じて若手の人材に取り組んでいる状況である</p> <p>また、一般的に、幼少期にはゲームクリエイターが憧れの職業として挙げられるが、中高生になると人気が低下する傾向が見受けられるため、若年層がクリエイターへの志や制作への意欲を持ち続けることができるよう、働きかけ続けることが重要である</p>
	●プロジェクトの目的 ●プロジェクトの進捗状況 ●育成対象者の声・意見	<p> 本プロジェクトは、上記の業界状況も踏まえ、世界で評価されるオリジナルのゲームIP・コンテンツを創出する若手クリエイターを育成することを目的として立ち上げた。今回は30歳以下を公募条件として、育成クリエイター10組を選抜したが、本プロジェクトを大ヒットゲームのクリエイターやプロデューサー等を輩出する「成長の礎」のような存在にできればと考えている</p> <p> 令和6年度の主な成果は、本プロジェクトの立ち上げ、TGCAプログラムの開始、そして公募・選考の実施を通じた育成クリエイターの決定、これらを通じて活動基盤が構築できたことだと思っている。課題としては、公募要項の段階からプロのクリエイターによる助言の頻度等、具体的な支援内容を明確にすることができていなかったことなど、応募者が応募を躊躇するような内容になっていた点が挙げられる。今後は、より明確な公募要項の作成が必要である。令和7年度以降は、専任メンター10名が各クリエイターの支援を担当し、育成クリエイターの声に耳を傾けながら助言・指導をしている。育成クリエイターや伴走支援アドバイザーの反応から、取り組みが無駄ではないと実感しているが、改善提案や要望も日々寄せられており、試行錯誤をしながらプロジェクトを進めている</p> <p>なお、チャット（SlackやDiscord）により随時事務局への意見や相談を受け付け、育成クリエイターを対象に四半期ごとのフォローアップアンケートも実施しているが、アンケートの実施を待たずして本プロジェクトへの意見が寄せられている。当会としては、プロジェクトが始動したばかりということもあり、皆様からの意見を吸い上げながら、柔軟な対応をしていけるよう心掛けている</p> <p> 応募条件にゲーム制作経験を有することを含めていたため、既に強い志を持つ者が多い。個人開発者や起業志望者、企業内でプロデューサーやディレクターを目指す者等、応募書類に将来像を明確に記載している者が多い。TGCAへの参加により、さらに経験を積み重ねることができていると認識している</p> <p>育成クリエイターは、大学生も多く選抜されているが、今回文化庁の支援プログラムであるということで、保護者の同意・後押しも得られており、モチベーションの向上にもつながっている</p>



インタビュー対象	コンピュータエンターテインメント協会	分野	メディア芸術
プロジェクト名	Top Game Creators Academy (TGCA)	区分	委託型








調査項目		回答内容	団体・施設
活動実績・成果およびその影響	●伴走支援アドバイザーにより指導・助言	 約35名の伴走支援アドバイザーが参加しており、若手の人材育成への熱意を持つ者が多い。勉強会や座談会の追加、交流促進等、団体側にも多くの提案・助言をいただいております。当会としても伴走支援アドバイザーからの意見を積極的に取り入れている 伴走支援アドバイザーより、オープンソースソフトウェア（OSS）の権利侵害リスクに関する勉強会開催の提案を受けたため、開催を行ったほか、育成クリエイターを交えた座談会を開催し、相互交流の促進を図った。これにより育成クリエイターへの個別助言の機会も創出することができた 伴走支援アドバイザーと育成クリエイターは、事務局が間に入りながら質問・指導を行っており、アドバイザー側も安心して参加できるよう配慮している。また、専任メンターと育成クリエイターとは月に一度オンラインミーティングを実施し、直接コミュニケーションできる環境も整えた	 団体・施設
	●海外視察での気づき	 育成対象クリエイターの作品の出展可能性に関する視察のため、2025年は1月に台北ゲームショウ（台湾） 8月にgamescom（ドイツ）を訪問した。育成クリエイターが出展することになるインディーゲームのエリアは、イベントごとに特色があることが分かった。 台北ゲームショウはファンとの交流が盛んな雰囲気であり、育成クリエイターにはこのゲームショーのレベルには到達してほしいと思っている一方で、gamescomは完成度の高いゲームが多く、日本のゲームに対する期待値も高いことから、現状育成対象者の出展ハードルは高い印象で、段階的な出展計画が重要だと認識した	
	●本基金のメリット	 複数年度で計画を立てることができるため、海外出展等ステップアップを見据えたプログラム設計ができている。単年度事業では実際半年程度しか運用期間がないが、今回2年にわたり人材育成に取り組める点は大きな利点である。伴走支援アドバイザーにも2年間の継続支援を前提として助言を依頼している。成果を急ぎすぎず、経験の蓄積も意識しながら取り組んでいる	
本基金への展望・今後の展望	●今後の展望	 今後のステップアップの順序としては、各ゲームショーの雰囲気、現在の育成対象者のゲームのクオリティ、渡航コスト等の現実的な課題も考慮し、台北ゲームショウからgamescomとステップアップするのが良いと考えている 本プロジェクトは当会としては新たな人材育成プログラムであるため、東京ゲームショウ等の大規模イベントを活用し、情報発信に努めたいと考えている。主催イベントと連動した情報発信を行い、自然にアクセスしてもらえるよう工夫していく	
	●本基金後の育成事業の自走化	基金を通じて本プログラムの取組を仕組み化し、将来的に基金が終了しても持続的に人材育成ができるようにしていきたい。予算の継続も含め、プログラムの成果を振り返り、業界の課題にきちんとミートしているかを整理している。支援規模や育成対象者や伴走支援アドバイザーの数等、調整・適正化できる部分は存在するため、2年間の成果と課題を踏まえ、今後の方針を検討する予定である	

インタビュー対象	一般財団法人出版文化産業振興財団	分野	メディア芸術
プロジェクト名	Manga International Network Team (MINT)	区分	委託型

インタビューサマリー










- ✓ 北米では日本のマンガ人気が高まっているが、主にアニメ化されたメジャーな作品が中心で、マンガ単体の人気は一部の熱心なファンに支えられている。それらのファンはオルタナティブなスタイルを持つ作品に関心を寄せるだけでなく、マンガ編集者に対しても高い関心を示していると感じた
- ✓ 育成対象者は、北米のイベント参加やSNS発信を通じて作品や作家への現地の関心を高めながら、現地読者との交流を図り、自身の作品への自信をつけた。また、作品に付随したコンテンツの依頼や翻訳依頼も受ける等、指導者の助言やネットワークを効果的に活用して成果を生んだ
- ✓ 北米を中心とした今後の海外展開は、図書館やSNSで新作情報を入手する現地の傾向を踏まえ、文化的障壁への対応、現地出版社との連携強化を通じた市場拡大が重要となる。作家と編集者がともに情報発信を行い、国内外のファンへのアプローチを続けることも効果的である

インタビューメモ

調査項目		回答内容	 団体・施設	 指導者	 育成対象者
業界動向・海外展開に対する考え方・業界課題	●業界動向（北米におけるマンガの需要）	 北米ではアニメコンテンツのストリーミング配信が人気で、それに牽引されてマンガ人気もかつてないほどに高まっている。市場規模も2019年から4倍ほどに拡大しており、特に図書館でのマンガの需要が高く、図書館やSNSを通じて新しいマンガを知り、書店で購入するというケースも多い			
		 海外展開をしていくなかで、SNSでは海外から受け入れていただいていることは感じていた。また、今回Anime Expo（ロサンゼルス）とカリフォルニア美術大学（サンフランシスコ）で現地の方々と交流して、日本人よりインタラクティブに作者を知ろうとする意欲があり、熱狂的なファンがいると感じた。自身の作品が恐竜を題材にしていることから、興味を持たれやすい部分もあると思うが、前提として日本のマンガであることに対する興味が大きいのだと思った（作家）			
		 Anime Expoの現地ブースで来場者と話した際の感触として、アニメ化された有名作品のファンが多い一方で、まだ知られていないマンガやオルタナティブなスタイルを持つ作品にも強い関心があり、英訳されていない作品を知る機会を喜ぶ声が複数あった。より多様な作品を読みたいという潜在的なニーズがあると感じた			
	●海外展開における課題	 北米では、成長余地のあるジャンルとして12歳以下対象の児童マンガが挙げられるものの、暴力や性的描写、文化的な違いから学校や図書館に導入できない日本のマンガが多く、需要に対してリーチできていないという課題が存在する			
		マンガは日本が世界をリードしている状況にあり、海外展開を視野に入れていない作家も多いのが現状である			

インタビュー対象 一般財団法人出版文化産業振興財団		分野	メディア芸術
プロジェクト名 Manga International Network Team (MINT)		区分	委託型
調査項目		回答内容	
		 団体・施設  指導者  育成対象者	
業界動向・海外展開への考え方	●海外展開における課題	 <p>過去に海外展開作品を作ろうとしたことがあったが、実際に勉強すると日本の感覚とは大きく異なり、作品のコンセプトを根本から変更しなければいけないと思うほどであった。この経験から、北米を意識しすぎると、日本で読まれなくなるのではないかと懸念が生まれ、バランスを取るのが難しいと感じている。また、国内の出版社は、海外での展開に投資する程の資金的な余裕がないことが多く、それであれば国内のプロモーションにお金をかけると判断をしてしまう状況にある（編集者）</p> <p>北米のイベント参加や美術大学への視察を通して、アニメ化されたメジャーなマンガ作品は広く知られている一方、その他の日本マンガの知名度は依然として高くはないと実感した（編集者）</p>	
	●プロジェクトの概要・進捗 ●プロジェクトにおける成果/今後見込まれる成果	 <p>2025年夏にAnime Expo（ロサンゼルス）でのブース出展、カリフォルニア美術大学（サンフランシスコ）でのトーク・サイン会を実施した。また、年内にはさらにオハイオ州立大学（コロンバス）でのワークショップ開催、CXC（コロンバス）でのブース出展・トークセッション、コロンバス芸術＆デザイン大学（前同）での展覧会・トークセッションを予定している。また2026年には、ニューヨークの美術系学校での展覧会・ワークショップや書店でのトークセッション、そして最後に、Toronto Comics Arts Festival（トロント）でのブース出展・サイン会・トークセッションを開催予定である</p>  <p>今回の北米渡航では、指導者より具体的なコネクションの共有やファンへのアプローチ方法の事前指導もあり、多くの集客やメディア露出に繋がった。海外において自分の作品が熱意高く受け入れられており、かつ自分たちの実施してきたSNSでの広報・プロモーション活動が間違っていなかったことを認識できたとともに、今後も自分の面白いと思うものを描いていこうという自信がついた（作家）</p> <p>現地渡航前に指導者と面談を行い、注意すべきことを聞いたが、海外では積極的にコミュニケーションを取ると喜ばれると聞いた。写真の撮影やサインなど断るべきことは断っていいとも言われたので、Anime Expo当日はそのバランスを取りつつ、いただいた助言を素直に実施することで、来場いただいた方々とは有意義な交流をすることができた。</p> <p>また、カリフォルニア美術大学で行われたサイン会では、ただサインを書くだけでなく、現地のファンと英語で話すことが求められて大変だったが、同じく楽しく対応することができた。（作家）</p> <p>海外渡航後は、Anime Expoで受けたインタビュー記事の掲載に伴い、指導者に個別面談等を通してフォローアップしていただく予定（作家）</p> <p>今回の海外展開の活動で、現地企業より作品に付随したイラストやメディア展開に関するオファーをいただいた。また、本プロジェクトに関わりのない作品ではあるが、サイン会の際に現地出版社の方から、絵本の英訳版を出したいという話もあり、複数のオファーを受けている（編集者）</p>	

インタビュー対象	一般財団法人出版文化産業振興財団	分野	メディア芸術
プロジェクト名	Manga International Network Team (MINT)	区分	委託型





調査項目		回答内容	
		 団体・施設  指導者  育成対象者	
活動実績・成果およびその影響	●広報・プロモーションに関する成果や気づき	 基本的には指導者のアドバイスを踏まえて、SNSでの集客を行った。X、Instagram、Blueskyなどを活用しているが、依然としてXでの広報・プロモーションが最も効果的だという印象だった（作家）	
	●周囲の評価・反応	 同じ出版社で連載を持っている作家より、今回北米への展開を行っている姿を見て、編集者経由で海外に売り出すノウハウを聞かれることがあった（編集者）	
	●本基金のメリット	 北米への展開にあたっては、マンガの英訳版を出版することは必須であるが、英訳の出版には出版社の選定や専門用語の翻訳など多くの時間を要する。そのため本基金のような複数年度の支援があることで、より実現しやすくなると思う	
今後の展望・本基金への示唆	●基金の活動を経て得た業界へ還元できるポイント等	 安全面について改めて強調したい。派遣先のロサンゼルスは治安が良くない地域でもあったため、安全情報にはより一層配慮すべきだと考える。海外経験の少ない作家もいらっしゃると思うので、プロジェクト全体としても、安全面に十分注意して海外展開を進めてもらいたい（作家）	
	●今後の展望	 本プロジェクトに関する情報発信は、MINTの公式Xアカウントを主軸に実施しながら、指導者であるデボラ青木氏とも連携を強化している。同氏は幅広い人脈を持つだけでなく、SNSでの情報発信にとっても積極的であるため、同氏のアカウントを通じた広報発信も行ってもらうことで、海外でのプロジェクトの認知度向上を図りたい。指導者のフォロワーを中心に多くの方に見てもらえるよう、今後も発信の仕方を工夫していこうと思っている	
		 自分のマンガを映画化するというのはひとつの夢なので、その実現に向けて努力していきたい（作家） 個人での広報・プロモーションに関しては、特に海外向けに実施するというわけではなく、まずは国内に対して発信していくつもりである。Xには自動翻訳機能があるため、海外のファンにも情報を届けることは出来ると思っている（作家）	

インタビュー対象	公益財団法人画像情報教育振興協会	分野	メディア芸術
プロジェクト名	New Way, New World: Program for Connecting Japanese Animators to the World	区分	委託型

インタビューサマリー

- ✓ 短編アニメーション分野は、欧州を中心に支援制度が整備され、作家が国際的に活躍する地盤が整っている。日本の作家の海外展開は、渡航ハードルを乗り越えて、ピッチ等で海外プロデューサーとネットワークをどう築き、作品制作に繋げるかが課題である
- ✓ 欧州ツアーを実施し、海外映画祭でのピッチ機会の提供、また企画開発過程の公開による多様なアドバイスの取り込みを通じ、創作能力の向上とネットワーク構築を図った。また、パリでの上映イベント開催や、育成対象者の海外レポートをウェブサイトに掲載する等、情報発信にも注力している
- ✓ 次世代作家を継続的に育成し、日本のコンテンツの国際的評価をさらに高めていく上で、本基金のような複数年度の支援は画期的で効果的である。今後さらに他分野の採択プロジェクトとの接点やジャンルを超えた作家活動の支援等も強化されるとよい

インタビューメモ

調査項目		回答内容	 指導者	 育成対象者
業界動向・海外展開に対する考え方・業界課題	●業界動向	 短編アニメーション分野は、2000年代に美術大学でアニメーション教育を通じたアーティスト育成の取組が文化普及の大きな起点となり、その中で、芸術表現として個人で制作する人、海外の映画祭で活躍する人というモデルケースも生まれてきた。ただ、この分野は制作資金を得る場が少なく、産業として成り立ちにくいと、自己資金と余暇で作らざるを得ない状況である。そのため学生時代に優れた制作をしていた人の卒業後の制作継続を、業界としても支援するのが困難な状況にある		
	●海外展開のステップ	短編アニメーションは支援制度も発達している欧州が本場であり、特にフランスが完成度の高い作品を多く輩出している。またアジアでも韓国や東南アジア等は助成金が充実しており、作品本数は助成金の状況とほぼ比例すると考えている		
		そのため、本場である欧州現地での経験や人脈形成が重要となるが、日本から地理的に離れており、渡航には時間も費用も要するため、地理的な距離が最大の課題であるが、近年は、日本人作家がフランスのプロデューサーと組むことで、予算をつけて短編を制作する機会が増加した。日本の助成金に加え、欧州の助成金も活用し、優れた作家の新作を予算化している。その影響もあり、北米最大のオタワ国際アニメーションフェスティバル（カナダ）では、日本人作家が直近10年間で4度も短編コンペティション部門のグランプリを受賞している		
		 国際的な映画祭でのピッチは、作品のアイデアやデモ動画をプレゼンする場であり、業界関係者と効率的に出会うための場としても有用である。さらに、映画祭での評価は、助成金や資金の獲得だけでなく、新たなプロデューサーとの出会いにも繋がり、ネットワーキングの役割も果たすものである。その意味で、国際的な映画祭は目指すべき場であり通過点でもある。なお、欧州では国境を越えた機会探索やピッチは自然なことであり、プロデューサーとの接点構築から仕事にも繋がるため、現地のコミュニティに参加すること自体が意識改革のうえでも重要である。日本ではそのような意識が育ちにくい		

インタビュー対象	公益財団法人画像情報教育振興協会	分野	メディア芸術
プロジェクト名	New Way, New World: Program for Connecting Japanese Animators to the World	区分	委託型






指導者












育成対象者

調査項目

回答内容

活動実績・成果およびその影響	●プロジェクトの目的/概要	<p> 本プロジェクトの目的は、より多くの作家を海外の映画祭やプロデューサーの目に触れさせるためのメソッドを構築することである。作家には、作品制作のスキルだけでなく、プレゼンテーションするスキルを身につけてもらい、海外のプロデューサーとのマッチングの可能性を増やしてもらいたい。そのため海外映画祭に新作のアイデアを発表する「ピッチ」をしに行くことが重要である</p> <p>企画開発過程の公開や多様なアドバイスの取り入れは、プロジェクトで重視した点である。アーティストは、学校卒業後は作品について深く話す機会がなくなり、孤独に制作することが増える。様々な意見を聞くことで方向性を見失う危険性もあるが、本プロジェクトでは、作家の個性をいかに国際的に通用する形にするか、そのための第三者の視点を強く意識しており、指導者には作品を的確に見る力を持つ人材を揃えた</p> <p>本プロジェクトはある意味で強引にコミュニティへ参加させることで、誰もが非ネイティブの英語で話しているという現実をこれまでの言語の壁から孤立しがちだった日本人作家に体感してもらうというねらいがあり、ただ参加するだけでも意識面での効果は非常に大きいと考えている</p>
	●育成対象者の選抜	<p> 第1期に関しては、監督単独で応募を受け付け、プロデューサー探しを今後の課題として取り組んでいく。第2期も監督育成が主だが、プロデューサーにも映画祭を経験させ、ネットワークを広げてもらう目的で、プロデューサーとの共同応募を推奨し、実際採択された3名中2名がプロデューサーと組んで応募されていた。第2期は、既に海外プロデューサーとのマッチング事例も出ている。また第3期の公募も今年中に実施する予定である</p>
	●プロジェクトにおける成果/今後見込まれる成果	<p> 海外映画祭でのピッチ準備を通じて、自身の活動を言語化し、振り返る機会となった。また欧州での18日間の滞在期間で、英語にも徐々に慣れることができた。個人的な課題は、経験不足により、プロデューサーを名乗る者から連絡があった際の信頼性が見極めが困難なことである</p> <p>日本の美術教育には、言葉にできないものを作品として表現するという純粋な芸術至上主義的な側面があり、作品への資金提供を得るためのアピール方法を教えていない点が、根本的な課題であると思った。</p> <p>海外の作家たちは、誰もがピッチやネットワーキングを通じて生き抜く術を模索していた。今回実施したピッチで得たスキルは、ビジネスだけでなく、自身の作品を語ることを通じて他者と関係を築く上でも非常に有益であった</p> <p>海外という未知で困難な環境のなかで自分の作品のセールス活動に挑戦することの重要性を実感した。しかし、日本に戻ったあとの企画開発を進めるうえで、海外の経験で高めたモチベーションを維持することに苦労している</p>

インタビュー対象		分野	メディア芸術
プロジェクト名		区分	委託型
調査項目		回答内容	
		 指導者  育成対象者	
活動実績・成果およびその影響	●育成対象者におけるスキル/マインドの変化・成長実感	 日本では、プロデューサーのいない作家は孤独な制作が多いが、本プロジェクトでは、開発中のアイデアを国内外の作家に相談しやすい空気が醸成されており、 未完成のものを開示する不安を乗り越えやすい環境があったことは最大の利点だ と感じている。はじめて制作過程をオープンにするというプロセスに臨み、当初は不安だったが、第三者に意見をもらうことに慣れること自体が非常に大きかった。多数の指導者からのフィードバックも、意見の相違に悩むことはあれど、機会そのものが極めて貴重であった	
	●広報・プロモーションに関する取組	 育成対象者には、アヌシー国際映画祭（フランス）でのピッチ等の経験をレポートにしてもらい、プロジェクトのウェブサイトに掲載している。恩恵を限定的にせず、後続の育成対象者たちが参考にしたり、業界全体の知見の底上げに寄与したい ウェブサイトには日本人のアーティストのデータベースを作成しており、海外向けに情報発信している。また2025年10月にはライターのクリス・ロビンソン氏に来日いただき、日本人アーティストについての記事作成と発信してもらうことを予定している 本事業の広報・プロモーションの対象はアニメーション作家や業界人である。パリでは、作家の経験の共有に加え、映画業界全体のプロデューサーが集積する場所で、ネットワーキングを最大の目的として上映会とトークイベントを実施した。事前に業界関係者への告知も実施し、一定の集客も果たすことができたと思っている	
	●個人としてのプロモーション活動	 欧州ツアーでは、SNS上でしか知らなかった作家と直接会い、SNSでの発信方法等の情報交換ができた。加えてツアー中にデモ動画を公開したところ多くの反応があり、SNSが自己紹介の一部かつ、近況やトレンドを知る場であることを再認識した	
	●本基金のメリット	 複数年度支援・分野横断的な支援を実施している本基金の成立自体が、日本の文化支援における画期的な出来事である。欧州や韓国は文化と産業を分断しておらず、その分断をしていることで日本の成長を阻害している面がある。本基金のような長期育成の枠組みが拡大し、「日本のクリエイターを海外へ」という目的の下で動けば、日本のコンテンツ産業はさらに成長するポテンシャルがある。文化への予算投入が少ない日本がこれだけの実績を上げているのだから、適切な投資を行えばより大きな結果が期待できる。その第一歩として、本基金の成立を高く評価したい	
本基金への今後の展望・示唆	●これまでの活動を踏まえて、現場視点で求められる支援等	 プロジェクトへの要望は、ピッチの練習機会を日本でも設けてほしいことと、脚本家としてスクリプトドクターと繋がる機会がほしいことである	
	●本基金に求めること	 他分野の採択プロジェクトと相互に学び合う機会があれば、新たな発想が生まれるかもしれない。また、短編アニメは単独の市場が未確立なため、作家はマンガやゲーム等類似分野でも活動する。本基金内で、そうしたジャンルを超えた作家活動を支援する仕組みがあれば、より良い成果に繋がるだろう	
	●今後の展望	 本プロジェクトの本格的な始動からはまだ数ヶ月しか経っていないため、今後事業が3年、5年と継続すること自体が最大のプロモーションと考えている。今後はウェブサイトでのデータベース拡充や、海外ライターによる取材などを通じて、日本の作家の文脈を海外に伝えていく予定である	

インタビュー対象	公益財団法人ユニジャパン	分野	メディア芸術
プロジェクト名	Film Frontier ※海外渡航プログラムに関するヒアリングを実施	区分	委託型

インタビューサマリー

- ✓

日本の映画業界は近年国際的にも高く評価され、若手監督の認知度も向上しているが、言語のハードルを含め海外映画祭での企画のピッチングや実際の契約締結等の経験が不足しており、作品の企画開発段階での海外展開支援等を通じた海外視点の早期獲得が求められている
- ✓

プロジェクトの成果としては、事前の映像制作の甲斐もあり、参加したマーケットでのピッチングで成功をおさめたほか、育成対象者の企画の広報活動や海外プロデューサーらとの幅広いネットワーク構築を行うことができた。国際共同製作も決まり、作品の完成に向けて着実に前進している
- ✓

作品の企画段階での試行錯誤や国際的な共同制作者の選定には、本基金のような長期的かつ大規模な資金支援が不可欠である。また、海外でのロードマップの可視化による国内業界への知見やノウハウの還流、ピッチングと制作のバランスを保持することが今後の活動のカギとなる

インタビューメモ

調査項目		回答内容
業界動向・海外展開に対する考え方 業界課題	●業界動向	<div><div></div><div>日本の実写映画は、是枝裕和や濱口竜介などの監督による活躍もあり、カンヌ国際映画祭（フランス）などの海外の映画祭で高く評価されている。さらに、若手監督の作品も取り上げられることも増え、日本の映画監督の認知度向上のきっかけとなっている</div></div>
	●海外展開における課題	<div><div></div><div>2015年頃から海外の映画祭での「ピッチ（企画プレゼン）」に参加するようになったが、当時は日本の監督と会うことはほとんどなかった。しかし近年は、年々ピッチングに参加する人が増えており、現地で交流する機会が増えている印象である</div></div>
	●海外展開に対する考え方	<div><div></div><div>業界として、まだ海外展開の経験値が全体的に少ない点が課題である。まず言語のハードルがあり、自身の企画について英語でコミュニケーションできるレベルになれば、さらにチャンスは広がる。また、企画開発段階で海外に渡航するための資金がないことも、非常に大きなボトルネックであると考えている</div></div>
		<div><div></div><div>今回初めて海外プロデューサーと製作物の権利に関する契約を結ぶことになったが、知識がないと不利な内容になりかねないため、この分野の勉強は急務だと感じている。Film Frontierの一環で日本映画監督協会による国内向けの契約に関する講座を受けたが、海外向けの契約に関しては、まだ業界としての支援体制が整備されていないと感じている</div><div>初めて自主制作映画を発表したのが2013年で、その時は、映画祭がハブとなり自身の作品が海外へ広がっていく経験をしたが、当時は、今回のように制作段階から海外を意識する必要性を感じていなかった。海外展開を通して多くの場所で上映されれば次回作の制作にも繋がり、また日本と違う文脈で観てもらうことで内容面でも新たな気づきがあると思っている</div></div>
		<div><div></div><div>また今は、非商業的な映画を製作するインディペンデントな作り手にとって、海外の業界関係者の目に触れる機会である国際映画祭でのピッチは映画を作り続けていくためのひとつの有効な手段ではないかと考えるようになった</div></div>

インタビュー対象	公益財団法人ユニジャパン	分野	メディア芸術
プロジェクト名	Film Frontier ※海外渡航プログラムに関するヒアリングを実施	区分	委託型



団体・施設



育成対象者

調査項目

回答内容

活動実績・成果およびその影響

●プロジェクトの全体進捗



本プロジェクトは3年間で、18ヶ月を原則として第1タームと第2タームに分けている。18ヶ月という期間設定は、事業の成果を測り、将来的な制度化・恒久化を目指す上で、複数サイクルを回して検証することと、成果創出を図ることのバランスを考えた結果である。現在第1タームで折り返しを迎えるところであるが、これまでに企画開発を進め、海外関係者との接点づくりを行った。ここからは、資金調達やクリエイティブ面での実働に入っていく流れとなる。各プロジェクトが18ヶ月でどこまで具体的なアクションに繋がれるかを見極めながら次の計画を立てているが、現在、同時に第2タームの募集・選考も進めている

●プロジェクトにおける成果



このプロジェクトに採択されたおかげで、自身の企画をさらにブーストさせ、海外での展開に近づけることができたと感じている。例えば、2025年2月の沖縄環太平洋国際映画祭のインダストリー部門で自身の作品をピッチする機会があったが、他の多くの企画にはプレゼン映像が無かったなかで、我々はプロジェクト予算を活用してそれを制作していたため、より企画の本気度や覚悟を伝えることができ、企画のプレゼンも成功した。海外に伝える上で映像を用意しておくことは非常に重要であると再認識した

また、これまで企画のピッチを通じて海外のプロデューサー等に興味を持っていただいても、その後の制作に追われ情報共有が滞り、作品が完成した頃には相手関与する余地がなくなっているということがあった。今回指導者より様々な助言を得て、ピッチは出会いの場でしかなく、その後の適切なフォローアップや継続的なコミュニケーションが肝心であることを学んだ

ネットワーク構築に関しては、カンヌ国際映画祭の会場にて、ユニジャパンの繋がりからドキュメンタリーに詳しいプロデューサーを紹介してもらった。その方にカンヌ・ドックス（ドキュメンタリー部門のマーケット）を案内してもらい、そこでさらに多くの業界関係者と繋がることになった。朝からアポイントを取り、ミーティングやシンポジウムに参加するなど、映画祭をどう活用すれば企画段階からより多くの海外の業界関係者と関係を築けるかを学べたのが大きな収穫であった

●今後見込まれる成果



本プロジェクトに指導者として参画していただいている、フランスのドキュメンタリー制作会社のジャン＝マリー・ジゴン氏にアドバイザになっていただいた。彼は私の作風と近い作品を多く手掛けており、プレゼン映像の改善点や、プリセールス（完成前販売）に必要なトリートメント（脚本の前段階にあたる、作品の概要書）の書き方などを丁寧に教えてくれた。また技術的なことだけでなく、資金や人間関係の悩みにも相談に乗ってもらい、信頼関係を築くことができた。結果として『煙突清掃人』の共同製作契約を結び、製作費も一部負担いただけることになり、撮影の目処が立った

今秋に3つの映画祭（インドネシアのDocs By The Sea、台湾のTCCF、韓国のACFM）でピッチに参加することが決まっているが、これらも過去の映画祭等での出会いをきっかけに得た機会である。ただ一方で、ピッチだけを続けていても作品は完成しないため、ある程度の段階で自身を制作モードに切り替える必要があり、その見極めが重要だと感じている







インタビュー対象	公益財団法人ユニジャパン	分野	メディア芸術
プロジェクト名	Film Frontier ※海外渡航プログラムに関するヒアリングを実施	区分	委託型



団体・施設



育成対象者





調査項目	回答内容
活動実績・成果およびその影響	<p> 文化庁ではこれまでに、完成した作品の展開のための海外渡航や字幕制作に対する支援事業はあったと思うが、若手クリエイターが最も苦勞する企画開発段階を、複数年度にわたって長期的に支援できるのは、まさにこの基金があったからこそ実現できたことであり、大変有難い</p> <p> 複数年度での支援を行っている本基金は、作品の制作そのものではなく、プリプロダクション（撮影前準備）段階で活用できる点が非常に大きい。映画製作は、企画を練り上げ、共同製作の相手をじっくり見極めるなど、トライアンドエラーを重ねる時間が非常に大切である。例えば、海外プロデューサーとの共同製作の契約ができるか否かは、実際に動き出してみないと分からない部分が多いが、長期的な視点で進めることができるからこそ、作品の屋台骨をじっくり検討して組み立てることができる。これは良い作品を生み出す上で本当に大事だと感じている</p>
今後の展望・本基金への示唆	<p> 本プロジェクトの活動を通じて、海外との契約に関して学ぶ機会を作ることの必要性を感じている。日本映画監督協会に協力いただいたような講座等に組み込むことができれば良いかもしれないが、様々な海外の投資家やプロデューサーが来日する我々主催の東京国際映画祭併設マーケットTIFFCOMでも、今後契約の話に発展することも想定される。そのような場でまずは無料の法律相談ブースを設ける等の手段も考え得るため、我々が持つプラットフォームを最大限活用して、クリエイターのニーズや課題に応えていきたい</p> <p>クリエイター自身の言葉で他のクリエイターに共有する場を作っていきたい。また、事務局として、どのようなマーケットや企画の発信の機会があるのかという情報を「見える化」し、ウェブサイトなどで集約・発信していきたいと考えている</p> <p> 交流のある監督から、国際共同製作の具体的な進め方について学んだことを共有する場を設けてほしい、というリクエストを受けた。ノウハウとしては知っていても、実際にどうすればいいかわからない人は多いのではないかと感じている</p> <p>私たちが辿ってきたルートをロードマップとして共有することはできると考える。インディペンデントで映画を作り続けるのは大変だが、活動の全体像が見えれば、悩みが少しは軽くなり、活動を継続しやすくなるかもしれない</p> <p> この支援が今後も続いていく形になることを強く望む。第1タームの方々の活動も18ヶ月で終わりではなく、その後のフォローができるような、継続的な仕組みにしていきたい。第1期、第2期ともに50名弱の応募があり、熱意のある方々が多い。認知度も上がっていると感じており、継続的に支援していければと思う</p> <p> この事業には非常に多くの監督が応募したと聞いている。この枠組みがあれば、海外で高く評価される映画がもっと生まれるはずである。ぜひ続けてほしい。そのためにも、第1タームで選んでいただいた私たちが成果を出さなければと感じている</p>

インタビュー対象	独立行政法人 国立美術館（国立アートリサーチセンター）	分野	現代アート
プロジェクト名	JUMP アーティスト＋キュレーター国際協働プログラム	区分	委託型

インタビューサマリー

- ✓ 現代アートは、予算不足に伴う海外渡航および現地ネットワーキングの機会不足に加え、海外美術館との文化的・制度的な違いや、各国独自の規制・配慮等への対応が海外展開の障壁となっており、海外との長期的な関係構築や連携、そしてその知見の蓄積が求められている
- ✓ 海外美術館での展示計画や現地キュレーターとの交流、指導者との交流を通じて、国際共同制作ノウハウや実務経験が実践的に蓄積された。オンライン発信とリアルイベント開催の双方での広報発信も強化しており、海外連携の推進にとどまらない波及効果や認知度向上に努めている
- ✓ 今後は海外でのプロモーション活動や分野横断的な発信活動を強化するとともに、海外美術館との連携のなかで直面した課題や文化的背景への理解を広く共有していくが、本基金に対しては現代アートへの関心層を広げるための一般層への働きかけの場を創出してほしいという声も上がった

インタビューメモ

調査項目		回答内容
現状課題・海外展開に対する考え方・業界課題	●業界動向（海外との比較等）	<div> 海外の美術館は、寄付や協賛文化に支えられて運営が成り立っている側面がある。一方日本の美術館は、行政予算が中心であるため、商業性に比較的囚われずに企画ができるというメリットはあるが、財政面での課題が大きくなってしまふ</div> <p>本プロジェクトで連携している海外の美術館に比べ、日本の地方美術館は組織体制が小規模であることを痛感している。日本では、一人が担当する業務が多岐にわたり、ネットワークづくりをはじめ、キュレーターとしての専門性を高めるための活動を行うことが難しく、ゆえにその専門性や権威性も海外に比べて低くなっているのではと感じている。そのため現地リサーチに赴いたときも、現地のキュレーターとの業務範囲の違いに驚いた</p>
	●海外展開における課題	<div><div> 地方美術館も重要なコレクションを所蔵している。滋賀県美術館は公立美術館の中でもアールブリュット収集に注力しており、その分野に関して海外美術館からの連絡は増えている。また、高知県立美術館の石元泰博のコレクションも海外の美術館からの借用依頼が多い。山口情報芸術センターも世界的に著名なメディアアーティストとの協働制作の実績が多数ある</div><div> 現代アートは、美術館や芸術祭が作品の発表の場となっているが、最大の課題は予算不足である。そのため、海外の美術館や展覧会を視察するとしても出張費が出ず、国際的なつながりを作るのが難しい。また、企画展での所蔵作品の貸借による海外美術館との協働も、近年は輸送費の高騰により難しい状況になってきている</div><div> 地方の公立美術館は複数の館で協力して予算を獲得しないと海外との協働企画や作品借用が難しく、東京や国立の美術館等、限られた美術館しか海外連携に取り組むことができていない状況である</div></div>

インタビュー対象	独立行政法人 国立美術館（国立アートリサーチセンター）	分野	現代アート
プロジェクト名	JUMP アーティスト+キュレーター国際協働プログラム	区分	委託型



調査項目	回答内容
活動実績・成果およびその影響	
●プロジェクトの目的/概要	<p> アーティスト・キュレーターを1組とし、計3組をそれぞれロサンゼルス・リスボン・シドニーに派遣し、現地でのリサーチと現地美術館での展示を実施する予定である。第1期の成果としては、現地の美術館での新作展示がアウトプットとなるが、今後海外展開を目指す美術関係者への参考資料として、展示までのプロセスを反映した記録集も作成予定である</p> <p>連携するロサンゼルス・シドニー・リスボンの現地美術館は、国立アートリサーチセンターのセンター長の片岡氏のネットワークがあり、また現代美術を扱っていること、波及効果、リサーチしやすい地域性を考慮して選定した</p>
●進捗状況	<p> 3チームとも現地を訪れ、現地キュレーターとの交流を行うとともに、展示場所の下見と各地の文化や日本との繋がりなどについてリサーチを実施した。その過程で、オーストラリアではアボリジナル・アートの扱いや検疫などの規制について知見を得たり、ロサンゼルスとリスボンでも協力先美術館以外のキュレーターや現地のアーティストに会い、国際的なコネクションの構築に努めた</p> <p>情報発信活動の一環としてウェブサイトを立ち上げ、育成対象者のインタビューに加え、現地のリサーチや海外キュレーターとの協働のなかで得た知見を「国際協働のヒント」として月2回のペースで発信している。Instagramは日英で記載し、育成対象者のJUMP以外の活動も積極的に発信している</p>
●プロジェクトにおける成果/今後見込まれる成果	<p> 育成対象者・指導者が一堂に会し、育成対象者が作品プランを提示して、それに対して指導者が講評を行う機会があった。自身の所属館の上長が指導者（メンター）なのだが、普段の活動のなかでは、具体的なアドバイスを貰う機会はあまりないため、普段とは異なるメンターとしての立場で、これまでの経験を踏まえた多角的な意見をもらうことができ、非常に勉強になった</p> <p> 海外のキュレーターとは、東京で顔合わせを行った後、自身が所属する美術館も訪れてもらい、コレクションや県内のアーティストを紹介した。実際に訪問して、日本の地方美術館の規模や展示物の収蔵庫等の様々な違いを実感してもらえたことで交流も深まり、今後の協働に向けた関係性の強化ができたのではないと思う</p> <p>現代アート業界のメインストリームで活躍するならば、海外展開は避けて通れない道だと認識していたが、今まではその機会もなく、英語への苦手意識もあった。しかし、本プロジェクトを通じて英語でのコミュニケーション機会が増加し、英語を話すことへの心理的ハードルも下がったことで、意識も変わってきている</p> <p> 展覧会や芸術祭では、キュレーターがアーティストを選ぶ構造であるため、海外のキュレーターがどれだけ日本人アーティストを認知しているかが重要となる。本プロジェクトのように日本人キュレーターが海外で活動することで日本のアーティストの認知度が少しでも上がればと思っている</p>

インタビュー対象	独立行政法人 国立美術館（国立アートリサーチセンター）	分野	現代アート
プロジェクト名	JUMP アーティスト＋キュレーター国際協働プログラム	区分	委託型



調査項目	回答内容
活動実績・成果およびその影響	<ul style="list-style-type: none">●本プロジェクトの課題<ul style="list-style-type: none">これから現地での展示実現に向け、海外美術館の組織体制や規制への対策、文化的配慮など多くの対応事項が出てくると思っている。また、本プロジェクトを国内にどう波及させ、業界に対する効果を高めるかも引き続きの検討課題である●プロジェクトの広報・プロモーション活動<ul style="list-style-type: none">リスボンチームは、ポルトガル大使館にてリサーチ報告会を実施した。今後も海外展示実現の過程を積極的に発信することで、業界関係者のみならず、広く国内に向けても本プロジェクトへの関心を高めていきたいと考えている海外での広報・プロモーションは、Instagramを活用していくとともに、展示に関する広報活動は、現地美術館の協力も得つつ進める。日本国内ではウェブサイトだけでなく、トークイベント等のリアル開催でも、プロセスの可視化や情報発信を強化していくつもりである個人での発信はしていないが、他の現場で一緒になるアーティストやキュレーターからプロジェクトについて興味を持って聞かれることが増え、ウェブサイトやInstagramでの公式情報が届いていると実感している。またトークイベント等で、現場で起きた細かなトラブルや解決策、文化的な違いへの対応など、より実践的な情報やオンライン上では伝えきれない情報等を共有するのも有益だと思った。海外の文化や規制についても実例を伝えていきたい
今後の展望・本基金への示唆	<ul style="list-style-type: none">●今後の展望<ul style="list-style-type: none">まずは海外の3つの美術館での新作展示を成功させることが重要であると思っている。加えて国際協働に興味がある人や今後挑戦する人の参考になるよう、単なる展示記録でなくプロセスやノウハウを反映した記録集を作成する予定である。具体的な方法は未定だが、記録集を冊子として広く配布することも検討している国内では知れないグローバルトレンドや国際的な動向にアンテナを張る重要性も伝えていながら、海外展開への関心を高めていきたい●現状海外のキュレーターとの関係はまだパーソナルなものであるが、今後協働を通じて館同士の交流も加速すると思われるため、今回のプロジェクトをきっかけに、これまでほぼ繋がりのなかった海外の美術館と強固な繋がりを築けていると思っている●組織としても海外美術館や団体との長期的な関係構築を重視しており、複数年にわたる支援を可能とする本基金の存在が、その実現に不可欠だと考えている。従来の日本人アーティスト支援やキュレーター研修は短期的な支援に留まる中、本プロジェクトのような複数年にわたる継続的な国際協働を実施することは本基金によって初めて可能となったものである●これまでの活動を踏まえて、本基金に求める支援等<ul style="list-style-type: none">マンガ・アニメ・ゲームと比して現代アートへの関心層は未だ少数と思われるため、分野横断的に一般層へ働きかける場を設ける等、本基金でもご協力いただけるとありがたい

インタビュー対象	認定NPO法人 趣都金澤	分野	分野横断的新領域
プロジェクト名	『Kogei』アーティスト育成グローバル展開プロジェクト	区分	補助型

インタビューサマリー








- ✓

国内の工芸業界は、市場縮小や認知度の低迷という衰退局面にあり、伝統的な技術力やクリエイティビティを組み合わせながら、美術領域におけるアカデミックな文脈での価値向上、既存市場との接続による産業振興、現代的文脈の取り込み等を実現していくことが求められている
- ✓








パリやソウルでのアートフェア出展やロンドンでのシンポジウム開催を通じ、マーケットとアカデミズムの両面を意識した活動を実施した。来年のヴェネチア・ビエンナーレでの展示を前に、海外での広報活動やキーマンとのネットワーク構築にも成功し、着実な前進と次年度に向けて弾みをつけている
- ✓

国際的な舞台で競うには、本基金のような長期的かつ大規模な資金支援が不可欠である。また、海外での活動の可視化による国内への還流や、影響力のある専門家への発信・アプローチが今後の発展へのカギである

インタビューメモ

調査項目		回答内容	 団体・施設	 指導者	 育成対象者
業界動向・海外展開に対する考え方・業界課題	●業界動向（国内外の工芸の状況）	<div><div></div><div>工芸自体が地場の産業としても非常に縮小している。研究者たちの意見を総合すると、90年代をピークにして業界全体の売上高も縮小しており、10年後には消滅する工芸品目も出てくるといわれている。本基金のテーマでもある「作家の育成」は、最終的な目標として重要である一方で、日本の工芸そのものの世界的な認知度向上も非常に重要だと思っている</div></div>			
		<div><div></div><div>今の現状に対しては、ファッション・デザイン・現代アート等の既存の大きな市場との接続によるマーケットをいかに形成するかや、アカデミックな領域としても見られている「工芸」の歴史性を訴え、重要かつ魅力的な芸術分野のひとつであると認識してもらう文脈形成が重要である</div></div>			
		<div><div></div><div>イギリス・フランス・イタリア・オーストラリア・アメリカなども工芸と現代アートの中間のような作品を制作しているが、我々が手探りでやっているのと同じように、同じような方向で作品制作をしている海外の人たちも、前例がないため割と手探り状態であると認識している。とりあえず継続的に動きながら広げていくことが肝要である</div></div>			
	●海外展開における課題	<div><div></div><div>日本の工芸は、伝統技術を継承しながら創意工夫し、クリエイティビティを持って発展させていると業界での評価は高い一方、従来積極的な海外展開（ルート開発）をして来ず、イメージ刷新も遅れている面もあり、「知っている人は知っている」という存在になっている</div></div>			

インタビュー対象	認定NPO法人 趣都金澤	分野	分野横断的新領域
プロジェクト名	『Kogei』アーティスト育成グローバル展開プロジェクト	区分	補助型

調査項目		回答内容
海外展開の考え方・業界動向	●海外展開に対する考え方	<div><p>海外に工芸は伝える方法には大きく2つある。一つは日本的な文化を前面に押し出して見せるやり方である。しかし、自分たちがやろうとしているのは、現代をどう捉え、どんな価値観を持っているのかを示しながら、同時代の人たちと課題を共有していくことである。その結果として、今までにないユニークな表現が生まれている。これにはジェンダーや環境などの社会的課題に、どう向き合っていくかということも含まれている。日本のアート業界には、こうした課題を言語化して共有する力がまだ十分とは言えない部分がある。自分たちは、課題を共有するという視点から新しい表現や発信のあり方を模索している</p></div> <div><p>我々にとっては見慣れた事柄であっても、海外の方々は全く異なる解釈や新鮮な視点によって評価や驚きを示されることがあるため、海外展開は自身の学びの機会にもなっている</p></div>
	●プロジェクトの内容・進捗	<div><p>本プロジェクトは、趣都金澤が従来から実施している「Go for KOGEI」のサテライト企画とも位置付けられるが、昨年度は Craft Trend Fair（ソウル）、Asia Now（パリ）と2つのアートフェアに出展した。新進的な芸術の文脈をつくっている海外の団体とネットワーキングするほか、会場にてVIP・批評家らと交流しながら、マーケット志向の場において価値形成と新規市場への展開を図った</p><p>2年目は、V&A博物館（ロンドン）でのシンポジウムの開催を通じ、アカデミックな文脈でも新たな言説の創出を試みた。3年目は、本プロジェクトのメインの取組となるが、ヴェネチア・ビエンナーレにて関連企画展を実施し、世界各国のアート関係者が集う場で7ヶ月間の展示を行う予定である</p></div>
活動実績・成果およびその影響	●育成に対する考え方	<div><p>新しい表現をして芸術的魅力はあれど、ターゲットとする市場が確定していない作家、十分に評価されていない作家を選出し、工芸とアートの間の業界におけるヒエラルキーを向上させてあげたいという思いを持ちながらプロジェクトの推進に取り組んでいる</p></div> <div><p>育成対象者に対しては、指導・アドバイスというよりも、「一緒に芸術における新たな文脈を作り出している」という感覚で取り組んでいる。作品の方向性やテーマ、キュレーションとしての説明など様々なコミュニケーションを随時取りながら制作をしている</p></div> <div><p>海外展開するにあたり「日本」を押し出しすぎると、異文化としてコミュニケーションが遮断され、アートの商流において孤立してしまう危険性があるという海外での活動に精通する指導者からのアドバイスは、とても大きな気づきとなっている</p></div>
	●プロジェクトにおける成果/今後見込まれる成果	<div><p>昨年Asia Nowに出展する過程で、価値観や方向性の共有・相互理解が生まれ、先方の担当者や代表とのネットワークも生まれたが、今年も出て欲しいという積極的な誘いを受け、やりとりが継続している。受けるかは別としても、ネットワーク形成とつながり続けることに大きな意義を感じた</p></div>



インタビュー対象	認定NPO法人 趣都金澤	分野	分野横断的新領域
プロジェクト名	『Kogei』アーティスト育成グローバル展開プロジェクト	区分	補助型

調査項目		回答内容	
活動実績・成果 およびその影響		<div>団体・施設</div> <div>指導者</div> <div>育成対象者</div>	
●プロジェクトにおける成果/今後見込まれる成果		<div>● V&A博物館でのシンポジウムでは、開催に先立ち、指導者の菊池氏・秋元氏および登壇者によるディスカッションが実施され、事前に多くの示唆を得ることができた。また、本シンポジウムを見た現地の研究者から展示の誘いをいただいたり、次の展開につながる機会にもなった</div> <div>● シンポジウムの合間に様々なアクションを得ることがあったが、やはり同じような悩みを抱えていることや、気持ちの部分で文化の異なる人たちと共感することができたという経験はすごく大きかったと感じている</div>	
今後の展望・本基金への示唆	●今後の展望について	<div>● 広報・プロモーションの文脈においては、V&A博物館のシンポジウムで訴求することができたアートメディア、批評家、キュレーター等に対し、現在準備中のヴェネチア・ビエンナーレでの展示に関する発信をしっかりと行うことで、ネットワーク強化やさらなる人的広がり構築につなげていきたいと考えている</div> <div>● 「誰を相手にしているのか」をうまくとらえることが一番のポイントになるだろうと思っている。美術界で影響力を持つ人たちのコミュニティそのものは実はそこまで大きくない。最終的にはマスに働きかけて人気が出るということではあるが、やはり一番初めに良いねと言ってくれる人たちや、影響力のある専門家たちにどのように届けていくのが一番難しいが今後の重要なポイントだ</div>	
	●本プロジェクトにおける広報・プロモーション課題や検討中の対応施策	<div>● 日本の団体で、ヴェネツィア・ビエンナーレにおいて日本館以外での展示を実施するのは十数年ぶりのことであるが、渡航費の問題などあり、メディアや雑誌に密着取材などしてもらうことは難しい状況にある。国内でも本プロジェクトについて伝えられるために、制作していくプロセスも記録に残す方法はないか模索している</div> <div>● 対面でのコミュニケーションを大事にして、着実にネットワークの拡充をしていくことが重要であると感じている</div>	
	●本基金の必要性に対する認識	<div>● 単年度の事業では、展示や広報活動が一過性のもとなる傾向があるが、三年間という期間を設けることで、単なる展示に留まらず、新たな文脈や価値観の創出が可能となっている。基金の特徴として、三年間という期間が設けられている点は非常に意義深く、特に有難いことであると考えている</div> <div>● 昨年のCraft Trend Fair（ソウル）、Asia Now（パリ）への出展や、長期の準備期間を要する先日のV&A博物館でのシンポジウムは、年度を跨って良い本基金による支援がないと実現できなかった。ヴェネツィア・ビエンナーレも会場視察等を含めると準備だけで複数年を要するため、同じく本基金がなければ到底実現できないことだったと思っている</div>	
	●これまでの活動を踏まえて、本基金に求める支援等	<div>● 複数年かつ本基金と同規模の支援があってようやくスタートラインに立てるという状況である。資金面・時間面で計画を立てられるということが大きなポイントであり、非常に感謝しているが、この2つのポイントがより強化されれば非常に助かる</div>	

3.クリエイター等育成支援事業詳細資料

- (1) 採択プロジェクトインタビュー個票
- (2) 採択プロジェクト概要

プロジェクト名

国際音楽祭での新作初演と新作オペラ『The Great Wave』の 国際共同制作を通じた若手育成

採択団体名

株式会社 KAJIMOTO



音楽

舞踊

演劇

伝統芸能
大衆芸能

補助型

舞台芸術

メディア
芸術

現代アート

分野横断

委託型

事業概要

音楽家の育成対象者を派遣しながら、日本国内での成果発表公演を実施する。また、新作オペラ作品の国際共同制作を通じ、若手音楽家（育成対象者）および制作スタッフの育成を行う。

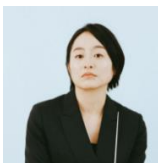
活動計画

～3年目

～5年目

- ・ルツェルン音楽祭への育成対象者の現地派遣
- ・新作オペラ『The Great Wave』の日本初演公演およびその他海外公演に向けた準備、制作活動
- ・スコットランドの著名な劇場での新作オペラ『The Great Wave』上演
- ・プロジェクト参加者の成果発表となる機会の創出

主な育成対象者



斎藤 友香理 | 指揮者

2015年ブザンソン国際指揮者コンクール・ファイナリスト。



石川 健人 | 指揮者・作曲家

ケルン音楽舞踊大学大学院在学中。第34回芥川也寸志サントリー作曲賞受賞。



久松 夕香 | 照明家

日本照明家協会奨励賞（2022）新人賞（2016）文化庁新進芸術家海外研修員（2021）。



中核的な指導者・アドバイザー

スチュワート・ストラットフォード | 指揮者

トリニティカレッジ、サンクトペテルブルグ国立音楽院にて指揮法を学んだあと、キャリアを積む。2015年よりスコティッシュ・オペラの音楽監督。



桑原 ゆう | 作曲家

東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程作曲専攻修了。第31回芥川也寸志サントリー作曲賞受賞。ルツェルン音楽祭から委嘱を受ける。



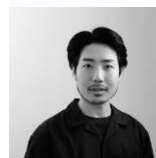
角田 恵子 | 舞台製作

ローズブルフォード演劇学校（イギリス）にて演劇および演出を学ぶ。その後もイギリスを中心にオペラおよび演劇作品も演出助手等として携わっている。



田中 弘基 | 作曲

シュトゥットガルト音楽演劇大学ツェルトエグザメン課程に在籍中。



杉山 賢 | 演劇（ダンス）

日本舞踊坂東流名取 坂東賢志朗。2019年よりSPAC静岡県舞台芸術センターに参加し研鑽を積む。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ プロジェクトに対する理解の醸成や、今後の活動に対する円滑な連携体制構築等を見据え関係者向けオリエンテーションを実施した
- ・ ルツルエン音楽祭、作曲アカデミーを見学、音楽関係者との打ち合わせを行い、プロジェクトの認知拡大を図った
- ・ スコットランドオペラプロダクションとの定期的なミーティングに若手スタッフの参加を促し、国際共同制作の知見やネットワーク構築の場を提供した

プロジェクト関係者の意識・
行動変容

- ・ 対面での会話を通して、育成対象者は新しいアイデアや視点・考え方を習得し、互いに好影響を与えた
- ・ 指導者も育成対象者と対面でコミュニケーションを取ることで、新たな着想を得て、多角的な思考を生み出すことができた

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- ・ 作曲家の石川健人氏が第34回芥川也寸志サントリー作曲賞を受賞した
- ・ 指導者や他の参加者との意見交換の機会を通じ、新たな視点を得るとともに、共感力や団結力も向上した
- ・ オペラの国際共同制作におけるプランニング段階から関わったことで、具体的な実務経験が蓄積された

事業概要

国内外を問わず最低年1本のプロダクションを設定する。育成対象の音楽家と世界的歌手との共演機会の創出、それに伴うワークショップの実施、指導者からの個人稽古等を行う。

活動計画

～3年目

～5年目

- 海外指導者より演出のワークショップ・新制作プロダクションでのオペラ上演や音楽の個人稽古等、演唱両面で指導を実施

育成対象者



彌六 | 演出家

米留学中より舞台スタッフとして従事し、帰国後は新国立劇場等で演出助手。



森川 太郎 | 演出家

ウィーン国立音楽大学で演出を学び、現在アン・デア・ウィーン劇場等で一流演出家の助手を務める。2025年ザルツブルク音楽祭にて演出。



七澤 結 | 声楽家 (ソプラノ)

パリ留学後、演出家からの抜擢等で国内でも多くのオペラに出演。リヨン国際室内楽コンクールで第3位、委嘱作品最優秀演奏賞を受賞。

中核的な指導者・アドバイザー



宮本 亜門 | 演出家

オペラ、ミュージカル、歌舞伎等ジャンルを問わず演出を手がける日本を代表するクリエイターのひとり。複数年にわたるプロジェクトで、この事業をバックアップする。



喜多村 貫 | 照明デザイナー

H4より東京バレエ団海外公演の照明チーフ、欧米歌劇場来日公演でも日本側照明チーフを多数務める。マラーホフやコンヴィチユニーら一流アーティストから指名を受け、欧州歌劇場でも照明デザインを担当。



宮下 嘉彦 | 声楽家 (バリトン)

二期会オペラ研修所修了直後に、東京二期会オペラ劇場『椿姫』ジェルモンのカヴァーに抜擢。来日した指揮者からも高い評価を受ける。2025年セビリア・マエストランサ劇場『ドン・ジョヴァンニ』出演予定。



河野 大樹 | 声楽家 (テノール)

宮本 亜門演出『午後の曳航』で二期会デビュー後、当事業による山形公演『コジ・ファン・トゥッテ』に出演の他、マスタークラスを受講。本年夏ペーザロでのロッシーニ・オペラ・フェスティバル『ランスへの旅』に出演。



川瀬 賢太郎 | 指揮者

名古屋フィルハーモニー交響楽団音楽監督、札幌交響楽団正指揮者。2025年『イオランタ/くるみ割り人形』にて指揮。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ 育成対象者を起用したうえで、世界的指揮者であるクレリア・カフィエーロ氏を招聘し、やまぎん県民ホールにてオペラ公演『コジ・ファン・トゥッテ』を実施した
- ・ 世界的演出家コンヴィチューニ氏、世界的演奏家ロラン・ナウリ氏によるマスタークラスを実施した

プロジェクト関係者の意識・
行動変容

- ・ 出演を通じ、役への理解と技術が向上した
- ・ マスタークラスで次のステップへの自覚が醸成された
- ・ 次のステップに移行しなければいけないという意識が強まり、積極的なコンクールやオーディションへの参加が見られた

令和6年度終了時点での
育成についての状況

<達成した点・成果が認められた点>

- ・ 育成対象者が世界的アーティストと共演し、多くの時間をともに過ごしたことで、コンディション作りや舞台人としての在り方、国際的感覚等を習得することができた
- ・ 特に育成対象者の宮下嘉彦は、本公演での演唱が次の大舞台出演（セビリアでの「ドン・ジョヴァンニ」公演）の決定打だった
- ・ 「音楽の友」誌でも「鮮やかな名舞台」という高い評価を得た

<改善すべき点>

- ・ 聴衆の前での経験が最も育成対象者の成長を促すが、本公演での集客には課題が残り、より良い育成環境の構築という点での広報機能強化が求められている

プロジェクト名

ニコニコ動画主催企画を介した若手クリエイター発掘および海外進出プロジェクト

採択団体名

株式会社 ドワンゴ



音楽

舞踊

演劇

伝統芸能
大衆芸能

補助型

舞台芸術

メディア
芸術

現代アート

分野横断

委託型

事業概要

若手クリエイター（育成対象者）を対象に、ボカロやポップカルチャーのプロデューサー陣と連携し、海外進出を支援。アニメコンベンション出演や音楽配信プラットフォームでのマーケティングを通じ、楽曲や映像作品とのタイアップを推進する。

活動計画

～3年目

～5年目

- PR計画を実行し、Anime Expo等でライブ出演を実現
- 他コンテンツホルダーとネットワーキングし、海外戦略を拡大
- メンバーによる海外ライブツアーを開催し、全世界でパフォーマンスを実施
- 『ボカコレ』や『ニコニコ超会議』でワークショップを実施

主な育成対象者



jon-YAKITORY | 作詞家・作曲家・実演家

2013年より活動するボカロP。2020年、Adoとの楽曲『シカバネーゼ』が話題となり、Spotify『バイラルトップ50』で1位を獲得。



picco | 作詞家・作曲家・実演家

東京拠点の音楽プロデューサー兼ボカロP。『Hyper Kawaii Music』をコンセプトに活動し、『Melty Magic』がYouTubeで400万再生突破。



月が綺麗じゃなかった。 | 作詞家・作曲家・実演家

ドワンゴと日本テレビが共同開発中の新ユニット。コンポーザー40mPは2010年メジャーデビューし、2013年には『みんなのうた』で合成音楽曲を初採用された。

中核的な指導者・アドバイザー



横澤 大輔 | プロデューサー

株式会社ドワンゴ取締役。ニコニコ動画の戦略や企画を担当し、『ニコニコ超会議』統括プロデューサーや『超歌舞伎』の総合プロデューサーとして活動。GACKTや小林幸子の楽曲プロデュースも手がける。

No
Image

田村 優 | クリエイター

株式会社インクストゥエンター代表取締役。初音ミクを用いた世界初のメジャーCDを手がけ、livetuneやsupercellを率いる。HoneyWorks原作のアニメ映画もプロデュース。

No
Image

谷 有人 | 株式会社ドワンゴ 社員

ボカロPをはじめとしたクリエイターとのコミュニケーションを担当。ラジオやメディアを活用したクリエイターのサポートを管掌。

No
Image

菊池 洸志 | 株式会社ドワンゴ 社員

VOCALOID楽曲投稿祭『ボカコレ』におけるレギュレーション策定や企画創出を担当。

No
Image

岩崎 凪 | 株式会社ドワンゴ 社員

ボカコレにおける外部企業との連携施策の渉外および生放送を担当。本プロジェクトでは全体の進行管理を担当する。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ 海外のイベント運営団体への出演交渉を実施。現在Anime Expoは2025年の出演機会を調整中、Anime NYCおよびAFAも現地協議を重ねた
- ・ クリエイター相互交流プログラム「Asia Creator Cross」の実施と併せてAFAを視察した
- ・ 音楽配信企業へのヒアリングを進め、最適な連携企業の選定準備に取り掛かった

プロジェクト関係者の意識・
行動変容

- ・ AFA視察を通じ、日本の音楽シーンやコンテンツの現地での広まり方に課題があることを痛感した
- ・ 上記を踏まえ、「一体となり事業を進められるか」という視点を最重要視しながら海外現地での連携先を選定することとした

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- <達成した点・成果が認められた点>
- ・ Anime ExpoやAFAで日本コンテンツの受容度を検証し、出演交渉を進展させたことで、対象クリエイターの育成環境整備を推進した
 - ・ 育成対象クリエイター「月が綺麗じゃなかった。」による楽曲リリースが行われた

事業概要

2024年秋に独英8都市で演奏会を開催する。当団の次世代の担い手である若手の楽員・職員が本場での演奏機会と聴衆、音楽文化に触れ、演奏活動に成果を反映させることで、事業継続に必要な力を醸成する。帰国後、演奏会も記録し、海外向けに発信する。

活動計画

～3年目

～5年目

- ・ツアー開催を通し、楽団の知名度向上を企図
- ・ツアー動画の発信実施
- ・アンサンブル公演に欧州ツアーを経験した若手が出演
- ・ステージ運営の改善に取り組み、アンサンブル演奏を通じ海外への発信活動
- ・客演陣のグレードアップ等当団のプレゼンスのさらなる向上

主な育成対象者



瀧村 依里 | 演奏家

東京藝術大学、ウィーン国立大学卒。2015年入団、第2ヴァイオリン首席奏者。



岸本 萌乃加 | 演奏家

東京藝術大学大学院修士課程修了。2021年入団、次席第1ヴァイオリン奏者。



對馬 哲男 | 演奏家

東京藝術大学大学院修士課程修了。2015年入団、次席第1ヴァイオリン奏者。



セバスティアン・ヴァイグレ | 指揮者

2019年から読響の第10代常任指揮者を務めるドイツの名匠。ベルリン国立歌劇場管の首席ホルン奏者から指揮者に転身。リセウ大劇場、フランクフルト歌劇場の音楽総監督等を務め、世界各地の有名オーケストラと共演を重ねている。



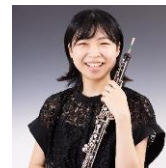
日下 紗矢子 | ヴァイオリニスト

読響特別客演コンサートマスター。2000年パガニーニ国際コンクール2位。世界での豊かな経験をもとに、若手楽員との共演で的確なアドバイスを行いながら演奏を率いる。



富岡 廉太郎 | 演奏家

バーゼル音楽院（スイス）修士課程修了。東京シティフィルを経て、2017年入団。首席チェロ奏者。



荒木 奏美 | 演奏家

東京藝術大学大学院修士課程修了。東京交響楽団を経て2023年入団。首席オーボエ奏者。



葛西 修平 | 演奏家

東京音楽大学卒。2017年入団、トロンボーン奏者。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ 常任指揮者セバスティアン・ヴァイグレの指揮のもと、10月にベルリン、ハンブルク、ロンドン等、独英8都市で公演ツアーを実施し、国内外の著名な楽曲を演奏した
- ・ 準備段階から制作及び舞台スタッフの若手を関与させ、海外経験のあるベテランが指導にあたった
- ・ 公演期間中は在外公館による日本文化発信にも協力し、ツアーの様子も映像・音声に記録を実施した

プロジェクト関係者の意識・
行動変容

- ・ 欧州で約2週間の行程を共にした楽員・職員間の絆が深まったとともに、国内でのアンサンブル公演で高い集中力を発揮した
- ・ 楽団の認知度不足や集客課題を認識し、ツアー後に制作した英語版動画を発信し、30万件超の視聴を達成した。成果を将来の活動に活かすという視点での問題意識を持つようになった

令和6年度終了時点での
育成についての状況

<達成した点・成果が認められた点>

- ・ 異なる音響環境での演奏を重ねたことで、楽員の順応力が高まり、演奏水準の向上につながった
- ・ 制作部門の育成対象者が海外現場業務を担い、経験値を積み、視野を広げた
- ・ 現地の大らかな鑑賞態度や熱烈的な歓声に触れたことで、海外展開への意欲を持つ楽員・職員が増えた

<改善すべき点>

- ・ 参加できなかった人へのツアー体験の共有が不十分である
- ・ 多くの参加者がツアーの意義を感じた一方、長期ツアーによる身体的な負担感について意見があり、将来の海外公演にあたっての検討課題となった

プロジェクト名 海外公演を通じた国際的なダンサー育成プロジェクト

採択団体名 公益財団法人 新国立劇場運営財団

事業概要

新国立劇場バレエダンサーを育成対象者とし、指導者陣による育成プログラムを実施する。バレエの殿堂であるロンドン ロイヤル・オペラ・ハウスでの公演および前後の国内公演を通して国際的競争力を持つダンサーを育成する。同時に、海外での広報活動や公演の記録映像を用いたプロモーションを展開する。

活動計画

～3年目

～5年目

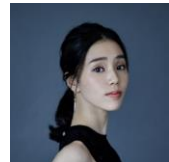
- ・バレエ『ジゼル』新国立劇場公演・ロンドン公演・国内凱旋公演を通して技術を精緻化
- ・海外公演の教訓を踏まえたトレーニング内容の再設計
- ・国際舞台での基盤を強化
- ・海外のバレエフェスティバルへの出演も含め更なる海外公演の実施を検討
- ・3年目までのトレーニングプログラムをブラッシュアップし、継続実施

主な育成対象者



井澤 駿 | バレエダンサー

新国立劇場バレエ団に2014年に入団し、2017年よりプリンシパル。



小野 絢子 | バレエダンサー

新国立劇場バレエ団に2007年に入団し、2011年よりプリンシパル。



米沢 唯 | バレエダンサー

新国立劇場バレエ団に2010年に入団し、2013年よりプリンシパル。



音楽

舞踊

演劇

伝統芸能
大衆芸能

補助型

舞台芸術

メディア
芸術

現代アート

分野横断

委託型

中核的な指導者・アドバイザー



© Tamaki Yoshida

吉田 都 | 新国立劇場舞踊芸術監督

1995年より2010年まで英国ロイヤルバレエにて最高位プリンシパルとして活躍。04年よりユネスコ平和芸術家、12年より国連UNHCR協会国連難民親善アーティスト。07年大英帝国勲章（OBE）受賞、17年文化功労者、24年日本芸術院会員。



湯川 麻美子 | バレエミストレス・リハーサルディレクター

1997年新国立劇場バレエ団にソリストとして入団、2011年プリンシパル昇格。2015年よりバレエ団教師、2020年より現職。『こうもり』『カルミナ・ブラーナ』『アラジン』等で主演を務め、ニムラ舞踊賞や芸術選奨文科大臣新人賞を受賞する等高く評価される。

No
Image

松下 友紀 | 制作

2019年入職、2022年より制作部在籍。

No
Image

清水 千奈美 | 広報

2015年入職、2018年より広報室在籍、2020年より制作部兼務。

No
Image

吉田 真悠 | 宣伝

2022年入職、2022年より営業部在籍。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ 令和7年度に予定している国内外公演に向けリハーサルや稽古を進行し、若手の成長を促進した
- ・ ロンドン公演準備で現地出演者手配や連携体制を整備しつつ、国内外での広報活動を強化した
- ・ ロンドン現地での技術打ち合わせや、国内事業者とのツアー商材企画等も実現した

プロジェクト関係者の意識・
行動変容

- ・ 団体として、ロイヤル・オペラ・ハウスとの協働や現地企業との連携を通じ、異文化理解や国際展開の重要性を認識した

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- ・ ダンサーは多様なリハーサルを通じ技術力を向上し、若手が「ジゼル」公演で主要役柄に登用される等成長を遂げた。海外公演への明確な目標設定がバレエ団全体のレベルアップに貢献した
- ・ 制作担当者はロイヤル・オペラ・ハウスとの協議を通じ契約やスケジュール策定を進行、異文化での実務遂行能力や国際的視野を拡大した
- ・ 広報担当者は現地会社との協働で広報展開を習得し、イベント企画やネットワーク構築を通じ実践的な知識を獲得した
- ・ 宣伝担当者は多様な広告手法を学びながら、海外観客向けプログラム作成を通じ国際的視点とコミュニケーション能力を向上した

事業概要

日本のダンスアーティストやクリエイターが国際的な舞台で活躍する機会拡大を目的に、創作環境の整備、海外ツアー実現のための基盤づくりを推進。海外の劇場や芸術祭とのネットワークを生かしたダンス・エージェント機能を担い、国内劇場での初演後、舞台芸術見本市での紹介や劇場、芸術祭とのマッチングを実施。日本の優れた作品やダンサーの国際的な認知向上と、文化芸術の活性化に貢献する。

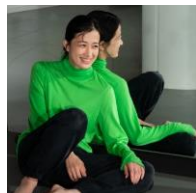
活動計画

～3年目

～5年目

- ・エディンバラ、韓国、カナダで公演を実施
- ・来場者情報やアンケートを収集し、現地メディアを招待
- ・近隣国プロデューサーの招聘
- ・再構成した作品で3公演のツアーを開催
- ・海外劇場や芸術祭のプロデューサーと協定締結
- ・著名な賞へのノミネートや受賞に向けたエージェント活動強化

主な育成対象者



柿崎 麻莉子
| 振付家

©Yurie Nagashima



阿目 虎南
| 振付家

©Mai Taniguchi



高橋 萌登
| 振付家



田中 希
| 制作・広報

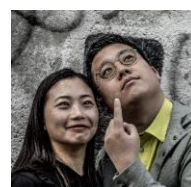


神村 結花
| 制作



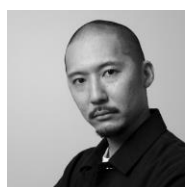
岩渕 貞太
| 振付家

©野村佐紀子



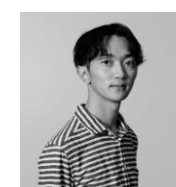
中澤 陽
小野 彩加
(スペースノット
ブランク)
| 振付家

©Dan Bellman



©Takayuki Abe

鈴木 竜
| 振付家



丹羽 青人
| ドラマトゥルク



植村 朔也
| 批評家

中核的な指導者・アドバイザー



©Takayuki Abe

唐津 絵理 | 芸術監督

2014年より愛知県芸術劇場のプロデューサーを経て4月より現職。2020年、DaBY設立を機に、ダンス、パフォーミングアーツ領域全体の活動環境の整備を行う。令和4年度(第73回)芸術選奨文部科学大臣賞(芸術振興部門)受賞。



塩谷 陽子 | プロデューサー



Tony Mills | プロデューサー

STEPHANE NOEL
| プロデューサー・
キュレーター©Takayuki Abe
東海 千尋 | 弁護士

盛 裕花 | インターナショナルコーディネーター

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ 振付家は来年の海外展開に向けてクリエイションを開始。オーディション、一般公開のワークショップ、ショーイングなどをそれぞれ実施した
- ・ 制作、広報のスタッフは各振付家の創作に立ち合い、上演に向けて関係先との連携を図った
- ・ 批評家はワークインプログレス1本について執筆し、指導者への添削を依頼した

プロジェクト関係者の意識・
行動変容

- ・ 愛知県芸術劇場との協働によるプロジェクトでは、一回限りの上演ではない、再演を目指した作品作りという意識をスタッフおよびアーティストと共有することができた

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- ・ 愛知県芸術劇場との協働によるプロジェクトでは、新作を制作し、国内公演まで実現した
- ・ YPAMでのショーケースや交流で海外関係者との繋がりを強化するとともに、海外ディレクターやフェスティバル担当者から関心を得る機会を創出した
- ・ 制作広報スタッフが公演準備を通じノウハウを蓄積した

事業概要

本事業において、国内外から招聘した指導者による指導・海外公演での実地研修を通じた育成対象者の育成、海外公演開催のノウハウの継承、海外におけるコネクション形成に取組み、東京バレエ団の『世界五大バレエ団』入りを目指す。

活動計画

～3年目

～5年目

- 『かぐや姫』の海外での全幕初演を成功させる体制を構築
- 批評家を派遣
- スタッフのノウハウ継承
- 欧州以外でのエリアでの海外公演を実施
- 育成対象者を中心とする公演を開催
- 新しいエリアでの公演制作、上演

主な育成対象者



柄本 弾 | バレエダンサー

2008年入団、2013年プリンシパル昇格。大役を担い振付指導も行い、2024年第36回服部智恵子賞、2025年芸術選奨文部科学大臣賞受賞。



沖 香菜子 | バレエダンサー

2010年入団、2018年プリンシパル昇格。ポリショイ学校留学経験をもち、2020年横浜文化・芸術奨励賞受賞。



秋山 瑛 | バレエダンサー

2015年入団、2022年プリンシパル昇格。海外留学経験をもち、タソオリンピック銅賞や2024年に芸術選奨新人賞受賞。



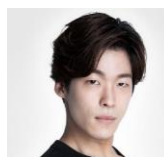
斎藤 友佳理 | 団長

1987年東京バレエ団入団、2014年芸術監督就任、2024年団長就任。ロシア舞踊学校を首席卒業し『日本のタリオーニ』と称賛。紫綬褒章受章等国内外で高い評価を得る。



高橋 典夫 | 専務理事

1977年より日本舞台芸術振興会で活動し、2016年専務理事就任。世界の著名バレエ団やオペラ、オーケストラの招聘公演に携わり、総合舞台芸術のトップとして国際的な信頼を得る。



池本 祥真 | バレエダンサー

2018年入団、2024年プリンシパル昇格。ポリショイ学校卒業、2010年ペルミ国際バレエコンクール金賞受賞。



伝田 陽美 | バレエダンサー

2008年入団、2018年ファーストソリスト昇格。国内コンクールで準優勝や5位受賞の実績を持つ。



金子 仁美 | バレエダンサー

2011年入団、2024年ファーストソリスト昇格。横浜バレエコンペ4位、エデュケーショナルバレエ5位受賞。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ 海外公演の実施に向け、海外劇場・海外カンパニー・エージェント等との現地協議を実施した
- ・ 上演作品ごとに経験値豊富な国内外指導者による招聘を行い、若手抜擢による公演を通じた育成を行った

プロジェクト関係者の意識・
行動変容

- ・ 初年度はプロジェクトの一環としての公演はなかったため、育成対象者が一致団結して意識をもって取り組むまでには至らなかった
- ・ 上演作品ごとに経験値な国内外の指導者を招聘することにより、育成対象ダンサーの作品理解が深まった

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- ・ 2024年9月に東京バレエ団の芸術スタッフを充実させ、アーティスティック・アソシエイツを選任した。
- ・ 東京バレエ団60周年を記念した多様な作品の上演により、育成対象者である柄本弾が令和6年度（第75回）芸術選奨文部科学大臣賞を受賞した

事業概要

日本の舞台芸術で不足する国際発信力を持つキュレーターを育成するため、KYOTO EXPERIMENTを育成の場として、①ショーケース企画を通じた育成、②海外キュレーター招聘による国際ネットワーク構築、③プロデュース作品の海外上演、④プロデューサー、テクニカルディレクター、評論家育成施策を通じ世界的に活躍する人材を育成する。

活動計画

～3年目

～5年目

- 共同制作や巡演を視野にショーケース公演のキュレーションを実施
- プロデュース作品を海外で1-2か所上演
- 国内外での批評プロジェクトも引き続き実施
- 新ディレクターのもとKYOTO EXPERIMENTを開催
- 海外共同製作を2-3作品、5-6カ所からの招聘
- 国際シンポジウムを開催し、日英記録をウェブで公開

主な育成対象者



和田 ながら | キュレーター

2018年こまばアゴラ演出家コンクール観客賞受賞。セゾン・フェローや京都舞台芸術協会理事長として活躍。2025年よりKYOTO EXPERIMENTアシスタント・ディレクター。



川口 万喜 | キュレーター

2013-2022年『アートエリアB1』理事兼事務局長、2023年『METAMETA“アルター”市場 vol.04』ディレクター。



荒木 優光 | 演出家

2021年クンステン・フェスティバル・デザールで公演。2023年度セゾン文化財団セゾン・フェローとして活動。

中核的な指導者・アドバイザー



川崎 陽子 | キュレーター・プロデューサー

チューリヒ・シアター・スペクタクル2022ゲスト審査員や2023年SAAL Biennaal（エストニア）・ISPAEシンポジウム（インドネシア）登壇等海外で活躍。令和5年度芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。



塚原 悠也 | キュレーター・演出家

第27回読売演劇大賞優秀スタッフ賞、京都市芸術新人賞を受賞。ドイツの『Forecast』メンターやアーツカウンシル東京『未来の踊りのためのプログラム』講師を務める等、多方面で活躍。



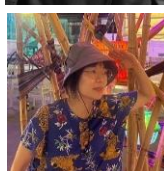
中間 アヤカ | 演出家

令和4年度神戸長田文化奨励賞受賞。クンステン・フェスティバル・デザールやポンピドゥー・センターで公演。



村川 拓也 | 演出家

Theaterformen（ドイツ）で公演。2016年文化庁東アジア文化交流使として中国・上海／北京に滞在。



豊山 佳美 | プロデューサー

akakilike、村川拓也等の制作として、海外公演時はツアーマネジャーを務める。KYOTO EXPERIMENT広報としても活動。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ 次代のプログラムディレクター候補であるキュレーターが、ショーケース公演を企画し国際ネットワークを拡充した。また海外キュレーターを招聘し、関係構築と作品の海外展開のきっかけを創出した
- ・ 国際的な批評の知見をもつメンターによる批評プログラムの実施を通じて評論家育成を行い、来日したEU拠点および台湾拠点の批評家との交流も実施した
- ・ KYOTO EXPERIMENTプロデュース作品の海外公演に向けた交渉を進め、2年目での公演が複数決定した
- ・ 上記の国際ネットワーク構築や企画立案、海外公演に向けての交渉・調整それぞれのシーンにおいてスタッフ育成を実施した

令和6年度終了時点での
育成についての状況

< 達成した点・成果が認められた点 >

- ・ キュレーターの育成に関しては、対象キュレーターがショーケース公演のプログラミングを担当し、一から企画を作ったことで、実践的に学ぶことができた
- ・ 海外キュレーターを招聘して公演実施したことで、海外の有力舞台芸術関係者とのネットワーク構築に繋がった
- ・ プロデューサー、舞台スタッフ育成に関しても、ショーケース公演の担当の他、育成対象演出家の海外公演準備等も行い、実践を通して確実に知見を広げた

< 改善すべき点 >

- ・ 多様性を重視して選出した育成対象者間の経験値の違いについて考慮できていなかった
- ・ 丁寧な指導の結果批評文の発信が遅れてしまった

事業概要

国際的な創作環境を整え、次世代プロデューサーを育成。①国際的な学びを提供するプログラム、②エディンバラフェス等海外展開を目指す派遣、③国内で成果発表と作品流通を促すピッチイベントを実施する。

活動計画

～3年目

～5年目

- 協力団体との関係を構築
- 国際的な連携の強化および、より効果的な育成プログラムの確立
- 海外派遣を中心とした業界交流、人材育成、機会創出のプログラム
- 国内で国際交流イベントを開催実施

主な育成対象者

野村 善文 | プロデューサー

舞台美術家としての活動を続ける傍ら通訳・翻訳の活動等も幅広く行い、現在は公益財団法人クマ財団の事務局長を務める。

ウォーリー 木下 | 演出家・劇作家

sunday代表。ストレートプレイ・ミュージカル・コンサート・2.5次元演劇の演出やフェスティバルディレクターなど幅広く手がける。東京2020パラリンピック開会式の演出を担当。

坂本 もも | プロデューサー・制作

合同会社範宙遊泳代表・プロデューサー／制作。創造環境整備や育児と演劇の両立に関心を持ち創作に参加している。舞台芸術制作者オープンネットワーク（ON-PAM）・緊急事態舞台芸術ネットワーク（JPASN）理事。

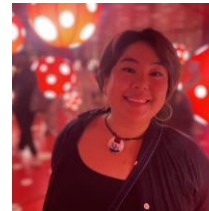
篠崎 勇己 | プロデューサー

TBSテレビステージ事業部プロデューサー。小劇場での脚本、演出で評価を受けた後、プロデューサーに転身。近年の主な作品：「9 to 5」（明日海りお主演）「ヴェニスの商人」（草薙剛主演）など。

高橋 戦車 | 制作

劇団鹿殺しの公演制作をはじめ、ゆうめい、悪童会議など様々なカンパニーや作品の制作を担当。2020年本多劇場グループpresents「DISTANCE」には企画から参加。

中核的な指導者・アドバイザー



Michelle Rocha | プロデューサー

“Factory International”ツアーリング部門責任者。パフォーミングアーツカンパニー『Quarantine』の理事会副議長。前職として、香港の西九文化区管理局でパフォーミングアーツ（音楽およびアウトドア部門）のプロデューサーを務めた。

高本 彩恵 | プロデューサー

劇団あはひ制作。企画立案からマネジメントまで横断的に担当。早稲田大学大学院文学研究科演劇映像学コース修了。2023年度アーツカウンシル東京「アートマネジメント人材等海外派遣プログラム」参加。

田中 えみり | プロデューサー

フリーの制作として様々な現場にて制作業務を経験したのち、株式会社ホリプロに入社。近年関わった主な作品に『スクルージ〜クリスマス・キャロル〜』『ねじまき鳥クロニクル』『ピーター・パン』『マクベス』など。

風呂 奈津美 | プロデューサー

慶應義塾大学経済学部卒。在学中にカーネギー・メロン大学演劇学部へ留学。2022年東宝株式会社入社。帝国劇場営業係、事業統括部を経て、現在は演劇部国際室にて海外作品及び輸出公演に携わる。

坂田 厚子 | 制作

合同会社 1 0 月 1 7 日代表。FUKAIPRODUCE羽衣の座付制作（2008年～2023年）、及びquinadaに所属、様々な公演の制作業務を請け負う。2017年よりイキウメの制作部に参加。

松井 真人 | 俳優・プロデューサー

主演作品にて名古屋市民芸術祭、愛知県芸術劇場演劇フェスティバル優勝など。令和2年度愛知県文化選奨「文化新人賞」受賞。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ 海外展開に向けた基盤整備として、エディンバラ・フェスティバル・フリンジやCINARS（カナダ）を視察した
- ・ 1期目の育成対象者選定のため、募集要項を策定・公開し、9件の採択を確定した
- ・ マンチェスター・インターナショナル・フェスティバル(MIF)から有識者を招聘し、集中講義を実施した

プロジェクト関係者の意識・
行動変容

- ・ エディンバラとCINARS視察を通じ、マーケットイベント参画がプレゼンス向上に有効であるという手ごたえを得た
- ・ MIFによる集中講義で海外知見を習得するとともに、各団体のノウハウの厚みを再認識した
- ・ 欧米圏展開のコスト課題を踏まえ、アジア圏での支援ニーズが具体的に顕在化した

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- ＜達成した点・成果が認められた点＞
- ・ 海外の国際的なプログラムを運営するチームからの講義を通じ、業界内で知見や経験を積極的に共有する機会を創出。初日には英語で自己紹介がやっとだった参加者が、最終日には自身や団体の活動を英語でプレゼンテーションピッチできるまで成長した
- ＜改善すべき点＞
- ・ 参加者の所属や規模が多様であったため、国際展開におけるニーズが異なり、一部の参加者には講義内容が平易に感じられたり、講義内容が多岐に渡ったことで、特定のトピックの掘り下げが十分ではないという印象を与えた可能性がある

プロジェクト名 世界を現場にする次代クリエイターの育成プロジェクト

採択団体名 株式会社 サイ

Japan
Creator
Support
Fund
FOR CREATORS

音楽

舞踊

演劇

伝統芸能
大衆芸能

補助型

舞台芸術

メディア
芸術

現代アート

分野横断

委託型

事業概要

若手クリエイターを対象に、日本と海外の文化芸術団体が主宰する公演や展示事業に起用し、世界基準で時代と社会を認識する視点と力を養うことで、国際社会で活躍できる人材の育成を目指す。

活動計画

～3年目

～5年目

- 育成対象者による創作、公演、展示を実施
- インドでの滞在制作と国際イベント参加
- 制作者・マネージャーをアメリカ・メキシコ・フランスに派遣
- 若手クリエイターを中心とした創作・公演
- 実施体制の具体化・海外調査の結果を基にした企画制作を実施

主な育成対象者



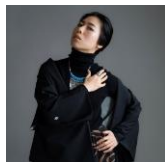
山上 渡 | 作家（美術）

2009年第12回岡本太郎現代芸術賞特別賞、2013年東京ミッドタウンアワード準グランプリ、オーディエンス賞受賞。2019年文化庁新進芸術家海外研修員に選任。



今井 尋也 | 実演家（能役者、小鼓演奏家）

国立能楽堂研修所・東京藝術大学を卒業後、渡仏。帰国後、シルクロード能楽会を立ち上げ全ての作品の作・演出を行う。



西川 壱弥 | 実演家（日本舞踊家）

2000年に宗家西川流の名取免許を取得し、当時最年少で西川壱弥を許名。2020年には宗家西川流の師範免許を取得し、門真国際映画祭で最優秀賞受賞。

中核的な指導者・アドバイザー



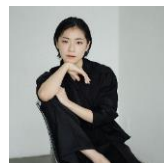
小池 博史 | 演出家・作家・振付家・映画監督

世界18カ国で創作、42カ国で公演、計100作品を制作。主要劇場やフェスでの上演多数。1990年代は欧州、2000年代は北米、2010年代はアジアで活動を拡大。現在は芸術を通じた世界融和を目指す。



松島 誠 | パフォーマー・演出家・舞台美術家

世界中から招待を受け作品を制作、発表している。特に香港のダンス・演劇シーンでは最も知られた日本人パフォーマー。



津山 舞花 | 実演家（舞踊家、俳優）

2011年の国民文化祭・京都2011に出演し、同年にはAIS BALLET JAPANのドイツ公演に出演。2012年にはYAGPニューヨークシティファイナルのアンサンブル部門で世界大会、第二位を獲得。



池野 拓哉 | 実演家（舞踊家、俳優）

2002年からパパ・タラマラに出演し、2012年の解散まで参加。2013年には映画『恋人たち』に出演し、2014年からパフォーマンスグループ『世界装置』に在籍。



黒田麻理恵 | 制作者、マネージャー（プロジェクトマネジメント）

海外の文化団体との対応から契約交渉を行い、国際交流事業の立ち上げや共同制作事業にも関与。2019年からは主に（株）サイノ小池博史ブリッジプロジェクトの事業担当を務める。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ 基盤構築を目的に、海外連携体制の整備や海外向け広報・営業を推進した
- ・ 育成対象者は、「BREATH TRIPLE」、「Soul of ODYSSEY」の制作・海外公演を実施した
- ・ 指導者は公演や事業への助言を行い、2年目に向けた課題や目標を共有した

プロジェクト関係者の意識・
行動変容

- ・ 舞台上での表現に加えて、自らの活動や考えを言語化し、外部に発信する力には依然として課題がある
- ・ 報告会やレポート提出を通じて意識の共有や活動の記録・可視化は進んでいる

令和6年度終了時点での
育成についての状況

< 達成した点・成果が認められた点 >

- ・ 「Soul of ODYSSEY」を東京で上演し、外国人出演者・スタッフとの国際共同制作オペレーションを実践した
- ・ 制作者がCINARS（カナダ）やAPAP（アメリカ）に参加し、「BREATH TRIPLE」等の営業活動を開始した
- ・ ブラジルやマレーシアとの連携を通じ、現地の芸術団体やプロデューサーらとのネットワークを形成した

< 改善すべき点 >

- ・ 事業の発展性や資金調達を見据えた「プロデューサー視点」で活動することが求められている
- ・ 英語資料の整備やプレゼン内容の質向上、事業費や予算に関する知識強化、交渉力向上が課題である
- ・ 現地での調査活動の成果を具体的に整理し、公表可能な形で発信するための体制構築が必要である

事業概要

これまでの国際交流実績を活かし、アーティスト、批評家、制作者、技術スタッフを対象に研修やネットワーキングを実施し、自律的な海外活動を目指す。また同時代の国際展開のあり方について各クリエイターが学び向き合い、そのプロセスと成果を公開することで、将来にわたる日本の舞台芸術の国際的な基盤強化を目指す。

活動計画

～3年目

～5年目

- 海外公演に必要な字幕制作や企画書、予算作成等の実務指導
- 新たなツアー先獲得や交流・議論を深めるためのネットワーク開拓
- 成果発表やレポートを通じ、舞台芸術業界への知見共有
- 各クリエイターの国際基盤構築
- 新時代の動向やニーズに応じた育成プログラムの強化
- 新規開拓地域との交流、ネットワーク強化

主な育成対象者

上田 久美子 | 劇作家・演出家
projectumi主宰

藤田 貴大 | 演劇作家
マームとジブシー主宰

筒井 潤 | 劇作家・演出家
dracomリーダー

萩原 雄太 | 劇作家・演出家
かもめマシーン主宰

山本 卓卓 | 劇作家・演出家
範宙遊泳代表

Jang-Chi | 演出家
オル太代表

メグ忍者 | 劇作家
オル太メンバー

牧原 依里 | 映像作家・演出家
聲の鳥プロダクション代表

林 香菜 | プロデューサー
マームとジブシー代表

坂本 もも | プロデューサー
範宙遊泳プロデューサー

加藤 奈紬 | プロデューサー

守山 真利恵 | 技術監督

山崎 健太 | 批評家・ドラマツルク

高嶋 慈 | 美術・舞台芸術批評

関根 遼 | 批評家

中核的な指導者・アドバイザー



中村 茜 | プロデューサー

国内外90都市で劇団やダンスカンパニーの海外進出を支援。文化庁芸術選奨新人賞受賞。国東半島芸術祭やあいちトリエンナーレ等でキュレーションを手がけ、国際交流に尽力。



橋本裕介 | キュレーター・ドラマツルク

KYOTO EXPERIMENTを企画。その後、ロームシアター京都勤務、ニューヨーク滞在を経て、現在ベルリン芸術祭「舞台芸術シーズン」芸術監督を務める。編著に「芸術を誰が支えるのか アメリカ文化政策の生態系」。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- 国際展開に必要な知見、ネットワーク、活動資料・広報体制等の基盤構築に向け、育成対象者間の定期的な交流や報告会を設定し、以下の活動を展開した
 - 各育成対象者の目標設定
 - 国際水準を目指した営業資料作成
 - 資金調達や字幕制作等の研修受講
 - 国内外の他団体と連携した視察・交流
 - 国際広報リサーチ・特設サイト立ち上げ
- 牧原依里の作品が韓国にて上演、筒井潤のドイツとの国際共同制作がFFTデュッセルドルフにて上演した

プロジェクト関係者の意識・
行動変容

- 育成対象者は海外展開のための資料作成や関係構築を進め、ノウハウ獲得や意識の変容につながった。批評家や舞台監督も新たに国際的視野を広げつつある

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- <達成した点・成果が認められた点>
- 育成対象者が国際展開に向けて自身の活動に向き合い目標を言語化し、国内外のプラットフォームにてプレゼンやネットワーキングを実施した
 - 現代舞台芸術の国際シーンの動向について学んだ
 - 海外公演の可能性が具体化し、牧原依里・オル太の作品が複数の国際芸術祭から招聘の可能性を得た
 - 特設Webサイトを開設し、育成対象者の活動や事業の知見を広く共有する場を整備した
- <改善すべき点>
- 育成対象者ごとのニーズに応じた具体的な育成計画（地域やスキル別の学習機会）が必要である
 - 海外広報発信が不足しており、媒体やジャーナリストのリストアップ、媒体件数目標の設定が課題である
 - 批評家や舞台監督の横のつながりや海外活動を通じた育成計画のさらなる具体化が求められる

事業概要

若手クリエイター9名（演出家、作曲家、振付家、振付家兼俳優、美術家、プロデューサー）を起用し、海外展開を見据えた公演の企画・制作の場と海外での上演機会を提供する。さらに活動を通して、海外演劇団体との連携を強化し、ネットワーク形成を促進する。加えて、全期間を通じて国内外で活躍するクリエイターが指導者となり、世界トップレベルの公演の企画・制作を支援する。

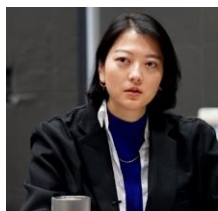
活動計画

～3年目

～5年目

- オリジナル新作舞台海外上演
- 若手俳優育成プログラムを実施
- 海外専門家招聘と認知拡大
- 現地キャストとの海外公演の実施
- 国際批評家の招聘
- 新企画の立ち上げを実施

主な育成対象者



井川 かおる | プロデューサー

2008年ホリプロ入社。同年4月～2014年6月俳優のマネージメント業を経て、2014年7月～現在の部署に異動し、海外作品の日本版の公演や、招聘作品、日本発オリジナル作品など舞台制作に携わる。また、『デスノートTHE MUSICAL』においては立ち上げから携わり、海外プロダクションによる公演において海外との窓口として交渉等を担当する。



柳本 美世 | プロデューサー

大日本印刷を経て、2008年8月、株式会社銀河劇場入社。営業、広報担当。2011年ごろから制作と営業を兼務。制作として演劇、プロデューサーとして招聘公演やコンサートなどを担当した。2016年4月ホリプロに移籍し、制作部門で制作、プロデューサーとして多数作品に参加。

中核的な指導者・アドバイザー



Jason Howland | 作曲家、脚本家

作曲家（トニー賞ノミネート）であり、プロデューサー（グラミー賞受賞、トニー賞ノミネート）、編曲家（エミー賞受賞、トニー賞ノミネート）およびオーケストレーター。今シーズン話題のブロードウェイミュージカル『ザ・グレート・ギャツビー』では作曲およびオーケストレーター/編曲など世界的に活躍している。



Philippe Decouflé | 演出家、振付家、作曲家

映像、オペラ、サーカス、キャバレー、現代美術など様々なジャンルを取り入れ、伝統的なダンスの世界に革新をもたらした先鋭的なアーティスト。アルベルビル冬季オリンピックの開閉会式（1992）の演出によって国際的な注目を浴び、現在では世界的に知られるアーティストとなる。



飛田 弥咲 | プロデューサー

京都大学大学院医学研究科卒業後、株式会社三菱総合研究所にて、官公庁の調査やコンサルに携わったのち、2020年に株式会社ホリプロ入社。公演事業本部にて、制作・プロデューサーとして多数の舞台作品に参加。舞台『ハリー・ポッターと呪いの子』では、立ち上げ時にマーケティングディレクターを務め、マーケティング・広告宣伝の実績も有する。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ 海外クリエイターから舞台制作の進行方法や交渉術等を学ぶとともに、英国演出家による育成プログラムの実施準備を進めた
- ・ 日本で上演歴がある作品の現地プロモーターとの打ち合わせや契約締結等、3年目以降の海外公演を見据えた新作舞台の企画・準備を進めた
- ・ 7回の海外視察でニーズや流行を調査し、世界トップレベルの現場を見学した

プロジェクト関係者の意識・
行動変容

- ・ 育成対象者は海外クリエイターとの交流を通じて、異文化環境での創作手法やコミュニケーション手法を学んだ
- ・ 団体は中長期的な成長戦略を基盤に、組織内に国際プロジェクト推進体制を整備した

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- <達成した点・成果が認められた点>
- ・ 韓国での拠点形成に注力し、多くのクリエイターや現地プロデューサーと関係を構築。『ミセン』の韓国公演が第2期中に実現見込みとなり、『デスノート』のライセンス公演再演も決定したことで、育成対象者の成長・実績作りの機会を創出した
 - ・ 渡航先や活動範囲を拡大し、想定以上の都市での公演やさらなる公演地増大を視野に入れることができた
- <改善すべき点>
- ・ 初年度はプロデューサーの育成に偏り、クリエイター陣の成長機会の創出が課題。25年度以降は稼働を増やし、本人との打ち合わせやヒアリングを強化する必要がある

プロジェクト名 歌舞伎の海外展開を目指したクリエイター育成

採択団体名 松竹 株式会社



音楽

舞踊

演劇

伝統芸能
大衆芸能

補助型

舞台芸術

メディア
芸術

現代アート

分野横断

委託型

事業概要

坂東玉三郎監修のワークショップや鑑賞教室を実施し、若手俳優やスタッフを育成。海外で歌舞伎ショーケースを開催し、英語字幕付き配信や外国人向け公演を制作する等、歌舞伎の認知向上と海外展開を推進する。

活動計画

～3年目

～5年目

- ・舞踊や解説等のショーケースを実施
- ・京都南座の「歌舞伎鑑賞教室」の実施
- ・英語字幕付きの特集海外配信の実施
- ・南座の「歌舞伎鑑賞教室」の継続
- ・国外での歌舞伎ショーケースの拡大
- ・海外配信作品を通じた歌舞伎のプロモーションの継続

主な育成対象者

No image

藤巻 詩織 | プロデューサー・事務局

シネマ歌舞伎、配信事業等歌舞伎の映像コンテンツに関わる事業に従事。2024年より海外配信の宣伝をきっかけに、歌舞伎の海外展開に携わる。

No image

渡邊 絢子 | プロデューサー・事務局

以前は、外務省にて広報文化事業に従事。入社後はシネマ歌舞伎の宣伝業務や海外上映に携わり、2024年より歌舞伎の海外展開に携わる。

No image

志村 沙紀 | プロデューサー・事務局

広告業務に従事。現在はライツビジネスの立場から様々なワークショップや監修を担当。国内で歌舞伎を活用したイベントも多数手がけており、それらの海外展開に携わる。

中核的な指導者・アドバイザー



坂東 玉三郎 | 歌舞伎俳優

歌舞伎座『心中刃は氷の朔日』のおたまほかで五代目坂東玉三郎を襲名。2012年重要無形文化財保持者（人間国宝）。13年フランス芸術文化勲章コマンドゥール章。14年紫綬褒章。15年度日本芸術院賞・恩賜賞受賞。

No image

阿部 尚子 | プロデューサー・事務局

語学留学の経験もあり、松竹新喜劇等の演劇公演から南座「歌舞伎鑑賞教室」の歌舞伎公演まで幅広く制作業務に従事。

No image

織田 成一郎 | プロデューサー・事務局

「歌舞伎鑑賞教室」ではインバウンドのお客様でも楽しめるよう英語音声ガイドの導入に奔走し、同時解説のアナウンス原稿も手掛ける。

No image

山村 侑子 | プロデューサー・事務局

南座で監事室リーダーとして、「歌舞伎鑑賞教室」の『歌舞伎のお囃』の解説部分の脚本執筆を手掛ける。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ 玉三郎監修のワークショップについて、各国の公的機関、文化関連団体等にヒアリングを行い、劇場のリサーチ、公演形態、公演内容等の情報収集に努め、開催準備を進めた
- ・ 南座「歌舞伎鑑賞教室」のインバウンド集客向上のため、ポスターやチラシのデザイン・解説内容を再検討した
- ・ 海外ショーケース実現に向け、韓国、マルタ、サウジアラビアの在外大使館や民間団体への提案活動を実施した

プロジェクト関係者の意識・
行動変容

- ・ 国内のインバウンド需要の拡大で、集客も右肩上がりに推移しており、歌舞伎の魅力と認知度をさらに高めるため、情報発信を含めた海外展開の拡充とそのための人材育成の取組が必要だと認識した

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- ・ 活動準備として海外展開の推進について指導者から過去の実績等のヒアリングを実施し、取引関係各所への情報収集をフォローする等、育成体制の基盤作りを推進した

事業概要

日本音楽の魅力を国内外に発信。若手に国際的な活動機会を提供し、伝統的な日本音楽の演奏技術の継承と発展を図る。また、さまざまな日本音楽に係る事業の実施により、業界全体の活性化を図る。

活動計画

～3年目

～5年目

- ・ 箏・三味線・尺八等のパリ公演等の実施
- ・ 雅楽の演奏家を東南アジアへ派遣しホーチミン公演等実施
- ・ 創作邦楽の演奏家を北米に派遣しNY公演等実施
- ・ オセアニア地域や中東アジア等も視野に入れた公演を実施
- ・ 日本の伝統音楽の様々な魅力を紹介できるよう事前広報と成果報告を実施

主な育成対象者（五十音順）



黒田 鈴尊 | 演奏家（琴古流尺八）

文化庁文化交流使。国際尺八コンクール2018 in ロンドン優勝、利根英法記念あいおい全国邦楽コンクール1位、くまもと全国邦楽コンクール優秀賞等の受賞歴。



桑原 ゆう | 作曲家・プロデューサー

国立劇場、神奈川県立音楽堂、横浜みなとみらいホールをはじめ、ルツェルン音楽祭等国内外で多くの委嘱を受ける。第31回芥川也寸志サントリー作曲賞受賞。



野 護元 | 演奏家（龍笛ほか）

東京藝術大学卒業。NHK『ニッポンの芸能』、東儀秀樹コンサート他、国内外で公演。安宅賞、アカンサス音楽賞、同声会新人賞の各賞を受賞。

中核的な指導者・アドバイザー



徳丸 吉彦 | 音楽学者

音楽記号学、民族音楽学研究。瑞宝中綬章受章。ベトナム政府より文化戦士賞、国際音楽学会よりG.アードラー賞他受賞多数。



米川 敏子 | 演奏家（生田流箏曲）

人間国宝の初代米川敏子に師事し、地歌・箏曲の演奏家として国内外で活躍。研箏会五代家元、くらしき作陽大学特任教授。文化庁芸術選奨文部科学大臣賞、文化庁芸術祭優秀賞、紫綬褒章、日本芸術院賞等受賞。



平田 紀子 | 演奏家（生田流箏曲）

宮城道雄記念コンクール、賢順記念全国箏曲コンクール賢順賞1位、利根英法記念あいおい全国邦楽コンクール最優秀賞等の受賞歴。東京藝術大学非常勤講師。



本條 秀慈郎 | 三味線演奏家

本條秀太郎に師事。芸術選奨新人賞。文化庁芸術祭新人賞。くまもと全国邦楽コンクール最優秀賞。文化庁文化交流使。J-TRAD Ensemble MAHOROBAメンバー。



宮森 庸輔 | プロデューサー・映像作家

写真家、映像、録音編集者として幅広く活躍する。写真と音楽の公演プロデュースや現代音楽と映像を独自の視点で表現しアーティストからの信頼も厚い。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ 国内外の関係者とのネットワークを構築し、国内公演・海外公演の計画を立案した
- ・ 三曲、雅楽、邦楽アンサンブルに適した内容の講習会を実施し、茨城大学では外国人留学生向け雅楽ワークショップを開催した
- ・ 講習会やワークショップは写真映像で記録し、ウェブ発信を行い、演奏会場付近での広報活動を強化した
- ・ 関係者へのキックオフ・ミーティングを開催し、指導者への依頼内容を明確化して理解を得た

プロジェクト関係者の意識・
行動変容

- ・ 育成対象者は講習会を通じてプロジェクトの意義・海外活動のノウハウを学び、チームの一体感を育んだ

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- <達成した点・成果が認められた点>
- ・ 2024年10月から計6回の講習会を実施し、国内外の実演家やプロデューサーによる講義がネットワーク形成と今後の海外公演の計画・実施に寄与した
 - ・ 茨城大学での雅楽のワークショップでは、留学生を対象に英語での解説・演奏を実施したことから、出演者にとって貴重な海外体験のシミュレーションとなった
- <改善すべき点>
- ・ 制作やマネジメントに携わる若手育成対象者の成長機会創出が十分にできず、段階的に若手に事業運営を任せられる体制を構築する必要性を再認識した

事業概要

人形浄瑠璃文楽は伝統継承を図る一方で、固定的なファン層以外への広がりや課題があり、観客減少等が懸念される。本プロジェクトでは他ジャンルとのコラボや海外公演を通じ、新たなファン層開拓と担い手の世界的評価向上を目指す。

活動計画

～3年目

～5年目

- 『街の灯』を大阪で初演
- 海外ミニ公演を実施し、文楽を普及するとともに翌年の海外公演をPRする
- マンガ作品を題材とした文楽新作に向けて脚本家と技芸員が推敲
- 『街の灯』の海外公演の実施

主な育成対象者



豊竹 希太夫 | 人形浄瑠璃文楽座太夫

平成16年初舞台。平成31年文楽協会賞、令和3年国立劇場文楽賞文楽奨励賞受賞、同年大阪文化祭奨励賞。



鶴澤 清志郎 | 人形浄瑠璃文楽座三味線弾き

平成6年初舞台。平成16年、17年国立劇場文楽賞奨励賞、平成25年大阪文化祭賞グランプリ、平成28年咲くやこの花賞受賞。



豊竹 若太夫 | 人形浄瑠璃文楽座太夫

昭和43年初舞台、令和4年切語りに昇格、令和6年十一代目豊竹若太夫襲名。平成29年JXTG音楽賞邦楽部門受賞、平成30年文楽優秀賞受賞、令和1年第54回大阪市民表彰、令和4年文化庁長官表彰受賞。



桐竹 勘十郎 | 人形浄瑠璃文楽座人形遣い

昭和43年初舞台、平成15年三代桐竹勘十郎を襲名。令和3年重要無形文化財（人間国宝）に認定、令和7年日本藝術院会員。平成20年3 芸術選奨文部科学大臣賞、同年紫綬褒章受賞。平成31年国立劇場文楽賞文楽大賞受賞、他受賞多数。



豊竹 巨太夫 | 人形浄瑠璃文楽座 太夫

平成23年初舞台。



鶴澤 友之助 | 人形浄瑠璃文楽座三味線弾き

平成14年初舞台。平成27年国立劇場文楽賞文楽奨励賞受賞
平成28年文楽協会賞受賞

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・『街の灯』の作品制作を実施。台本初稿の半分を完成させるとともに文楽の語りに合わせた修正を反映し、イギリスでの公演候補地の調査にも取り組んだ
- ・『どろろ』の作品制作を実施。関係者で打ち合わせを重ねた

プロジェクト関係者の意識・
行動変容

- ・ 文楽関係者以外との協働で古典芸能特有の掟を伝える難しさを感じつつ、新たな魅力創出の可能性を発見できた

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- ・ 西原フミ子氏の育成に関しては、訪日外国人観光客のデータや専門家とのヒアリングを通じ、古典芸能の魅力を再発見し、新たな訴求方法を模索している
 - ・ 鶴澤友之助氏の育成に関しては、台本改訂に合わせた作曲に取り組み、中堅への成長過程で課題を克服しながら進展している
- <改善すべき点>
- ・ 今年度のプロジェクト進行に遅延が生じ、台本の完成に至らず、出演者に対する十分なクリエイションおよび稽古時間の確保、適切な指導等を行うことができなかった

プロジェクト名 **舞台芸術海外コーディネーター育成事業**

採択団体名 **公益社団法人 全国公立文化施設協会**

事業概要

舞台芸術の海外展開を目指し、劇場や芸術団体から公募・選出したコーディネーターを3年間育成。研修や交流を重ね、芸術見本市に出展し招聘・巡回を推進。日本の舞台芸術作品が海外で継続的に紹介・流通できる支援体制を構築する。

活動計画

～3年目

- ・CINARSやYPAM等を視察
- ・文化施設や芸術団体等とも連携し、作品を海外見本市等へ出展、プレゼンテーション等の実施
- ・各種講座の実施

～5年目

- ・作品を海外見本市等へ出展、評価と分析の実施
- ・フェスティバルや劇場巡回の支援
- ・成果報告会の実施、報告書の作成

主な育成対象者

大橋 玲 | 穂の国とよはし芸術劇場PLAT事業制作部 制作

幼少期、中東で過ごした経験をもとに演劇教育に関心を持つ、2015年より現職。プロデュース公演制作、教育普及、人材育成、広報、施設管理などを幅広く担当。

小川 恵祐 | 沖縄アーツカウンシル／舞台芸術制作者

2017～2022年、南城市文化センターシュガーホールにて音楽公演・ワークショップの企画制作や教育事業等を担当。2022年より現職。2024年より沖縄伝統組踊「子の会」事務局

荻原 文子 | 彩の国さいたま芸術劇場 制作

一橋大学社会学部（文化人類学）を卒業後、制作会社にて海外ツアーのコーディネート等を担当。2016年から現職。主にコンテンポラリーダンス公演の企画・制作を担当。

キャメロン 瀬藤 謙友 | 扇町ミュージアムキューブ

神戸大学演劇研究会に所属し関西小劇場で舞台監督、演出助手等を経験。2022年よりシアターワークショップに入社し、扇町ミュージアムキューブにて従事。

小沼 知子 | プロデューサー

公共劇場に約18年間所属し、演劇・舞踊を中心に多様なジャンル・規模の舞台作品の立案から制作全般を手がける。2024年4月よりインディペンデント・プロデューサー。



音楽

舞踊

演劇

伝統芸能
大衆芸能

補助型

舞台芸術

メディア
芸術

現代アート

分野横断

委託型

中核的な指導者・アドバイザー



丸岡ひろみ

｜YPAM－横浜国際舞台芸術ミーティング ディレクター

1991年より特定非営利活動法人国際舞台芸術交流センターに勤め、2011年に理事長就任。2003～2004年、文化庁新進芸術家海外研修制度によりニューヨークで研修。横浜国際舞台芸術ミーティング（YPAM）の前身である芸術見本市、東京芸術見本市（TPAM）に1995年の初回よりスタッフとして従事し、2005年より現職。特定非営利活動法人舞台芸術制作者オープンネットワーク（ON-PAM）副理事長。令和6年度芸術選奨文部科学大臣賞受賞。



橋本 裕介

｜ベルリン芸術祭 パフォーミングアーツシーズン 芸術監督

2010年にKYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭を創設し、プログラムディレクターを務め、ロームシアター京都のプログラムディレクターも歴任。2021年3月から1年間、文化庁新進芸術家海外研修制度の研修員としてニューヨークに滞在し、舞台芸術の資金調達についてリサーチを行う。2022年9月よりベルリン芸術祭に勤務。ヘッド・ドラマトルクを経て現職。

寺田 貴美子 | ロームシアター京都 制作

プロダンサーとしてのキャリアを経て、都内フェスティバル・劇場で舞台芸術分野に携わる。2014年ロームシアター京都に入職。施設管理や事業企画など劇場全般の運営に関わる。

前原 拓也 | SPAC－静岡県舞台芸術センター 制作

舞台制作、ドラマトルク、翻訳家。2022年より文化庁新進芸術家海外研修制度により2年間ミュンヘンに滞在。2025年より現職。これまで様々な作品のドラマトルクを担当。

山浦 日紗子 | La forêt（ラ・フォレ） プロデューサー

国際映画祭・見本市等の事務局を経て、高知県立美術館で舞台芸術の企画制作に従事。2020年にLa forêtを設立し、芸術文化・国際交流事業を展開している。

山口 遥子 | 下北沢国際人形劇祭 企画統括

人形劇研究者。博士（美術）。人形劇分野の国際的活動を支援するNPO法人Deku Art Forum 理事長。下北沢国際人形劇では企画統括を務める。JSPS海外特別研究員

吉田 一弥 | 株式会社 DEZAR 照明デザイナー/コーディネーター

照明家吉本有輝子氏に師事。京都大学在学中より小劇場運営や国内外での舞台照明デザインを手がける。2020年度日本照明家協会新人賞、2024年度同奨励賞を受賞

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ 8～9月に育成対象者を公募し、10名を選抜した
- ・ 11月から3月にかけて、CINARS Biennale（カナダ）、Asia TOPA（オーストラリア）、BIPAM（タイ）等に育成対象者を派遣し、公演視察や関係者とのミーティングを実施した
- ・ 12月にYPAM（横浜国際舞台芸術ミーティング）で報告会を開催した

プロジェクト関係者の意識・
行動変容

- ・ 海外の舞台芸術見本市を視察研修し、海外関係者との交流を通じて、舞台芸術作品の流通・展開の仕組みや必要な情報提供・ネットワーク構築について体験的に学習し、認識を深めることができた

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- ・ 各研修終了後、育成者自身の振り返りと研修チームメンバー間での分析・検証を実施し、その内容を事務局や育成者全員と共有するミーティングを開催した
- ・ 研修先のテーマや規模、ジャンル、運営形態等の違いを分析・検証し、育成対象者が自身の目的に照らした次なる研修先選定や講座内容、到達目標を主体的に描ききっかけを形成した

プロジェクト名 **グローバル・アニメ・チャレンジ**

採択団体名 **株式会社 キネマシトラス**



音楽

舞踊

演劇

伝統芸能
大衆芸能

補助型

舞台芸術

メディア
芸術

現代アート

分野横断

委託型

事業概要

今後さらなる活躍が期待される若手人材を選出し、国内外の状況を踏まえたアニメ制作や企画・宣伝、リーダーシップ等を学ぶ場を提供。海外のアニメ制作会社でのインターン実施後、パイロットフィルムを制作し、国内外での発表の場を設ける。

活動計画

～3年目

～5年目

- 派遣前教育訓練の実施
- 海外の有力アニメ制作会社でインターンを経験
- パイロットフィルムを企画開発し、海外アニメ映画祭に出展
- 著名な海外アニメーション・スクールへの派遣

主な育成対象者



篠原 啓輔 | 監督

『弱虫ペダル』で制作進行を担当。2015年以降、絵コンテと演出をいくつかの作品で担当。監督作は『BLACKFOX』『その着せ替え人形は恋をする』等。



木村 誠 | プロデューサー

『ソイタミナ』、ツインエンジンにてプロデューサーを担当。MAPPAにてアニメプロデューサーの他、ファイナンス、ライセンスビジネス等をはじめとしたライツ事業全般を統括。2024年、BLUE RIGHTS創業。



中目 貴史 | プロデューサー

数々の作品の制作進行からプロデューサーまで幅広く担当。斎藤圭一郎監督『葬送のフリーレン』のアニメーションプロデューサー。

中核的な指導者・アドバイザー



数土 直志 | ジャーナリスト

『日本のアニメ監督はいかにして世界へ打って出たのか？』『誰がこれからのアニメをつくるのか？』の著者。世界と日本のアニメ事情に精通。



菊池 剛 | 株式会社KADOKAWA執行役

2023年(株)KADOKAWA執行役Chief Anime Officer (CAO)就任。2024年KADOKAWAアニメ・声優アカデミー-powered by VANTAN教育顧問就任。2025年Chief Studio Officer (CSO) 兼スタジオ事業局 局長就任。



伊藤 優希 | アニメーター

有限会社wish所属。『モブサイコ1期』動画検査、『けだまのゴンじろー』作画監督、『ぼっち・ざ・ろっく！』ライブアニメーター、『逃げ上手の若君』作画監督等担当。



山本 ゆうすけ | 監督

動画工房にて動画、原画、作画監督等を担当後フリーランスに。『ワンダーエッグ。プライオリティ』にて初演出。『推しの子』『劇場総集編ぼっち・ざ・ろっく！ Re:』にてOPディレクターを担当。



斎藤 圭一郎 | 監督

『ACCA13区監察課 Regards』で初監督、『ぼっち・ざ・ろっく！』『葬送のフリーレン』でTVシリーズ監督を担当。最新作は『劇場総集編ぼっち・ざ・ろっく！ Re:』。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ 育成対象者6名（アニメーター1名、監督3名、プロデューサー2名）を選定した
- ・ 派遣前教育訓練としてワークショップ（講義とディスカッション）2度実施した。初回はジャーナリストの数土直志氏、第2回はグローバル・コネクツ・メディア社CEOでアナリストのダグラス・モンゴメリー氏が講義した
- ・ 2025年3月中旬に育成対象者が新潟国際アニメーション映画祭に参加した

プロジェクト関係者の意識・
行動変容

- ・ 育成対象者は国際映画祭での交流を通じ英語の重要性を認識し、学習意欲が向上した。また、海外アニメの表現手法に触れることで、新たな表現手法の開発に関心を高めた

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- <達成した点・成果が認められた点>
- ・ ワorkshopや映画祭参加を通じ、アニメ表現手法の理解やコンペ作品の具体的なイメージを醸成した
 - ・ 英語レッスンにより、日常会話や自己紹介、アニメに関する意見を英語で表現する力が向上した
- <改善すべき点>
- ・ パイロットフィルムの企画開発に必要な具体的な学習時間が不足した
 - ・ インターン先での業務を円滑に進めるための英語力が課題である

事業概要

世界的に大きなマンガ市場を持つ米国を中心とした北米をターゲットとし、①選抜したマンガ家の海外進出に向けた育成、②国内のマンガ家・編集者への講座の提供、③日本のマンガの多様性の紹介を行う。

活動計画

～3年目

～5年目

- ・国内外アドバイザーによる講座・面談を通じた育成プログラムの実施
- ・北米のマンガ関連イベント登壇、展示会・ワークショップの開催
- ・成果発表会やシンポジウムの開催
- ・北米以外のエリア（欧州やアジア）への展開についてのリサーチ
- ・日本マンガの海外展開を自立的に推進できるコーディネーターの育成準備

主な育成対象者



御前 モカ | マンガ家

実体験に基づくCAお仕事マンガ『CREWでございます！』で2015年マンガ家デビュー。2023年より秋田書店webサイトにて、『おはよう、おやすみ、また明日。』の連載開始。



かつしか けいた | マンガ家・イラストレーター

イラストレーターとして雑誌や書籍装画等も制作。2022年よりWebコミックメディア「路草」にて『東東京区区』（トゥーヴァージンズ）を連載中。



川勝 徳重 | マンガ家

『電話・睡眠・音楽』『アントロポセンの犬泥棒』『瘦我慢の説』（いずれもリイド社）等、マンガの執筆活動と並行して、マンガ編集、及び評論を発表している。

中核的な指導者・アドバイザー



デボラ・アオキ | マンガ評論家・編集者

アニメ・マンガ情報発信ウェブサイトや、米情報誌にてマンガのレビューやインタビュー記事を執筆するほか、日本のマンガを紹介する週刊ポッドキャスト番組「Mangasplaining」の共同ホストを務める。



クリストファー・ウッドロー・ブッチャー | 編集者・評論家

日本のマンガ・アニメの翻訳出版を手掛ける米企業や講談社等と協働して日本マンガの翻訳出版に携わる。週刊ポッドキャスト番組「Mangasplaining」ではデボラ・アオキと共同ホストを務める。



木下 いたる | マンガ家

恐竜飼育マンガ『ディノサン』（新潮社）連載中。「次にくるマンガ大賞2023」にランクイン、2024 American Manga Awards Best Continuing Manga Seriesにノミネート。



小日向 まるこ | マンガ家・イラストレーター

アニメーションやイラストの仕事を受けながらマンガの執筆を行う。近作に『あかり』（ヒーローズ、2022年）、『アルティストは花を踏まない』（小学館、2019年）等。



ばったん | マンガ家

2016年『にじいろコンプレックス』（講談社）でデビュー。著書に『かけおちガール』『けむたい姉とずるい妹』（いずれも講談社）等。「webアクション」にて『そしてヒロインはいなくなった』連載中。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・「MINT」プログラムの基盤構築として、選定委員やアドバイザーの決定、育成対象者の選定・派遣先リサーチ、北米派遣先の決定を実施した
- ・海外展開準備として、アメリカ・オハイオへのリサーチ出張や、アニメ・エキスポでの展示準備を実施した
- ・本格的な海外展開基盤整備に向け、国内での講座実施および育成対象者に要望を聴取した

プロジェクト関係者の意識・
行動変容

- ・育成対象者は海外イベントの決定や英訳サンプル作成、講座の開始により具体的な展開を実感し、多忙な中でも一生懸命取り組む姿勢が見られ、北米市場を意識した積極的な発信を試みる対象者も現れた

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- ・共通講座後に実施した育成対象者へのアンケートの声を、講座テーマや運営（日英通訳の質等）に迅速に反映するとともに、アドバイザーにも共有して必要なアドバイスを提供した
（アドバイザーには海外の反応や有効なプロモーション方法、進捗状況を日常的にヒアリングし、事務局で分析・検証を実施中）

事業概要

世界で評価されるオリジナルのゲームIP・コンテンツを創出できる、優れたアイデアと技術力を持つクリエイターを目指し、「伴走支援アドバイザーの支援を受けたゲームの制作」と「ゲームイベントへの出展による世界を目指した活動」の2つを中心にしながら、スキルアップや世界デビューの後押しを目指す。

活動計画

～3年目

～5年目

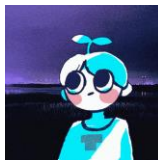
- ・実施プログラムの内容検討と入学者の募集・選定、入学式の実施
- ・育成対象者との月に1回のMTG等やその他講義等の実施
- ・国内外のゲームショウへの出展やプロクリエイターとの交流実施
- ・第1期生の成果を踏まえた上で、カリキュラムの見直しや連携者との協力体制の強化等を実施
- ・海外見本市などでTGCAとしての出展を定着させるなど、プレゼンス向上をめざす

主な育成対象者



イノナカゲームス | ゲームクリエイター

リーダーのシキガエルが『Out of Skull』を制作するために設立したチーム。『Out of Skull』でIGC学生選手権最優秀賞を受賞するなど、様々な実績を有する。



煙々創苑 | ゲームクリエイター

リーダーの大塚は福岡のIT人材発掘・育成事業である未踏事業を修了、学生ゲームジャムを運営する等積極的な活動を展開している。



達観する電子工房 | ゲームクリエイター

リーダーの木蓮はチーム内でディレクションやプログラミングなどを担当。チームとして学問に親しむツール確立を目指している。ゲームクリエイター甲子園総合賞佳作等の受賞歴を有する。

中核的な指導者・アドバイザー



日野 晃博 | (株) レベルファイブ代表取締役社長／CEO
『レイトン』シリーズや『妖怪ウォッチ』シリーズ等数々のヒット作を生み出し、ゲーム、アニメ、映画、マンガ等クロスメディア展開の実績を持つ。育成プログラムのプリンシパルとして参加し、参加者の目標となる存在。



島守 明広 | (株) カプコン CS 第二開発統括 開発二部部長
『戦国BASARA』等でプログラマやマネージャーとして活躍し、長く続くIPから新規IPまで幅広く携わった経験を持つ。育成対象者の制作環境や進捗確認を行い、目標達成を伴走支援できる実績とマインドを有する。



ノンリニア プロジェクト「Near The Sun」 | ゲームクリエイター
リーダーのドッグウッドはプログラム、グラフィック、シナリオなどを担当。ゲームならではのストーリーテリングに力を入れており、ゲームクリエイター甲子園セミファイナル進出の実績を持つ。



BogosoGames | ゲームクリエイター

リーダーの金井はディレクター、開発を担当。様々なゲーム開発に携わる一方で、BogosoGamesでのチーム開発も実施中。法人化を視野に入れ継続的なゲーム制作に意欲を持つ。



simizu | ゲームクリエイター

個人開発で参加。物語性を重視して制作している。インディーズにおけるアクション系ホラーの増加、その盛り上げを狙いたいという姿勢が特徴的。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・「Top Game Creators Academy (TGCA)」第1期プログラムの開始に向け、TGS2024で株式会社レベルファイブの日野氏を監修役（プリンシパル）として発表した
- ・公式サイトを公開し、育成クリエイターの募集を開始。10組の候補を最終選定した
- ・CESA理事会等へアドバイザー推薦を呼びかけ、現役クリエイターや社員による支援体制を構築した

プロジェクト関係者の意識・
行動変容

- ・CESA主体によるゲーム業界初の人材育成プログラムとして、団体内外で期待感が醸成されている
- ・2025年4月の開始に向け、事務局や関係者間でより良い支援体制や関与の在り方について積極的に議論を重ねることができている

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- ・日野プリンシパルやCESA委員会と意見交換を経て、応募条件にゲーム制作経験や年齢上限を設定し、応募時点で個人またはチームでの参加を前提とする等の枠組みを決定。育成環境整備を推進した
- ・それぞれの応募条件設定のメリットやデメリットについては、今後の第1期プログラムの実施状況を見ながら検証予定である

事業概要

複数名のクリエイターがニューヨークで代表作品の展示やポートフォリオを発表。現地プログラムと連携し、キュレーターやギャラリスト、研究機関等とのを通じ、プレゼン機会を創出し海外進出の基盤を築く。

活動計画

～3年目

～5年目

- ・広報のため英語のポートフォリオ・ウェブサイト・SNSの作成
- ・国内の教育機関等と連携したレクチャー等の実施
- ・現地キュレーター、ギャラリスト等とのネットワーキング
- ・事業ウェブサイトへの活動レポート等の掲載
- ・現地でのリサーチおよび情報収集とレポートの作成
- ・国内の主要メディアアート施設、芸術祭等との連携、交流

主な育成対象者



青木 竜太 | 芸術監督・社会彫刻家

芸術と科学技術の融合領域で作品制作・研究開発・展覧会企画等。協働プロジェクトが文化庁メディア芸術祭で受賞。イーサリウム財団と韓国ACCのアートプログラムに日本人初選出。



宇佐美 奈緒 | アーティスト

ビデオゲーム、映像、パフォーマンスを制作するアーティスト。他者視点の追体験に関心を持ち、3D-CG技術で身体感覚や皮膚感覚を想起させる映像表現を探索する。



エキソニモ | アーティスト・デュオ

千房けん輔と赤岩やえによるニューヨーク拠点のアーティスト・デュオ。デジタルとアナログを横断する実験的作品を国内外で発表し、広告制作や展覧会企画等多岐にわたる活動を展開している。



サロメ・アセガ | NEW INCディレクター

アーティストであり、NEW INCディレクター。POWRPLNT共同設立者で、Eyebeam等のレジデンスに参加。ムソク美術館やMoMAで展覧会を開催し、多くの著名な団体の理事を務める。



木原 共 | メディアアーティスト・ゲーム開発者

「遊び」をテーマに実験的ゲームや都市介入型インスタレーションを制作。S+T+ARTS Prize 2024で受賞。展覧会『Art Plays Game』（2025）等に参加。



田中 みゆき | キュレーター・アクセシビリティ研究・社会福祉士

「障害は世界を捉え直す視点」をテーマに活動。ACC助成を経てNY大学客員研究員としてニューヨーク滞在後、帰国。主な企画に『ルール？展』、著書に『誰のためのアクセシビリティ？』等。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ 基盤構築とノウハウ蓄積のため、プログラム立ち上げに必要な体制・書類等を整えた
- ・ NEW INCや東京藝術大学との連携を進め、共同トークイベントを配信する等、国際的な活動を推進した
- ・ 国内外の審査員による英語をベースとした書類審査・オンライン面談を実施し、4名の育成対象者を採択した

プロジェクト関係者の意識・
行動変容

- ・ プロジェクト推進を通じて個々のノウハウや人脈が表面化し、チームの結束と基盤が強化した
- ・ 海外ではアーティスト・研究者や教育者等のステークホルダーとのネットワークを、国内ではメディアアート分野の団体や大学関係者とのつながりを構築した

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- ・ 応募フォームに「行きたい場所」「会いたい人」等の記入欄を設けたことで、国内クリエイターが求めるアドバイザー像が明確になった
- ・ 次年度以降、育成対象者のニューヨーク滞在中の活動成果のレポート提出を求め、事務局やアドバイザーとの振り返りミーティングの実施や分析・検証を行い、レポートを事業ウェブサイトに掲載予定である

事業概要

短編アニメーション分野の作家に対し、国際的評価やマーケットへ進出する技能習得の訓練プログラムとネットワーキングの機会を提供。同時に、国内の主要コミュニティや映画祭を連携させ、ウェブサイト等での海外発信体制を整備する等、新たなロールモデルを構築し、恒常的にアーティストがグローバルに活躍できる環境を整備する。

活動計画

～3年目

～5年目

- ・公募作家の企画開発支援
- ・国内外アドバイザーによるレクチャー及び個別アドバイスの実施
- ・海外映画祭等での上映や新作企画ピッチ、ネットワーキング等の機会提供
- ・3年目までに育成した作家の完成作品を映画祭等へ出品
- ・公募枠作家への支援を継続しつつ、学生等も対象としたすそ野を広げた支援を実施

主な育成対象者



金子 勲矩 | アニメーション作家

早稲田大学創造理工学部卒、多摩美術大学院修了。2025年3月まで同大学院助手として勤務。監督作は『LOCOMOTOR』『The Balloon Catcher』等。



関口 和希 | アニメーション作家

多摩美術大学卒、東京藝大院修了。自身の体験や感情を通じて、共感と笑いを生み出す作品を制作。日本アニメーション協会会員。



ひらの りょう | アニメーション作家・マンガ家

ポップでビジュアルな作風を持ち味として『パラダイス』『KRASUE』等を制作。国内外のアニメーション映画祭にも多く参加。NHK「みんなのうた」等のアニメーション制作も手掛けている。

中核的な指導者・アドバイザー



土居伸彰 | 本プログラムプロデューサー

2015年にニューディアーを設立し、海外作品の配給を開始。非商業アニメーション作家の研究や上映企画を通じて作品を紹介し、映画祭審査員、キュレーション、国際共同制作等、多方面で精力的に活動。



クリス・ロビンソン | 評論家・フェスティバルディレクター

『Lipsett Diaries』の脚本でジユトラ賞とジニー賞を受賞。アニメーション研究で国際的評価を受け、2020年アニメーションフェスト・ザグレブで受賞。2022年ルネ・ジョダン賞を受賞した。



矢野 ほなみ | アニメーション作家

東京藝大院修了。在学中は山村浩二氏に師事。『骨噛み』（2021）でオタワ国際アニメーション映画祭短編部門グランプリ受賞。



ニハイ サリナ | アニメーション作家

英国RCA修士課程の修了作品『Small People with Hats』（2014）がオタワ国際アニメーション映画祭短編部門グランプリ受賞。MVの制作等も手掛け、国際的に活躍する。



折笠 良 | アニメーション作家

アンリ・ミショーのエッセイを原作とした『みじめな奇蹟』（2023）で、オタワ国際アニメーション映画祭短編部門グランプリ受賞。本作はフランス・カナダ・日本による国際共同製作。

プロジェクト名 **New Way, New World: Program for Connecting Japanese Animators to the World**

採択団体名 **公益財団法人 画像情報教育振興協会**



音楽

舞踊

演劇

伝統芸能
大衆芸能

補助型

舞台芸術

メディア
芸術

現代アート

分野横断

委託型

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ 海外アドバイザーを日本に招聘し、トークイベントやツアーを通じてプロジェクトの認知度向上とネットワーキングを実現、トークイベントの様子は公式ウェブサイトにて公開した
- ・ 公募枠作家の審査過程で海外アドバイザーとのオンライン面談を実施し、海外進出を意識した作家3名を選出
- ・ 海外アドバイザーやアニメーション関係者とのネットワーキングにより、国内クリエイターが彼らと協働する機会や、2年目の展開に向けて映画祭等での上映機会を得るきっかけを生み出した

プロジェクト関係者の意識・行動変容

- ・ 海外アドバイザーの日本招聘を通じ、日本と海外双方の観点から有効なプログラムを検討しはじめた
- ・ 1年目を通じて、短期間のプロジェクト運営における迅速かつ柔軟な意思決定フローの重要性を再認識し、連絡体制を確立した

令和6年度終了時点での育成についての状況

- ・ 採択・不採択に関わらず、公募枠の応募者全員にフィードバックシートを返答するとともに、コミュニティ形成を目的にトークイベントや交流会を実施し、プログラムの成果を定期的に分析した
- ・ 第一期育成対象者に対して、定期的な面談を開始し、企画開発を進めた
- ・ 業界関係者が集まる交流会で、事務局より作家活動に必要な支援についてヒアリングを行い、次年度以降のプログラム改善に反映した

事業概要

Film Frontierという傘の元、実写映画およびアニメーションの若手クリエイター（監督、プロデューサー、脚本家、アニメ・スタジオ）を育成する3種のプログラム（①海外渡航プログラム、②長編アニメクリエイター支援、③滞在型企画開発）を実施。15企画程度のクリエイターを支援する。

活動計画

～3年目

～5年目

- ・実写映画は企画開発支援、アニメーションは企画開発・海外展開支援を育成対象者別に実施
- ・国内外の主要映画祭・マーケットに参加し、ピッチやネットワーキングを実施
- ・育成対象者を募集し、同様のサイクルで育成を継続
- ・育成対象者の企画のフォローアップ

主な育成対象者



太田 信吾 | 監督

『わたしたちに許された特別な時間の終わり』は世界12カ国で上映。『沼影市民プール』は、制作段階においてカルロヴィ・ヴァリ国際映画祭2024で日本の企画として初の受賞を果たした。



中西 舞 | 監督

国内外映画プロジェクトに助監督や美術、プロデューサーとして参加。短編監督作に『SWALLOW』『BORDER』『CONFESSION』釜山国際映画祭Asian Film Academy選出。



早川 千絵 | 監督

『PLAN 75』で長編デビューし、第75回カンヌ国際映画祭「ある視点」部門特別賞受賞。『ルノワール』で第78回カンヌ国際映画祭コンペティション部門出品。

中核的な指導者・アドバイザー



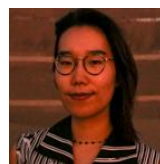
井上 伸一郎 | プロデューサー

元（株）角川書店代表取締役、元（株）KADOKAWA代表取締役副社長、アニメ・実写のプロデューサーを歴任。



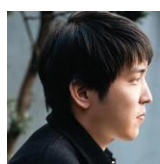
市山 尚三 | プロデューサー、プログラミング・ディレクター

東京大学経済学部を卒業後、松竹に入社。オフィス北野在籍中に国内外の様々な作品をプロデュース。2000年から2020 年まで映画祭「東京フィルメックス」のプログラム・ディレクターを務め、2021年より、東京国際映画祭のプログラミング・ディレクターに就任。



飯塚 陽美 | 映像作家

東京大学大学院博士課程在籍。映画『Lock Up and Down』が2022年ぴあフィルムフェスティバル入選。『The Taste of Orange』がイフラヴァ国際映画祭で上映。



木下 麦 | アニメーション監督

TVアニメ「オッドタクシー」で自身初となる監督、キャラクターデザインを担当。初長編アニメーション『ハウセンカ』で2025年アヌシー国際アニメーション映画祭長編コンペティション部門出品。



小森 よしひろ | アニメーション監督

監督、アニメーションディレクターとして、20年以上にわたり日本を代表する数々のキャラクターに命を吹き込んできた。長編アニメーション映画『GAMBA ガンバと仲間たち』監督。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・「海外渡航プログラム」の育成対象者4名の選定、概要発表等を実施した
- ・「滞在型企画開発」の育成対象者4名、伴走アドバイザー4名、それぞれのプログラムを決定した
- ・「長編アニメクリエイター支援」の育成対象3企画（5名）を選抜した

プロジェクト関係者の意識・
行動変容

- ・アドバイザーとの面談やワークショップ等、実質的な支援は2年目から本格的に始動することとなる

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- ・育成対象者に対してヒアリングを行い、本プログラムで望むことや今後の活動計画を確認し、2年目以降の本格的な活動に向けて基盤整備を進めた

事業概要

国際写真祭とアートフェアを活用し、次世代の作家・批評家・キュレーターを育成する。①審査員が優れた作家を選出し発表機会を提供、②展示を企画するコーディネーターを育成、③批評や評論を発表する機会を創出する。

活動計画

～3年目

～5年目

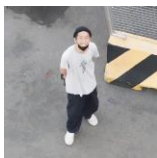
- ・ 国外の美術館キュレーターや批評家等との交流や展示・批評の実践の場を実現、海外のアートフェア/フェスティバルとの連携
- ・ 活動を書籍化およびウェブサイトにアーカイブし共有
- ・ 写真/批評に関するレクチャーやシンポジウムを展開
- ・ 育成対象キュレーターと海外キュレーターによる共同企画展を実現

主な育成対象者



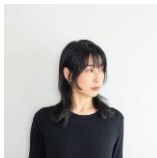
高嶋 慈 | 美術・舞台芸術批評

ジェンダーやクィア、歴史の（再）表象を軸に、現代美術とパフォーミングアーツを横断的に批評。近刊の共著に『鷹野隆大 カスパバ -この日常を生きのびるために-』（水声社、2025）。



千賀 健史 | 写真家

国内外で作品やブックが多数受賞。シンガポール国際写真祭でグランプリを受賞した写真集『HIJACK GENI』を2024年に IANN BOOKS より刊行。



南川 恵利 | 写真家

人生を取り巻く日常的な環境に目を向け、写真メディアを通し「当たり前」に潜む社会問題や構造・仕組みを表象させる作品を制作。KG + SELECT 2025 参加。

中核的な指導者・アドバイザー



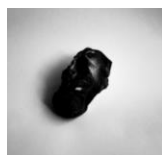
菅沼 比呂志 | キュレーター・大学教授

「ガーディアン・ガーデン」の立ち上げに参加し、2017年まで運営に従事。2017年よりT3 PHOTO FESTIVAL TOKYO実行委員を務め、2022-23年には東川町国際写真フェスティバルで『東川賞受賞作家展』のキュレーションを担当。



太田 睦子 | IMA編集長

『マリ・クレール』『エスクァイア』『GQ』の編集を経験。アート写真雑誌『IMA』創刊同エディトリアルディレクター。浅間国際フォトフェスティバルのエキシビションディレクター。



宮地 祥平 | 写真家

School of Visual Artsより美術学士号(写真)、Pratt Instituteより美術修士号(写真)を取得。近年の展示に『Koganecho International Artist's Network』等。



鈴木 麻弓 | 写真家

写真集『The Restoration Will』が2018年Photo Españaにて「年間最優秀国際写真集」選出。アルル国際写真祭（2024）にて『Répliques 11/03/11』として展示。



池田 佳穂 | キュレーター

インディペンデント・キュレーター。森美術館でアシスタントとして経験を積み、2023年に独立。近年の主な企画実績として、「バグスクール2024:野生の都市」など。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・「T3 PHOTO FESTIVAL TOKYO」で「New Japanese Photography」から50年を切り口にした企画展を開催し、海外ゲストを招聘してトークイベントを実施した
- ・パリフォトや国立美術館関係者と交流、ヴェネチア・ビエンナーレの視察を行った

プロジェクト関係者の意識・
行動変容

- ・ 日本写真の質の高さが海外キュレーターやパリフォトで評価されることを認識できた
- ・ 審査会で選ばれた5人の作家に海外から展示オファーが届く等成果が現れ、令和7年度は作家たちの活躍を後押しする柔軟な対応をする予定である

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- < 達成した点・成果が認められた点 >
- ・ T3 PHOTO FESTIVAL TOKYO 2024のカatalogであり、同イベントで開催されたシンポジウムをベースにした書籍「MORE THAN ONE WORLD - New Japanese Photography 50 years on」に、批評家枠の育成対象者によるサンドラ・フィリップスへのインタビューや、論考を掲載した

事業概要

若手アーティスト・キュレーターを海外へ派遣し、海外の美術関係者と協働しながらリサーチを基に作品制作・展示を実施。これらの国際協働プロジェクトのノウハウをまとめた記録集を制作する。

活動計画

～3年目

～5年目

- ・アーティスト1名(組)とキュレーター1名を1グループとし、3グループを海外3か所に派遣し現地美術館で展示を実施
- ・プロジェクトの過程を記録集にまとめ、発信共有
- ・海外での展示作品を日本国内で公開（展示計画は育成対象者が主導）
- ・海外美術関係者を招聘しトークイベント等を開催。第2期の記録集を制作・刊行

主な育成対象者



MES（新井 健、谷川 果菜絵） | アーティスト

新井健と谷川果菜絵によるアーティストデュオ。クラブカルチャーと現代美術を融合させたインスタレーションとパフォーマンスを国内外で展開。



塚本 麻莉 | キュレーター

高知県立美術館主任学芸員。高知ゆかりの作家を取り上げる個展シリーズ「ARTIST FOCUS」のほか、合田佐和子等の展示を手掛けた。



青柳 菜摘 | アーティスト

映像メディアを用いて、フィールドワークやリサーチをもとにした作品制作を行う。近年の活動に個展「亡船記」等。詩集『そだつのをやめる』で第28回中原中也賞を受賞。

中核的な指導者・アドバイザー



片岡 真実 | 国立アートリサーチセンター センター長
森美術館館長。第21回シドニー・ビエンナーレ芸術監督、「あいち2022」芸術監督を歴任。CIMAM会長（2020～2022）等国際的役職を務め、広いネットワークを活用し海外協働や事業を効果的に推進。



安田 篤生 | 高知県立美術館 館長
奈良県立美術館副館長、原美術館副館長等を歴任、2024年より現職。ロサンゼルス・カウンティ美術館、オスロ国立現代美術館等と協働し、企画展を実施。日本とドイツのアーティストを相互派遣する「メルセデス・ベンツ アート・スコープ」も担当した。



見留 さやか | キュレーター

山口情報芸術センター[YCAM]キュレーター。前職の十和田市現代美術館では名和晃平、百瀬文、劉建華等、現職ではマヤ・エリン・マスタ等の展覧会を企画・担当。



遠藤 薫 | アーティスト

沖縄や東北をはじめ国内外で、地域に根差した工芸と歴史を基盤に、染織などの工芸技法を用いて、生活と密接な関係にある社会的、政治的な関係性を紐解く作品を手掛ける。



荒井 保洋 | キュレーター

滋賀県立美術館主任学芸員。これまで担当した主な展覧会に、空き家などの美術館外を会場とした「シガアートスポットプロジェクトVol.1-3」や「川内倫子:M/E 球体の上 無限の連なり」等。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ 育成対象者の選定やメンターの委嘱、運営事務局の人員配置を行い、支援体制を構築した
- ・ 情報発信基盤として、プログラム名称の決定、ロゴ制作、広報計画の策定、ティザーサイト制作、本サイト設計等を実施した

プロジェクト関係者の意識・
行動変容

- ・ 育成対象者は、英語力向上のための講座参加や活発な情報共有・ネットワーク強化を積極的に実施した
- ・ メンターは、定期的な意見交換や海外協力先美術館へのプレゼン支援を通じて国際交渉力向上を支援した
- ・ 日本国内の地方美術館の活動や所蔵作品等を、海外美術館関係者に紹介される機会が生まれた

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- ・ アンケート結果では、育成対象キュレーター3名全員が「相手の文化・価値観への理解力」が成長したと回答し、英語でのコミュニケーション力やプレゼンテーション力の向上も実感した。一方で、英語対応への課題が明らかになり、スキルアップを促進するコンテンツの導入や事前準備の強化が必要と認識している
- ・ 海外組織との協働機会を創出し、実践を通じた学びや長期的な関係構築に寄与した
- ・ プログラムは派遣や視察にとどまらず、海外展示の実施や国際的な協働を促進し、育成対象者に実践的な経験と学びの場を提供する意義が大きいと認識した

事業概要

オペラ作品「Super Angels」の新シリーズを海外の潜在層に向け制作。創作から海外展開までに役割ごとに育成対象分野を設け、最適な人材育成のフォーマットを確立、新領域での継続的な人材育成を促す。

活動計画

～3年目

～5年目

- ・仏現地でプロジェクトチームを結成し、劇場や演出家候補との協議を経てアーティストチームを編成
- ・ヨーロッパでプロトタイプ版を初演し、海外展開の基盤構築
- ・ヨーロッパのフェスを巡回し、作品の改訂と規模拡大を実施
- ・日本とロサンゼルスでシンポジウムを開催、またロサンゼルス公演を実施し、活動内容を一般公開

主な育成対象者



岸 裕真 | 分野横断的新領域アーティストチーム

アーティスト。AIを「Alien Intelligence（エイリアンの知性）」と捉え直し、人間とAIによる創発的な関係「エイリアンの主体」を掲げて、自ら開発したAIと協働して絵画、彫刻、インスタレーションの制作を行う。



鈴木 勇氣 | 舞台スタッフ

2018年洗足学園音楽大学卒業。2018年より音響エンジニアとしてキャリアを開始、映像、舞台システム等の業務領域を広げている。2025年4月より音響会社の代表に就任。



見野 舞 | プロデューサー

2022年頃からATAKでインターン参加、演劇学を早稲田大学院とパリ・ナンテル大学で学びながら、2025年3月にはパリ・グランパレ「MIRROR Ghost」に制作スタッフとして参加。

中核的な指導者・アドバイザー



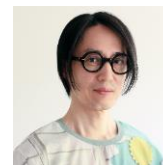
渋谷 慶一郎 | 音楽家

東京藝術大学作曲科卒業。2002年に音楽レーベル『ATAK』を設立。電子音楽、オペラ、ピアノソロ、映画音楽等幅広い作品を手がけ、東京・パリを拠点に活動。生と死、テクノロジーをテーマに探求。



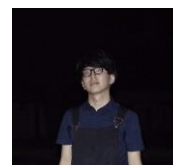
池上 高志 | 研究者

東京大学教授。複雑系・人工生命をテーマに、生命とは何かを追求する研究を進める。2018年、ALIFE国際会議を東京で主催。著書に『人間と機械のあいだ』『作って動かすALife —実装を通した人工生命モデル理論入門』等。



今井 慎太郎 | コンピュータ音楽家

国立音楽大学およびIRCAMで学び、文化庁派遣芸術家在外研修員としてドイツのZKM等にて研究および創作活動を行う。2008年よりバウハウス・デッサウ財団にてバウハウス舞台の音楽監督を度々務める。国立音楽大学准教授および大阪芸術大学客員教授。



藤巻 俊介 | 分野横断的新領域アーティストチーム

国立音楽大学演奏・創作学科コンピュータ音楽専修卒業。同修士課程作曲専攻（コンピュータ音楽）修了。音を扱うこと／考えることを「音響デザイン」と広く捉え、ジャンルやフォーマットを限定せず様々な音のクリエイションに参加。



小嶋 瑠記 | 分野横断的新領域アーティストチーム

国立音楽大学コンピュータ音楽専修卒業、同大学大学院修士課程に在籍中。音や音楽といった聴覚現象を主題に、楽曲制作、映像、インスタレーション、パフォーマンスなど多様な表現を横断して作品を展開している。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ユニバーサルミュージック・フランスと連携し、制作チームを結成した
- ・Wayne McGregorを演出家兼振付家として迎える共同制作を進め、日本で記者発表を行うことに合意した
- ・育成対象者はフランス・パリのグランパレで試験的なコンサートを開催し、国際的な体験機会を提供した

プロジェクト関係者の意識・
行動変容

- ・団体は、育成には中長期的視点と段階的な実践が不可欠であると認識した
- ・指導者は、若手と共に歩む姿勢を定着させ、次世代に求められる横断的な能力の重要性を意識した
- ・育成対象者は、国際的な場での実践を通じて、主体的立場としての自覚を持ち、責任感や視野を拡大した

令和6年度終了時点での
育成についての状況

<達成した点・成果が認められた点>

- ・育成対象者の岸裕真はAIプログラミングと芸術表現での高い能力を活かし、コンセプト構築や戦略的思考を重視した指導を受け、制作に関与した
- ・岸裕真は、ベネチアおよびパリでの現地ミーティングに同席し、国際的な視点を学ぶ機会を創出した
- ・パリ・グランパレでの試作的コンサートを通じ、岸裕真、見野舞、鈴木勇気を中心に国際的活動に向けた実践的な準備を進める契機となった

<改善すべき点>

- ・新制作の構想および劇場等との交渉が進行中であったため、若手クリエイター全員を具体的な制作工程に本格的に巻き込むことが難しく、新規の人材募集の実施に至らなかった

事業概要

渋谷『404 Not Found』と京都『art bit』が連携。展覧会やワークショップを通じ次世代クリエイターを育成し、海外進出を目指す新たな芸術再編ムーブメントを創出する。

活動計画

～3年目

～5年目

- ・国内の地盤固めとグローバル展開の準備、人材育成
- ・アジア圏のゲームショウへの出展・企画展の展開
- ・欧州・北米圏への企画展の展開、海外アートフェアへの出展
- ・世界のトップランナー級のクロスオーバー・インパクトをプロジェクト全体で達成するとともに、インディーならびに大型ゲームショウでの受賞

主な育成対象者



高橋 洋介 | キュレーター

2014-2021年 金沢21世紀美術館主任学芸員、2021-2022年 角川武蔵野ミュージアムキュレーターを経て独立。主な展覧会に「DeathLAB:死を民主化せよ」「Ghost in the Cell」など。



hako生活 | ゲームクリエイター・プロデューサー

2016年から個人で2Dゲーム開発を開始。『アンリアルライフ』をリリースし、第24回文化庁メディア芸術祭新人賞を受賞。



西島 大介 | 漫画家 / 現代美術家

単行本『凹村戦争』でデビュー。第8回文化庁メディア芸術祭審査員推薦作となる。『ディエンビエンフー』他作品多数。2024年 NHK神工ボ出演、GAME PRIZE OF JAPAN審査員賞受賞。

中核的な指導者・アドバイザー



村上 雅彦 | プロデューサー

一般社団法人渋谷あそびば制作委員会代表理事。米国美大卒業後ゲーム業界へ。BitSummit主催や404NotFound、art bit展を通じクリエイターの挑戦を支援。ゲーム開発を軸にVR/AR、都市開発、イベントプロデュースなど幅広い領域で活動中。



豊川 泰行 | キュレーター

ホテル アンテルーム 京都 館内のギャラリーやイベントを通じて、ゲームカルチャーを発信するプロジェクトを推進。現代アートとインディーゲームの展覧会、ゲームをモチーフにしたコンセプトルーム等、様々な企画を展開。



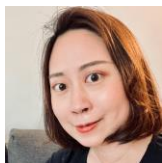
たかくら かずき | アーティスト

デジタル表現を使用し、仏教などの東洋思想による現代美術のルール書き換え、デジタルデータの新たな価値追求、キャラクターバリエーションの美学をテーマに作品を制作している。



カミエナ | ゲームプロデューサー・ディレクター

BitSummit展示をきっかけにゲーム制作にのめり込む。“創る”から“届ける”までにこだわるクリエイター。ars●bitプロジェクトでアート×ゲームの“一点物”による新たな価値創出を目指す。



吉積 英子 | 現代美術家 / 立命館大学RCGS客員研究員

英国でオートクチュール帽子を学び、現代オペラの衣装を手がける。ファッションショー作品がNick Knight CBEに評価され、2024年よりメディア横断型プロジェクト《Les Hommes du Désert》を始動。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ ゲームアートの動向調査、関係者へのヒアリング、クリエイティブジャムや国内アートフェアでの展示を実施した
- ・ インディーゲームレーベル・ヨカゼがTaipei Game Showで展示、新興エリアのドバイで本プロジェクトのパネル展示を行い、現地調査を兼ねた海外展示を実施した
- ・ その他シンガポール、アメリカ、フランスの展示調整を進行中である

プロジェクト関係者の意識・行動変容

- ・ プロジェクト推進を通じてチームの結束が強まり、個々のノウハウや人脈が表面化した
- ・ 海外では研究者や大使館関係者とのネットワークを、国内では大学やミュージアム関係者とのつながりを構築した

令和6年度終了時点での育成についての状況

- < 達成した点・成果が認められた点 >
- ・ 新たなゲーム×アート作品の制作と国内展示、議論の活性化を推進した
 - ・ インディーゲームレーベル・ヨカゼのTaipei Game Showへの出展が海外メディアで取り上げられる等、海外からの反応を得た
 - ・ 次年度以降の海外の業界関係者の協力を獲得できた
- < 改善すべき点 >
- ・ 育成対象者のさらなる選定や、海外展開プロジェクトへの主体的な関与を促す必要がある
 - ・ 獲得した海外ステークホルダーとの文脈接続を強化し、合同プロジェクトや日本国内への誘致を通じて相互メリットを生む関係性を深める必要がある

プロジェクト名 『Kogei』アーティスト育成グローバル展開プロジェクト

採択団体名 認定NPO法人 趣都金澤



音楽

舞踊

演劇

伝統芸能
大衆芸能

補助型

舞台芸術

メディア
芸術

現代アート

分野横断

委託型

事業概要

学術研究機関と連携した国際シンポジウムの開催、主要な国際美術展における特別展示の実施といった海外展開を行い、従来の『工芸』に対するイメージや文脈を刷新し、新たな芸術として『Kogei』を日本の新たなコンテンツ市場として創出する。

活動計画

～3年目

～5年目

- ・ ヴェネチア・ビエンナーレ関連企画展を開催
- ・ 海外の美術館と連携した展覧会を開催
- ・ 工芸の新たな文脈をつくる国際シンポジウムの開催
- ・ 海外の主要な国際展における展示会等を開催

主な育成対象者



牟田陽日 | 作家

1981年東京生まれ。2008年にロンドン大学ゴールドスミスカレッジ（ファインアート科）を卒業し、2012年に石川県立九谷焼技術研修所を卒業。近年の主な展覧会に「清州クラフトビエンナーレ」（清州・韓国、2023年）や「ジャンルレス工芸展」（国立工芸館、2022年）、「GO FOR KOGEI 2021」（大瀧・岡太神社、2021年）などがある。主な受賞歴は、「第11回パラミタ陶芸大賞展」大賞（2016年）や「伊丹国際クラフト展『酒器・酒盃台』」優秀賞（2012年）。国立工芸館、パラミタミュージアム、能美市九谷焼美術館に作品が収蔵されている。

中核的な指導者・アドバイザー



秋元 雄史 | プロデューサー/キュレーター/批評家

東京藝術大学名誉教授、金沢21世紀美術館特任館長、国立台南芸術大学栄誉教授、美術評論家。1991年から直島のアートプロジェクトに携わる。地中美術館館長をはじめ金沢21世紀美術館館長、東京藝術大学大学美術館館長・教授、練馬区立美術館館長を歴任し、2021年から「GO FOR KOGEI」のアーティストディレクターを務める。『工芸未来派』展、『GO FOR KOGEI』等多くの工芸プロジェクトを監修・プロデュース。



Photo: cocoro

川井雄仁 | 作家

1984年茨城県生まれ。2007年に切尔西・カレッジ・オブ・アーツ (UAL) BA(Hons)ファインアート科を卒業。2018年に茨城県立笠間陶芸大学校研究科を卒業。近年の主な展覧会に「The Fourth Dimension うつわの未来へ」（2022年 益子陶芸美術館、栃木県）、個展「粒の数だけ抱きしめて」（2022年 KOTARO NUKAGA、東京都）、「FOOLISH FIRE」（2023年 Newchild Gallery、ベルギー）等がある。高橋コレクション、LOEWE コレクションに作品が収蔵されている。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ 2024年10月、パリのアートフェアASIA NOWで「伝統的芸能・美意識の現代化」をテーマに吉田真一郎と秋元雄史の展示を実施した
- ・ 韓国で行われる東アジア最大級の工芸フェアCraft Trend Fairで新里明士、橋本雅也、入沢拓の展示を実施した

プロジェクト関係者の意識・行動変容

- ・ 2年目のシンポジウム、3年目の展示に向けて準備を進めており、1年目の事業の中で重要性が感じられた現地機関との連携を更に強化することが重要だと認識した

令和6年度終了時点での育成についての状況

- <達成した点・成果が認められた点>
- ・ ASIA NOWで吉田真一郎が「Special Project」枠で展示し、約27,000人の来場者から注目を集め、活動の評価を獲得した
 - ・ 韓国のCraft Trend Fairで展示を行った新里明士、橋本雅也、入沢拓が、それぞれ現地で高い評価を受け、展示を成功させた
- <改善すべき点>
- ・ アートフェアで注目を集めるには、現地の機関による広報やネットワークの強化が重要であることを再認識した
 - ・ 主催者の協力により一定の成果を得たが、現地での広報活動に関してはさらなる改善余地がある

事業概要

独自のシンクレティズムを形成する日本文化の結晶とも言うべき茶の湯。中でも衣食住を包括するプレゼンテーションであり、現代アートの定義である「リレーショナルアート」と近似要素を持つ『茶事』を応用。日本人クリエイター育成に必要な2ステップ「海外の高い文化リテラシーを持つコミュニティとの対話（＝狭く深く）」「パブリック展開可能なパッケージによる展開（＝浅く広く）」を両立。

西洋中心の視点で東洋文化を愛でる「オリエンタリズム」に甘んじることなく、グローバルにおける真の日本文化の理解を構築する。その基盤の上にこそ意味を成す、作家の起用、適切なグローバルコミュニティにおけるキャリア形成、ひいては次世代の日本人クリエイターの育成が可能になる。

初年度における具体的な取り組みとして、世界的アーティスト、シアスター・ゲイツとのコラボレーション（森美術館『シアスター・ゲイツ展：アフロ民藝』展示内でのアート茶事の実施）や、メトロポリタン美術館キュレーター等を招いたニューヨークの老舗、マーサホテルでのアート茶事公演を実施した。



主な育成対象者

職種：作家（陶芸家/大仏師）、実演家（茶人）、プロデューサー、カメラマン、ビデオグラファーなど

一回4時間の「茶事」に用いる道具として作家の作品を魅せることで、日本文化のコンテキストに則した一貫通貫なプレゼンテーションを行う。少数精鋭のゲスト、4時間という十分な時間を活用して表層的な理解でなく、日本文化というものを伝える。本企画のターゲットに対しては、中核要素である東洋思想、日本文化、日本的シンクレティズムこそが、引きのあるコンテンツであり、厳選したメンバー＝作家・海外コミュニティの交流が活性化、グローバル市場における基盤を確立する。

中核的な指導者・アドバイザー



ナカヤママン。

｜マーケター/現代アーティスト

現代アーティストとして、世界三大アートフェアのひとつ「Frieze LA」に公式プログラムとして招致された他、国際映画祭EIC2024の公式招待作品に選出。マーケターとしては、ルイヴィトンやグッチ、シャネル、アニメ映画『シン・エヴァンゲリオン』等に関わる。

活動計画

～3年目

- 海外での「アート茶事」公演のノウハウ構築、適切な集客構造の確立、作家陣とプロデュースチームの人材育成
- ニューヨークとロサンゼルスを中心に最低でも3回の「アート茶事」海外公演を実施

～5年目

- 海外展開の継続実施、コミュニティの拡張。頻度、リーチ、エンゲージメントの最適化
- 映像化を含めてパブリック展開可能なパッケージ展開への拡張
- 美術館、ファッションウィーク、イベント等のコンテンツとしての採用も視野に

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- 世界的アーティスト、シアスター・ゲイツとのコラボレーションやニューヨークの老舗、マーサホテルを拠点とした展開を実現した。ゲストにはメトロポリタン美術館キュレーターも参加した

プロジェクト関係者の意識・
行動変容

- ゲスト：「現代アートとしての茶事」というコンセプトは、参加者の興味を喚起しており、起点として十分に機能
- クリエイター：難易度の高い「茶事における撮影」に対して前向きな試行錯誤の末、ノウハウ構築し始めている
- クリエイター：一部を対象にスキル不足が課題。メンバーや育成対象者の入替/追加を検討中

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- <達成した点・成果が認められた点>
- 計画通り公演を実施。全体企画としての「現代アートとしての茶事」という表現は継続実施の価値を実感
 - 両公演に参加したシアスター・ゲイツからも良いリアクションを得ている。ブラック・アーティストとして立身している彼から学ぶことは多数存在する
 - 初年度からニューヨークを拠点とした活動を開始。本企画の文脈を理解する現地層から高い評価を得た
- <改善すべき点>
- 海外公演に関するコスト問題：輸送・保険・円安下でのコスト増加への対応が課題。プロジェクト全体の構成(質と量のバランスなど)の見直しも含めて対応が急務

4 .文化施設による高付加価値化機能強化支援事業 詳細資料

(1) 採択プロジェクトインタビュー個票

(2) 採択プロジェクト概要

インタビュー対象	東京国立博物館	分野	美術館・博物館
プロジェクト名	Global Exhibition Team (GET) による日本文化発信プロジェクト	区分	大規模

インタビューサマリー








- ✓

文化庁の支援のもと積極的に推進している日本美術の海外展開は、海外からの要望も増えており、館同士の連携強化・拡大を図るチャンスを迎えている。一方で、人員不足や法務知識の不足をはじめ、他館へのノウハウ共有による業界底上げへの対応については課題を抱えている
- ✓

Global Exhibition Team (GET)は本基金への採択を機に、新設された世界規模での日本文化の魅力発信を行う館内の特命チームである。具体的な海外展覧会の企画・実施も進む中、GETおよび活動の館内認知度も高まっており、施設全体で海外展開の機運が醸成されている
- ✓

今後の継続的かつ主体的な海外展開に向けては、従来展覧会を開催していなかった国・地域の施設とのネットワークの拡充、館としてのノウハウ蓄積が重要となる。本基金へは、法務関係等当館に知見の少ない業務に対する支援や、館の活動を長期的に支える仕組みを求めている

インタビューメモ

調査項目		回答内容	 団体・施設	 指導者	 育成対象者
業界動向・海外展開の考え方・現状課題	●業界動向（日本の博物館・美術館の海外展開の現状）	 日本美術の海外への発信は、従来文化庁が主体となり「海外展」を実施していたが、現在は中止となっている。しかし現状では、日本美術の借用や展示に関する要望が海外の美術館・博物館から寄せられている。当館のように、文化庁の支援のもとに海外で日本美術の展示を積極的に推進している博物館は他にないと認識している。 また、当館は国立博物館であるため、海外の国立博物館が困ったとき等に連絡相談を受けることが多い。当館にはアジアの文化財も所蔵されているため、それらの地域の館とは共同調査・展示や、所蔵品の貸し借りを通じたネットワーク形成が進んでいる			
	●海外展開のステップ	 博物館の海外展開（展覧会）は大きく2パターンあり、相手先の館との共同企画・展示による「主催」と、相手先がテーマを決めて借用依頼を行う「貸出」である。これらの展覧会は相手先との交流関係のもとに成立する。 例えば、日韓国交正常化60周年を節目とした大規模展覧会等の相互でリソースを出し合うような展覧会は「主催」となるが、日本の文化財を所蔵する欧米の大規模文化施設では、研究員が企画内容を決め、当館に借用依頼を行う「貸出」が多い			
		 当館での海外展開は、MOU（国際交流協定）を結ぶことで、属人的な関係に依存せず館としての結びつきを維持、または強化しながら相手先との共通課題に取り組んでいく方針を取っている。MOUは継続的な協力を目的とし、展覧会開始時点で締結する場合もあれば、既に交流がある場合は展覧会の準備段階で締結することもある			
	●海外展開への考え方	 当館はこれまで米国や西欧への発信機会が多かったが、今後はまだ実績が無い東欧・中米・東南アジア・中東等に対しても積極的に展覧会実施の働きかけを行い、日本文化や日本美術への興味関心を引いていきたい			

インタビュー対象	東京国立博物館	分野	美術館・博物館
プロジェクト名	Global Exhibition Team (GET) による日本文化発信プロジェクト	区分	大規模




調査項目

回答内容













●プロジェクトの目的/概要
●プロジェクトにおける成果/今後見込まれる成果
●海外展開の課題

活動実績・成果およびその影響

 <p>国立文化財機構の一部門である当館は、「国際文化交流の振興」を使命として掲げており、継続的なネットワークの形成・強化を通じて、日本文化財のハブとしての知見の相互共有などの役割を果たすべく活動しているが、本プロジェクトへの採択を機に、特命担当「Global Exhibition Team (GET)」を立ち上げた。GETでは、世界で活躍する専門家の育成、さらには日本の伝統文化の国際的なプレゼンスの向上ならびに当該地域における日本文化のファン獲得・拡張を目標としている。</p> <p>GETでは以下の4事業を実施している</p> <ul style="list-style-type: none">● ジョイントリサーチ事業：より魅力的な展示を実現するための、出展作品に関する共同での事前調査を推進する事業● 展示メソッド事業：展示制限があるなど、脆弱な日本の美術品の基本的な前提知識を連携先の館に共有し、展示環境の違いへの対応や、オペレーションのしやすい展示メソッドの確立を推進する事業● パートナーシップ事業：海外の館とMOUの締結を通じて長期的な関係構築を目指しつつ、将来的な連携可能性の創出を推進する事業● デジタルコンテンツ事業：海外展で作成した作品解説や翻訳（英語・中国語・韓国語）、そして画像・写真データをデータベース化し、広くアーカイブ公開を推進する事業
 <p>2025年8月韓国での展覧会が終了し、入館者数や現地報道記事、アンケートの取りまとめを行っている。なお、2025年9月からは中国・上海で展覧会の開催を予定しており、既に館内作品の梱包作業中、10月から予定しているインドネシアでの展覧会に関しても図録を作成中であり、プロジェクト2年目も着実に海外での展覧会開催を進めることができる見込みである</p> <p>本基金のKPI達成の貢献にも紐づく、2025年実施予定のメキシコでの展覧会は延期となったが、2026年の11月に開催する旨を既に現地でも広報済みであり、2026年中の実施を見込んでいる</p> <p>2029年以降には、日本美術を所蔵するプラハ国立美術館での海外展を予定しており、作品の保管管理や修理に関しても助言を行う。これまで交流がなかったため、先にMOUを結び、その後、着実に調査研究・保存アドバイス・展覧会実施を進めていく予定である</p>
 <p>海外展開に取り組む人員および資金不足と、海外を含めた他館へのノウハウの共有が最大の課題だと認識している。他館へのノウハウ共有は、国内全体の文化施設の機能の底上げ・強化を図れるのではと考えている</p>

インタビュー対象	東京国立博物館	分野	美術館・博物館
プロジェクト名	Global Exhibition Team (GET) による日本文化発信プロジェクト	区分	大規模




調査項目		回答内容	 団体・施設	 指導者	 育成対象者
活動実績・成果 およびその影響	●プロジェクトにおける活動進捗/成果/今後見込まれる成果	 従来の海外展開に関しては当館で個別の担当者が任務を担っていたが、本基金で新設された「Global Exhibition Team (GET)」という組織のなかで複数名体制で実施している。組織化されたことでGET及びプロジェクトの認知度が高まるとともに、海外展開に係る相談先も明確になり、組織的にコミュニケーションスキームが確立されてきている			
	●育成対象者におけるプロジェクトの成果	 国際展のロジスティクスに加え、ミュージアム主催者側として在外日本大使館や国際交流基金とのやり取りが増えたため、ネットワークが拡充された。インドネシア展の図録/パンフレット作成を通じて多様な業務へ挑戦することができた			
	●本基金によって活性化した取り組み	 これまでは文化庁の海外展をサポートする形で展示品を貸し出すに留まっていたが、本基金では主催者側として責任を持って取り組むことで、法務関連の業務など主催者としての業務プロセスの中で館として不足している点などを認識できた。また、長期のプロジェクトとなっているため、館内でも海外展開に関われる人材が増えている			
	●広報・プロモーションの取り組み	 従来広報担当者を海外展に派遣することは予算の関係等もあり実現できなかったが、本基金により広報室員の現地派遣による取材や、SNSで海外に日本文化を発信することができた。館内ポスターやウェブサイトを通じた本プロジェクトの広報活動も実施しており、国内外への発信を強化している 大使館や国際交流基金、共同開催する海外館が既に持っているネットワークやノウハウをフル活用し、いかにコストパフォーマンスの高い広報ができるかを考えて実施している。そのために各関係各所とのコミュニケーションを密にとっていく必要がある			
今後の展望・本基金への示唆	●今後の展望・ビジョン	 引き続き、これまで交流のなかった館ともMOUを締結し、継続的な協力関係を築いていきたいと考えている 2029年まで、メキシコ・UAE・アイルランド・中国・チェコでの展覧会を企画しているが、日本と相手国の周年事業や相手館の会場状況等を考慮し、外務省大使館等とも連携しつつ調整している			
		 国内においては、ハローキティ展や内藤礼展など、若年層が関心を持つきっかけとなる展覧会が実施できている。そのため、まず国内で新たな企画に挑戦し、成果のあった企画を将来的に海外展開へ発展させる可能性も視野に入れている			
	●本基金への要望	 本プロジェクトを通じ、継続的に海外展開を主催する場合、法的知識を有する人材を確保する必要性を強く感じた。コンテンツの多様化による契約書や著作権対応が難しくなっている中、欧米に比べリーガルチェック体制の整備が甘いため引き続きの支援をいただけると有難い 本基金の支援期間は、現状最大5年であるが、時間を要するプロジェクトが多いため、より長期間支援があることが望ましい			

インタビュー対象	森美術館	分野	美術館・博物館
プロジェクト名	グローバル・アート・プロフェッショナル育成プロジェクト	区分	大規模

インタビューサマリー

- ✓ 日本の美術館では、学芸員と事務員という組織体制による不足や、メディア企業を中心に海外から展覧会や主要美術館コレクションを輸入するモデルが続いたことによる館内のPMOや交渉のノウハウの不足、そして国際的なネットワークを持つリーダーシップ層の不足などが海外展開に係る課題として挙げられた
- ✓ 同館として知見・ネットワークの薄い建築分野における海外巡回の実現に資するネットワーク拡充が進行している点は、施設の機能強化に寄与。また、海外巡回経験のない育成対象者の実務を通した育成も並行し、今後の人材面での施設の機能強化にも期待が持てる
- ✓ 引き続き、海外巡回に伴う業務経験（とりわけネットワーク構築経験）を次代を担う若手人材にも継承しつつ、そのノウハウを国内美術館へも広く共有していくことが求められている

インタビューメモ









調査項目		回答内容
業界動向・海外展開への考え方・現状課題	●日本の美術館の現状	 団体・施設 明治維新以降、欧米の近代化に追従した日本は、アジアの中では比較的早い時期に美術館・博物館政策を始めた国であると言える 国内の国公立美術館には、海外の建築系美術館やMoMA（ニューヨーク）、M+（香港）のように 建築・デザイン部門を持っている美術館がほとんどなく、建築キュレーターが育成出来ていない状況である 。そのため諸外国の建築系美術館や総合美術館の建築部門において継続的に試みられている「 建築を展覧会化する 」ということの可能性に関する情報共有が、日本では十分になされていない
	●海外展開に係る課題	 指導者  育成対象者 1990年代、2000年代以降にアジア地域でも欧米のモデルに準じた多様な専門性を持った文化施設が生まれているのに対して、日本は学芸員と事務員という旧来の組織体制や、メディア企業を中心に海外から展覧会を輸入するモデルが続いたことがあり、 美術館内にPMOや巡回交渉等のノウハウが育っていない 。また、 館長レベルでの国際的なネットワークが不足しており、海外から顔が見えている館長が少ない現状である 1990年代に比べて多くの文化施設が新設されるアジア地域（シンガポール・韓国・香港等）においては、輸送費のコストシェアや共同コミッションなどのコスト削減対応策を行いながら展覧会の巡回は以前に比べて頻繁に実施されている。一方で、日本の公立美術館は、 単年度会計かつ一円単位での予算計上 が求められるため、 外貨が変動するなかで国際的な協働には参画しにくいという制度的な問題を抱えている

インタビュー対象	森美術館	分野	美術館・博物館
プロジェクト名	グローバル・アート・プロフェッショナル育成プロジェクト	区分	大規模

 団体・施設







 指導者

 育成対象者

調査項目	回答内容
業界動向・海外展開への考え方・現状課題	<div> 基金によって海外巡回が実現することは有意義なことだが、本来は経費等の助成をなしに海外の美術館等が企画を購入し、予算も負担するというモデルがあるべき姿であるため、今後基金等の助成がない中でいかに海外巡回を実現していくかは課題と言える</div> <div> 海外美術館との巡回・共同展示は、館長クラス同士の話し合いという、トップダウン型によって話が進むことが多い。世界の著名な美術館の館長が定期的にカンファレンス等で集まり、意見交換をしている。また個展の場合には、アーティストが知り合いのキュレーターに相談したり、キュレーター同士が相談したりすることにより巡回や共同展示が成立する場合があるが実現性が高いのはトップダウン型である</div> <div> 海外巡回により当館のスタッフも育成しつつ、この仕組みを継承していきたい。また、海外巡回はネットワークありきで成立するため、本プロジェクトの育成対象にも顔の見える関係構築を行ってもらうことで持続的な仕組みにしたい</div>
成果およびその影響	<div> 本基金を活用して、当館の内部にて、海外の美術館とグローバルスタンダードな方法で交渉するノウハウを身につけたスタッフを育成し、本基金終了後も海外巡回を継続していける組織作りをしたいと考えている</div> <div> 当館における藤本壮介展の開催で、2025年7月から11月までが会期となっているため、令和6年度のはじめの半年間については、同展示会のための準備として企画・制作を実施していた。現在は令和8年度のアジア巡回に向けて、国際巡回が可能であるような美術館・文化施設への交渉を続けているところである 海外巡回の交渉に関しては、タイミング・予算があれば、実際に欧州やアジア各地の美術館に行き、先方のキュレーターと話をしている。また知人の伝手を使い、メール・オンラインベースで営業をしている</div> <div> 前職は新聞社に勤めており、国外からの輸入型の国内展示会の制作には携わっていたが、コンテンツを国外に巡回する輸出型の展示会・巡回に携わるのは本件が初めてであり、経験値のある館内スタッフから学びながら業務を進めている 本基金のようなプロジェクトで育成を受けるのは初めての経験であり、海外巡回のためには強固な人的ネットワークが不可欠であるため、本基金を通してネットワークを拡大しようとしているところである</div> <div> 海外の人的ネットワークの構築は、どれだけ相手と多く対話を行い信頼関係を築けるのか、という点に懸かっており、長期的な視座を持つべきだと考えている。また海外との巡回展の実現に向けて、最低でも2.3年先の話として海外美術館と交渉しなければならぬため、現状は苦戦しているといえる</div> <div> 巡回難易度の高い建築展における海外ネットワーク構築は、巡回の実施有無に関わらず進展したと考えている</div>

インタビュー対象	森美術館	分野	美術館・博物館
プロジェクト名	グローバル・アート・プロフェッショナル育成プロジェクト	区分	大規模



調査項目	回答内容
活動実績・成果およびその影響	<p> アジア・ヨーロッパの美術館に対して、現代建築の展覧会の巡回交渉をするのは初めての経験であり、常日頃からこの美術館で現代建築展が行われているかを意識的に情報収集するようになった</p> <p>海外巡回を視野に入れて、国内展覧会の制作や予算の考え方などを意識する習慣がついてきている感覚である</p> <p> 建築・デザインの分野で国際的に活躍するキュレーターに、今回のワークショップにあたり招聘すべきキュレーターについての助言をいただいた。その際、協力いただいたキュレーターは各美術館におけるキュレーターの嗜好性やこれまでの経験等を把握しており、このような深い関係を保持していくことが重要であると感じた。そのためには日頃の信頼関係作りだけでなく、キュレーターとしての経歴に関する情報に関しても知っておく関係構築や海外巡回においてポジティブに働くと感じた</p> <p> 国際展事業の建築部門の講師は世界的にも注目されている建築キュレーターを招聘できているため、今後20年ほど使えるようなネットワークを構築していけば業界還元につながると思う</p>
今後の展望・本基金への示唆	<p> 同一基金内で国際展事業（建築系・美術系のキュレーター人材の育成事業）としてワークショップを令和7・8年度に開催する。本基金以後も当館の内部スタッフの育成は実施していくつもりであり、また既に国際的な交流会（カンファレンス・セミナー等）に積極的に参加しているところである</p> <p> 海外の巡回展はそもそも複数年で交渉・営業をするものであるため、単年度のみの助成では実現が困難であり、今回の基金は非常に有益である一方で、基金終了後も各団体・施設が自走できるシステムの構築は容易ではなく、基金後のフォローアップもすべきであると考える。しかし、そのようなシステム構築を行い、文化施設の高付加価値化を実現するというのは非常にハードルの高いものということも同時に理解している</p> <p> 30代・40代の若手人材が自力ではできないような経験を通して、その後に繋がるプロフェッショナルな人的ネットワークを作るということは、国としても継続的にやっていくべきことだと思うが、それを継続できるかが重要。また全国には、美術館が400館程度あるなかで、今回文化施設の採択は4館と全体で見ると一部に留まっており、本基金で培ったノウハウや内容を情報発信していくことが重要だと考える</p> <p>日本は欧米に対してかなりの金額を使いコレクションを借用してきたが、発信の少ない輸入偏重型の構造を変えるべく、本基金の期間で人材育成を行うことで、美術館の館内スタッフで巡回ができるような素養を身に付けられていると望ましい。また、本基金終了後に、海外展開のためにどのようなモデルを目指すのかも議論していく必要がある</p>

インタビュー対象	愛知県芸術劇場	分野	劇場・音楽堂等
プロジェクト名	Constellation～世界をつなげる愛知県芸術劇場ダンスプロジェクト～	区分	小規模

インタビューサマリー





- ✓

ダンスの分野では、海外劇場は自前のカンパニーが作品制作・人材育成・販売展開を一貫して行い、作品完成後はつながりのある近隣国から順々に公演を行う一連の流れがある。一方、日本では、劇場とカンパニーの関係がそもそも異なり、劇場が自前のカンパニーを持つところは非常に少ない。日本の劇場では、カンパニーを持つのではない形でも機能強化が求められている
- ✓






本プロジェクトでは、令和6年の活動をきっかけに交渉を開始した海外公演もあり、アウトカム達成に資する成果創出が進んでいる。それらの交渉やネットワーク構築の現場に育成対象者も立ち会うことで、コミュニケーションや交渉のスキルを実践で学ぶ機会を作ることができた
- ✓

ダンス作品の持続的な海外展開に向けては、現状の日本から海外への展開支援だけでなく、双方向の展開を支援する仕組みが求められる。また、プロジェクトとしては、比較的小規模のダンス公演の効率的な海外公演に向け、海外現地ディストリビューターとの連携・活用を図っていきたい

インタビューメモ

調査項目		回答内容	 指導者	 育成対象者
業界動向・海外展開に対する考え方	●業界動向（諸外国と比較した際の日本のダンス分野の違い・特徴）	<div><div></div><div>海外は多くの芸術分野で長い歴史があり、公共が劇場・カンパニーを持ち、制作から人材育成まで取り組んでいた一方で、日本の施設は1990年頃から活動が開始し、2000年頃から劇場を拠点に盛んに活動が行われるようになったばかりである。日本では多くの劇場が貸館であるため、ダンスの制作・上演を主要事業とする施設が少ない。加えて、コンテンポラリーダンスをある程度の頻度で上演している劇場が少ない。また、クリエイションができる劇場も不足している。</div></div>		
	●海外展開における課題	<div><div></div><div>欧米を中心とした海外では劇場がカンパニーを有し、劇場で制作、公演まで実施するプロセスがあるため、人材育成の取組も活発である。そのような構造がない日本の劇場は、プロデューサーやそれを支える専門スタッフが圧倒的に不足している状況である</div><div>海外であれば自分の劇場で制作、公演後に既にネットワークの築かれている周辺国から始まり、遠方の国まで再演していく流れがあるが、日本はそのような一連の流れを構築できず、ゆえにクリエイションの質も高めづらかったのだと思う。そのため、現状国際的に活躍する日本人は、海外に拠点を移して上記のような流れに乗って活躍するアプローチを取らざるを得ず、日本を起点に作品を制作し、海外に展開するという経路が絶たれていると考えられる</div><div>日本に関心を持つ海外の劇場やフェスティバルは存在するが、現状海外との交流が活発ではない中で、日本の劇場や作品に関する情報の入手先が限られており、その担当者ともコンタクトを取るのが難しい状況である。また、日本ではダンス作品の上演機会が少ないため、海外からプロデューサーが来日した際に公演を気軽に見ることができないのも課題である</div></div> <div></div> <div></div>		







インタビュー対象	愛知県芸術劇場	分野	劇場・音楽堂等
プロジェクト名	Constellation~世界をつなげる愛知県芸術劇場ダンスプロジェクト~	区分	小規模

調査項目		回答内容
海外展開に対する考え方	●海外展開のステップ	 展開したい国の見本市やショーケースに作品を持っていくことや、各国のダンスプラットフォームに日本から関係者を10~20名ほど連れてジャパンプラットフォームのような形で海外で発信することが考えられるが、後者はなかなか予算的にも実施が難しい。一方でダンスはノンバーバルなコンテンツであるため、他ジャンルと比較して展開しやすい面もあると考えられる
	●これまでのプロジェクトの進捗状況/活動実績	 プロジェクト初年度は、一部作品の創作・上演を行う一方、見本市でのブース出展・作品紹介等を通じた海外ネットワーク構築を実施しつつ、海外フェスティバルにも訪問し、どのような関係者がいて、どういう作品を求めているのかリサーチを実施した
活動実績・成果およびその影響	●基金によって活性化した取り組み	 業務で海外の見本市やフェスティバルを視察することが難しい中、休暇等にプライベートで現地視察に行く職員も多いため、本プロジェクトの始動によりこれを正式な業務として遂行できる環境が整った点は非常にありがたい。本基金が劇場の価値向上に繋がり、多くの方が当劇場にダンスアーティストとして関わる機会を得られたことも意義深く感じている
	●プロジェクトにおける成果/今後見込まれる成果	 2026年2月中旬にハンブルク（ドイツ）の舞台芸術フェスティバルにて作品を上演予定である。ハンブルクでの公演は、横浜のYPAMでの公演をきっかけに紹介を受け、2025年2月に決定した。 また、2026年5月にユトレヒト（オランダ）のスプリングフェスティバルでの上演も決定した。さらに同年8月にはチューリッヒフェスティバル（スイス）への招聘の話もいただいている アーティストの作品制作のみではなく、それをどう届けるか、どうネットワーク構築するか、観客とどうコミュニケーションするか、なぜ作品を届けるのかも意識的に考える必要があるが、地域住民との交流や活動を通じてそれらを育成対象者に考えて頂くきっかけとなったと考えている
活動実績・成果およびその影響	●育成対象者におけるスキル/マインドの変化・成長実感	 海外展開への意欲は元々あったが、本プロジェクトへの参加を通じてさらにモチベーションが高まり、自分の作品をどう届けるかを深く考えるようになった。オランダフェスティバルでは多様な作品やアーティストの存在に刺激を受け、トレンドや海外で求められる作品の要素を確認することができ、海外展開に向けた戦略や自身のやりたいことを突き詰める重要性を再認識した。作品のプレゼンテーションで高評価を得たことも自信につながった。若い世代にも海外で多くを見て、刺激を受けてほしいと感じた（アーティスト） 本プロジェクトでは、ドイツ、オランダ、オーストリア、そしてフランスにてダンスフェスティバルの視察やリサーチ、舞台芸術関係者とのミーティングを実施した。会う人の立場によって話し方を変えるなどのコミュニケーションの重要性を学んだ。 また、欧州の各フェスティバルを回っていると、面識のある関係者とも再会することになるため、どのように継続的に関係性を維持するかを考える良いきっかけとなった（劇場スタッフ）

インタビュー対象	愛知県芸術劇場	分野	劇場・音楽堂等
プロジェクト名	Constellation~世界をつなげる愛知県芸術劇場ダンスプロジェクト~	区分	小規模



団体・施設 指導者 育成対象者

調査項目	回答内容
活動実績・成果およびその影響	<div><p>「Constellation」のウェブサイトはこれまでの販売を目的としたサイトとは異なり、基金での取り組み自体/アーティスト等の育成スタッフの紹介を行うサイトとした。作品のスペック紹介や、コンタクトがあった際には直接愛知県芸術劇場とやり取りし、作品の詳細スペックを提供できる仕組みとした。ウェブサイトを見て作品に関するコンタクトが入ることが理想である。一方で、ウェブサイト経由で作品のコンタクトが入るようになるための今後の運用や取り組みは課題と感じている</p></div> <div><p>当劇場だけでなく複数の類似の活動をしているダンス団体と協力して海外見本市でのブース展開を行ったが、日本の新たなダンスを統一感を持って効果的にアピールできたと思う。海外ディレクター等来場者にしても、ひとつずつ館や団体を見るのは手間だが、一度に紹介することで、日本のダンスコンテンツをまとめて訴求でき、かつセールスにも繋げやすいという印象を受けた</p></div> <div><p>単に国内公演を行うだけではなく、創作プロセスや活動の中に県民との繋がりを作ることを目的とした。そこで自身の作品以外にもワークショップの実施、コンサートの中でオルガンとのコラボレーション、無料イベントに出ていただくなど、劇場がハブとなり、地域の活性に寄与する様々な活動を実施した</p></div> <div><p>当劇場で、一般の方向けに、踊りの魅力や楽しさを伝えるワークショップを開催した。普段はバレエ経験者に対する指導が多い中、初心者の方々との交流だったため、改めて踊りを通じたコミュニケーションの広がりやその可能性について認識した</p></div>
今後の展望・本基金への示唆	<div><p>本基金は、「日本から海外へ」というコンセプトとなっているが、基本的に海外の劇場関係者も日本での上演を望んでいるため、継続的な海外展開を実現するためには、日本と海外の双方向の交流を促すような仕組みに変えていく必要があると考える。欧州では渡航費を補助する支援制度も整っているが、本基金の場合、他の補助金との併用ができない点は課題である</p><p>海外での小中規模の作品上演の際には特に、プロモーションを含めた効率的な活動を行いたいと考えている。例えば、現在2026年2月と5月に欧州（ドイツ・オランダ）での公演が決定しているが、その前後で現地の劇場1ヶ所ずつに作品上演の交渉をしている。しかし、劇場に直接交渉しているため、スケジュールの確保や初めての作品の受け入れに苦戦している。1回の上演だけで帰国するのは効率が悪いと、一度の渡航で複数の上演を実現するためには、劇場との交渉やツアー実施を効率的にサポートしてくれるディストリビューター等とのつながり・活用が必要だと考える</p><p>事業を遂行している結果、当初の計画以上の成果を出せる見込みであるが、現在確定している助成額では、創作やPR活動などの活動範囲が非常に限定的にならざるを得ない状況である。海外からのオファーが増えてきた場合に、海外公演の資金が不足して、せっかくの海外公演の機会を諦める可能性も大いにありうる。よって、次の2年間については、そういったチャンスが無駄にならないような取り組みも考えてほしい</p></div> <div><p>ネットワークは個人に依存しがちだが、それが広く共有されると良い。業界全体として広く共有していれば大きいインパクトを生み出せると感じる</p></div>

インタビュー対象	江原河畔劇場	分野	劇場・音楽堂等
プロジェクト名	無隣館インターナショナル	区分	小規模

インタビューサマリー




- ✓

演劇分野の海外展開として海外の演劇祭・芸術祭に出展するにあたり、一方的な輸出を目指すのではなく、海外作品を日本の演劇祭・芸術祭に輸入することを前提に相互関係を築き、海外展開を狙っていくことが重要となっている
- ✓

江原河畔劇場の育成方針の浸透による各育成対象者における意識変容が、各自の活動を見直し、新たなアクションを取るきっかけづくりに寄与。また、一部今後の海外公演（パリ）に関する交渉も進んでおり、海外展開においても成果の見込みが窺える
- ✓

クリエイター視点では、より多くのクリエイターが海外展開の可能性を掴むために各国市場の特徴や自身の作品との親和性に基づく助言など、分野でのマーケティングインテリジェンス的機能を求める声が挙がる。分野での積極的な情報交換は継続的な海外展開の肝と思料

インタビューメモ











調査項目		回答内容
業界動向・海外展開に対する考え方	●業界動向（日本の演劇分野の諸外国と比した特徴）	<div>日本では大学における演劇の教育はほとんどなく、小学校・中学校においても演劇という教育科目もない。そのような国はOECD加盟国でも日本含め3カ国だけという状況で、大きな課題であると感じている</div>
	●海外展開における課題	<div><div></div><div>海外展開をしたい場合でも、いきなり日本人が海外で演劇公演を実施しようとしても相手にされない。幸い江原河畔劇場が主体的に参画している豊岡演劇祭は多くの団体がフリンジとして参加していて、豊岡演劇祭と関係が持てるということのひとつのポイントとして海外交渉が可能だが、それらの交渉材料を持たない団体は簡単に海外展開しづらいと思う。このように、海外展開はあくまでも相互的であることが国際交流の原則であり、そうでないと海外マーケットに参画もできない</div></div> <div>演劇は相手（鑑賞側）ありきなので、国ごとに何が評価されるか異なることが難しい。作品をブラッシュアップすることは大事だが、ブラッシュアップすれば評価が得られるものではなく、翻訳やマーケットの問題はこちらでコントロールできない</div>
	●海外展開のステップ	<div><div></div><div>海外展開はあくまでも相互的なものであり、作品を展開したいこちら側も海外からのアーティストの受け入れを実施し、それをパートナーにこちらの作品の受け入れも依頼するのが重要である。</div><div>いきなり日本人が海外に行っても相手にされない状況の中で、豊岡演劇祭はフリンジに力を入れているため、豊岡演劇祭への参加を材料に海外の芸術祭に参加するためのきっかけを作りやすい特徴がある</div></div>

インタビュー対象	江原河畔劇場	分野	劇場・音楽堂等
プロジェクト名	無隣館インターナショナル	区分	小規模



調査項目	回答内容
おおよそその影響	<p>●施設の機能強化のありたき姿</p> <p> 当館としては2020年から、地域を活性化するだけではなく、「江原から世界へ」を目指して中継点としての役割を目指してきたが、新型コロナウイルスもあり活動を自粛していた。本基金で事業を再開できたため、国際共同事業などもより多くの地域住民に触れていただき、当館および演劇の認知が頂けるような拠点にしていきたいと思っている</p>
	<p>●人材育成の考え方</p> <p> 人材育成において大事なことはトラッキング（定点的な進捗確認・評価）と、競争と淘汰の原理と考えている。それに基づき、令和6年度でも、幅広く育成対象者を公募しつつ年度ごとに人員を絞って選抜している。令和6年度から令和7年度にかけて各々の進捗を踏まえて、評価とインセンティブ（育成対象者に与える予算配分）を定めてきた。また選抜された育成対象者は実績も異なれば、現状のプロジェクトの中での進捗も異なっているが、その進捗の差を厭わず、競争意識を持たせるようにしている</p> <p>単に海外公演をすることが最終目標ではなく、きちんと海外の演劇界、あるいは学術界で名誉ある地位を占めるようなアーティストを育成することが最終的なアウトカムなので、そのために時間をかけてじっくり育成に取り組みたいと考えている</p> <p>既存事業の無隣館で教養講座の実績はあるため、その中で特に海外を意識した教養講座を令和6年度の活動として実施しており、人材育成の実績が他施設比較で多い点は当館の強みである</p>
	<p>●プロジェクトの活動実績</p> <p> プロジェクトでの活動としては、海外展開を意識しながら年12回の教養講座、合宿研修、週2回のメンタリングを実施。海外視察は、令和7年度は4か所実施し、何を視察し、誰と会うかというところまで緻密に海外視察の計画を立てている。また豊岡演劇祭では今年から、海外のプロデューサーを招聘する新たなプログラムが設けられ、ショーケースとしての機能がさらに高まることが期待される</p>
	<p>●プロジェクトにおける成果/今後見込まれる成果</p> <p> 令和6年度は研修がメインだったが、段階的な活動成果として豊岡演劇祭での字幕付きの公演を実施。令和7,8年度では海外での公演を見込んでおり、現在フランス・パリでの海外公演の交渉に入っているメンバーもいる。</p> <p>令和6年度での活動が育成対象者それぞれの各自の活動（豊岡演劇祭のフリンジや別フェスティバルへの参加等）へ繋がっている点も、本プロジェクトへの参加による意識変容の結果だと思う</p>
	<p>●育成対象者におけるスキル/マインドの変化・成長実感</p> <p> 他の育成対象者もレベルも高く、学びを深めつつ、競争環境にあるという状況で、今何が必要かという点を意識して活動に取り組めるようになった。海外でのアーティスト等との出会いや、利賀村（富山県）での様々な出会いの中でなにかしら演劇業界・舞台芸術業界に還元できるのではと具体的に考える機会が増えた。</p>

インタビュー対象	江原河畔劇場	分野	劇場・音楽堂等
プロジェクト名	無隣館インターナショナル	区分	小規模




調査項目		回答内容	
		<div><div> 団体・施設</div><div><div></div>指導者</div><div><div></div>育成対象者</div></div>	
活動実績・成果およびその影響	●育成対象者がプロジェクトを通して感じた成果や変容	<div><div></div><div>これまで漠然と目指していた海外展開だったが、本基金の事業に参加して自分の現在地とやるべきことが明確になっており、自身の現在地だと芸術祭などでメインプログラムをいきなり目指すのではなく、まずは、小さな作品を世界各地で展開して知ってもらうことが重要だと思った。また、海外展開された作品をたくさん紹介頂く中で、国際的な日本独自の特徴などを戦略的に混ぜていくということが重要であるということがよく理解できた</div></div>	
	●海外でのプロモーション活動	<div><div></div><div>視察チーム（市場）ごとに企画書を作成してもらい、広報のやり方をそれぞれ現地コーディネーターとすり合わせながらブラッシュアップしていつている段階</div></div>	
	●育成対象者視点でのプロモーション活動に関する現状・課題	<div><div></div><div>海外の場合はInstagramでの広報が必要だが、AIなどを活用してなんとか多言語対応も実施出来ている状態。個人としては知名度もあまりないが、江原河畔劇場のウェブサイトなどで紹介して貰えれば、プロモーションの効果も相乗的と思われる ハッシュタグ（＃）の付け方次第で、アナリティクスを見ると海外からの流入があり、今後は舞台映像とSNSからの流入、現地で実践可能なステージライダーを有機的に回すことが国内で出来る広報だと認識している</div></div>	
	●本基金のメリット	<div><div></div><div>育成においてきちんとした競争と淘汰を行うには時間がかかるため、育成に複数年度の猶予を頂けたことは大変有益である。予算も明示されているため、参加者に対して、「全体の年度で使える予算があるため、どのように配分するかを育成対象者の評価に基づいて配分していく」旨を説明がしやすく、競争と淘汰の原理を反映しやすい</div></div>	
	●基金の活動を経ての地域・社会への影響	<div><div></div><div>豊岡市は人口7万5千人と非常に小さな町でインパクトが実感しやすい。例えば、城崎温泉という関西随一の観光地を抱えており、豊岡演劇祭も賑わっているため、地域への還元が実感できていると感じる。 海外のアーティストと共同制作をする場合にも、宿泊施設を持っている城崎国際アートセンターや江原河畔劇場で集中的に実施したり、国際共同制作等も実施が可能であるため、次のステップとしてはそれらも実施したい。 また、市内に芸術文化観光専門職大学もあるため、今後は育成対象者に短期の講座を持ってもらうことも考えている</div></div>	
本基金事業への今後の活動や示唆	●本プロジェクトのプロモーション活動における展望	<div><div></div><div>本プロジェクトのどんな育成対象者がいて、どんな取り組みをしているのかを発信するために準備を行っている。 2025年9月の豊岡演劇祭の際に紹介したり、各々の作品の上映に向けて翻訳資料なども紹介できるように劇場としても取り組んでいきたいと考えている</div></div>	
	●これまでの活動を踏まえて、求められる支援等	<div><div></div><div>各国での演劇の位置づけや、求められている表現、各国のトレンドなどの情報や、個々人の作品や特性に応じたターゲット市場の情報や助言があると多くの人材が活躍できる確度高くなるのではないと思う 国内での（座学での）学びの場は得ているが、地政学的にも海外と交流し続けることが難しい。単発の視察だと国際演劇祭に視察に行くことのみに留まってしまうところがあるので、創作だけではなく長期で様々な目的のための派遣があると良いと思う</div></div>	

インタビュー対象	東京芸術劇場	分野	劇場・音楽堂等
プロジェクト名	TMTギア – 東京芸術劇場クリエイター支援プロジェクト	区分	中規模

インタビューサマリー

- ✓ 日本の舞台芸術コンテンツは、海外から高く評価され、海外展開の好機を迎えているが、文化施設としてはいかに実力のあるタレントに依存せず、システムティックに海外販路を確立できるかが課題であり、積極的な海外プログラムへの参加、海外劇場との連携交渉等が求められている
- ✓ プロジェクト初年度は、海外フェスティバル・劇場視察や国際会議への参加等を通じ、育成対象者のネットワーク構築や国際感覚の醸成を支援。育成対象者とプロジェクト未参加スタッフの会話を通じ、館のスタッフ全体での海外展開への機運醸成や意識変容も見られた
- ✓ 館としては、長期的な視点で責任ある海外展開交渉ができるという本基金ならではのメリットを享受しつつも、舞台芸術分野とその他分野の違いを踏まえた成果指標・成果創出スパンの設定への工夫や配慮を求める声も挙がり、分野ごとの適切な評価体系の検討の余地が垣間見えた

インタビューメモ







調査項目		回答内容
業界動向・海外展開への考え方・現状課題	●業界動向	 演劇・ダンスの業界においては、新型コロナウイルスによる影響が落ち着き、国際交流が再開したという状況であるが、コロナ前後で様々な変化を感じている。例えば、 演者や制作関係者等の飛行機の移動に対するエコ・脱炭素志向の浸透や、オンラインでの取組・活動が増えたことで、「生で上演することの価値」が高まっていると感じており、国際フェスティバルも、人件費や物価等、物流コストの上昇等の経済的な状況を背景に、従来の舞台芸術のあり方やプログラム内容の再編成が行われている
	●日本のコンテンツへの評価	 一方で日本の演劇コンテンツに関して言えば、ロンドンのウエストエンドで2.5次元系のアニメを原作とした作品が大ヒットする等、 日本のコンテンツへの期待・関心が非常に高まっており、日本にとっては海外展開の絶好の機会であると捉えている
		 今回ブリティッシュ・カウンシルからの招聘で訪問しているエディンバラ・フェスティバル（イギリス）においても、本基金の別プロジェクト「SOIL」が発信するプログラムや、劇団鹿殺しの作品の評価が高く、日本のコンテンツの人気を目の当たりにしているところである。特に劇団鹿殺しは5つ星評価を獲得するなど活躍が顕著であった。 また、フェスティバルに来て感じることは、国ごとに作品やその作り方に様々な特徴が見られるものの、 日本人は丁寧かつ繊細に、細やかに芸術を創り上げる などということ。その点はプロデューサーや制作スタッフの力もすごく大きいと思うが、日本の強みとして大事にしたいポイントだと感じた。 極めて伝統的なものや美意識が高いものと、キッチュなもの両極端が一緒に存在しているというのも、日本の魅力のひとつだと思う

インタビュー対象	東京芸術劇場	分野	劇場・音楽堂等
プロジェクト名	TMTギア – 東京芸術劇場クリエイター支援プロジェクト	区分	中規模








団体・施設


指導者


育成対象者

調査項目	回答内容
業界動向・海外展開への考え方・現状課題	<p> 文化施設としては、従来の才能の突出した芸術監督やプログラムディレクターに依拠した属人的な展開から脱し、システムティックに海外への販路拡大することで館の機能強化に繋がっていくことが求められていると思う</p> <p>また、同時に新たな才能の発掘に熱心なブリティッシュ・カウンスルが実施する海外プロデューサー向けのプログラムに日本からも多くの人を派遣する等、もっと積極的に販路拡大・機能強化に必要なネットワーク構築にも取り組む必要があると考えている</p> <p>国家両庁院（台湾）は積極的にシャイヨー国立劇場（フランス）、アヴィニョン演劇祭（フランス）等とMOA (Memorandum of Agreement)を結ぶなど、フットワーク軽く、積極的に海外提携を進めている。その中で、同館がプロデューサーを3年にわたり育成するプログラム（Asia Connection：Producers Camp）を立ち上げ、シンガポール・ソウルの劇場・当館と合同で実施した。当館からは今回の育成対象メンバーが参加した経験がある。参加者は、海外への視界が開けるだけでなく、国際的な仕事につながる可能性が生まれるため、これらの海外に出る機会は、制作者・プロデューサーにとって重要である</p> <p> 当館は、ネットワークがイギリスやフランスにとどまり、全世界に張りきれていないため、アジア地域のネットワーク強化を図りたい。また、新型コロナの影響で取り組めなかった若手スタッフの海外ネットワーク構築にも取り組む。なお、近隣の韓国・シンガポール・台湾は、日本よりもネットワーク形成に積極的であり、見習いたいと思っている</p>
活動実績・成果およびその影響	<p> 本プロジェクトの目標としては、育成対象クリエイターの作品の海外上演、高評価の獲得であるものの、5年後には初期の育成対象者が海外で継続的に活躍し、インナースタッフによるクリエイター発掘や海外との関係構築を行いながら、後続を育成する仕組みを作ること、持続的な海外展開と機能強化が実現できる体制を作りたいと考えている</p> <p> 今年の5～6月にかけて、オン・ジョブ・トレーニングの一環として、ルーマニアのラドゥ・スタンカ国立劇場と共同製作を行った「ヨナ-Jonah」の東欧ツアーに帯同した。自分自身も制作現場に身を置きながら、現地の方々との信頼関係の構築や、日本と異なるスピード感等の文化の違いを体験し、今後の制作業務を行う上で必要な視点を得ることができた。また、初めてシビウ国際演劇祭に参加し、日本とは異なる現地の空気感に大きな刺激を受けた</p> <p>そして、6月には韓国のK-Musical Marketに参加し、公演やピッチの視察や他カンパニーとの意見交換を行った。中でも、日韓共同制作を行う日本のプロダクションのピッチやプレゼンは、同様の経験が少ない当館にとって、先行事例として大変学びが多かった</p> <p> 映像モデル検証事業で、今回の「ヨナ-Jonah」公演のドキュメンタリー映像を、出演者らによる欧州ツアーの成果報告会で披露したところ、非常にインパクトと説得力があり、地方の館からも広報活動で利用したいという連絡を受けている</p> <p> 今年の始めにニューヨークで行われた国際会議、The International Society for the Performing Arts (ISPA)に育成対象メンバーを帯同して参加し、自分のネットワークを彼女に共有した。のちに彼女がギリシャのフェスティバルに参加した際には、その際に共有したネットワークを活かした活動を行うことができ、若手スタッフのネットワーク構築も順調に進んでいる</p>

インタビュー対象	東京芸術劇場	分野	劇場・音楽堂等
プロジェクト名	TMTギア – 東京芸術劇場クリエイター支援プロジェクト	区分	中規模

調査項目		回答内容
活動実績・成果およびその影響	●これまでの活動実績・成果【音楽】	 音楽に関しては、当館が長年実施しているBorn Creative Festivalを来年の3月に行う予定であるが、その際に世界中の演奏家が集まるのに合わせ、クリエイターの発表機会を作ることができないか模索しており、昨年度より育成対象メンバーがディレクターやプロデューサーの招致に向けたネットワーキングを進めているところである
	●本プロジェクトによる団体/業界等への好影響や波及効果	 上記の進捗報告およびその先の海外展開に向けて公演候補地先となる劇場とのネットワークキングのために、今年3月にドイツを訪れ、これまでは担当者レベルでのつながりだった館同士の関係性強化に向けてミーティングを行いつつ、視察を実施した 視察では、直近10年で新設された劇場を回ることができ、日本にしていると知り得なかったような業界の最新事情や注目すべきアーティストの情報を入手できたことは大きな収穫だった。普段東京での自分の仕事との違いや距離感を比較できたとともに、アートクリエイターと協働する際に参考になる部分をたくさん持ち帰ることができたと思う
		 育成対象になっていないインナースタッフとも海外展開を意識したような会話ができるようになったり、作品に対する意見交換や海外マーケットの情報の交換等も館内で活発化した。K-Musical Market（韓国）では他施設関係者とも連帯感を持ち、情報共有ができた。今後はこれを育成対象となっていない人々にも広げたい
今後の展望・本基金への示唆	●今後の活動の展望	 今年の秋には、日本の実情を知ってもらおうべく、海外プレゼンターを日本に招聘する予定である。東京舞台芸術祭やKYOTO EXPERIMENTが行われる時期であり、日本から海外に発信するものも増える時期であるため、複数のプレゼンターを招く準備を進めている。また、YPAM（横浜国際舞台芸術ミーティング）の時期も同様に考えている。これは3ヶ年で取り組んでいく予定である
	●本基金のメリット	 海外の劇場やプロモーターと先を見据えた話し合いができることは本基金のメリットである。複数年で取り組めることから、育成対象アーティストをいつ頃、どのような公演をすることが可能なのかを責任を持って伝えることができ、話がしやすくなっている これまでは単年度予算で活動を計画する必要があったが、本基金では3年間かつ予算の付け替えも可能であり、非常に柔軟な体制を取ることができるため、クリエイションの観点からも取り組みやすい
	●現場視点で求められる基金への要望等	 この基金では複数年での取り組みでありつつも、中間成果を示すことが求められているが、本番公演が最大の成果となる我々の分野にとっては、中間成果・変化を見せにくいという課題があると思う。特に舞台芸術は即時的に成果が見えやすい分野（マンガ、アニメ等）と比べ、成果が地味に見られがちであるため、舞台芸術の価値を適切に評価することで、関係者のモチベーション向上にも繋げられる仕組みがあると有難い



インタビュー対象	まつもと市民芸術館	分野	劇場・音楽堂等
プロジェクト名	Step into the world from Matsumoto	区分	小規模

インタビューサマリー

- ✓

日本のコンテンポラリーダンスの分野は、国内マーケットが小規模かつ作品上演の機会も縮小傾向にあり、既に活躍しているアーティストに活躍の場が集中している。国内外で活躍できる、作家性を備えた若手ダンサーも減少しているため、その育成が急務である
- ✓









減少傾向にある作家性を兼ね備えたダンサーを育成しながら、ダンス分野においても松本市のブランディングを推進していくという大きな目的に向けてプロジェクトを始動。指導者の育成方針に関する想いの共有やチームビルディングが功を奏し、各個人での自主的な活動が数多く生まれ、行動変容が起きている
- ✓

当館としては引き続き作品制作～公演を通じて若手アーティストの育成を推進しつつも、今後さらにプロジェクト・作品のプロモーションの試行錯誤を行い、成果の最大化を目指す。また、本基金に対して、育成対象者が主体となった情報交換の場を求める声も挙がった

インタビューメモ

調査項目		回答内容
業界動向・海外展開への考え方	●業界動向	<div><div></div><div>日本のコンテンポラリーダンスの分野は非常に小規模であり、作品が上演される機会や国内マーケットが縮小傾向にあるため、海外に作品を売り込んでいく潮流がある。一方で、海外の舞台芸術関係者が視察に来る、国内の舞台芸術祭、ミーティング等で作品を上演する日本人は、既に海外から認知のあるアーティストに集中しており、若手アーティストの活躍の場をサポートしていく必要がある</div><div>コンテンポラリーダンスには「作家」と「ダンサー」の2つの役割が存在しており、かつては国内にも作家とダンサーを兼任するアーティストが存在したが、今はこの2つの素養を持ち合わせた良い作品を作ることができるアーティストが減少傾向にある。そのため、海外ディレクターが、国内でクオリティの高い作品をセレクトする際に、作家性を兼ね備えたごく一部のダンサーに興味が集まってしまう</div><div>日本国内でコンテンポラリーダンス作家が減っている要因として、専門的な教育という意味で大学教育の機能不全があると考えている。かつては一流のアーティストの下、4年間でダンスや作品創作について考えることができたが、規制などもあり従前の教育が衰退していると思っている。本事業の期間は、大学教育中の期間と概ね一致しており、若手アーティストがゆとりをもって作品制作やダンスについて考えられることはアーティスト育成において非常に重要だと思う</div></div>
	●海外展開における課題	<div><div></div><div>若手アーティストが、自身のあり方を確立させるためには、ある程度の時間的な余裕も必要であると考えているが、多くの人がコンペティションのための作品制作に追われており、作品制作やダンスを通してそもそも自分が成し遂げたいことを考える時間が限られてしまっている</div></div>

インタビュー対象	まつもと市民芸術館	分野	劇場・音楽堂等
プロジェクト名	Step into the world from Matsumoto	区分	小規模







調査項目	回答内容	 団体・施設  指導者  育成対象者		
活動実績・成果およびその影響	●プロジェクトの目的	 巡回公演や貸館だけではなく、作品制作のノウハウを持つことが強みの当館は、これまで注力していた演劇に加えて、別の分野にも進出していく方針・狙いである。それに伴い、既に備わっている『岳』『学』『楽』等の松本市のブランド力に『ダンス』が加わることで更に促進されることが本プロジェクトの大きな目的である。基金終了後も育成対象者には関与し続けていただきたいし、松本市にダンスのイメージも醸成し続けていきたいと考えている		
	●育成対象者選抜・育成の方針	 本プロジェクトの目的を果たすため、作家性を兼ね備えた若手アーティストを選抜し、育成していきたいと考えている		
	●人材育成の考え方	 自身の経験では、ダンスとは一見関係ない出来事から作家としての素養が鍛えられてきた。実力のあるアーティストを育成するには、自分のペースで、何かダンス以外のことを考える時間を持つ必要があると考えている。そのため、指導者が海外展開に係る活動を全て主導するのではなく、育成対象者とコミュニケーションをとりつつ、彼らの自主的な活動をサポートしていきたいと考えている		
	●これまでのプロジェクトの進捗状況/活動実績	 3名のダンス作家と1名の制作者を育成対象とした後、能楽師等によるレクチャーや市内研修等を行った。令和7年12月にショーイングを実施し、令和8年の5月に松本市内での公演を予定しており、その際に国内外のプロデューサー・批評家等を招聘し、作品に対して意見を頂く予定である。加えて、アートマネージメントの育成対象者がリサーチしている各国のダンスフェスティバルの情報と、育成対象者個人の活動、令和7年6月の韓国視察から得られた情報を内部の成果報告会で共有し、ディスカッションを通して、育成対象者ごとにどの国のどのフェスティバルをターゲットとするかを検討・選定する予定である		
	●プロジェクトにおける成果/今後見込まれる成果	 指導者の指導およびフィールドワークを通じて得た学びを生かし、育成対象者が各々の活動に繋げていくマインドを身に付け、まつもと市民芸術館を拠点に、それらを有機的に共有している点が非常に大きな成果であると考えている。また、自費での欧州視察、一般の方を起用した作品制作、振付師としての劇団の作品制作への参等、各自が自主的に具体的な活動を展開し、切磋琢磨している		

インタビュー対象	まつもと市民芸術館	分野	劇場・音楽堂等
プロジェクト名	Step into the world from Matsumoto	区分	小規模

 団体・施設

 指導者

 育成対象者

調査項目	回答内容
活動実績・成果およびその影響	<div> 本プロジェクトの枠組み・指導者との関わりが自身の海外展開に対する考えを大きく変えた。海外で国際的に活動するという言葉の解像度が低いということを痛感した。そこで、ベルギー、ドイツ、オーストリアの現地の教育機関およびダンスハウスを自費で約1か月に渡り視察し、現地で活動している12名の日本人アーティストにインタビューを実施し、活動の内容や現地コミュニティの有無、資金繰りについて話を伺った。またインパルスstanツ（オーストリア）を視察し、若手アーティストが参加するオムニバス公演を観賞した。視察後、ノウハウ還元のため、本プロジェクトメンバーと情報共有しただけではなく、急な坂スタジオ（横浜）にて一般向けに視察内容の報告会を実施した</div> <div>欧州視察後に、リンツ（オーストリア）のインディペンデントダンスハウスのレジデンスーに通過し、26年度からオーストリアにて創作を行うことが決定した。欧州視察から現地ダンスハウスへの応募までの一連の活動は、本プロジェクトを契機とする意識と行動の変容により実現した結果であると認識している</div>
	<div> コンテンポラリーダンスは企画から公演まで最低2年、長くて4、5年程度の時間を要するため、単年度の事業では、実施可能な内容が限られてしまう。一方本基金では、資金面の援助に加えて、長期的な視点で1つのプロジェクトを実施し、育成を行うことができるようになったことが非常に魅力的である</div> <div>“作品制作～公演”だけではなく“育成”のための活動に対して資金援助がされる点も魅力的であると感じている。公演に直結する経費だけでなく、ダンスについて考える時間や講師のレクチャーの時間などの作品制作の手前の活動に対してかかる費用も対象となっている点は大変有益である</div>
	<div> 市民に芸術やコンテンポラリーダンスへの間口を広げつつ、育成対象者として成長できるかがプロジェクトの目的と考えているため、松本市に実際に移住してプロジェクトに参加している。その中で、地域のお祭りなどのイベントに実際参加・交流するだけでなく、それを通じて公演や当館の活動の話に繋がることもあり、移住も含めてそれらの目的達成に同時に向かっている実感がある</div>
本基金への展望・今後の展望	<div> 広報手法を検討するにあたり、欧州のダンスカンパニー関係者と情報交換を行った際に、作品セレクトを行う上での参考映像は、長尺よりも1分程度の短い動画の方がインパクトがあり有効との意見があった。そのため、今後は映像/音楽制作が出来る育成対象者と協力して進めていきたいと考えている</div>
	<div> 事業を広く周知するために、ウェブサイトには、概要のほかライターや育成対象者によるレポートを掲載している。運用も動き出したばかりで試行錯誤しながら進めている状況なので、文化庁や芸文振の皆様の伴走支援により、アドバイスや意見を頂けたら大変有難い</div>
	<div> プロジェクトの垣根を超えた育成対象者での情報交換やディスカッションの機会があると良い。本基金で得られたノウハウを全体に還元できると相乗効果も出て良いと考えている。どこかの団体が主催するのもあると思うが、本基金の施策の一環として用意頂けると大変有益だと感じる</div>

インタビュー対象	山口情報芸術センター【YCAM】	分野	劇場・音楽堂等
プロジェクト名	子ども×テクノロジー作品の制作を通じた人材育成プロジェクト	区分	小規模

インタビューサマリー

- ✓

近年の国際的なフェスティバルでは、VRやAI等のテクノロジーを活用した新たな表現が多く、ディレクターたちの興味関心を惹きつけていると認識している。一方で、テクノロジーを活用した作品制作には、創作のための多くの時間・費用の捻出、そして各国法規制への対応等が求められる
- ✓

本プロジェクトでは、施設として初めて子どもを対象にしたオリジナル舞台芸術作品の制作に挑戦しており、その上でさらに海外展開の実現に向けて活動をしているため、育成対象者の意識変容も含めて様々な気づきを得ながら、地域の小学校等とも連携して作品制作を進めている
- ✓

作品にAIを活用することから、海外現地の契約や法規制等への対応が課題であるものの、今後地域と連携して広報活動を進めながら、児童に作品のプロトタイプを体験してもらう機会も計画しており、成果創出に向けて多方面で積極的な活動を展開する予定である

インタビューメモ

調査項目		回答内容
業界動向・海外展開への考え方・現状課題	●業界動向	<div><div></div><div>当館はこれまで20年以上、「同時代のテクノロジーを応用して作品を作る」ということに挑戦している。その中で、本プロジェクトの調査で国内外の芸術祭を訪問した際にも感じたことであるが、欧米やアジアを問わず、近年の国際的なフェスティバルは、例えばVR、ロボティックス、AI等のテクノロジーを使った作品を上演するフェスティバルが非常に多いと感じた。現代社会を映す鏡としてのフェスティバルにおいて、多くのディレクターが同時代に発生しているテクノロジーに興味関心を持っているのではないか</div></div> <div><div></div><div>実際に、近年訪れているアジア圏（シンガポール、台湾、韓国）でテクノロジーを使ったパフォーミングアーツ作品やそのアーティスト支援が顕著になってきている印象がある一方、日本の舞台芸術としては「若い観客層の獲得」も課題となっていると感じる。そのため幼少期から舞台芸術に親しむ方策が必要だと考えており、特に地方の文化施設として子どもたちの元へ出向く必要性を痛感している</div></div>
	●認識している課題	<div><div></div><div>テクノロジーを活用した作品は、興味や注目が集まる一方で、制作に非常に時間がかかるのが課題である。どのようなテクノロジーを作品に使用するかを協議し、実現に向けプロトタイプを一度開発してから実験を行い、テクノロジーの使用可能性や作品の実現可能性を確かめていくことが必要になるため、どうしても時間と費用の捻出が課題となる</div></div>










インタビュー対象	山口情報芸術センター【YCAM】	分野	劇場・音楽堂等
プロジェクト名	子ども×テクノロジー作品の制作を通じた人材育成プロジェクト	区分	小規模



調査項目	回答内容
●これまでのプロジェクトの進捗状況/活動実績	<p> YCAMは、作品制作を支えていたスタッフの入れ替わりもあり、若いスタッフの育成という施設としての課題も抱えているが、今回の海外展開を通じた人材育成プロジェクトでは、初めてこのような取組に参加するスタッフに対するアドバイザーとして元YCAMの技術課長が指導者として参画し、海外スタッフとの確認作業等実務的な部分のアドバイスを頂きながら、人材育成とプロジェクトの両方を推進できるようにしている</p> <p> 今回の作品では、例えば日本の小学校で当たり前のこと（例：授業開始のチャイム、教室の机の並べ方やレイアウト等）を取り入れているが、そのコンテキストがどこまで海外で通用するのかが非常に気にしている。作品のコンテキストや話の内容を上演する先々で擦り合わせしつつも、そこに影響されすぎずに作品を保持し続ける難しさがあると思っている。また、海外展開を見据えてコンセプトを固めながら作品を作るのは、これまでの自身のやり方とは異なるため、意識すべき点が多いと感じている</p> <p>本作品は通常の鑑賞体験とは異なり、アーティストと観客である子どもが一体となって作り上げていくものであり、現在台本作成においても、先生の投げかけに対して実際に児童が反応してくれることを想定して作成を進めている。ただ、児童がどのような熱量でこの作品を体験するのかという点や、パフォーマンスな要素とそれに対するリアクションの要素の想定が適切であるかという点は正しく掴みかねている部分である</p>
●基金によって活性化した取り組み/基金があることで始動した取り組み	<p> YCAMでは、AIを活用した創作はこれまでも取り組んだことがあるものの、子どもたちを対象にしたパフォーマンスアーツの分野のプロジェクトは初の試みである。教育普及活動という切り口で、小学4年生以上の児童を対象にしたワークショップ形式の授業等は過去に実績があるものの、舞台芸術で子どもを対象にしたオリジナル作品を制作するのはYCAMとして初めてであり、非常に大きな挑戦となっている</p>
●スキル/マインドにおける変化/成長実感の度合い	<p> 制作、プロモーション含め、海外展開をするというマインドセットの中で制作をするのは初めてである。海外まで展開するという意識がクリエーションの一部になっていることが、自分にとって非常に珍しいことであり、現在令和7年12月の初演に向けてクリエーションを進めているが、今後の先々の展開を見据えつつ、当初の目的・ビジョンを忘れずに作品を作っている</p>
●単年ではない基金だからこそ感じられるメリット	<p> 3年間支援いただけることが決まっているからこそ描ける射程がある。単年度助成の場合だと、支援開始後すぐに海外展開をするための作品制作を行わないといけないが、今回は国内の文化施設や市内の小学校から始まり、そこから海外各国に合わせ作品を調整しながら展開を図るという計画を描いている。海外展開を段階的に考えることができるのは、この事業だからこそだと感じている</p>

活動実績・成果およびその影響

インタビュー対象	山口情報芸術センター【YCAM】	分野	劇場・音楽堂等
プロジェクト名	子ども×テクノロジー作品の制作を通じた人材育成プロジェクト	区分	小規模

調査項目		回答内容	 団体・施設	 指導者	 育成対象者
成果およびその影響 活動実績・	●広報面における指導者の関与	 指導者である伊藤ガビン氏には、「編集者」であり「子どもを持つ親」という立場で、YCAMにも訪問いただきながら、子ども達に作品を伝えるための広報や子どもや親へのアピールの仕方についての助言や、広報の素材制作などにも関与いただいている			
	●本プロジェクトにおける課題	 海外現地におけるAI使用のレギュレーションを把握することが課題である。本作品は観客が喋った内容を録音し、AIが生成した言葉をロボットが喋るシーンを想定している。個人情報を使用し、その情報からAIが台詞を生成することに対して予め観客の許可を取る必要がある。海外展開の場合、現地プレゼンターがパートナーとなり、その点は調整の対応をしてもらうことを想定しているが、現地で個人の個人情報に関わる法的課題には留意する必要があると考えている 海外での契約や法務は毎回YCAMでも手探りであるが、この分野のノウハウや専門的知見があると他劇場も含めて非常に助かると感じた			
今後の展望・本基金への示唆	●今後の展望	 令和7年9月のクリエイション活動では実際に作品のワークインプログレスを子どもに体験してもらう予定で、その結果やフィードバックを作品に反映していきながら作品を完成に近づけていく想定である  作品を通じて市内をはじめ多くの小学校を巡る予定であるため、今までYCAMに足を運んだことのない子どもたちにも作品を届ける良い機会になるのではと考えている 令和7年10月にソウルの国立現代舞踊団が主催のイベントにワークショップ講師や、フォーラム登壇者としての参加を予定している。本作品から得たアイデアを取り混ぜながら、ワークショップを実施する予定である			
	●今後の広報活動予定	 本プロジェクトの広報活動は、YCAMがオリジナル作品に対して通常行っている広報活動（フライヤー、プレスリリース、バナー、ポスター制作等）に沿って行っているが、ただ今回は新作かつ子どもを対象としていることもあり、イラストレーションを活用したポスターやティザー動画を検討中である。また、地域における広報活動という点では、地元の新聞やテレビにもはたらきかけ、批評家を招聘して記事を書いていただくことも予定しているほか、小学校等の関係団体へのフライヤー配布や、親子向け演劇を上演している団体への告知、地域内の舞踊・演劇団体向けの広報も併せて実施していく予定である			
	●本基金に求めること	 海外批評家、海外に向けて発信できる国内批評家、さらに海外で発信力を持つ批評家のネットワークがないため、それらの情報やマッチング支援（批評家や媒体との繋がるための支援）があれば、より作品や活動を訴求できるのではないかなと思う 次世代のクリエイター育成を推進するという意味では、育児と創作活動の両立に困難を感じている関係者をサポートする環境を整備することで、より質の高いパフォーマンスが期待できるのではないかな			

4 .文化施設による高付加価値化機能強化支援事業 詳細資料

(1) 採択プロジェクトインタビュー個票

(2) 採択プロジェクト概要

事業概要

大分美術館および大分市のプレゼンスを高めることを目標に、育成対象者と有名アーティストのコラボレーション企画、海外アートフェア・展覧会への派遣を実施する。また、大分市美術館コレクションとのコラボレーション、展覧会の国内外開催による学芸員のキュレーション、プロデュース能力の向上を目指す。

活動計画

～3年目

～5年目

- ・有名アーティストとのコラボレーション企画（「アウトスタンディング・アーティスト×竹」）を含む国内展示会を開催
- ・制作プロセスを含むデジタルコンテンツを国内外に配信
- ・国内での作品制作と国内外への発信
- ・海外における市場開拓
- ・海外展示の実施、アートフェスティバル等への参加

主な育成対象者



長谷川 絢 | 美術家

日本美術展覧会・日本新工芸展入選/『Japon Japonismes, Objets inspires 1867-2018』展（パリ装飾美術館）に出展。



近藤 雅代 | 竹工芸作家

次世代バンブーアート賞トラディション優秀賞・暮らしの中の竹工芸展グランプリ受賞/日本伝統工芸展入選。



谷口 倫都 | 竹藝家

国際北陸工芸サミット『ワールド工芸100選』展 富山県美術館/日本新工芸展 彫刻の森美術館奨励賞。

中核的な指導者・アドバイザー



コシノ ジュンコ | ファッションデザイナー

東京を拠点に、1978年～2000年にパリ・コレクションに参加。世界各地でファッション・ショーを開催。オペラから、ブロードウェイ・ミュージカル、スポーツのユニフォーム、インテリア・デザインまで、幅広い分野で活動。



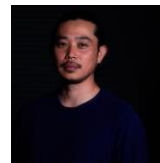
中臣 一 | 竹藝家

次世代バンブーアート賞コフランド最優秀賞受賞。ボストン美術館等国内外の展覧会参画。国内外の美術館にパブリックコレクション多数あり。



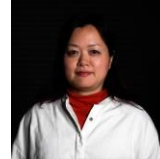
木崎 和寿 | 竹藝家

次世代バンブーアート賞ファイナリスト/『Japon Japonismes, Objets inspires 1867-2018』展（パリ装飾美術館）に出展。



池 将也 | 竹藝家

『Japon Japonismes, Objets inspires 1867-2018』展（パリ装飾美術館）に出展/国際北陸工芸サミット『ワールド工芸100選』



青柳 慶子 | 竹工芸作家

西部伝統工芸展入選/日本伝統工芸展入選。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ コシノジュンコ氏らのワークショップ開催に向け準備を行った
- ・ 海外美術館、海外の著名なアーティストとの連携協議を推進した

プロジェクト関係者の
意識・行動変容

- ・ 指導者・育成対象者ともに、本プロジェクトに対する期待と使命を持ち、意欲的に取り組んでいる
- ・ 遂行団体として、当初のロードマップを基にしつつ、柔軟かつスピード感のあるPDCAサイクルの重要性を再確認した

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- ・ 近藤雅代がくらしの中の竹工芸展グランプリ受賞、池将也が同展大分合同新聞社社長賞受賞した
- ・ 木崎和寿、池将也がArt Central（香港）に、長谷川絢がArt Paris（パリ）に出品した

事業概要

国立科学博物館および映像コンテンツ制作会社のメンバーからなるイノベティブ映像開発ユニットのノウハウを統合し、博物館標本を実空間、仮想空間、マスメディア等の特性に応じて効果的に活用できる『次世代型学習コンテンツプロデューサー』を育成する。

活動計画

～3年目

～5年目

- イノベティブ映像開発ユニットと共同で博物館標本に関する超高精細コンテンツの制作
- 展示・学習コンテンツの制作
- 超高精細コンテンツを活用した学習コンテンツの制作
- 上記を活用した、コミュニケーションモデルをアジア地域の博物館に対して提案

育成対象者

堤 千絵	国立科学博物館 植物研究主幹
森田 航	国立科学博物館 人類研究部研究員
對比地 孝亘	国立科学博物館 生命史研究部研究主幹
井手 竜也	国立科学博物館 動物研究部研究主幹
田島木 綿子	国立科学博物館 動物研究部研究主幹
鞍島 治	国立科学博物館 科学系博物館イノベーションセンターマーケティング・コンテンツグループ長
小川 達也	国立科学博物館 学習課学習企画担当

中核的な指導者・アドバイザー



篠田 謙一 | 国立科学博物館 館長

古人骨のDNAを分析し、日本人の起源や人類の世界拡散について研究、書籍多数出版。
国立科学博物館にて幅広い分野の特別展を監修。



落合 淳 | NHKエデュケーショナル エグゼクティブプロデューサー
専門分野は科学番組や超高精細8kコンテンツプロデュース。超高精細技術を生かし、中尊寺展展示映像、国立科学博物館の標本の超高精細3DCG化等行う。科学技術映像祭文部科学大臣賞等受賞。

久保 匡	国立科学博物館 常設展示・巡回展示課常設展示担当
大橋 紘樹	国立科学博物館 企画展示課特別展担当
泉谷 尚宏	国立科学博物館 財務課財務企画担当
日野原 竜	NHKエデュケーショナル チーフプロデューサー
藤原 桃子	NHKエデュケーショナル プロデューサー
植木 健太	NHKエデュケーショナル ディレクター
高嶋 一成	アフタイメージ テクニカルディレクター

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ 人類頭骨5式、ほ乳類2式、化石1式の3D撮影を行い、人類頭骨5式の3Dモデリングを作成した
- ・ ASEAN諸国の現地博物館訪問者の状況を調査し、コンテンツ展開のステップの検討を開始した

プロジェクト関係者の
意識・行動変容

- ・ 自然標本の特性や注意点、取り扱いに関する理解度が高まった
- ・ 標本・資料のデジタル化と超高精細データ制作方法についての理解を深めた
- ・ デジタルコンテンツを展示や学習プログラムに活用する方法についての視点が広がった

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- ・ 次世代学習コンテンツの一つ3Dモデリングを作成した
- ・ 標本管理者と映像クリエイターの間で議論を重ね、標本の意義や特性を共有しながら作業を進めたことで、相互理解が向上した
- ・ 撮影やモデリングが予定通り進行し、成果を達成した
- ・ 令和7年度の3D撮影やモデリングに向けたスケジューリングを行い、計画的な進行の準備を整えた

実施施設 **東京国立博物館**

事業概要

若手キュレーター・デザイナーの人材育成、アジア諸国やBRICS等のミュージアムとのネットワーク構築を行う。また、日本文化の魅力発信を通して、日本伝統文化の国際的なプレゼンスの向上、海外での日本文化ファン獲得・拡大を目指す。

活動計画

～3年目

～5年目

- ・日本美術展の開催機会が少ないメキシコ、インドネシアを候補地として展覧会を開催
- ・世界各地のミュージアムとの交流協定の締結
- ・交流協定締結館のうち日本との関係強化が見込まれる地域に限定し、日本の美術展を開催
- ・展覧会を適宜デジタルコンテンツ化し、情報を発信

主な育成対象者

沼沢 ゆかり	染織	東京国立博物館・工芸室 研究員（キュレーター）
玉城 真紀子	東洋考古	東京国立博物館・平常展調整室 研究員（キュレーター）
野中 愛理	日本絵画	東京国立博物館・特別展室 研究員（キュレーター）
福島修	漆工	東京国立博物館 貸与・特別観覧室長 主任研究員（キュレーター）
廣谷 妃夏	染織	東京国立博物館・東洋室 研究員（キュレーター）

中核的な指導者・アドバイザー



小山 弓弦葉 | 東京国立博物館職員

東京国立博物館・調査研究課長。染織を専門分野としており、特別展『人間国宝』、『きもの』、『江戸☆大奥』ほか多数展示実績あり。



佐藤 寛介 | 東京国立博物館職員

東京国立博物館 特別展室長。刀剣甲冑を専門分野としており、特別展『国宝 東京国立博物館のすべて』ほか多数展示実績あり。

増田 政史

日本彫刻

東京国立博物館・特別展室
研究員（キュレーター）

菊池 望

日本考古

東京国立博物館・特別展室
研究員（キュレーター）

荻堂 正博

展示設計

東京国立博物館・デザイン室
研究員（デザイナー）

小島 有紀子

教育普及

東京国立博物館・教育普及室
主任研究員（エドゥケーター）

山口 朔実

英語

東京国立博物館・海外展室
AF（コーディネーター）

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ インドネシア国立博物館で展示室の計測・環境調査を実施し、展示レイアウトおよび展示ケースの図面を作成。韓国国立中央博物館では令和7年度展示作品の合同調査を実施した
- ・ 国内展示では、トルコのサバンジュ美術館と連携。東京国立博物館でトルコ文化やオスマン帝国の美術を紹介する講演会を開催した
- ・ プラハ国立美術館とのMOU締結、インドネシア国立博物館とMOU締結に向けた現地協議を実施した
- ・ 今後の海外展出品作品のColBase登録を行った

プロジェクト関係者の
意識・行動変容

- ・ 育成対象者からは、主体的に実務を担う意識が強く芽生えていることが看取される。次年度以降はこれをより具体的な行動として発揮できるよう働きかけていく

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- ・ 海外ミュージアムの国内情勢によりスケジュール変更を余儀なくされる中、若手コーディネーターを採用し、指導者のサポートのもと実践的な人材育成を実施した
- ・ 育成対象者に、展覧会に伴って生じる文化財輸出入にかかる手続きを経験させることで、博物館事業の国内・海外展開に必要なロジスティクス能力を育成した

実施施設 森美術館

事業概要

建築家の藤本壮介氏の展覧会の企画・制作・海外巡回や、森美術館外の中堅・若手キュレーターも対象としてシンポジウムやワークショップを通じたキュレーター、コーディネーター、アシスタントの育成を実施する。

活動計画

～3年目

～5年目

- 3年間でアジア1～2会場での藤本壮介展の巡回を実施
- 国際展のディレクター経験者を招聘し、ワークショップと国際シンポジウムを開催
- アジア巡回に加えて欧州での巡回ワークショップ参加キュレーターを海外機関や芸術祭のスタッフとして派遣

主な育成対象者



近藤 健一 | 森美術館シニア・キュレーター

2014-15年ハンブルガー・バーンホフ現代美術館客員研究員。国内外にて多数の企画・共同企画経験あり。



樗 玲子 | 森美術館キュレーター

2002年より森美術館所属。国内外にて多数の企画・共同企画経験あり。



高橋 美奈 | 森美術館コーディネーター

展示制作グループにて展覧会コーディネーター担当。海外巡回含む複数展覧会に関わる。2013年より森ビルのパブリックアート設置も担当。

中核的な指導者・アドバイザー



Photo : David Vintiner

藤本 壮介 | 建築家

2014年フランス・モンペリエ国際設計競技最優秀賞『ラルブル・プラン（白い樹）』に続き、2015、2017、2018年にもヨーロッパ各国の国際設計競技にて最優秀賞を受賞。国内では、2025年日本国際博覧会の会場デザインプロデューサーに就任。



片岡 真実 | 森美術館館長

2020年より現職。海外美術館・芸術祭にてキュレーター、芸術監督経験多数。CIMAM（国際美術館会議）では2014～2022年に理事（2020～2022年に会長）を歴任。

No
Image

三宅 さくら | 森美術館 コーディネーター

毎日新聞社にて展示会制作業務に従事したのち、2023年より現職。森美術館では、『ルイズ・ブルジョワ展』（2024-2025）等の展示・制作を担当。

No
Image

清水 美咲 | 森美術館 アシスタント

2023年より現職。『私たちのエコロジー』（2023-2024）、『MAMリサーチ10：1980～1990年代、台湾ビデオ・アートの黎明期（展覧会編）』（2024-）等を担当。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ 2・3年目に実施予定のワークショップや国際シンポジウム等の国内拠点形成に向けた準備を進めた
- ・ 海外美術館との人的ネットワーク形成および海外展示設営の基礎習得のため、育成対象者は台北等に出張し活動した
- ・ 藤本氏との企画内容や展示プランの協議・策定等、展示に伴う各種調整業務を進行した
- ・ 森美術館の既存ネットワークを活用し、巡回先となる台湾や欧州等の候補館へのアプローチを開始した

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- ・ キュレーターは、万博会場をはじめとする藤本建築の視察や、指導者との面談を踏まえ、「藤本壮介の建築展」実現に向けた専門的な知識の習得やキュレーションスキルの向上を図った
- ・ コーディネーター、アシスタントは展覧会制作に必要な大型模型をはじめとした展示物の制作や、国際巡回を意識した輸送計画の策定といった展示・制作に関連する知見を深めた

事業概要

育成対象者によるダンス作品の創作活動を行い、愛知県芸術劇場で初演、国内で再演、海外公演まで実施する、加えてプロモーション強化事業及び海外プロモーション活動を行う。これらの事業に愛知県芸術劇場の制作者・舞台技術者等も参画し、海外公演を実施できる技能・ネットワークを構築する。

活動計画

～3年目

～5年目

- 令和6年度より指導者と共に、創作活動を開始
- 見本市参加、国際会議等でのプロモーション活動を通じ上演機会の開拓・再演
- 3年目までの成果を踏まえ、更なる国内での再演および海外公演を実施

主な育成対象者



酒井 はな | ダンサー

クラシック・バレエを中心に、ミュージカル、コンテンポラリーダンスにも挑戦。2009年芸術選奨文部科学大臣賞、2015年ニムラ舞踊賞等受賞、2017年紫綬褒章受章。



島地 保武 | ダンサー・振付家

海外でダンサーとして活躍後、帰国し酒井はなとユニット“Altneu〈アルトノイ〉”を結成。近年フランス国立シャイヨー劇場のレジデンスプログラムに選出され滞在制作を実施。



三東 瑠璃 | ダンサー・振付家

「生きることが踊ること」。自作自演のソロ『Matou』（2015）は世界14カ国21都市で上演され続けている。2017年に〈Co.Ruri Mito〉を結成。

中核的な指導者・アドバイザー



唐津 絵理 | プロデューサー

愛知県芸術劇場を中心に、ダンスの公演・普及・育成等あらゆる企画に携わる。2024年愛知県芸術劇場芸術監督・常務理事に就任。

2022年度芸術選奨文部科学大臣賞受賞。



平山 素子 | ダンサー・振付家

2005年より本格的に振付家としての活動を開始。新国立劇場、愛知県芸術劇場にて多数の上演経験あり。2009年芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。



黒田 勇 | ダンサー・振付家

第21回Art-M in 富山2018最高賞の松本千代栄賞受賞。座・高円寺ダンスアワード受賞。岡田玲奈とダンスユニット〈Null〉を立ち上げる。演劇、バックダンサー、CM出演等活動の場を広げる。



岡田 玲奈 | ダンサー・振付家

幼少よりモダンダンスを学ぶ。黒田勇とダンスユニット〈Null〉を立ち上げる。そのほか振付家作品への出演や演劇・ミュージカルの振付助手、MV・CM出演等活動中。

他、制作スタッフ4名（内 愛知県芸術劇場職員2名）
舞台スタッフ2名（内 愛知県芸術劇場職員1名）
批評家・ライター 2名

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ 育成対象者による作品クリエイション及び上演を実施し、メンターによる作品に対するフィードバックを行った
- ・ ダンスアーティスト及び創作した作品をアーカイブにまとめ国内外へ発信した
- ・ 育成対象者に対し、作品創作の基礎知識となるプロデュース・マネージメント・ライターのための講座の実施をスタートした

プロジェクト関係者の
意識・行動変容

- ・ 育成対象者は、メンターとの対話を通じて、作品を客観的に見つめ直し、社会への展開を考える視点を得た
- ・ 育成対象者は、「社会的視点の弱さ」を自覚し、作品の改善と社会との繋がりを熟考する機会となった

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- ・ 育成対象者（ダンサー・振付家）は、作品創作に集中し、メンターからフィードバックを受け、今後の海外展開を視野に入れた活動を実施した
- ・ 育成対象者の島地保武と酒井はな、Nullは、横浜国際舞台芸術ミーティング（YPAM）に参加し、自身の作品を海外の舞台芸術関係者と共有し、発信力を強化した
- ・ 育成対象スタッフは、公演の現場だけでなく、横浜国際舞台芸術ミーティング等の場に立ち会い、メンターと交流しアドバイスを得的機会を創出した
- ・ 育成対象者であるスタッフは、海外の見本市や劇場を視察し、海外関係者とのネットワーキングの構築をスタートさせた

事業概要

江原河畔劇場をフランチャイズする劇団青年団の人材育成ノウハウを生かし、国際的に活躍する劇作家・演出家・舞台スタッフ・制作者を育成する。実際に国際プロジェクトを制作・実践する拠点劇場となることを目指す。

活動計画

～3年目

～5年目

- ・合宿・オンラインによる海外展開の
教養講座の提供
- ・海外プロデューサーのマッチング、
海外フェスティバルへの派遣
- ・豊岡演劇祭等での字幕付き上演
の実施
- ・国際共同制作、海外劇場・フェス
ティバルからの委嘱作品制作に向
けた研修の実施
- ・育成対象者全員の海外公演の
実施

主な育成対象者



上ノ空 はなび | 演出家

パフォーマンスカンパニーto R mansion全作品の演出、振付、プロデュースを行い、18カ国84都市の演劇祭やストリートフェスに招聘されている。近年、演出ユニット・スカンクスパンクを結成。

©Chiye NAMEGAI



宮崎 玲奈 | 劇作家・演出家

ムニ主宰・劇作家・演出家。『ことばにない』第1回日本みどりのゆび舞台芸術賞 HOPE 賞受賞 / 『真昼森を抜ける』第11回せんがわ劇場演劇コンクール演出家賞。



松原 俊太郎 | 劇作家・演出家

戯曲『みちゆき』第15回AAF戯曲賞大賞を受賞(2015)。戯曲『山山』が第63回岸田國土戯曲賞を受賞(2019)。

© HISAKI MATSUMOTO

中核的な指導者・アドバイザー



© Tsukasa Aoki

平田 オリザ | 劇作家・演出家

1995年岸田國土戯曲賞他受賞歴多数、2011年仏国芸術文化勲章受勲。

2021年芸術文化観光専門職大学学長。



杉山 至 | 舞台美術家

2006年 カイロ国際演劇祭ベストセノグラフィアーワード、2014年 読売演劇大賞最優秀スタッフ賞、受賞。

2021年 芸術文化観光専門職大学准教授。



撮影：塚田史香

高羽 彩 | 劇作家・演出家

プロデュースユニット『タカハ劇団』の主宰・脚本・演出。アニメ・実写ドラマ・ゲームシナリオとジャンルを問わず活躍の場を広げている。



©矢野瑛彦

福名 理穂 | 劇作家・演出家

劇作家、演出家、ぱぷりか主宰。『柔らかに揺れる』にて第66回岸田國土戯曲賞受賞(2021)。



©岩原俊一

穴迫 信一 | 劇作家・演出家

現代演劇を制作する芸術団体「ブルーエゴナク」代表・劇作家・演出家。公益財団法人セゾン文化財団セゾン・フェロー。

THEATRE E9 KYOTO第3期アソシエイトアーティスト。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ 選考の面談も含め、述べ200回近い面談を繰り返し行い、育成対象者へ海外展開へのきめ細かい指導、助言を行った
- ・ 面談を通じてアーティストの特性をつかみ、個別に売り込み先の地域、国、売り込み方の細かい選定と推進を並行して行い、翻訳・字幕作成および令和7年度の海外視察および国内での字幕付き上演を決定した

プロジェクト関係者の
意識・行動変容

- ・ 教養講座を通じて参加者の海外展開への意識が高まり、「持続可能な展開には計画の深掘りが必要」という共通認識が形成された
- ・ 運営側もメンバーの熱意に応え、講座内容を精査し具体的なサポート体制を強化している

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- ・ 育成対象者19名を一律にサポートするのではなく、すでに高い実績のある対象者には字幕上演、海外のプロデューサーとのマッチングを進める一方、将来性のある若手アーティストには企画書の内容から指導し、ブラッシュアップを続けている
- ・ 多い者は5回程度まで面談を繰り返し、ターゲットを絞って海外プロデュースへの工程表の作成に入っている

事業概要

SPAC-静岡県舞台芸術センターがストリートシアター作品を制作することで、誰もが親しめるストリートシアターの実施ノウハウを蓄積し、国際的な舞台芸術市場にも育成対象者を輩出する。

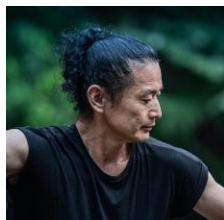
活動計画

～3年目

～5年目

- ・ストリートシアター作品を創作し、国内での上演の実施
- ・海外のストリートシアターフェスティバルとのネットワークを構築
- ・海外の野外フェスティバルからの招聘
- ・国内でのツアー公演の実施
- ・海外の野外フェスティバルからの招聘

主な育成対象者



鈴木 ユキオ | 振付家・ダンサー

2008年『トヨタコレオグラフィーアワード』にて次代を担う振付家賞（グランプリ）を受賞。2012年フランス・パリ市立劇場『Danse Elargie』で10組のファイナリストに選出。



大熊 隆太郎 | 演出家・俳優・パフォーマー

2008年劇団壱劇屋を結成。2022年度大阪文化祭奨励賞受賞。京都でロングラン公演中の『ギア-Gear-』マイムパートに出演。ストレンジシード静岡には過去7回参加。

中核的な指導者・アドバイザー



ウォーリー 木下 | 演出家・劇作家

ノンバーバルパフォーマンス集団 THE ORIGINAL TEMPOのプロデュースを行い、エジンバラ演劇祭にて5つ星を獲得、海外にて国際共同製作を行い、高い評価を得ている。東京2020パラリンピック開会式演出を担当、第49回菊田一夫演劇賞受賞。



宮城 聡 | 演出家

第3回朝日舞台芸術賞受賞。第2回アサヒビル芸術賞受賞。第68回芸術選奨文部科学大臣賞受賞。19年フランス芸術文化勲章シュヴァリエを受章。第50回国際交流基金賞受賞。



安本 亜佐美 | 演出家・サーカス・アーティスト

京都市立芸術大学院卒業後、英国サーカス学校へ。帰国後、京都を拠点に現代サーカス・アーティストとして活動。産業ローブアクセス国際資格IRATA level1を所持。



ゼロコ | 演出家・パフォーマー

角谷将視と濱口啓介によるフィジカルコメディデュオ。2016年に設立。オーストラリア、タイ・バンコク等海外のストリートフェスティバルに参加。2019年エジンバラ・フェスティバル・フリンジにてAsian Arts AwardのBest Comedy賞受賞。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ 育成アーティストの決定、ストリートシアターへの知見を深めるためのゼミの初回の実施、および静岡市街地でのリサーチを進めた

プロジェクト関係者の
意識・行動変容

- ・ 団体、指導者として、まず育成対象者を選考するにあたり、これまでのストリートシアター・アーティストの課題と現状を考えることができた
- ・ 育成対象者は、演劇/ダンス/サーカス等、他領域にまたがるジャンルとしての「ストリートシアター」のアーティストであるというアイデンティティに自覚的になった

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- ・ 国内のフェスティバルでは、大道芸／野外劇／ストリートシアターの違いが未だはっきりしておらず、令和6年度は「ストリートシアターとは何か」ということについて、多角的な視点で考え、今後の創作の起点ができた

プロジェクト名 劇場による総合的な人材育成・国際発信プロジェクト

実施施設 世田谷文化生活情報センター（世田谷パブリックシアター）

Japan
Creator
Support
Fund
FOR CULTURAL FACILITIES

美術館・博物館

大規模

中規模

小規模

劇場・音楽堂

事業概要

指導者と育成対象の若手クリエイターが国内外で共同作業を行い、演劇作品を世田谷パブリックシアターがプロデュースし、国内外で発表を行う。舞台芸術に携わる様々な職種の劇場職員の育成を同時に行う。

活動計画

～3年目

～5年目

- 育成対象者作品の出演人材選抜ワークショップ・オーディション開催
- 3年目には、育成対象者を中心に、新作を創作・上演
- 海外上演に向けて英国クリエイターとワークショップの実施
- 既存作品の国内再演やデジタルアーカイブ、海外ツアー公演を実施
- 韓国、東南アジア地域の劇場・演劇人と人材分野での交流
- 日英共同制作作品の新作を上演

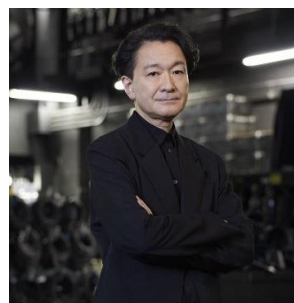
主な育成対象者



生田 みゆき | 演出家

11年、文学座附属演劇研究所入所(51期)。10～14年、『ペーター・コンヴィチュニーオペラ演出ワークショップ』参加。16年、ドイツ文化センター文化プログラムの語学奨学金(芸術分野対象)でドイツに滞在。第31回読売演劇大賞優秀演出家賞受賞。

中核的な指導者・アドバイザー



白井 晃 | 演出家

劇団主宰、KAAT神奈川芸術劇場芸術監督を経て、22年4月、世田谷パブリックシアター芸術監督に就任。第9・10回読売演劇大賞優秀演出家賞、湯浅芳子賞（脚本部門）等受賞歴多数。

他、翻訳家・俳優 1名
劇作家・演出家 1名

※そのほか俳優、ダンサー、スタッフら多様な職種の若手クリエイターをワークショップ・オーディション等を通じて選考を行う予定。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・『不可能の限りにおいて』のワークショップ・オーディションを実施し、俳優14名を選抜した
- ・英国との国際共同制作では、育成対象者も議論に参加しながら、戯曲の題材について協議した
- ・英国、インドネシア、韓国を訪問し、劇場関係者や制作会社と協議した

プロジェクト関係者の
意識・行動変容

- ・育成対象者は、自分自身が対象者に選ばれたことにより、採択活動に対して他のプロジェクトと異なる強い責任感を持って取り組んでいるように見受けられる

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- ・育成対象者は、海外の指導者との打ち合わせに参加することで、演劇づくりのノウハウを学ぶとともに、海外の文化への理解を深めた

事業概要

音楽・演劇分野で国際経験豊かな指導者と東京芸術劇場の事業推進を通じ、作品を創作し国内外に発信するノウハウを育成対象者に対して指導する。同時に、舞台映像のプロモーション等に体系的に取り組む協働チームを育成する。

活動計画

～3年目

～5年目

- ・ 創作・海外公演に向けたリサーチの実施
- ・ 国際共同制作の海外創作現場での研修に参加
- ・ 短期ワークショップを実施し、東京芸術劇場にて公演を実施
- ・ 3年目までに国内上演を実施していない育成対象者による国内上演を実施
- ・ 音楽・演劇両プロジェクトにて海外公演を実施

主な育成対象者



布施 砂丘彦 | アートクリエイター（音楽）

演奏、批評、公演企画、舞台作品の演出に従事。コントラバスでプロオーケストラへの首席客奏等を行う。批評家として第7回柴田南雄音楽評論賞奨励賞を受賞。



長瀬 善則 | アートクリエイター（音楽）

コロンビア大学経営大学院(MBA)に在籍。DTM、ピアノ演奏に従事。音楽プロダクションでの楽曲制作や、コンサート/音楽ラジオ出演等、様々な音楽企画に参加。



吉野 良祐 | アートクリエイター（音楽）

オペラカンパニーNovanta Quattroで演出作品を発表、びわ湖ホール等各地のプロダクションで演出助手を務める。建築史研究家として片岡安賞（日本建築協会）等受賞。

中核的な指導者・アドバイザー



岡田 利規 | 演劇作家・小説家

2007年クンステンフェスティバル参加以降、世界90都市で作品を上演。2016年からはドイツの公共劇場で継続的にレパートリー上演。読売演劇大賞選考委員特別賞等受賞歴多数。



山田 和樹 | 指揮者

BBC交響楽団を指揮してヨーロッパ・デビュー。欧州を含む国内外の楽団にて首席指揮者、音楽監督を歴任。出光音楽賞、渡邊暁雄音楽基金音楽賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞等多数受賞。



額田 大志 | アートクリエイター（演劇）

2016年に演劇カンパニー『ストミック』を結成。自身の音楽のバックグラウンドを用いた脚本と演出で、パフォーミングアーツの枠組みを拡張していく作品を発表。



山崎 阿弥 | アートクリエイター（演劇）

自らの発声とその響きを感じしエコロケーションに近い方法で空間を認識。音響的な陰影を変容させ世界の生成されるのかを問い、科学者との協働に力を入れる。

他、映像メディアチーム 4名
東京芸術劇場スタッフ 6名

No
Image

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等

令和6年度の実施概要

- ・ 東京芸術劇場スタッフ（育成対象者）が海外フェスティバルや見本市、コンサートホール等を調査・視察した
- ・ 和田信太郎氏と東京芸術劇場の上級職員を指導者とする映像メディアチームを編成し、本年度の自主事業を映像制作を通じて検証し、舞台芸術の高付加価値を目指すモデル検証に実践的に取り組んだ
- ・ アートクリエイターを広く公募し、書類・面接による選考を経て、育成対象者を決定した

プロジェクト関係者の
意識・行動変容

- ・ 国際共同制作公演の復活と、海外公演実現に向けた創作活動の実施という、国際交流ができる劇場へと変化するきっかけとなり、アジアのハブ劇場としての役割を担う意識を持ち始めた
- ・ 指導者は驚くほどの時間と熱意を投入し、自身の経験を次世代へ伝えようとしていた

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- ・ 育成対象者（アートクリエイター）は、指導者とのディスカッションやメンタリングを経て、それぞれが視察等の活動や作品制作のプラン構想等を行い、次年度以降の活動の準備をした
- ・ 育成対象者である東京芸術劇場のスタッフは、実際に海外の劇場・ホール・フェスティバルへの視察を実施した

実施施設 **東京文化会館**

事業概要

東京文化会館が、デジタルテクノロジーを用いた音楽芸術領域を代表する世界的機関、パリのIRCAM（イルカム/フランス国立音響音楽研究所）と共同作曲委嘱を行う。育成対象者の育成と創作・発表の機会を創出し、日本の「最先端音楽芸術の拠点」として新たな魅力を発信する。

活動計画

～3年目

～5年目

- IRCAMと会議を重ね関係構築
- 育成対象者がパリに滞在し、IRCAMの現地クリエイターと共同創作を開始
- 3年目までの取組を引き続き継続
- パリおよび日本国内で公演を実施

育成対象者



向井 響 | 作曲家

第6回マータン・ギヴォル国際作曲コンクール(テルアビブ)およびORDA-2019作曲部門（アムステルダム）第1位。2018年ストラスブル現代音楽祭(フランス)にて、最優秀賞。第84回日本音楽コンクール作曲部門第1位。



北爪 裕道 | 作曲家

2013年より、文化庁新進芸術家海外研修制度、ロームミュージック ファンデーション等から給費を受け約5年半の間パリに滞在。2015年、フランス財団音楽賞を受賞。

中核的な指導者・アドバイザー



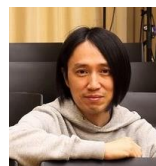
野平 一郎 | 作曲家・ピアニスト

日本を代表する作曲家のひとりで、海外でのコンクールで審査員も務める。自身もIRCAMでの委嘱制作経験がある。2012年春に紫綬褒章受章の他、芸術選奨・文部科学大臣賞等多数の受賞歴あり。



フランク・マドレーネ | アーティスティックディレクター・IRCAM所長

フランスとベルギーでピアノ、指揮、哲学を学ぶ。ヨーロッパ・モーツァルト財団、ブリュッセルのアルス・ムジカ音楽祭、ストラスブルのムジカ音楽祭で芸術監督を務めた。



今井 慎太郎 | コンピューター音楽家

バウハウス・デッサウ財団にて、バウハウス舞台の音楽監督を度々務める。ムジカ・ノヴァ国際電子音楽コンクール第1位、ZKM国際電子音楽コンクール第1位ほか。現在、国立音楽大学准教授。



横山 未央子 | 作曲家

東京藝術大学音楽学部作曲科および同大学大学院修士課程作曲専攻修了。ヤマハ音楽振興会留学奨学生としてヘルシンキ芸術大学シバリウス音楽院大学院修士課程作曲専攻へ入学。最優秀の成績で修了。2025年テオスト賞受賞。



金原 直哉 | サウンドデザイナー

国立音楽大学コンピュータ音楽専修卒業。スペクトル楽派から強く影響を受け、ライブエレクトロニクス作品やフィクストメディア作品を中心に制作を行う。これまでに、コンピュータ音楽を今井慎太郎氏に、作曲を清水祥平氏に師事。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ 若手邦人作曲家（40歳以下）をリサーチし、当館とIRCAMで協議の上、3名を選出した。音響エンジニア志望者1名は専門家推薦により選出した
- ・ 共同委嘱者であるIRCAMとのオンラインミーティングを通じてクリエイションの時期、内容、契約、初演公演プログラム等を調整した

プロジェクト関係者の
意識・行動変容

- ・ 令和7年1月にクリエイターが決定した後、令和6年度は実質、実働に向けての準備年度であったためクリエイターの変化は捉えることが困難だった
- ・ 館内職員に関しては、現代音楽やエレクトロニクスを使用した公演等、育成対象者が関連する企画公演への関心が高まり、視察に行く機会が増えた

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- ・ 育成対象者（クリエイター）計4名が決定し、令和7年度に研修・クリエイションが始まる2名については詳細な日程の調整を行っている
- ・ 館内の職員育成に関しても、該当者でワーキンググループを作りミーティング等を行っており、クリエイターに同行するかたちでの海外研修に関しても準備を進めている

事業概要

アドバイザー監修による公演制作を当館自主事業として行い、制作した作品を海外にも発信、まつもと市民芸術館のコンセプト『ひらいていく劇場』の理念に即し、地域にも開かれた活動を展開する。

活動計画

～3年目

～5年目

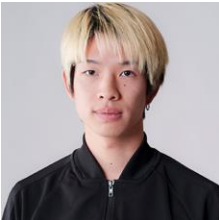
- ・ダンス作家は松本市内での滞在制作後、国内公演を実施
- ・アートマネジメントを担う制作者の国内公演従事
- ・ルーマニア『シビウ国際演劇祭』等での現地調査を実施
- ・欧州・アジア圏を含めて検討の上で国外公演の会場を決定
- ・海外公演作品の制作、公演実施

育成対象者



女屋理音 | 振付家

幼少よりクラシックバレエに親しむ。お茶の水女子大学入学後は作家研究を行い、ダンサーとしても様々な振付家の作品に出演。23年にシアタートラム・ネクストジェネレーション vol.15 - フィジカル - に選出され、初の主催公演を実施。



櫻井 拓斗 | 振付家・ダンサー・サウンドアーティスト

ccc振付コンペティション2011準グランプリ、『夢見の余韻』作・出演でセッションハウスアワード2023未来賞受賞。ダンサーとして、近藤良平らの作品、TOKYO2020開会式等に参加。サウンドアーティストとして、山下残、山瀬茉莉等の作品に参加。

中核的な指導者・アドバイザー



倉田 翠 | 演出家・振付家・ダンサー

まつもと市民芸術館舞踊部門芸術監督。第18回日本ダンスフォーラム賞受賞。代表作で2023年にクンステン・フェスティバル・デザール（ブリュッセル）とフェスティバル・ドートンヌ（パリ）に招聘され、海外ツアーを果たす。

No
Image

山田 せつ子 | ダンサー・振付家

ソロダンスを中心に独自のダンスの世界を展開する。1989年～ダンスカンパニー枇杷系主宰。2000年～2011年、京都造形芸術大学映像・舞台芸術学科教授。2019年度日本ダンスフォーラム大賞受賞。



宮 悠介 | ダンサー・振付家・アート企画者

筑波大学、大学院にて舞踊学を専攻。AJDF-kobeにて5度の文部科学大臣賞、ヨコハマダンスコレクション2022コンパII最優秀新人賞、SAI DANCE FESTIVAL 2023 ソロ部門First Prize等受賞歴多数。



八木 志菜 | アートコーディネーター

京都芸術センター（公益財団法人京都市芸術文化協会）のアートコーディネーターとして京都国際舞台芸術祭をはじめ多数企画に従事。京都国際ダンスワークショップフェスティバル共同プログラムディレクター（2025年～）。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ 新芸術監督の倉田翠氏のもと、地方都市から世界へ発信できるダンス作品の制作を目指し、能動的に創作に
関与できるダンス作家の育成を進めた
- ・ ダンス文化の市民への定着と観客層の拡大を図り、地方都市から海外へ文化発信する仕組み構築を進めた
- ・ ダンス事業の強化と並行して、海外発信を担えるコーディネート能力を持つ制作者の育成にも取り組んだ

プロジェクト関係者の
意識・行動変容

- ・ まつもと市民芸術館は、演劇のイメージの強かったが、本プロジェクトの採択と育成対象者の公募の実施により、ダ
ンスを発信制作する劇場として認識されつつあり、次年度以降の自主事業公演へのダンス公演の売り込みが数
倍となった

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- ・ ダンス作家については、指導者である倉田と面識の無い3名が決定したこともあり、まずはガイダンスを通して倉田と
の関係作りを行い、この事業の狙いや重視する点を共有し、目指す方向性を確認した
- ・ 制作者については、まつもと市民芸術館の制作手法を学ぶため、大阪ツアー公演の現場制作経験を重ね、今後
関わるダンス作家との関係作りも兼ねて、制作者として講座に参加し、指導者・ダンス作家らと交流を深めた

プロジェクト名 子ども×テクノロジー作品の制作を通じた人材育成プロジェクト

実施施設 山口情報芸術センター[YCAM]

事業概要

ワークショップやメディアリテラシー教育の授業等に加えて、市民・学校と連携した事業を展開してきたYCAMが、AIやロボットを活用した新しい子ども向け舞台作品を制作。国内外で公演を展開し、国際的な創造環境・発信拠点の機能を高める。

活動計画

～3年目

- 子ども向け作品、AI技術やロボティックス、教育についてリサーチを行い、使用技術の基礎知識を習得
- 国内公演ほか小学校と連携し、3年目に学校公演を実施

～5年目

- 海外巡回に向け海外アドバイザーとの連携や巡回先への売り込みを実施
- 5年目に海外公演を実施

育成対象者



撮影：前谷開

振子 びじん | ダンサー/振付家

自身の体に微視的なアプローチをしたソロダンスや、ダンサーの体を物質的に扱った振付作品を発表する。



斧田 小夜 | 作家

作家、ソフトウェアエンジニア、写真家。2019年『飲鳩止渴』で第十回創元SF短編賞優秀賞受賞、2021年同作でデビュー。2022年に初の単行本『ギークに銃はいらない』（破滅派）を刊行。

中核的な指導者・アドバイザー



伊藤 ガビン | 編集者

編集的手法を使い、書籍、雑誌、映像、webサイト、展覧会のプロデュース、ゲーム制作等に従事。京都に在住し、京都精華大学の『メディア表現学部』で新しい表現について、研究・指導している。



撮影：Hideto Maezawa

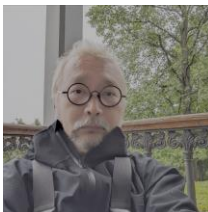
丸岡 ひろみ

PARC – 国際舞台芸術交流センター理事長。2005年より、YPAM – 横浜国際舞台芸術ミーティング（旧TPAM）ディレクター。令和6年度芸術選奨芸術振興部門文部科学大臣賞受賞。



新井 知行

PARC – 国際舞台芸術交流センター理事。YPAM – 横浜国際舞台芸術ミーティング（旧TPAM）シニアプログラムオフィサー。サウンド・ライブ・トークョーディレクター（2014～2016）。



山元 史朗 | テクニカルディレクター

情報科学芸術大学院大学[IAMAS]、山口情報芸術センター[YCAM]、日本科学未来館の技術スタッフを経てフリーランス。国内外の展覧会やアートプロジェクトで技術監督を多数務める。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ 振子ぴじん氏を中心とした打ち合わせやYCAMでの滞在制作を通じ、物語や演出コンセプトを具体化した
- ・ 国内外の見本市やフェスティバルで複数の海外プレゼンターとネットワーキングを行った
- ・ 観客ニーズを把握するため、地元の人々にヒアリングを実施した

プロジェクト関係者の
意識・行動変容

- ・ 初年度の研修により、作品テーマの丁寧な調査やステークホルダーのニーズ掘り起こしを開始した
- ・ 創作初期段階から海外巡回を視野に入れた内容検討が可能となり、創作チーム全体の目標意識に変化が生まれた

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- ・ 作家・斧田小夜氏を育成対象者として選出し、継続的なディスカッションを経て原作の執筆を依頼し、初稿が完成した
- ・ 育成対象者は子ども向け舞台作品についてのリサーチや、見本市やフェスティバルでのプレゼンテーション、ネットワーキングを行い、初年度に行うべき作品創作のための調査を行うことができた
- ・ クリエイションに関わるクリエイター、スタッフが、本作品で扱う専門領域であるロボティクス、AIについての知識、子どもとAI/ロボットの関わりについて調査し、共有しながら作品のアイデアを膨らませている

プロジェクト名 ロームシアター京都 レポートリーの創造 ホープス

実施施設 ロームシアター京都

事業概要

若手アーティスト（育成対象者）と共に新作創造や旧作のブラッシュアップ、戯曲翻訳、情報発信を行い、京都から世界へ才能を発信。人材育成や国内外公演を通じ、京都舞台シーン全体の機能強化を目指す。

活動計画

～3年目

～5年目

- ・新作クリエイション/旧作リクリエイション実施
- ・指導者によるレクチャーや勉強会、海外研修の実施
- ・京都、横浜での公演実施
- ・海外公演に向けたリサーチ、プロモーションの実施
- ・新作/旧作ブラッシュアップ
- ・海外公演の実施

育成対象者



©shimizu kana

野村 真人 | 演出家・俳優

演出家、レトロニム（自身が演出家を務めるクリエイターチーム）のメンバー。京都にて演劇作品を制作・発表。『景観と風景、その光景（ランドスケープとしての字幕）』等を手がけ、利賀演劇人コンクール優秀演出家賞受賞。俳優として文化庁新進芸術家海外研修制度にてベルリン滞在中。

垣田 みずき | 制作・プロデューサー

東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻修了。2023年よりロームシアター京都事業課に入職。

No
Image

Japan
Creator
Support
Fund
FOR CULTURAL FACILITIES

美術館・博物館

大規模

中規模

劇場・音楽堂

小規模

中核的な指導者・アドバイザー



©山地憲太

小倉 由佳子 | プロデューサー

ディレクターとして、アイホール(伊丹市立演劇ホール)のダンスプログラム公演、ワークショップを企画制作。2015年文化庁新進芸術家海外研修制度でロンドンに1年間滞在。2016年度よりロームシアター京都勤務、現在ロームシアター京都プログラムディレクター。

川崎 陽子 | プロデューサー

橋本 裕介 | キュレーター・ドラマトルク

林 立騎 | 翻訳者・演劇研究者

大鹿 展明 | 舞台監督

ほか



©宇治田 峻

西田 悠哉 | 劇作家・演出家

1993年東京都生まれ富山県育ち。大阪大学を母体に2015年劇団不労社を旗揚げ、代表として作・演出を担当。歪な人間像を描く作劇が特徴。関西演劇祭ベスト演出賞、若手演出家コンクール優秀賞受賞。青年団所属、京都大学大学院在学。

プロジェクト別令和6年度実施概要・成果等（出所：令和6年度報告書）

令和6年度の実施概要

- ・ 旧作リクリエイション作品を選定（『吉日再会』『MUMBLE-モグモグ・モゴモゴ-』）しているほか、新作制作を進行中である。一部の新作は国内他地域の演劇祭から2026年度の招聘打診を受けた
- ・ KYOTO EXPERIMENT等でプレゼンを実施し、国内外のキュレーターやプロデューサーとのネットワークを拡大した
- ・ 日英ウェブサイトを開設し、トークセッション映像を作成した。また海外向けプロモーションを開始した

プロジェクト関係者の
意識・行動変容

- ・ 海外キュレーターへのプレゼンと対話を通して、作品の紹介の仕方や作品の作り方について課題や留意すべき点が見えた
- ・ 英語での情報発信の重要性を改めて認識した

令和6年度終了時点での
育成についての状況

- ・ KYOTO EXPERIMENT招聘キュレーターへのプレゼン、YPAM（横浜国際舞台芸術ミーティング）でのプレゼンに参加し、本プログラムの紹介を通じ作品や活動をプロモーションした。交流会への参加を通して国際的に活躍するプロデューサーやアーティストとのネットワークづくりに取り組んだ
- ・ 育成対象者は国際的ミーティングに参加し、キュレーターの注目している点、どのように交流しているかを学ぶ機会となった